福島県文化財調査報告書第335集

# ＮＴＣ遺跡発掘調査報告

美シ森Ａ遺跡
美シ森Ｂ遺跡
美シ森Ｃ遺跡
根ッ子原Ａ遺跡
下岩沢Ａ遺跡

１９９７年３月

福島県教育委員会
財団法人福島県文化センター
東京電力株式会社

# ＮＴＣ遺跡発掘調査報告

美シ森（うつくしもり）Ａ遺跡
美シ森（うつくしもり）Ｂ遺跡
美シ森（うつくしもり）Ｃ遺跡
根ッ子原（ねっこはら）Ａ遺跡
下岩沢（しもいわさわ）Ａ遺跡

口絵１　美シ森Ｂ遺跡近景１（航空写真）

口絵２　美シ森Ｂ遺跡近景２（航空写真）

口絵3　1～3号土器棺墓

a：2号土器棺　b：1号土器棺　c：3号土器棺
d：1号土器棺墓　e：2号土器棺墓　f：3号土器棺墓

口絵4　航空写真（ＮＴＣ建設予定地周辺）

# 序　文

サッカー・ナショナルトレーニングセンター（略称：ＮＴＣ）は，わが国最大のサッカー専用トレーニング施設として計画され，本県の地域振興にとってもきわめて有意義，かつ有効な面を備えていると言えます。

楢葉町及び広野町の両教育委員会では，事業区内の遺跡の実態を把握し適切な保存を図るため，平成７年６月に表面調査を実施し，21遺跡の所在を確認しました。両町教育委員会が同年９月から10月にかけて実施した試掘調査の結果に基づき，福島県教育委員会は企画調整部地域振興課・東京電力株式会社ＮＴＣ工事事務所と埋蔵文化財の保存協議を行いましたが，現状保存が困難な遺跡については，その記録保存を図るため発掘調査を実施いたしました。

本報告書は平成８年度に発掘調査した楢葉町所在の美シ森Ａ～Ｃ遺跡・根ッ子原Ａ遺跡・下岩沢Ａ遺跡について，その結果を『ＮＴＣ遺跡発掘調査報告』としてまとめたものです。今回の調査では，特に美シ森Ｂ遺跡からは弥生時代中期の集落跡が発見され，根ッ子原Ａ遺跡は平安時代の集落跡であることがわかり，当該地方の大変貴重な資料を得ることができました。この調査報告書が，地域の歴史を解明する手がかりとして，また，生涯学習の資料に広く活用されるとともに，文化財保護思想の普及・啓発に役立つことができれば幸いです。

最後に，この調査にご協力いただきました楢葉町，広野町の両教育委員会，福島県企画調整部地域振興課，東京電力株式会社及び地元の方々，並びに調査を行った財団法人福島県文化センターのご尽力に心から感謝いたします。今後とも，埋蔵文化財の保護につきまして，なお一層のご理解とご協力をくださるようお願いいたします。

平成９年３月

福島県教育委員会
教育長　渡　邉　貞　雄

# あ い さ つ

2002年には日本と韓国とのワールドカップ共催が決定し，国内ではプロサッカーＪリーグの試合が行われ，サッカー人気も大いに盛上がっております。このサッカーの基本的な練習場として，ＮＴＣ（サッカー・ナショナルトレーニングセンター）が計画されました。

ＮＴＣ建設地は，福島県の浜通り地方の楢葉町と広野町とにまたがっておりますが，建設地周辺には先人の残した数多くの文化遺産が埋蔵されております。開発に際しては，文化遺産の保存協議を行い，開発と文化財保護との調和を図ることが大切であります。

当福島県文化センターでは，福島県教育委員会より委託を受けて，ＮＴＣ建設地内の遺跡について発掘調査を行いました。

本報告書は，平成８年度に発掘調査を実施した楢葉町大字山田岡地内の美シ森Ａ～Ｃ・根ッ子原Ａ・下岩沢Ａ遺跡について調査結果をまとめたものです。特に，美シ森Ｂ遺跡では県内でも調査例の少ない弥生時代中期の土器棺墓・竪穴住居跡・遺物包含層を検出いたしました。

本報告書が，地域社会の文化財保護や学術研究或いは生涯学習の資料として広く活用いただけば幸いと存じます。また，埋蔵文化財の保護につきまして，今後とも一層のご理解とご協力をお願いする次第であります。最後に，発掘調査にご協力いただいた福島県企画調整部・楢葉町教育委員会・東京電力株式会社ＮＴＣ工事事務所，ならびに地元の方々に深く感謝申し上げます。

平成９年３月

財団法人　福島県文化センター
館長　新　妻　威　男

82　1号遺物包含層出土遺物（18）……237
83　1号遺物包含層出土石器（1）……238
84　1号遺物包含層出土石器（2）……238
85　1号遺物包含層出土石器（3）……239
86　遺構外出土遺物（1）……239
87　遺構外出土遺物（2）……240
88　遺構外出土遺物（3）……240
89　遺構外出土石器（1）……241
90　遺構外出土石器（2）……241
91　遺構外出土石器（3）……242
92　遺構外出土石器（4）……242
93　遺構外出土石器（5）……243
94　遺構外出土石器（6）……243
95　土器文様帯（1）……244
96　土器文様帯（2）……245

## 第3編　美シ森C遺跡

1　美シ森C遺跡遠景（南から）……246
2　美シ森C遺跡全景（西から）……246
3　1号竪穴状遺構土層（西から）……247
4　1号竪穴状遺構全景（南から）……247

## 第4編　根ッ子原A遺跡

1　根ッ子原A遺跡遠景（南から）……248
2　東部近景1（南西から）……248
3　東部近景2（西から）……249
4　西部近景（南西から）……249
5　1A・B号住居跡全景1（南から）…250
6　1A・B号住居跡全景2（西から）…250
7　2号住居跡土層（西から）……251
8　2号住居跡全景（南から）……251
9　3号住居跡全景（南から）……252
10　3号住居跡細部……252
11　4号住居跡全景（南から）……253
12　4号住居跡細部……253
13　1号性格不明遺構全景（西から）……254
14　1号性格不明遺構細部・1号溝跡……254
15　土坑……255
16　1A・B号住居跡出土遺物……256
17　1B号住居跡出土遺物……257
18　4号住居跡出土遺物（1）……257
19　4号住居跡出土遺物（2）……258
20　遺構外出土遺物……259

## 第5編　下岩沢A遺跡

1　下岩沢A遺跡遠景（北から）……260
2　下岩沢A遺跡全景（西から）……260
3　1号土坑土層（北東から）……261
4　1号土坑全景（南西から）……261

# 表　目　次

## 序　章

表1　NTC内調査遺跡一覧……2
表2　NTC周辺遺跡一覧……8

## 第2編　美シ森B遺跡

表1　福島県内検出弥生時代中期住居跡…131
表2　福島県内弥生時代墓跡検出主要遺跡…131
表3　土器観察表……132
表4　石器観察一覧……135

## 第4編　根ッ子原A遺跡

表1　土器観察一覧……172

# 付　図

付図1　NTC工事計画図
付図2　美シ森B遺跡遺構配置図

4 航空写真3 ……194
5 調査区南東部全景（西から） ……195
6 調査区南西部全景（南から） ……195
7 1号住居跡土層（西から） ……196
8 1号住居跡全景（西から） ……196
9 2号住居跡検出状況（東から） ……197
10 2号住居跡全景（北から） ……197
11 3号住居跡細部 ……198
12 3号住居跡全景（北から） ……198
13 5号住居跡全景（東から） ……199
14 5号住居跡細部 ……199
15 6号住居跡土層（西から） ……200
16 6号住居跡全景（北から） ……200
17 7号住居跡土層（北から） ……201
18 7号住居跡全景（北から） ……201
19 8号住居跡全景（南から） ……202
20 9号住居跡土層（南東から） ……202
21 10号住居跡全景（東から） ……203
22 11号住居跡全景（東から） ……203
23 12号住居跡全景（北から） ……204
24 13号住居跡全景（北から） ……204
25 14号住居跡全景（北東から） ……205
26 15号住居跡全景（東から） ……205
27 1号土器棺墓 ……206
28 2・3号土器棺墓 ……207
29 土 坑1 ……208
30 土 坑2 ……209
31 土 坑3 ……210
32 土 坑4 ……211
33 1・2号特殊遺構 ……212
34 3号特殊遺構 ……213
35 4号特殊遺構 ……213
36 1号溝跡（西から） ……214
37 2号溝跡（西から） ……214
38 1号木炭窯跡（東から） ……215
39 1号木炭窯跡細部 ……215
40 1号遺物包含層 ……216
41 1号住居跡出土遺物 ……217
42 3号住居跡出土遺物（1） ……217
43 3号住居跡出土遺物（2） ……218
44 3号住居跡出土遺物（3） ……218
45 5号住居跡出土遺物（1） ……219
46 5号住居跡出土遺物（2） ……219
47 7号住居跡出土遺物（1） ……220
48 7号住居跡出土遺物（2） ……220
49 7号住居跡出土遺物（3） ……221
50 7号住居跡出土遺物（4） ……221
51 7号住居跡出土遺物（5） ……222
52 7号住居跡出土遺物（6） ……222
53 8号住居跡出土遺物 ……223
54 9号住居跡出土遺物 ……223
55 10・11号住居跡出土遺物 ……224
56 12・15号住居跡出土遺物 ……224
57 1号土器棺 ……225
58 2号土器棺 ……225
59 3号土器棺 ……226
60 2～7号土坑出土遺物 ……226
61 9号土坑出土遺物 ……227
62 15号土坑出土遺物 ……227
63 1号特殊遺構出土遺物 ……228
64 4号特殊遺構出土遺物 ……228
65 1号遺物包含層出土遺物（1） ……229
66 1号遺物包含層出土遺物（2） ……229
67 1号遺物包含層出土遺物（3） ……230
68 1号遺物包含層出土遺物（4） ……230
69 1号遺物包含層出土遺物（5） ……231
70 1号遺物包含層出土遺物（6） ……231
71 1号遺物包含層出土遺物（7） ……232
72 1号遺物包含層出土遺物（8） ……232
73 1号遺物包含層出土遺物（9） ……233
74 1号遺物包含層出土遺物（10） ……233
75 1号遺物包含層出土遺物（11） ……234
76 1号遺物包含層出土遺物（12） ……234
77 1号遺物包含層出土遺物（13） ……235
78 1号遺物包含層出土遺物（14） ……235
79 1号遺物包含層出土遺物（15） ……236
80 1号遺物包含層出土遺物（16） ……236
81 1号遺物包含層出土遺物（17） ……237

第59図　風倒木痕基本土層……94
第60図　1号遺物包含層基本土層……95
第61図　1号遺物包含層出土遺物（1）……97
第62図　1号遺物包含層出土遺物（2）……98
第63図　1号遺物包含層出土遺物（3）……99
第64図　1号遺物包含層出土遺物（4）…100
第65図　1号遺物包含層出土遺物（5）…101
第66図　1号遺物包含層出土遺物（6）…102
第67図　1号遺物包含層出土遺物（7）…103
第68図　1号遺物包含層出土遺物（8）…104
第69図　1号遺物包含層出土遺物（9）…105
第70図　1号遺物包含層出土遺物（10）…106
第71図　1号遺物包含層出土遺物（11）…107
第72図　1号遺物包含層出土石器（1）…109
第73図　1号遺物包含層出土石器（2）…110
第74図　遺構外出土遺物（1）……113
第75図　遺構外出土遺物（2）……114
第76図　遺構外出土遺物（3）……115
第77図　遺構外出土遺物（4）……116
第78図　遺構外出土遺物（5）……117
第79図　遺構外出土遺物（6）……118
第80図　遺構外出土石器（1）……119
第81図　遺構外出土石器（2）……120
第82図　遺構外出土石器（3）……121
第83図　遺構外出土石器（4）……122
第84図　遺構外出土石器（5）……123
第85図　美シ森B遺跡出土弥生土器集成図…127
第86図　弥生時代遺構変遷図……129

## 第3編　美シ森C遺跡

第1図　美シ森C遺跡周辺地形図……141
第2図　美シ森C遺跡遺構配置図……144
第3図　1号竪穴状遺構……145

## 第4編　根ッ子原A遺跡

第1図　根ッ子原A遺跡周辺地形図……149
第2図　根ッ子原A遺跡遺構配置図……152
第3図　根ッ子原A原遺跡基本層序……153
第4図　1A・1B号住居跡……154
第5図　1A・1B号住居跡出土遺物……157
第6図　2号住居跡……158
第7図　2号住居跡出土遺物……159
第8図　3号住居跡……160
第9図　3号住居跡出土遺物……161
第10図　4号住居跡……162
第11図　4号住居跡出土遺物……164
第12図　1～3号土坑……166
第13図　1号性格不明遺構……167
第14図　1号溝跡……168
第15図　遺構外出土遺物……170

## 第5編　下岩沢A遺跡

第1図　下岩沢A遺跡周辺地形図……175
第2図　下岩沢A遺跡配置図……177
第3図　1号土坑……179

# 写　真　目　次

## 第1編　美シ森A遺跡

1　美シ森A～C遺跡遠景（西から）……187
2　美シ森A・B遺跡遠景（南西から）…187
3　美シ森A遺跡西部全景1（南西から）188
4　美シ森A遺跡西部全景2（東から）…188
5　1号住居跡全景（西から）……189
6　1号住居跡断ち割り状況（西から）…189
7　1号住居跡細部1……190
8　1号住居跡細部2……190
9　土坑……191
10　1号住居跡出土遺物……192
11　遺構外出土遺物……192

## 第2編　美シ森B遺跡

1　美シ森B遺跡遠景（南西から）……193
2　航空写真1（南から）……193
3　航空写真2（西から）……194

# 挿 図 目 次

## 序　章


第１図　ＮＴＣ位置図……１
第２図　ＮＴＣ周辺のボーリング柱状図……３
第３図　ＮＴＣ周辺の遺跡分布図……６


## 第１編　美シ森Ａ遺跡


第１図　美シ森Ａ遺跡周辺地形図……11
第２図　美シ森Ａ遺跡遺構配置図……14
第３図　美シ森Ａ遺跡基本層序……15
第４図　１号住居跡……16
第５図　１号住居跡出土遺物……18
第６図　１・２号土坑……19
第７図　遺構外出土遺物……20


## 第２編　美シ森Ｂ遺跡


第１図　美シ森Ｂ遺跡周辺地形図……26
第２図　１号住居跡……29
第３図　１号住居跡出土遺物……30
第４図　２号住居跡出土遺物……31
第５図　２号住居跡……32
第６図　３号住居跡……34
第７図　３号住居跡出土遺物（１）……35
第８図　３号住居跡出土遺物（２）……36
第９図　３号住居跡出土遺物（３）……37
第10図　３号住居跡出土遺物（４）……38
第11図　５号住居跡……39
第12図　５号住居跡出土遺物（１）……40
第13図　５号住居跡出土遺物（２）……41
第14図　６号住居跡……41
第15図　６号住居跡出土遺物……42
第16図　７号住居跡……43
第17図　７号住居跡出土遺物（１）……45
第18図　７号住居跡出土遺物（２）……46
第19図　７号住居跡出土遺物（３）……47
第20図　７号住居跡出土遺物（４）……48
第21図　７号住居跡出土遺物（５）……49
第22図　８号住居跡……50
第23図　８号住居跡出土遺物……51
第24図　９号住居跡……52
第25図　９号住居跡出土遺物……53
第26図　10号住居跡……54
第27図　10号住居跡出土遺物……54
第28図　11号住居跡……55
第29図　11号住居跡出土遺物……56
第30図　12号住居跡……57
第31図　12号住居跡出土遺物……58
第32図　13号住居跡……59
第33図　14号住居跡……59
第34図　15号住居跡……60
第35図　15号住居跡出土遺物……61
第36図　１～３号土器棺墓……63
第37図　１号土器棺……64
第38図　２号土器棺……65
第39図　３号土器棺（１）……66
第40図　３号土器棺（２）……67
第41図　１～５・７・９～11号土坑……71
第42図　８・12・13・15・18号土坑……74
第43図　19～21・23・24・26・27号土坑……77
第44図　28～36号土坑……80
第45図　２・４・７・９号土坑出土遺物……82
第46図　９号土坑出土遺物……83
第47図　９・10号土坑出土遺物……84
第48図　13･15･21･23･26･27･31･35号土坑出土遺物……85
第49図　１・２号特殊遺構……86
第50図　１・２号特殊遺構出土遺物……87
第51図　３号特殊遺構……88
第52図　４号特殊遺構出土土器……89
第53図　４号特殊遺構……89
第54図　１号溝跡……90
第55図　１号溝跡出土遺物……90
第56図　２号溝跡……91
第57図　１号木炭窯跡……92
第58図　１・２号焼土遺構・ピット群……93

1号焼土遺構（92）　2号焼土遺構（93）　ピット群（93）　風倒木痕（94）
第9節　遺物包含層……94
第10節　遺構外出土遺物……111
第3章　ま　と　め……125
第1節　遺物について……125
第2節　遺構について……128
第3節　集落と墓域……130
第3編　美シ森C遺跡
第1章　調査経過……141
第1節　位置と地形……141
第2節　調査経過……142
第2章　遺構・遺物……143
第1節　調査の方法と基本層序……143
第2節　竪穴状遺構……145
第3章　ま　と　め……146
第4編　根ッ子原A遺跡
第1章　調　査　経　過……149
第1節　位置と地形……149
第2節　調査経過……150
第2章　遺構・遺物……151
第1節　調査の方法と基本層序……151
第2節　竪穴住居跡……153
1A号住居跡（153）　1B号住居跡（155）　2号住居跡（158）　3号住居跡（159）
4号住居跡（162）
第3節　土　坑……165
1号土坑（165）　2号土坑（165）　3号土坑（166）
第4節　その他の遺構……167
1号性格不明遺構（167）　1号溝跡（168）
第5節　遺構外出土遺物……169
第3章　ま　と　め……171
第5編　下岩沢A遺跡
第1章　調　査　経　過……175
第1節　位置と地形……175
第2節　調査経過……176
第2章　遺構・遺物……177
第1節　調査の方法と基本層序……177
第2節　土　坑……178
第3章　ま　と　め……180
総　括……181
付　編　美シ森B遺跡出土石器の石質と産地……183
写真図版……185

# 目　次


序　章

第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　平成8年度の調査経過 …… 2
第3節　自然環境 …… 2
第4節　歴史的環境 …… 4

第1編　美シ森A遺跡

第1章　調　査　経　過 …… 11
第1節　位置と地形 …… 11
第2節　調査経過 …… 12

第2章　遺構・遺物 …… 13
第1節　調査の方法と基本層序 …… 13
第2節　竪穴住居跡 …… 16
第3節　土　坑 …… 18
第4節　遺構外出土遺物 …… 20

第3章　ま　と　め …… 21

第2編　美シ森B遺跡

第1章　調　査　経　過 …… 25
第1節　位置と地形 …… 25
第2節　調査経過 …… 25

第2章　遺構・遺物 …… 28
第1節　調査の方法と基本層序 …… 28
第2節　竪穴住居跡 …… 29
1号住居跡（29）　2号住居跡（31）　3号住居跡（33）　5号住居跡（38）
6号住居跡（41）　7号住居跡（42）　8号住居跡（50）　9号住居跡（51）
10号住居跡（53）　11号住居跡（55）　12号住居跡（57）　13号住居跡（58）
14号住居跡（59）　15号住居跡（60）
第3節　土器棺墓 …… 61
1号土器棺墓（61）　2号土器棺墓（62）　3号土器棺墓（66）
第4節　土　坑 …… 68
1号土坑（68）　2号土坑（68）　3号土坑（68）　4号土坑（69）　5号土坑（69）
7号土坑（69）　8号土坑（70）　9号土坑（70）　10号土坑（72）　11号土坑（72）
12号土坑（72）　13号土坑（73）　15号土坑（73）　18号土坑（75）　19号土坑（75）
20号土坑（75）　21号土坑（76）　23号土坑（76）　24号土坑（76）　26号土坑（78）
27号土坑（78）　28号土坑（78）　29号土坑（78）　30号土坑（79）　31号土坑（79）
32号土坑（79）　33号土坑（81）　34号土坑（81）　35号土坑（81）　36号土坑（81）
第5節　特殊遺構 …… 86
1・2号特殊遺構（86）　3号特殊遺構（88）　4号特殊遺構（89）
第6節　溝　跡 …… 90
第7節　木炭窯 …… 91
第8節　その他の遺構 …… 92

# 用　例

1．本書における遺構図の用例は，以下のとおりである。

(1) 方　　位　図中の方位は真北を示す。

(2) 縮　　尺　竪穴住居跡・土坑・特殊遺構・溝跡・遺物包含層・木炭窯跡・焼土遺構・ピット群は1/40，土器棺墓は1/20で採録し，挿図スケールの右に縮尺率を示した。

(3) ケ　　バ　遺構内の傾斜部は𝍐のケバで表現したが，相対的に緩斜面の部分には𝍩のケバを使用した。なお，𝍩𝍩は後世の人為的な削土部の傾斜を示す。

(4) 土　　層　遺跡内堆積土はローマ数字で，遺構内堆積土は算用数字で示した。

(5) 標　　高　海抜高度を示す。

(6) 地　　山　斜線で示した。

(7) ピ　ッ　ト　深さを平面図の下に記した。

2．本書における遺物実測図の用例は，以下のとおりである。

(1) 縮　　尺　各遺物の大きさに応じ縮尺を設定したが，土器については拓本を1/2，実測図を1/2・1/3，石器については実測図を1/2・1/3，土製品については実測図を1/2，鉄製品については実測図を1/2で採録し，挿図スケールの右に縮尺率を示した。

(2) 土器断面　a：弥生土器・土師器の断面は白抜き，須恵器はベタ黒とした。
b：縄文土器で胎土に繊維を含む土器は，断面に▲を表示した。
c：粘土の積み上げ痕は，断面に一点鎖線を使用して表現した。

(3) 黒色処理　土師器の黒色処理については，アミ点で表示した。

(4) 石　　器　磨石等の石器の研磨面は斜線で示した。

3．本書で使用した記号は，以下のとおりである。

橘葉町……NH
美シ森A遺跡……USM・A
美シ森B遺跡……USM・B
美シ森C遺跡……USM・C
根ッ子原A遺跡……NTH・A
下岩沢A遺跡……SIS・A
竪穴住居跡……SI
土器棺墓……SM
土　坑……SK
特殊遺構……SX
溝　跡……SD
木炭窯……SC
焼土遺構……SG
遺物包含層……SH
ピット……P
遺跡内の堆積土……L
遺構内の堆積土……ℓ

4．引用・参考文献については，執筆者の敬称を省略して編末に収めた。

# 緒　言

1．本書は，平成８年度に実施したＮＴＣ（サッカー・ナショナルトレーニングセンター）建設にかかる遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書には，平成８年度に発掘調査を実施した下記の調査成果を収録した。

美シ森Ａ遺跡　　楢葉町大字山田岡字美シ森
美シ森Ｂ遺跡　　楢葉町大字山田岡字美シ森
美シ森Ｃ遺跡　　楢葉町大字山田岡字美シ森
根ッ子原Ａ遺跡　楢葉町大字山田岡字根ッ子原
下岩沢Ａ遺跡　　楢葉町大字山田岡字下岩沢

3．前項の調査は，福島県教育委員会と東京電力株式会社ＮＴＣ工事事務所とが事業区内に所在する埋蔵文化財について保存協議を行い，事業計画上現状保存が困難なため発掘調査を実施したものである。

4．遺跡の発掘調査費は，東京電力株式会社の負担金からなる。

5．福島県教育委員会は発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託した。

6．財団法人福島県文化センターでは，事業第二部遺跡調査課の下記の職員を配置して，調査に当たった。

文化財主査　高橋　信一　　文化財主査　本田　公成
文化財副主査　藤谷　誠　　文化財主事　香川　慎一

他に，文化財主査　松本　茂，文化財主査　高村亮一郎，文化財副主査　大竹　正浩，文化財主事　佐藤　啓の参加・協力を得た。

7．本書の執筆は，高橋・本田・藤谷・香川が行い，高村が協力し，文末に文責を明記した。

8．石器の石質・産地の同定については，福島県立博物館主任学芸員　香内　修氏に分析をお願いした。

9．本書に使用した二万五千分の一の地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の地形図を複製したものである。（承認番号：平９東複　第44号）

10. 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は福島県教育委員会で保管している。

11. 発掘調査および報告書作成に当たって，下記の方々・機関から指導・助言・協力を得た。

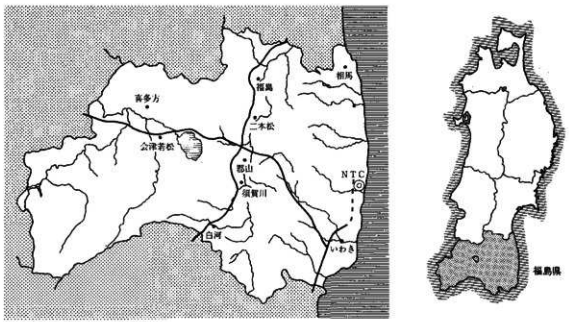
宇佐美雅夫・重藤　清一・楢葉町教育委員会・財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
梅沢太久夫・高橋一夫・中村倉司

# 序　　章

## 第１節　調査に至る経緯

サッカー・ナショナルトレーニングセンター（略称ＮＴＣ）は，福島県浜通り地方南部の楢葉町・広野町に，わが国最大のサッカー専用トレーニング施設として造成・建設が進められている。ＮＴＣに設置される施設は，大きく三つのゾーンに区分されている。グランド施設はグランド10面・400mトレーニングフィールド・ミニサッカー場２面，センター施設は宿泊機能やコンベンションホールなどを備えたセンター棟・フィットネス・メディカル棟・雨天練習場，スタジアム施設はスタジアム・フットサルコート２面・フラワーパークなどである。

福島県教育委員会と楢葉・広野両町教育委員会は，埋蔵文化財の実態を把握するとともにその保護を図るべく，東京電力株式会社ＮＴＣ工事事務所との協議を重ねてきた。両町教育委員会は，平成７年６月１日から６月９日にかけて事業対象区の表面調査を実施し21ヵ所の埋蔵文化財包蔵地を確認し，さらに平成７年９月18日から10月28日にかけて，試掘調査を行った。試掘調査の所見から，表１の８遺跡について発掘調査の必要が指摘された。そこで，福島県教育委員会では，福島県企画調整部地域振興課・東京電力株式会社ＮＴＣ工事事務所・楢葉町教育委員会・広野町教育委員会との協議を持った。造成事業の緊急性に鑑み，楢葉町所在の下岩沢館跡や広野町所在の岩沢Ａ遺跡・岩沢塚は楢葉町・広野町教育委員会で対応し，残りの楢葉町所在の美シ森Ａ～Ｃ遺跡・根ッ子原Ａ遺跡・下岩沢Ａ遺跡について福島県教育委員会で対応することとした。




**第１図**　ＮＴＣ位置図

表1　ＮＴＣ内調査遺跡一覧

| No | 遺跡名 | 所在地 | 要保存範囲 | 時代 | 検出遺構 | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 美シ森Ａ遺跡 | 楢葉町大字山田岡字美シ森 | 910㎡ | 平安 | 竪穴住居跡 | 土師器・須恵器 |
| 2 | 美シ森Ｂ遺跡 | 楢葉町大字山田岡字美シ森 | 3,640㎡ | 弥生 | 土　坑 | 弥生土器・石器 |
| 3 | 美シ森Ｃ遺跡 | 楢葉町大字山田岡字美シ森 | 320㎡ | 不明 | 竪穴状遺構 | |
| 4 | 根ッ子原Ａ遺跡 | 楢葉町大字山田岡字根ッ子原 | 930㎡ | 平安 | 竪穴住居跡・土坑 | 土師器・須恵器 |
| 5 | 下岩沢Ａ遺跡 | 楢葉町大字山田岡字下岩沢 | 100㎡ | 不明 | 土　坑 | |
| 6 | 下岩沢館跡 | 楢葉町大字山田岡字下岩沢 | 950㎡ | 中世 | 堀切・平場 | |
| 7 | 岩沢Ａ遺跡 | 広野町大字下北迫字岩沢 | 360㎡ | 不明 | 土　坑 | |
| 8 | 岩沢塚 | 広野町大字下北迫字岩沢 | 80㎡ | 近世 | 塚 | |

## 第2節　平成8年度の調査経過

ＮＴＣの完成予定が平成9年5月，運営開始が7月と決定した。発掘調査は，財団法人福島県文化センターに委託し，4月15日から8月30日まで延べ81日間にわたって調査対象面積12,000㎡相当で実施した。

## 第3節　自　然　環　境

福島県は北海道・岩手県につぎ全国で三番目の県土を有す。県土の自然地形に依拠した地区割りは，南北に走る奥羽山脈と阿武隈高地を境として，西から会津地方・中通り地方・浜通り地方の3地区に区分されている。楢葉町は，福島県東部で南北に延びる浜通り地方の中央部からやや南寄りにあり，双葉郡内でも南に位置する。東側には親潮が南下する太平洋が広がっており，沖合いは格好の漁場となっている。西側は阿武隈高地につながるとともに川内村と境をなし，北側は富岡町，南側は広野町と隣接する。町域の西部には国道6号が，東部にはＪＲ常磐線が南北に走り，その間を旧6号国道が通っている。面積は103.45㎢で，人口8,427人（平成5年10月1日現在）である。

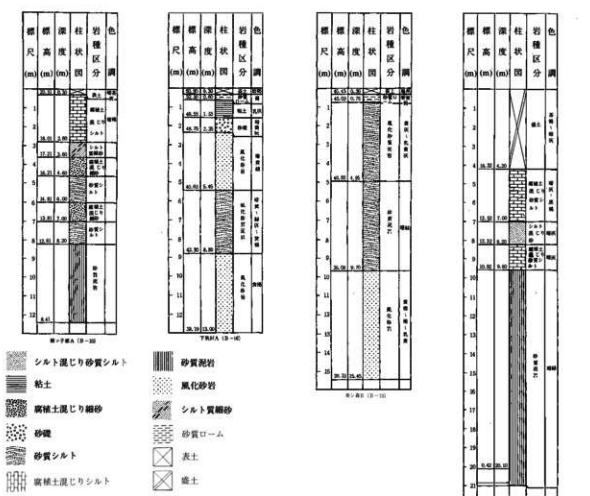
楢葉町の地形は，阿武隈高地，丘陵，そして段丘と低平地とに区分され，西から東へ向かって標高が低くなる浜通り地方に特有な西高東低の地形である。南北約150㎞，東西約45㎞の規模を持つ阿武隈高地は，海岸線と平行をなし，中通りと浜通りを区分するように南北に走っている。高地との境界付近では標高150～200mの丘陵が東側の太平洋に向かうにつれて徐々に高度を下げ，海岸線付近では20～40mの急崖となって太平洋に接している。段丘は，井出川流域と木戸川流域によく発達しているが，標高が40～50mの低位段丘は，河口付近に認められることから，海と川との相互浸食により形成されたものと考えられ，海岸段丘と河岸段丘に分類できる。地質的には砂利や岩盤により形成された中位砂礫盤で，第3段丘面に属し，海岸線沿いの地域は総じて双葉段丘地帯と呼ば

れている。なお，第３段丘は井出川以北には発達するが，木戸川以南にはあまり見られず，丘陵が大勢を占める。低平地のほとんどは，阿武隈高地を水源として町の中心部を東西にゆるやかに流れる２本の河川である井出川と木戸川の沖積地である。

浜通り地方の全体的な地質を観察すると，古生代の変成岩と古期および新期の花崗閃緑岩を基盤とした阿武隈高地に遍在する新旧年代の地層が，東の海岸線方向に30～50°の角度で傾斜を下げつつ整然とした並びで南北に連なる。楢葉町付近に目を向けると，阿武隈高地の近辺で，基盤を形成している花崗岩や花崗閃緑岩・千枚岩などの古生代から中生代にかけての深成岩や変成岩・堆積岩が確認されている。ＮＴＣ造成地区の地質ボーリング調査結果を，標高・深度・柱状図・岩種区分などを第２図として掲載した。

楢葉町の気候は，東日本型の海洋性気候のため，年平均気温は12℃前後と温暖である。年平均降水量は1,300㎜前後と少ない。夏は涼しく，冬は暖かくて雪はほとんど降らない過ごしやすい気候である。

産業は稲作が中心であり，総人口のうち農家人口が約60％を占めている。また，工業団地や住宅団地の造成事業，木戸川での鮭漁孵化事業に力を入れるとともに，天神岬スポーツ公園の整備や夏




第２図　ＮＴＣ周辺のボーリング柱状図

のイベントの実施など，地域整備や施設の充実にも努めている。

今回，発掘調査を実施したＮＴＣ地区は楢葉町大字山田岡にあり，最寄りの駅であるＪＲ常磐線・木戸駅から南西方向へおよそ２㎞の地点に所在する。南側は広野町との境で，広野町側に建つ東京電力火力発電所が近接する。また西側は国道６号線に面し，北側は丘陵の裾野から沖積地の低平地にかけて楢葉の町並みが続いている。今回調査した遺跡群は，木戸川の南方に発達した標高40m前後の丘陵頂部に位置するが，木戸川以南にあるため，前述した第３段丘面ではなく，丘陵地帯に含まれる地理的環境である。この丘陵は，美シ森Ａ・Ｂ両遺跡の東端から標高を急に下げる。眼下にはＪＲ常磐線が通り，クロマツやタブノキなどによる防風林が海岸線に沿って群生しており，その木々の合間から太平洋の水平線を眺望できる。丘陵は最終的に20～30mの断崖となって海岸線を形成している。　（本　田）

## 第４節　歴史的環境

楢葉町は，『楢葉町史』編纂や『福島県遺跡地図』作成のための表面調査により遺跡台帳が整備され，遺跡の分布状況がある程度把握されている。次に当地域の歴史的な環境について，遺跡分布を中心に概要を述べる。『福島県遺跡地図』には100ヵ所の遺跡が登録されている。その内訳は，縄文時代の散布地28ヵ所，弥生時代の散布地２ヵ所，高塚式古墳３ヵ所，横穴群10ヵ所，奈良・平安時代の散布地８ヵ所，中世の城館跡10ヵ所，近世の製鉄遺跡８ヵ所，社寺跡２ヵ所，近世の一里塚１ヵ所，磨崖仏１ヵ所，時期不明な散布地３ヵ所，その他には時代が２時期に渡る複合遺跡である。時期別及び種別では，縄文時代の散布地・横穴群を含めた古墳・奈良～平安時代の散布地・近世の製鉄遺跡の分布が多く，阿武隈高地から延びる丘陵上に立地している。

旧石器時代：旧石器時代には，天神原遺跡（15）がある。昭和54年度の発掘調査で発見され，チャートを主体とし，剝片・砕片が大半を占め，製品は少ない。縦長剝片，小剝片，両面加工尖頭器，石核，ピエス・エス・キューなどがあり，後期に相当すると考えられている。

縄文時代：縄文時代の散布地は，阿武隈高地から延びる丘陵上や段丘面に多く分布する。分布調査や試掘調査を実施した遺跡には，馬場前・向ノ内（12）・代（14）・山所布Ｂ遺跡がある。

向ノ内遺跡は河岸段丘に立地し，造成中に埋設土器が発見された。埋設土器は３基と，縄文土器の小壺・浅鉢・土錘やロクロ土師器杯が出土している。これらの縄文土器片は晩期の大洞Ｃ２式期に相当する。

代遺跡は低位段丘面に立地し，宅造に際して縄文土器が採集されている。時期的には後期の綱取Ⅰ式期を中心に，綱取Ⅱ式期や堀之内２式期を僅かに含む。この他に，土製品（土器片を再利用した円盤）や石器（磨製石斧・石錘・石鏃）がある。

山所布Ｂ遺跡は井出川上流の河岸段丘に立地し，開畑に際して一部試掘調査が実施された。遺構は検出されなかったが，遺存状況の良好な遺物包含層が検出された。時期的には晩期の大洞Ｂ－Ｃ

式期と大洞A′式期が中心を占め，僅かに大洞C２式期がある。土器以外では，土製品（土錘・土偶の胸部や脚部？スプーン状の把手・土版・スタンプ状土製品・倒卵形土製品）や石器（石鏃・石剣・磨製石斧）がある。

弥生時代：弥生時代には，天神原遺跡（15）・北向遺跡（10）がある。天神原遺跡は県指定史跡，出土品は国指定重要文化財である。弥生時代中期末の墓跡で，昭和54年度に発掘調査が実施された。遺跡は，木戸川と井出川に挟まれた標高39m前後の丘陵先端に立地する。調査の結果，土坑墓47基・土器棺墓24基（本調査以前に発見された個体を含めると総計33基）が検出された。土坑墓の形状は，長軸約２m内外・短軸80㎝前後・壁高35㎝の長楕円形を呈し，円形や方形は皆無であった。土坑墓の主軸方向は，北北東線に多く分布する。また，土坑墓の底面にはベンガラや小礫が検出された。出土した遺物は少ないが，弥生土器片が多く，石鏃や玉類が少量出土している。土器棺墓は，棺身と蓋とを別個の土器で組み合わせたもの，棺身と蓋とを同一個体の土器を打割分離し上下二分して使用したもの，さらに蓋としての土器がなく棺身のみのものがある。１個体構成は９基，２個体構成は14基，不明１基である。24基の土器棺は，壺26個体，甕15個体の計41個体が確認された。合蓋式では，壺＋壺５基，壺＋甕１基，甕＋壺６基，甕＋甕２基がある。単棺式では壺７基，甕２基である。また，土坑墓と土器棺墓の分布から三ヵ所の区画が構成され，これら三ヵ所の各々を一つの単位として数世帯を包括する血縁的家族集団とすれば，これらの墓群は三集団の共同墓地と考えられる（馬目　1982）。土器棺に使用されている弥生土器は，弥生時代中期末に相当するが従来の桜井式期とは異なり，新たに天神原式土器と型式設定されている。

北向遺跡は東京電力福島第二原子力発電所建設に伴って，昭和46年度に発掘調査が実施された。遺構は検出されないが，天神原式土器が少量出土している。

古墳時代：古墳時代は高塚式古墳や横穴群は多く発見されているが，集落跡についてはまだ未確認である。高塚式古墳は，船場・田中内・稲荷古墳がある。横穴群は10ヵ所確認されており，この中で北向横穴群（11）・合張横穴群（13）・名古谷横穴群（19）・松ノ口横穴群（20）の発掘調査や確認調査が実施されている。

北向横穴群は段丘の南緩斜面に立地し，東京電力福島第二原子力発電所建設に伴って，昭和46年度に横穴墓10基が発掘調査を実施した。配置から３グループに分類され，構造は玄室ー玄門ー羨道を有する横穴墓である。一部の横穴墓で，玄室内の排水溝や小横穴墓（副室）が確認された。遺物は須恵器長頸瓶や土師器杯が出土しており，７世紀代の年代が推定されている。

合張横穴群は段丘の南緩斜面に立地し，横穴墓25基が確認されている。A・B群の２グループに分類され，長い羨道が特徴的である。この内，25号横穴墓周辺の発掘調査が行われ，閉塞用の拳大の礫や羨道の側壁に小横穴墓（副室）が確認された。遺物は，直刀，須恵器の甕や長頸瓶や壺・甕，土師器杯や甕がある。７世紀中葉前後の年代が推定されている。

名古谷横穴群は段丘の南緩斜面に立地し，横穴墓約70数基が確認されている。町史編纂に関連して昭和61年度に，13基の発掘調査が実施された。合張横穴群と異なり，羨道が短く，規模は小型

第3図　ＮＴＣ周辺の遺跡分布図

で，玄門部の両袖の軟化や羨道幅が玄室幅よりも広い点が指摘される。遺物は，直刀・鉄製壺鐙・玉類（勾玉・棗玉）が出土しており，７世紀代の年代が推定されている。

松ノ口横穴群は平成元年度に宅地造成に関連して発見された。段丘の南緩斜面に立地し，分布の特色からＡ・Ｂの２群に分かれ，Ａ群３基・Ｂ群７基の計10基の横穴墓の発掘調査が実施された。構造は，玄室ー玄門ー羨道を有する横穴墓と玄室から明瞭な玄門を持たずに羨道へ移行する横穴墓の２つのタイプに分類される。遺物は少なく，僅かに土師器杯・甕が出土している。土師器杯の特色は，非ロクロ成形で，体部下半の外面に沈線状の軽い段差を有する丸底を呈する。この土師器杯は栗囲式期から国分寺下層式期にかけての移行期に相当し，７世紀後半から８世紀初頭に造営及び追葬が行われていたことが考えられる。

平安時代：平安時代の遺跡は，８ヵ所確認されているが，発掘調査を実施した遺跡には北向遺跡がある。北向遺跡（10）は北向横穴群と同様に，東京電力福島第二原子力発電所建設に伴って，昭和46年度に竪穴住居跡２軒の発掘調査を実施した。一辺が3.5m前後と5.5m前後を測り，長い煙道を有する。遺物は，土師器杯や甕・鉢，鉄製品の刀子・鎌，土製品の鈴とミニチュアの刀がある。時期は，ロクロ成形の土師器や杯底部の再調整から９世紀中葉を中心とする年代が想定される。

この他に，常磐自動車道予定路線の試掘調査で，30ヵ所の散布地が新発見・再確認されている。この中で，馬場前（16）・鍛冶屋（17）・下小塙上ノ原遺跡（18）が平成７年度に試掘調査が実施され，馬場前遺跡は縄文時代中期の集落跡，鍛冶屋遺跡は縄文時代・平安時代・江戸時代の複合遺跡，下小塙上ノ原遺跡は平安時代の集落跡が確認されている。

条里制は，鈴木貞夫の研究によれば山田浜地区で条里型地割図が確認されている。正方位の条理で，坪内の地割は長地型を基本とする。地名は，下八反町・日照町・柳町・大町・反町・深町・平五町・破町などがある。面積は40haで，国道６号線の東側に灌漑範囲が条里型地割の水田と推定されている。

中世～近世：古代末から中世にかけては，海東小太郎成衡による五子分封で，第一子の太郎隆祐は楢葉郡を領し，楢葉を姓とした。詳細については不明な点が多く，室町時代に岩城氏によって滅亡している。中世の城館跡は，楢葉・小塙・上ノ原・養輪・小山城跡や大谷・井出・名合沢館跡などが確認されている。記録は少ないが，楢葉城跡は楢葉氏，小塙城跡は楢葉左衛門，養輪城跡は下浦常陸，大谷・井出・名合沢館跡は井出氏や猪狩氏一族が城主と伝えられている。

製鉄遺跡は８ヵ所確認され，鉄滓が散布する。段丘面は少なく，丘陵上に多く分布している。時期は不明であるが，江戸時代前後と考えられている。

江戸時代には，楢葉地区は山田浜村・前原村・下小塙村・上小塙村・大谷村・北田村・井出村・上繁岡村・下繁岡村・波倉村に分れている。これらの村々は，磐城平藩領，幕府領，仙台藩預，越後新発田藩領，棚倉藩領，下総多古藩領と分割変遷し，幕末に至る。　　（高　橋）

## 参　考　文　献

渡辺　一雄ｍ　1972　『北向遺跡　北向横穴群』　楢葉町教育委員会

馬目　順一㎞　1972　『毛萱遺跡』　南奥考古学研究叢書刊行会
馬目　順一㎞　1982　『楢葉天神原弥生遺蹟の研究』　楢葉町教育委員会
西ヶ谷恭弘　1982　『楢葉町城館址調査報告書』　楢葉町教育委員会
西ヶ谷恭弘　1987　『小塙城・上ノ原城』　楢葉町教育委員会
馬目　順一㎞　1988　『楢葉町史　第２巻』　楢葉町
馬目　順一㎞　1989　『名古谷横穴群調査報告』　楢葉町教育委員会
宇佐美雅夫　1991　『松ノ口横穴群』　楢葉町教育委員会
鈴木　貞夫　1992　『福島の歴史地理研究』　いわき地域学會
小林　清治㎞　1993　「福島県の地名」　『日本歴史地名体系７』　平凡社
本間　宏　㎞　1996　「常磐自動車道予定路線周辺遺跡分布調査」『福島県内遺跡分布調査報告２（福島県文化財調査報告書第318集）』　福島県教育委員会
福島県教育委員会編　1996　『福島県遺跡地図（福島県文化財調査報告書第321集）』福島県教育委員会

表２　ＮＴＣ周辺遺跡一覧

| №　遺跡名 | 所在地 | 時代 | 種別 | 調査年度 | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1　美シ森Ａ遺跡 | 楢葉町大字山田岡字美シ森 | 平安 | 集落跡 | 1996年発 | 土師器・須恵器 |
| 2　美シ森Ｂ遺跡 | 楢葉町大字山田岡字美シ森 | 弥生 | 集落跡 | 1996年発 | 弥生土器・石器 |
| 3　美シ森Ｃ遺跡 | 楢葉町大字山田岡字美シ森 | 不明 | 散布地 | 1996年発 | |
| 4　根ッ子原Ａ遺跡 | 楢葉町大字山田岡字根ッ子原 | 平安 | 集落跡 | 1996年発 | 土師器・須恵器 |
| 5　下岩沢Ａ遺跡 | 楢葉町大字山田岡字下岩沢 | 不明 | 散布地 | 1996年発 | |
| 6　下岩沢館跡 | 楢葉町大字山田岡字下岩沢 | 中世 | 城館跡 | 1996年発 | |
| 7　岩沢Ａ遺跡 | 広野町大字下北迫字岩沢 | 不明 | 散布地 | 1996年発 | |
| 8　岩沢塚 | 広野町大字下北迫字岩沢 | 近世 | 塚 | 1996年発 | |
| 9　毛萱遺跡 | 富岡町大字毛萱字前川原 | 弥生 | 集落跡 | 1971年発 | 縄文土器・弥生土器・土師器 |
| 10　北向遺跡 | 楢葉町大字波倉字北向 | 平安 | 集落跡 | 1971年発 | 縄文土器・弥生土器・土師器 |
| 11　北向横穴群 | 楢葉町大字波倉字北向 | 古墳 | 横穴群 | 1971年発 | 土師器・須恵器 |
| 12　向ノ内遺跡 | 楢葉町大字井出字向ノ内 | 縄文 | 散布地 | 1976年発 | 縄文土器・土師器 |
| 13　合張横穴群 | 楢葉町大字北田字合張 | 古墳 | 横穴群 | 1985年発 | 土師器・須恵器 |
| 14　代遺跡 | 楢葉町大字井出字本釜 | 縄文 | 散布地 | | 縄文土器 |
| 15　天神原遺跡 | 楢葉町大字北田字上ノ原 | 弥生 | 墓跡 | 1979年発 | 弥生土器・石器 |
| 16　馬場前遺跡 | 楢葉町大字上小塙字馬場前 | 縄文 | 散布地 | 1995年試 | 縄文土器・土師器・須恵器 |
| 17　鍛冶屋遺跡 | 楢葉町大字上小塙字根子原 | 平安 | 散布地 | 1995年試 | 縄文土器・土師器・須恵器 |
| 18　下小塙上ノ原遺跡 | 楢葉町大字下小塙字上ノ原 | 平安 | 散布地 | 1995年試 | 弥生土器・土師器・須恵器 |
| 19　名古谷横穴群 | 楢葉町大字山田岡字名古谷 | 古墳 | 横穴群 | 1986年発 | 鉄製品・玉類 |
| 20　松ノ口横穴群 | 楢葉町大字山田岡字松ノ口 | 古墳 | 横穴群 | 1989年発 | 土師器 |
| 21　寒輪城跡 | 楢葉町大字波倉字原 | 中世 | 城館跡 | 1986年表 | |
| 22　井出城跡 | 楢葉町大字井出字館ノ沢 | 中世 | 城館跡 | 1986年試 | |
| 23　天神山城跡 | 楢葉町大字北田字上ノ原 | 中世 | 城館跡 | 1980年発 | |
| 24　名合沢館跡 | 楢葉町大字大谷字名合沢 | 中世 | 城館跡 | 1986年表 | |
| 25　大谷館跡 | 楢葉町大字大谷字西台 | 中世 | 城館跡 | 1986年表 | |
| 26　小山城跡 | 楢葉町大字上小塙字小山 | 中世 | 城館跡 | 1986年表 | |
| 27　小塙城跡 | 楢葉町大字下小塙字正明寺 | 中世 | 城館跡 | 1985年表 | |
| 28　上ノ原城跡 | 楢葉町大字下小塙字上ノ原 | 中世 | 城館跡 | 1985年表 | |
| 29　楢葉城跡 | 楢葉町大字山田岡字館 | 中世 | 城館跡 | 1984年試 | |

発：発掘　試：試掘

# 第１編　美シ森（うつくもり）Ａ遺跡

遺跡記号　ＮＨ－ＵＳＭ・Ａ
所在地　双葉郡楢葉町大字山田岡字美シ森
時代・種別　弥生時代・平安時代
　　遺物包含層・集落跡
調査期間　1996年４月22日～５月31日
調査員　本田公成・香川愼一
協力機関　楢葉町教育委員会

# 目　次

第1章　調　査　経　過……11
第1節　位置と地形……11
第2節　調査経過……12
第2章　遺構・遺物……13
第1節　調査の方法と基本層序……13
第2節　竪穴住居跡……16
第3節　土　　坑……18
第4節　遺構外出土遺物……20

# 写真目次

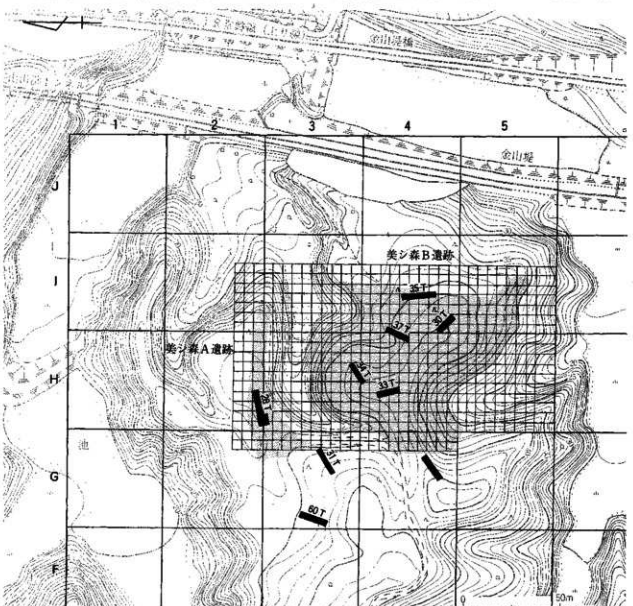
1　美シ森A～C遺跡遠景（西から）……187
2　美シ森A・B遺跡遠景（南西から）…187
3　美シ森A遺跡西部全景1（南西から）188
4　美シ森A遺跡西部全景2（東から）…188
5　1号住居跡全景（西から）……189
6　1号住居跡断割り状況（西から）……189
7　1号住居跡細部1……190
8　1号住居跡細部2……190
9　土坑……191
10　1号住居跡出土遺物……192
11　遺構外出土遺物……192

# 第1章　調　査　経　過

## 第1節　位置と地形

美シ森A遺跡は，ＮＴＣ建設地内の北東端に位置する。国土座標Ⅸ系でおおよその位置を示すと，遺跡の中心部は，Ⅸ系：Ｘ＝＋138,700.000・Ｙ＝＋104,370.000である。美シ森A遺跡から東側へ約80m進むと，ＪＲ常磐線が南北に通過している。さらに遺跡から東側へ約500m進むと太平洋岸に達する。

遺跡周辺の地形は，谷筋が樹枝状に入り組んでおり，複雑な丘陵地形が形成されている。昼と夜




第1図　美シ森A遺跡周辺地形図

の寒暖差が著しい日は，しばしば海上で霧が発生したが，海風にのると霧は谷筋に沿って遺跡方向へ流れてくる。特に春～初夏の頃はよく濃霧に覆われ，気温も低い日々が続く。また，午前中の海風が午後になると山風に変わり，時に強風が吹き荒れるが，遮るものがない丘陵の頂部付近では風の影響を受けやすい。

美シ森A遺跡の立地は，谷筋が「W」状に入り組む丘陵の頂部東端である。その丘陵頂部は，標高36～38mのなだらかな平坦地形となっており，約3,000㎡の範囲が美シ森A遺跡として登録された。今回，美シ森A遺跡の発掘調査を実施したのは，約3,000㎡の内，ＮＴＣ建設地の工区にかかる南部の910㎡である。美シ森A遺跡の南側を西から東方向へ1条の細い谷筋が抜けるが，その谷筋を挟んで美シ森B遺跡と隣接する。発掘調査前の地目は山林であり，美シ森A遺跡は黒松を中心とする針葉樹で覆われていた。　（香　川）

## 第2節　調　査　経　過

美シ森A遺跡は，平成7年度のＮＴＣ建設予定地内の遺跡分布調査で発見された遺跡である。平成7年9月に実施された試掘調査では，竪穴住居跡1軒と，土師器・須恵器などの遺物が確認され，平安時代の集落跡として登録された。

美シ森A遺跡を含むＮＴＣ遺跡発掘調査は，試掘調査の成果を受けて平成8年度に実施されることになった。工事工程上の要請から，ＮＴＣ建設地の北東部に位置する美シ森A・B遺跡の調査を最優先で実施することになる。

調査員は，本田と香川の2名が担当した。4月22日に重機を導入し，調査区に散乱する雑木と，表土の除去を行う。重機の使用は4月25日に終了し，26日から作業員を調査区に入れ遺構の確認作業を開始した。5月8日には，グリッド杭とベンチマークの設置作業が終わった。

調査区は東西に細長い尾根筋で，平成7年度の分布調査では調査区西部に竪穴住居跡が確認されていた。しかし，排土置場を調査区西側の一画に指定されたため，遺構の確認作業は東部から行うことにした。調査区東部～中央部では，遺構を確認することができなかった。また，遺物の量も少なく，弥生土器の細片・石器・須恵器が計23点出土しただけである。

結局，検出遺構は，分布調査時に確認された竪穴住居跡1軒（1号住居跡）と，その周囲の2基の土坑（1・2号土坑）である。各遺構の調査は，1号住居跡を5月21日から開始し，5月30日に終了した。1号土坑は5月24日に，2号土坑は30日に調査が終了した。

5月30日の時点ですべての遺構の調査と，調査区基底面の地形測量を終えた。5月31日に調査区の遠景写真の撮影を行い，美シ森A遺跡の発掘調査を終了した。4月22日～5月31日の天候は温暖で，雨天に悩まされることもなく発掘調査は比較的順調に進行した。

6月11日，福島県教育委員会・東京電力株式会社・(財) 福島県文化センターの各担当者が集まり，調査経緯・成果の説明後，美シ森A遺跡の引き渡しを行った。　（香　川）

# 第２章　遺構・遺物

## 第１節　調査の方法と基本層序

### １．調査方法

広域のＮＴＣ建設地内に５遺跡が大きく離れて分散する。そこで，まずＮＴＣ建設地全体を50m方眼の大グリッドで区画し，さらに各大グリッドを５m方眼の小グリッドで細分することにした。大グリッドの起点は，ＮＴＣ建設地の北西地点（国土座標Ⅸ系：Ｘ＝＋138,800.000・Ｙ＝＋104,000.000）に定めた。その起点から東方向へ50m単位に区切り，Ａ～Ｊまでのアルファベットを付けた。また起点から南方向へ50m単位に１～11までの算用数字を付け，両記号の組み合わせで各大グリッドを呼称した。ＮＴＣ建設地内に分散する各遺跡のおおよその位置は，大グリッドで表示した。美シ森Ａ遺跡のおおよその位置は，Ｈ２・３の境界を中心とする一帯である。

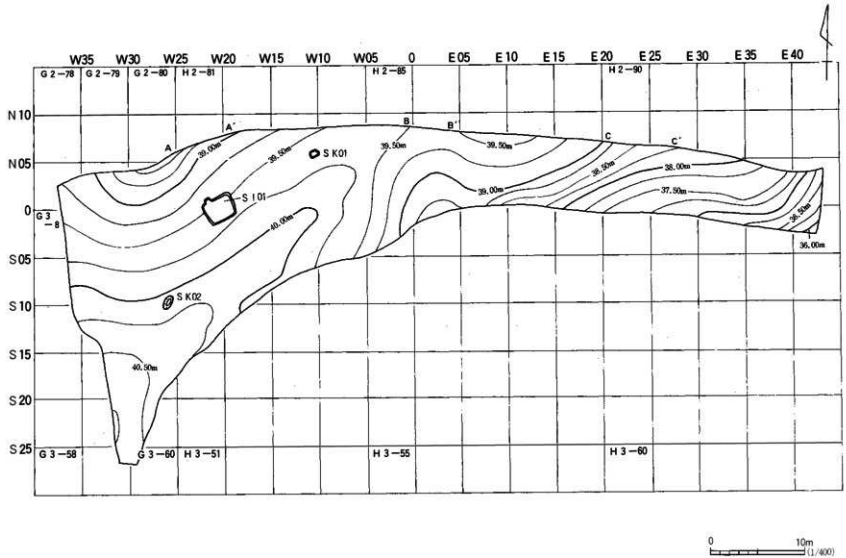
小グリッドは，大グリッドの北西部から東方向へ棚違い式に１～100まで分割した。おおよその遺構の位置や遺物の出土地点を示す場合には，大グリッドと小グリッドを組み合わせて，Ｈ２－１，Ｈ２－２などのように記した。遺跡内のグリッド杭は，小グリッド単位で網羅した。

また，便宜上，美シ森Ａ遺跡のＨ３－６杭を原点として，南北方向へ１m進むごとにＳ01・02…，Ｎ01・02…のように，また東西方向の場合も同様にして組み合わせ，遺跡内の位置を１m単位で示せるようにした。例えば，Ｈ３－６杭から北に11m，西に５m離れた地点は，Ｎ11・Ｗ05と表すことができる。この方法は，遺構図の作成や掲載をする時に用いた。なお，Ｈ３－６杭の位置を国土座標で示すと，Ｘ＝138,700.000・Ｙ＝104,375.000である。

遺跡を覆う表土層の除去は，バックフォー（0.7㎥）の重機を使用し，調査期間の短縮を図ることにした。また，排土の処理は，その置き場が遺跡の西側に定められていたため，小型のクローラキャリアで運んだ。なお，美シ森Ａ遺跡の一面に黒松などの切り株が多数残されていたが，クローラキャリアの通行路を確保する必要があったため，通行の邪魔になる切り株は，その直下に遺構がないことを確認したのちにバックフォーで除去した。

各遺構の記録は，平面形と軸線方向の断面形・堆積土状況を基本とし，竪穴住居跡を１/20，土坑を１/10の縮尺で実測を行った。遺構の標高の記録は，遺跡の中央に海抜36.5mのベンチマークを設定し，オートレベルを用いて計測した。調査区基底面の地形測量は，１/100の縮尺で行った。

住居跡床面から柱穴らしい痕跡が認められた箇所には，観察優先で，断ち割りを施して堆積土の有無を確認した。カマドなど熱を受けた痕跡が認められた箇所には，床・壁に断ち割りを入れて受熱の程度を確認した。写真撮影は，６×4.5判中型カメラを主カメラとして使用した。また，補助・リバーサル用として35㎜カメラを使用した。　（香　川）



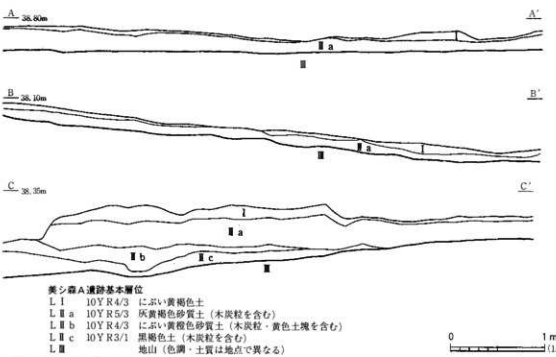

第２図　美シ森Ａ遺跡遺構配置図

## ２．基本層序

美シ森Ａ遺跡は，尾根筋上に立地するため表土から地山までの厚さは，ほとんどの地点で10cm～15cmと薄い。また，土壌の堆積状況も複雑ではなく，単純に２層に分けられた。表土層としたＬⅠの厚さは５cm前後である。次層は，炭粒をまばらに含む灰黄褐色系の砂質土でＬⅡａとした。ＬⅡａからは，土師器・須恵器・弥生土器・石器が出土しているが，その点数はわずかである。弥生土器・石器はＬⅡａの下位から出土したものの，土質・色調などからＬⅡａを細分することはできなかった。ＬⅡａの次層であるＬⅢは，海成堆積によって形成されたもので地山とした。今回の発掘調査で竪穴住居跡１軒，土坑２基を確認したが，いずれの遺構もその検出面はＬⅢ上面である。調査区の地形測量は，ＬⅢ上面を基底面として実測した。

ＬⅢの状態は，調査区の地点によって異なった。海側の調査区東部のＬⅢは，色調が黄橙色の砂質土で，多量の円礫を含む。調査区東部では，遺構・遺物を確認することはできなかった。一方，遺構が検出された調査区中央部の西部では，明黄褐色・橙色の砂質土で，円礫を全く含まない。地山内の円礫の有無が，遺構の構築に影響した可能性がある。

なお，調査区のほぼ全域が薄い堆積土壌であったが，調査区の北西端部ではやや谷状に地形が落ち窪んでおり，地山までの厚さは75cmを測った。そこでは，ＬⅡａからＬⅢまでの間を，色調の違いからさらに２層に分けることができた。だが，その２層は，いずれも木炭粒をまばらに含み土質がＬⅡａと類似することからＬⅡ内の範囲でとらえ，それぞれＬⅡｂ・Ⅱｃとした。




第３図　美シ森Ａ遺跡基本層序

## 第2節　竪穴住居跡

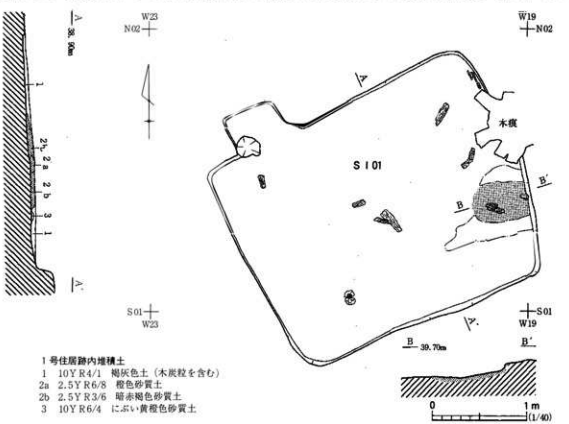
美シ森A遺跡では，平成7年度の分布調査で平安時代の竪穴住居跡（1号住居跡）が1軒発見された。1号住居跡から平坦地形が東側へ続いており，さらに竪穴住居跡の分布している可能性があった。だが，今回の発掘調査では，新たに竪穴住居跡を確認することができなかった。また，調査区の北側にも良好な平坦地形が続くが，土師器・須恵器などの遺物が非常に乏しいことから，美シ森A遺跡の周辺で該期の集落が形成されていた可能性は低いと思われる。したがって，1号住居跡は，単独で存在した可能性もある。

### 1号住居跡　SI01

**遺　構**　（第4図　写真5～8）

位置は，H3－2杭を中心とする場所である。立地は，西から東方向へ延びる2条の谷筋に挟まれた丘陵尾根の平坦地である。1号住居跡の北東側約12mの地点には，壁に熱を受けた痕跡と底面に木炭が堆積する1号土坑がある。1号住居跡と重複する遺構はない。

遺構検出面はⅠⅢ上面である。遺存状態は削平が著しく，壁の残りが悪い。また，住居跡の東部が樹木によって破壊されていた。住居跡床面の東部から中央部にかけて焼土が堆積しており，その




1号住居跡内堆積土
1　10YR4/1　褐灰色土（木炭粒を含む）
2a　2.5YR6/8　橙色砂質土
2b　2.5YR3/6　暗赤褐色砂質土
3　10YR6/4　にぶい黄橙色砂質土

**第4図**　1号住居跡

上を褐灰色の$\ell$1が覆っていた。焼土と接する床面から，熱を受けた痕跡は認められなかった。だが，焼土はさらに2次的に熱を受けたらしく部分的に硬化していた。また，床面中央部では黒灰状の木炭粒が焼土を覆い，床面東部には木炭が検出された。この木炭はサンプルとして取り上げたが，崩れてしまって原形をとどめていない。

1号住居跡の平面形は，おおよそ東西に長い長方形を呈する。東壁は，松の根によって部分的に破壊されているが，遺存部の形状を見るとやや曲線的である。北壁の西部には，方形に張り出す部分があった。分布調査では土坑の重複が報告されていたが，$\ell$1が張り出し部にも及んで堆積していたことから1号住居跡に伴うようである。張り出し部の深さは，床面の深さと変わらない。

壁の遺存状態は悪く，南壁で最大約20cmの深さがあったが，北壁と張り出し部の壁は4cm前後しか遺存していなかった。床面はLⅢ面であり，部分的にも貼床は施されていなかった。床面の状況は，起伏もなく平坦であるがやや北側へ傾斜している。床面や張り出し部から，特に踏み締まっている箇所は認められなかった。

1号住居跡の床面上には焼土が堆積していたが，この焼土を除去したところ，東壁南側の床面が楕円形状に赤褐色に著しく硬化していた。また，この硬化部分の周囲から，黄褐色土や白色粘土の散らばりが認められた。硬化部分に断ち割りを入れたところ，検出面からさらに5cmの深さまで赤褐色に変化していた。これらの状況から，赤褐色の硬化部分はカマドの火床面と考えられる。

この火床面から壁に張り出して煙道があったと思われるが，壁の削平が著しいため煙道の痕跡を確認することはできなかった。カマドの火床面に対して，カマドの袖はほとんど遺存していなかった。住居跡の廃絶直後に，カマドは故意に破壊された可能性がある。そして，焼土上に木炭粒が堆積していたことから，カマドの破壊後に1号住居跡が焼失した可能性が考えられる。

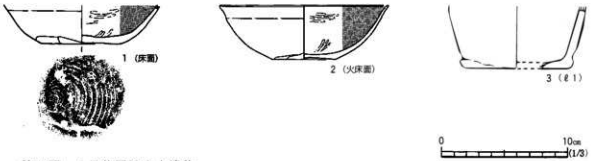
住居跡の内外からピット・溝などは確認できなかった。特に床面では，円形の土色の変化が認められるところすべて断ち割りをいれたが，その断面観察からピットと認められるものは無かった。

1号住居跡の平面形規模は，東西の長軸方向が3.05m，南北の短軸方向が2.50mである。北壁の張り出し部の平面形は，58cm×41cmである。東壁側のカマド火床面の平面形は，61cm×44cmである。住居跡の長軸方向の傾きは，N－63°－Eである。

**遺　物**　（第5図　写真10）

本住居跡からの出土遺物は少量で，図化できたのは第5図1～3の3点である。第5図1は，住居跡南西部の床面から出土したロクロ成形の土師器杯である。その出土状況は，口縁部を床面に接地させていた。だが，第5図1は，本住居跡が焼失した際に火を受けたらしく，口縁部の破片は復元が不可能なほど崩れていた。第5図2は，カマドと考えられるその火床面から出土したもので，第5図1と同様に火を受けており，器面は脆くなっていた。第5図1・2とも底部下端に手持ちヘラケズリ調整が施されている。

第5図3は，住居跡内堆積土$\ell$1から出土したもので，底部外面に木葉痕が認められ，弥生土器と考えられるものである。




第5図　1号住居跡出土遺物

ま と め

1号住居跡は，平面形が長方形を呈し，北壁の西部に方形の張り出し部を持つ。住居跡の規模は，東西方向が約3.0m，南北方向が約2.5mと非常に小型である。カマドは，火床面の痕跡から，東壁の南部に設けられていたようである。床面から柱穴を確認することはできず，上屋構造については不明である。

カマドの状況と，床面上に堆積していた焼土・木炭粒の在り方から，1号住居跡はカマドの破壊後に焼失した可能性がある。床面上に残された土師器杯も熱を受けた痕跡が認められた。1号住居跡の立地は丘陵尾根の平坦部であるが，その平坦部が東方向へ続くにもかかわらず，他の竪穴住居跡を確認することはできなかった。このことから，1号住居跡は，単独で営まれていた可能性がある。なお，1号住居跡の時期であるが，床面から出土した土師器杯の様相から9世紀前半頃と考えられる。

（香　川）

## 第3節　土　　坑

1号土坑　SK01（第6図　写真9）

本遺構はH2－83で検出された土坑で，本土坑の南西側約10mの地点には1号住居跡がある。他の遺構との重複関係はない。遺構検出面はLⅢ上面である。

土坑の平面形は，隅が丸い長方形である。その長軸方向はN－70°－Eで，地形の等高線の方向とほぼ等しい。本土坑の規模は，上端の長軸93cm，短軸69cmで，遺構検出面から最深部までの深さは20cmを測る。

土坑の底面は比較的平坦であるが，南東下部に窪みがある。本土坑の西半分の真中辺に北から南にかけて木の根が入り込んでいる。壁は四方とも底面から垂直に立ち上がる。壁の全面が熱を受けて赤褐色に変色していた。特に東半部の壁の変色が著しい。壁を断ち割り，変色の浸透程度を観察したが，東壁で最大8cm浸透していた。土坑内の堆積土は，ℓ1がにぶい黄褐色砂質土，ℓ2が褐色砂質土，ℓ3が木炭粒を多量に含む黒褐色土の3層である。堆積状況は，底面上に堆積するℓ3の東西両端にℓ2が三角堆積し，その上にℓ1がくる自然堆積である。

遺物は出土せず，時代・性格ともに不明であるが，酸化面が広範囲にわたって広がっているこ

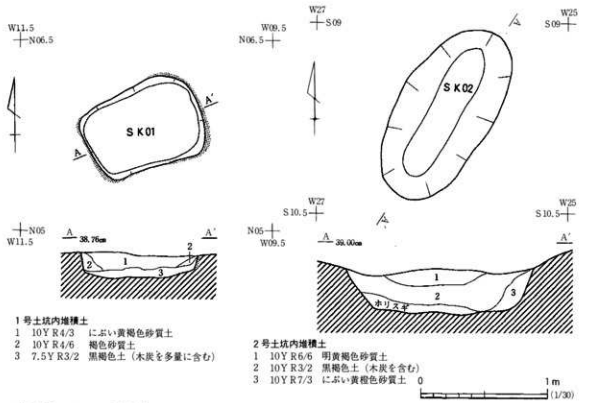
と，土層に木炭粒が大量に認められることから焼土坑と考えられる。本土坑の時期は，出土遺物がなく特定できないが，1号住居跡と関係があった可能性もある。　（本　田）

2号土坑　SK02（第6図　写真9）

本遺構は，調査区南西部のG3－20で検出された土坑である。遺構検出面はLⅢ上面である。本土坑の北東側約10mの地点に1号住居跡がある。他の遺構との重複関係はない。

本土坑の平面形は，長軸が長い楕円形である。長軸方向は，N－27°－Eである。本土坑の規模は，上端の長軸1.48m・短軸0.76mである。遺構の検出面から底面までの深さは，最深部で30cmを測る。床面の状況は，やや起伏が認められたが，全体的に見ると平坦である。周壁は，底面から55～70°の角度で曲線的に立ち上がる。

土坑内の堆積土は，ℓ1～3の3層に分けられたℓ1は明黄褐色の砂質土であるが，やや粘性があった。ℓ2は，木炭粒を均一に含む層で，土師器片が少量出土している。ℓ3は，南西部の壁面上で部分的に認められた層である。ℓ1～3の状況から，本土坑は自然に埋まったものと考えられた。ℓ2から出土した土師器は細片で，図化することができなかった。本土坑の性格は不明である。本土坑の時期も詳しくは判らないが，土師器を含むℓ2が自然に流入していることから，平安時代の頃の土坑と考える。　（本　田）




1号土坑内堆積土
1　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
2　10YR4/6　褐色砂質土
3　7.5YR3/2　黒褐色土（木炭を多量に含む）

2号土坑内堆積土
1　10YR6/6　明黄褐色砂質土
2　10YR3/2　黒褐色土（木炭を含む）
3　10YR7/3　にぶい黄橙色砂質土

第6図　1・2号土坑

## 第４節　遺構外出土遺物

**遺　　物**（第７図写真11）

美シ森Ａ遺跡から検出された遺構は，住居跡１軒・土坑２基と非常に少ない。遺物も同様で，遺構外から出土した遺物は23点と少量である。その内訳は，縄文土器１点・弥生土器２点・石器17点・須恵器２点・鉄製品１点である。そのほとんどが細片であり，また器面の劣化が著しいため，図化できたのは第７図１・２の２点である。なお，図化できなかったが，写真図版11に遺構外１～３の３点を掲載した。

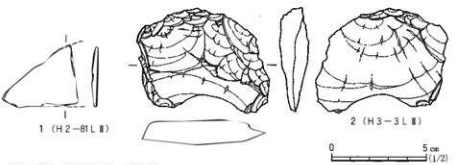
第７図１は，調査区西端部のＨ２－81のＬⅡから出土した鉄製品の破片である。左端部が三角形を呈する，丁度，鎌の先端部のような形状である。断面形は厚さが３㎜の薄い板状で，刃部の形成は認められない。遺存部の特徴から「火打燧」が推測される。

第７図２は流紋岩製で，横長の石器である。調査区中央部のＨ３－３のＬⅡ下位から出土した。表面に対して裏面の細調整は著しいものでないが，下端に内湾気味に抉れてい刃部が認められる。各計測値は，長さ5.6㎝，幅7.0㎝，厚さ1.5㎝，重さ47ｇである。Ｈ３－３のＬⅡ下位では縄文土器１点と弥生土器２点が出土しているため，第７図２の石器がどちらの時代に伴うものなのかは不明である。遺構外出土の石器は計17点であるが，すべて流紋岩製で，Ｈ３－３・13・14の狭い範囲で出土している。

写真11の遺構外１は縄文土器で，平底の底部破片である。胎土には多量の繊維を含んでおり，底部外面に木葉痕が認められる。縄文時代早期末葉頃と考えられるものである。

遺構外２は，弥生土器と考えられる薄手の土器である。外面に縄文が施されているが，器面の劣化が著しいため，原体の種類は不明である。

遺構外３は調査区東部のＬⅡから出土したもので，須恵器杯の口縁部破片である。器形は，遺存部から口縁部が直線的に開く形状を呈していたと思われる。器面の色調はやや赤みを帯びている灰褐色で，十分に還元していない。（香　川）




第７図　遺構外出土遺物

# 第3章　ま　と　め

今回の発掘調査において，平安時代前半頃の竪穴住居跡1軒（1号住居跡）と，時期不明の土坑2基（1・2号土坑）を検出した。美シ森A遺跡は，弥生時代の集落・墓域と多量の弥生土器・石器が出土した美シ森B遺跡と谷を隔てて隣接している。このことから美シ森A遺跡でも弥生時代の遺構・遺物が検出される可能性が考えられた。だが，発掘調査の結果，弥生時代の遺構は検出されず，また遺物もごく少量であった。本章では，1号住居跡と1号土坑について若干の補足を加えることで，美シ森A遺跡の調査成果のまとめとしたい。

**1号住居跡について**

美シ森A遺跡から平安時代の1号住居跡が確認されたが，根ッ子原A遺跡でも平安時代の竪穴住居跡が確認されている。しかし，両遺跡の竪穴住居跡は，立地・構造面において大きく異なっている。根ッ子原A遺跡の竪穴住居跡は，南に面する丘陵斜面の裾部に，隣の住居跡とある程度の間隔をあけながら東西に分布している。

一方，美シ森A遺跡の1号住居跡は，丘陵の頂部に構築されている。美シ森A遺跡は平安時代の遺物が非常に稀薄であるため，1号住居跡は集落から離れた単独の住居跡であった可能性がある。また，1号住居跡は，根ッ子原A遺跡の竪穴住居跡と比較してはるかに規模が小さく，その平面形も長方形を呈する。1号住居跡の性格としては，長期滞在型の住居跡ではなく，臨時的な簡易小屋のような施設が推測される。1号住居跡の床面上に焼土・木炭が多量に散布していたため，鍛冶遺構の可能性も考えて調査を行ったが，鍛冶作業の痕跡は認められなかった。

1号住居跡に伴う遺物は，土師器の杯が2点（第5図1・2）である。第5図1の底部外面には回転糸切り痕が明瞭に認められ，体部下端のみに手持ちヘラケズリが施されている。杯の体部下端のみに手持ちヘラケズリを施す調整方法は，9世紀中葉頃から土師器杯の主体を占めるようになり，また，底径が縮小していく傾向のあることが指摘されている。だが，第5図1の底径は6.2cmあり，底部がやや広めである。一方，第5図2は劣化が著しく再調整痕が明瞭に観察できなかったが，その底径は4.9cmと小さい。1号住居跡の所属時期であるが，第5図1・2の特徴から9世紀前半頃と考えたい。

**1号土坑について**

美シ森A遺跡からは2基の土坑が検出されている。1号土坑は，壁面が熱を受けて赤褐色に変色しており，焼土坑，あるいは木炭焼成土坑と呼ばれているものに類似している。焼土坑は，古いものでは弥生時代の例があり，土器焼成場の可能性が考えられている事例（1977：藤原）がある。古墳時代では，古墳の周囲から焼土坑が検出される例も多く，祭祀との関連性を考える説（1989：甘粕）がある。歴史時代では，周辺に所在する火葬墓との関連性から焼土坑を火葬所と考える説（1981：八木ほか，1992：森本，1996：香川）。また，古代の大規模な製鉄関連遺跡から検出された焼

土坑について，鍛冶の可能性から焼土坑はその燃料用の木炭を生産したとする説（1989：吉田）がある。このように焼土坑は，時代を越えて確認される性格のものであるが，以上の各説は，焼土坑の機能を他の遺構・遺物と有機的に結び付けて論証している点が特徴である。

一方，木炭焼成実験の結果，検出された焼土坑の様相と一致するという点から，焼土坑を木炭焼成土坑とするいわき市大平B遺跡の報告（1996：中山）がある。大平B遺跡の焼成実験は詳細で，非常に評価・尊重されるものである。また，土坑内から出土した木炭の樹種同程から，焼土坑を古墳時代のものとする分析も評価される。しかし，生産された木炭の用途の説明となると，家庭用の木炭・須恵窯の着火用など非常に曖昧である。木炭の用途の可能性についても，実験結果に基づく考察が重要であり，さらに深化した議論が可能となるだろう。

大平B遺跡の実験結果から，土坑内の空炊き→原木の燃焼→伏焼き→土坑の再利用というような図式を考える。だが，焼土坑の規模は小さいが，再利用をすることもあるという点から，備蓄を目的としておらず，ある作業の1回量のための木炭生産が想定される。また，少量の消し炭作りに数日の手間をかけるという点から，木炭の使用目的が明確であったと考えられるだろう。

簡単に家庭用の木炭というが，東国における古墳時代の一般的住居がカマドの付設された竪穴住居であったことを考えると，外部で生産した木炭を住居内に持ち込む可能性は低いと思われる。まだ，掘立柱建物と家庭用木炭という結び付きの方が理解できる。また着火性という点において，消し炭よりも乾燥木の方が着火性は高いが，着火剤としての木炭の意味を示す必要があるだろう。

最初に述べたように焼土坑は，時代を越えて確認されているものである。また，焼土坑は，構造面において非常に単純であるが，土器・木炭の焼成や・火葬・ゴミの焼却など多種の用途が可能である。それゆえ，他の遺構や遺物と有機的に結び付けて，焼土坑の機能が推測されている。そのような状況下で，焼土坑を特定の機能を表すような名称にしてしまう点に大きな問題があると考える。

美シ森A遺跡の1号土坑であるが，近接する遺構には1号住居跡がある。1号住居跡が簡易小屋的な性格であったとすると，1号土坑のような施設で木炭を生産しながら移動をしたと考えることも可能である。しかし，なぜ木炭を生産したのか推測する判断材料がない以上，短絡的な発想であり，憶測の領域を越えるものではない。したがって，美シ森A遺跡の場合，焼土坑と考えられる1号土坑の機能については不明である。　　（香　川）

## 参　考　文　献


藤原　学　1977　『河内長野大師山』関西大学文学部考古学研究室

八木勝行㈱　1981　『日本住宅公団藤枝地区　埋蔵文化財報告書』藤枝市教育委員会

甘粕　健　1989　『保内三王山古墳群』三条市教育委員会

森本　徹　1992　「火葬墓と火葬遺構2」『大阪文化財研究第3号』（財）大阪文化財センター

吉田秀亨㈱　1989　『相馬開発関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター

香川憲一　1996　「焼土坑の再検証」『論集しのぶ考古－目黒吉明先生頌寿記念－』

中山雅弘㈱　1996　「大平B遺跡」『いわき市埋蔵文化財調査報告第44集』いわき市教育委員会

# 第2編　美シ森（うつくもり）B遺跡

遺跡記号　NH－USM・B
所在地　双葉郡楢葉町大字山田岡字美シ森
時代・種別　弥生時代・平安時代・現代
　　集落跡・墓域・遺物包含層
調査期間　1996年4月15日～8月30日
調査員　高橋信一・本田公成
　　藤谷　誠・香川慎一
協力機関　楢葉町教育委員会

# 目　次

第1章　調　査　経　過 ……25
第1節　位置と地形 ……25
第2節　調査経過 ……25
第2章　遺構・遺物 ……28
第1節　調査の方法と基本層序 ……28
第2節　竪穴住居跡 ……29
第3節　土器棺墓 ……61
第4節　土　　坑 ……68
第5節　特殊遺構 ……86
第6節　溝　　跡 ……90
第7節　木炭窯 ……91
第8節　その他の遺構 ……92
第9節　遺物包含層 ……94
第10節　遺構外出土遺物 ……111
第3章　ま と め ……125
第1節　遺物について ……125
第2節　遺構について ……128
第3節　集落と墓域について ……130
写真図版 ……193～245

# 第1章　調　査　経　過

## 第1節　位置と地形

美シ森B遺跡は，福島県双葉郡楢葉町大字山田岡字美シ森に所在する。ＪＲ常磐線木戸駅から南西へ約２㎞離れた地点に位置する。

楢葉町は浜通り地方の中央部からやや南寄りに位置し，東を太平洋，南を広野町，西をいわき市・双葉郡川内村，北を富岡町に接している。遺跡の所在する楢葉町は，阿武隈高地から延びる標高20～600mの丘陵と，木戸川や井出川によって形成された小規模な河岸段丘から構成される。この丘陵は双葉段丘と呼ばれ，木戸川と井出川に挟まれた標高20～40m・60～80m・100～120mの面によく観察される。

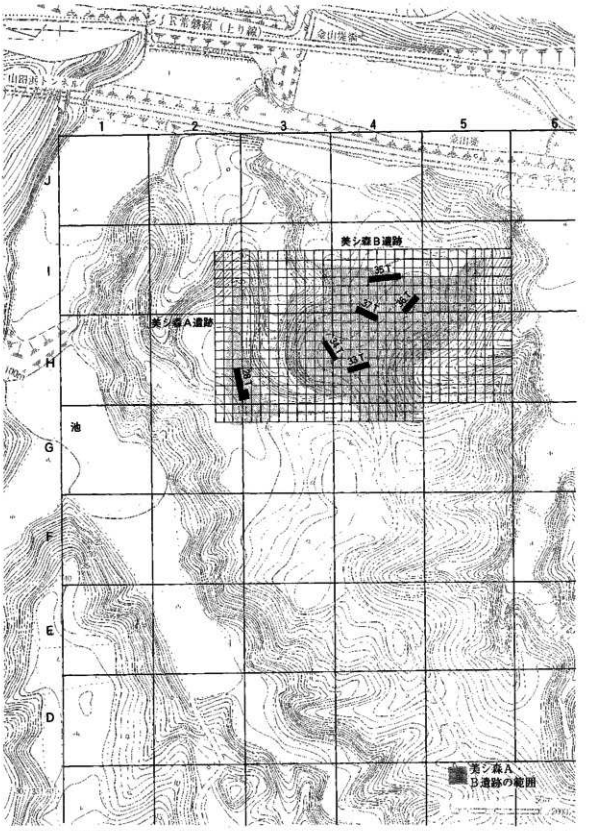
楢葉町山田岡地区は町の南端に位置し，北を大字下小塙，東を大字山田浜，南を広野町，西をいわき市に接する。山林が大部分を占め，小規模な谷地に水田が，低位段丘面には畑と山林が広がっている。地区の中央部を国道６号線が走り，ＪＲ常磐線木戸駅の東側には県道小塙・郡山線（旧６号国道）沿いに集落が形成されている。

美シ森B遺跡は，標高40m前後の丘陵に立地し，南北に東西方向に走る小規模な開析谷が発達している。現況は山林・雑木林であるが，第二次世界大戦前後に宅地が存在していたことが井戸の痕跡からうかがえる。これ以前の状況は不明な点もあるが，地形が改変されており，畑地として利用された可能性が高い。

ＮＴＣ建設予定地内からは，序章表１のように８ヵ所の遺跡が発見された。美シ森Ａ・根ッ子原Ａ遺跡は平安時代の集落跡，美シ森Ｂ遺跡は弥生時代の墓域と集落跡，美シ森Ｃ遺跡と下岩沢Ａ遺跡と岩沢Ａ遺跡は時期・性格不明な竪穴状遺構や土坑，下岩沢館跡は中世の城館跡で堀切や平場を，岩沢塚は塚をそれぞれ確認した。遺跡は丘陵上に立地しており，複雑に開析された小規模な谷地が発達している。各時期共に小規模な集落跡が確認されており，このような谷地を生産基盤にしていたことが推定される。また，ＪＲ常磐線複線工事に際して山田浜トンネルから横穴墓が発見され，土師器・須恵器の壺や甕が出土している。　　（高　橋）

## 第2節　調　査　経　過

美シ森B遺跡は，平成７年６月１日から６月９日にかけて福島県教育委員会と楢葉・広野町教育委員会とが，ＮＴＣ事業対象区内の表面調査の際に発見した弥生時代の遺物散布地である。さらに，９月18日から10月28日にかけて試掘調査を実施し，弥生時代の土器片や石器・土坑を検出し，要保存範囲3,640㎡と確定した。




第1図　美シ森B遺跡周辺地形図

ＮＴＣ事業対象区域では平成７年度からすでに造成工事を開始しており，大型機械が頻繁に稼働している状態下であったため，福島県教育委員会と財団法人福島県文化センターは，４月15日から発掘調査を開始するにあたり，東京電力株式会社ＮＴＣ工事事務所とサッカーＮＴＣ土木工事共同企業体と協議を重ね，調査中の安全や排土置場の確保を行った。同時に調査地域が造成工事区内に点在することから，作業員の安全確保のため大型バスの運行と調査員による引率を行った。以下，美シ森Ｂ遺跡の調査日誌概要を記す。

４月15日～４月19日　発掘調査の準備のため現地に赴き，調査地点の確認と作業員の手配を行う。17日から調査開始し，表土剝ぎを行う。

４月22日～４月26日　表土剝ぎを継続し，調査区の北東端から作業員を投入して遺構検出作業を行う。次週は大型連休のため調査を一時中断した。

５月７日～５月11日　遺構検出作業を継続。抜根に手間取る。（６月中旬で終了した）

５月13日～５月17日　遺構検出作業を継続。弥生土器片や石器（剝片）が出土する。

５月20日～５月24日　遺構検出作業を継続。調査区北東側から東部の１～７号土坑・１号木炭窯跡の精査を開始する。１号木炭窯跡の西側から段丘礫を含む露頭が確認され，本遺跡出土の石器との関連が考えられる。

５月27日～５月31日　調査区中央部の遺構検出作業を継続し，竪穴住居跡や土坑群を検出する。

６月３日～６月７日　調査区南側で弥生土器が集中して出土しており，７号住居跡とする。

６月10日～６月14日　２・３号住居跡や４・９号土坑周辺の精査を開始。

６月17日～６月21日　調査区西側の遺構検出作業が終了し，検出した遺構は少なかった。

６月24日～６月28日　調査区に仮置きした排土を移動する。

７月１日～７月５日　調査区南側中央部の遺物包含層の精査を開始し（８月９日で終了），少量の縄文土器と多量の弥生土器片・石器が出土する。

７月８日～７月12日　１・２号焼土遺構，調査区南西部の精査。

７月15日～７月19日　10～13号土坑，１号溝跡の精査。

７月22日～７月26日　１号木炭窯跡及び調査区東側の精査を開始する。

７月29日～８月２日　調査区南側の１・２号特殊遺構周辺を精査し，筒形土器細片出土。

８月５日～８月９日　１～３号土器棺墓の調査を行い，長頸壺や甕が出土する。５号住居跡と周辺の土坑群・遺物包含層の精査を行う。根ッ子原Ａ遺跡の調査が終了したため，全調査員を投入。

８月12日～８月16日　旧盆のため，調査を休みとする。

８月19日～８月23日　調査区中央部東寄りの５・６号住居跡，東側の７～９号住居跡，北側の10～15号住居跡と周辺の土坑群の精査を行う。

８月26日～８月30日　27日の空中写真撮影のため，調査地点の清掃を行う。各遺構の精査を継続し，調査の終了した遺構から断ち割りを行う。

９月１日～９月３日　補足調査を行い，現場を撤収する。　（高　橋）

# 第2章　遺構・遺物

## 第1節　調査の方法と基本層序

### 1．調査の方法

調査は試掘調査の所見から重機（バックホー）でＬⅠを除去し，排土はクローラダンプを使用し排土置場に運搬した。ＬⅠを除去した地点から作業員を投入して，遺構確認作業を実施した。

座標設定に当たっては，ＮＴＣ建設予定地内を50m単位の大グリッドで区画し，さらに大グリッドを５m単位の小グリッドで分割した。大グリッドの起点は，ＮＴＣ建設予定地内の北西端で（国土座標Ⅸ系：Ｘ＝＋138,800.000・Ｙ＝＋104,000.000）とした。大グリッドの名称は，北西端から東方向にＡ～Ｊのアルファベットで，南方向に１～11までの算用数字とし，両記号を組み合わせて表示した。本遺跡の大グリッドの地点は，Ｇ３～５，Ｈ３～５，Ｉ３～５である。さらに，この50m単位の大グリッドを北西端から５mで分割し，１～100とした。遺構や遺構外遺物の検出地点は，Ｇ３－１・Ｈ３－２と表示した。また，各遺構の地点を示すために，Ｈ４－50杭を原点にＮＳ00・ＥＷ00を設けた。

遺構の掘り込みは，２・４分法を基本として土層観察を行った。遺構外出土遺物は原則としてグリッド名と層位を記して調査を進めた。土層の記録は，遺構内堆積土は$\ell$と算用数字，遺構外堆積土はＬとローマ数字の組み合わせで表示した。

調査の記録は，原則として1/20の縮尺で作成したが，規模の小さな土坑や土器棺墓は1/10の縮尺で作成した。発掘面の地形は１mコンタの1/100で図化した。写真は６×4.5判のモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムの他に，35㎜のモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムを併用した。さらにラジコンヘリコプターによる遺跡全体の空中写真撮影を行った。

### 2．基本層序

本遺跡の基本層序は，ＬⅠは腐食土を含む表土，ＬⅡは小礫や木炭粒を含む褐色土（10ＹＲ4/4），ＬⅢａは土器片や木炭粒を含む褐色砂質土（10ＹＲ4/4），ＬⅢｂは明黄褐色砂質土（10ＹＲ6/6），ＬⅣは地山で遺構検出面である黄褐色砂土（10ＹＲ5/6）または明褐色粘質土（7.5ＹＲ5/8），ＬⅤは橙色粘質土（7.5ＹＲ6/6）となる。

調査地点で基本層序は異なり，調査区中央部の丘陵頂部ではＬⅠ直下がＬⅡとなる。遺物包含層を検出した調査区南側では，小規模な谷地を確認し，ＬⅢａ・ＬⅢｂ・ＬⅣを確認した。ＬⅢａの層厚は20～30㎝を測り，再堆積土を含み遺物（縄文土器・弥生土器・石器）が出土した層である。ＬⅢｂの層厚は10～20㎝を測り，少量の遺物が包含されていた。また，段丘礫の露頭が確認されたのは，ＬⅣ下で地表面から３m前後を測る。　（高　橋）

## 第２節　竪穴住居跡

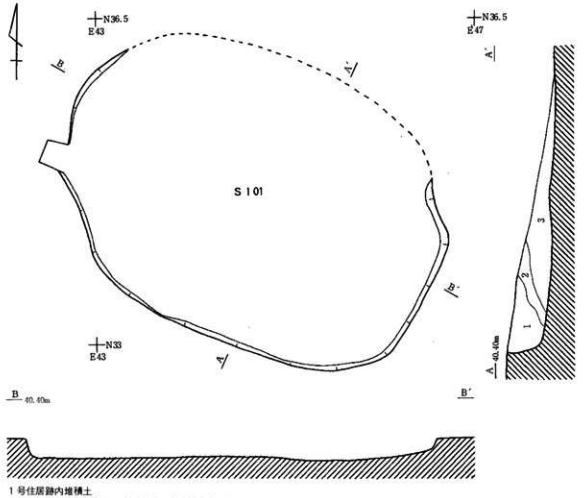
竪穴住居跡は，弥生時代中期のものが，合計14軒検出されている。遺跡内では，中央部～北側の尾根上平坦部とその周縁で９軒，東側では平坦面からそれに続く緩斜面上で５軒検出されている。

### １号住居跡　ＳＩ01

**遺　構**　（第２図　写真７・８）

１号住居跡は，調査区北端のＨ３－78・88・89グリッドに位置している。付近は調査区頂部平坦面より北へ向かう斜面となっており，周辺には西側に12号住居跡がある。住居跡内からは，柱穴・炉跡は検出されなかったが，その規模より住居跡として報告する。

遺構検出面はⅡ層上面で，そのプランは小判形を呈する。その規模は，東西の長軸が4.20m，南壁から北側床面遺存部までの南北の短軸が３mである。主軸はＮ－62°－Ｗである。検出面からの




１号住居跡内堆積土
1　7.5Y R4/4　褐色シルト（微量の木炭粒を含む）
2　5Y R4/6　暗赤褐色シルト（多量の焼土ブロック・微量の木炭粒を含む）
3　7.5Y R4/4　褐色シルト（少量の木炭粒・焼土粒・灰褐色土ブロックを含む）

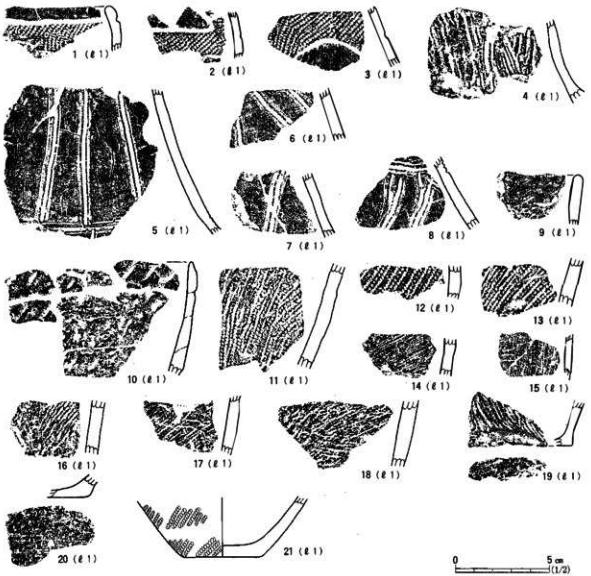
0　1m
(1/40)

第２図　１号住居跡

深さは，最深部である南壁下で40cm程となっている。堆積土は３層からなる。ℓ１は木炭粒を混入する褐色シルト，ℓ２は暗赤褐色を呈する焼土のブロック層，ℓ３は木炭粒・焼土・灰褐色土ブロックを混入する褐色シルト層である。堆積状況はブロック土を混入し，堆積の状況が斜面に対して不自然なところから，当初遺構の切り合いも想定して，土層ベルトに沿ってのサブトレンチを設定して調査を進めた。しかし，床面から上場にかけての壁が連続し，遺構の重複に伴うような段差は検出されなかったところから，同一遺構の人為的な堆積土と判断した。壁面の立ち上がりは，遺存している各壁で急となっている。床面は凹凸はないものの，東側から中央部に向かってやや傾斜している。また，床面上から踏み締まりと考えられる特に硬質な面は検出されなかった。柱穴・炉跡等の施設は床面及び遺構の周辺から検出されなかった。

**遺　物**　（第３図　写真41）

遺物は堆積土中より弥生土器片が出土している。遺物は中期前半のものと中期末のものが出土している。図示資料では，**第３図１～４が中期前半のもので，１が口縁部が内湾する形態の鉢の口縁**




第３図　１号住居跡出土遺物

部，2がその体部，3・4が壺の頸部である。1～3には沈線と磨消縄文手法を用いた文様が施されている。5～8は同一個体の壺の頸部破片で，3条1組の沈線による縦位の区画文が施されている。中期末のものと考えられる。9・10は深鉢の口縁部破片で，9は口縁下の無文帯下に縄文が施されている。10は外面に輪積み痕が明瞭に残っているものである。11～13，16～18は外面に附加条縄文が施された甕あるいは壺の体部破片である。14・15は外面に細かな撚糸文が施された壺の体部と思われる。19～21は底部で，19には外面に条痕文が施されており，20は底部に布目痕が残っている。21は鉢の体部と思われ，外面に単節縄文が施されている。

**ま　と　め**

1号住居跡は，遺跡北側に位置する小判形を呈する住居跡で，人為堆積と考えられる堆積土中より弥生中期前半と中期末の遺物が出土している。したがって，住居跡の年代は，新しい時期の弥生中期末と考えられる。（藤　谷）

## 2号住居跡　SI02

**遺　構**　（第5図　写真9・10）

2号住居跡は，調査区中央部よりやや西側の段丘上部平坦面のH4－15・25グリッドに位置している。遺構は，中央部北側と南東側で木の根による攪乱を受けており，東壁の南側一部は遺存していない。住居跡は1・2号焼土遺構と4号性格不明遺構と重複関係にある。焼土遺構は，住居跡の堆積土上部より検出されており，住居跡より新しい。4号特殊遺構は住居跡に切られており，それより古い。周辺には東側に3号住居跡，4・9・29号土坑が位置している。

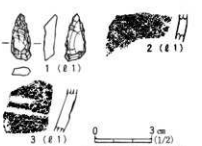
遺構検出面はⅠⅣ上面で，形態は不整な隅丸方形を呈する。その規模は，南北の長軸で4.1m，東西の短軸で3.5mとなっている。主軸はN－10°－Eである。検出面からの深さは南側の最深部で25cm程となっている。堆積土は2層からなっている。ℓ1・2ともに木炭粒を混入する褐色シルトで，堆積状況は自然堆積と考えられる。壁面の立ち上がりは全周にわたってやや急である。床面は平坦で，中央部には踏み締まりと考えれる硬質な面があった。炉と考えられる焼土は，北西隅近くで検出された。焼土の範囲は，長軸57cm，短軸45cmであり，その厚さは14cm程である。柱穴と考えられるピットは，床面東側の壁際で1個検出された。径25cm，深さ15cm程のものである。

**遺　物**　（第4図）

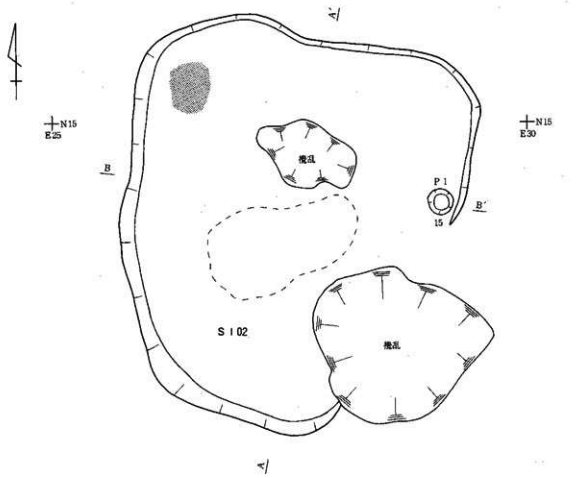
遺物は堆積土中より，石鏃と少量の弥生土器片が出土している。図示資料では第4図1が流紋岩製の石鏃である。2は鉢の体部破片で，外面に縄文が施されている。3は弥生中期前半の深鉢の体部で沈線文が施されている。

**ま　と　め**

2号住居跡は，3号住居跡とともに炉跡が付設された住居跡で，その年代は3号住居跡との位置関係，出土遺物より弥生中期前半の可能性が高い。（藤　谷）



第4図　2号住居跡出土遺物


N15
E25
N15
E30
B
B'
P 1
S I 02
撹乱
撹乱
E25
N10
E30
N10
A
42.50m
A'
B
42.50m
B'
1
2
P
2号住居跡内堆積土
1　7.5Y R4/4　褐色シルト（少量の木炭粒・パミスを含む）
2　7.5Y R4/4　褐色シルト（微量の木炭粒を含む）
0
1m
(1/40)

**第5図　2号住居跡**

### 3号住居跡　SI03

**遺　構**　（第6図　写真11・12）

3号住居跡は，調査区中央部よりやや西側の段丘平坦面のH4－14・24グリッドで検出された。4・9・29号土坑と重複関係にあり，4・9号土坑に切られ，29号土坑を切っている。

遺構検出面はLⅣ上面で，形態は南側が9号土坑に切られ南壁が壊されているが，それ以外の周壁の形態より小判形を呈すると考えられる。その規模は，北壁から9号土坑の南壁までの長軸が4.50m，短軸が2.25mである。主軸はN－6°－Wである。検出面から床面までの深さは，最深部で20cm程となっている。堆積土は，床面までの堆積土が2層，掘形の堆積土が1層である。ℓ1は遺構のほぼ全面に堆積し木炭粒を混入する褐色シルト，ℓ2は東側の壁際に堆積し木炭粒と地山ブロックを混入するオリーブ褐色シルトである。ℓ4は掘形内に堆積する褐色シルトである。堆積状況は，掘形内を除いて自然堆積と考えられる。壁面の立ち上がりは全体的にやや緩やかである。

住居内の東西壁に沿っては，ベッド状の高まりが認められる。西側のものは，西壁中央の壁際から内部に向かって弧状に土堤部が10～15cm程の高さに張り出す形態を呈し，壁際の長さが1.85m，幅が60cmの規模である。高まり上部は凹凸がなく，南から北側に向かって僅かに傾斜し，ほぼ平坦である。東側のものは，東壁北側より長さ1.1m，幅50cmの規模で弧状に張り出す形態となっている。上部は，南側が床面より7cm高くなっており，北側は床面と同じ高さとなる。これらの高まりは，断面の状況から，床面より土を貼って作ったのではなく，住居構築時に地山より作り出されたものと考えられる。

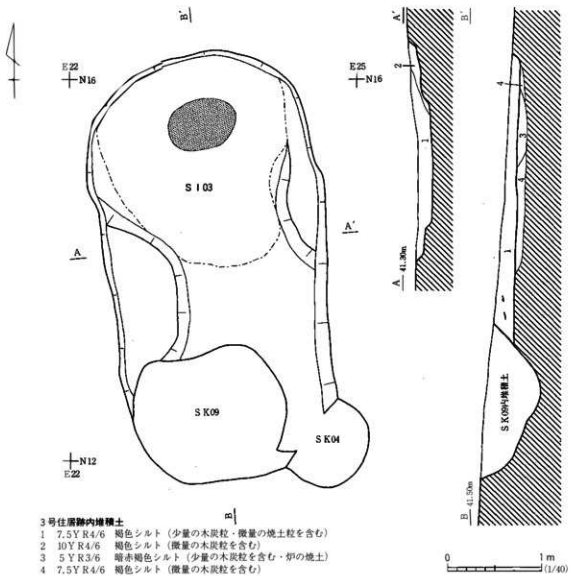
炉と考えられる焼土は，床面の北側中央にあり，焼土の範囲は53×75cmの規模で，焼土の厚さは厚いところで，10cmに及ぶ。住居築造時に作られたと考えられる掘形は，住居の北半に認められ，床面からの深さは8cm前後である。

**遺　物**　（第7～10図　写真42～44）

遺物は堆積土中及び掘形内より石器と弥生土器が出土している。

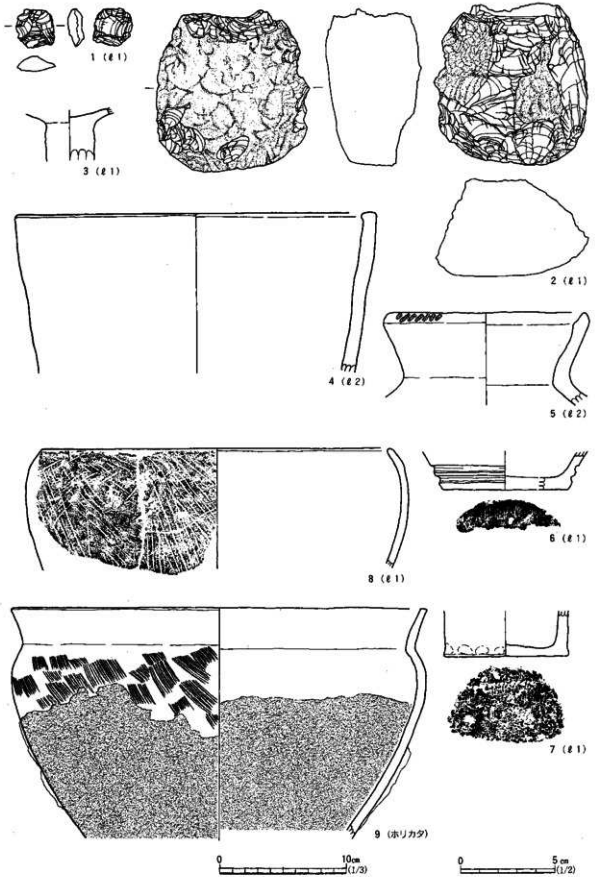
石器は2点を図示した。第7図1は流紋岩製の不定形石器，2は珪質岩製の石核である。

弥生土器では，高坏・鉢・深鉢・壺・甕などが出土している。第7図3は高坏の杯部から脚部にかけての破片である。4は円筒型を呈する無文の深鉢で，口縁内面が肥厚し明瞭な段を有する器形である。5は壺の口縁部から頸部で，口縁外面に縄文が施されており，口縁内面には稜線を持つ器形である。6は鉢の底部あるいは蓋の天井部で，2条の平行沈線が巡っている。7は小型の鉢の体部で底部から体部にかけて円筒形に立ち上がる器形である。8は外面に条痕が施された深鉢で，口縁部が内湾する器形である。9は体部外面に条痕が施された甕で，体部内外面に木炭粒が付着している。特に外面ではその厚さが厚いところで5mmとなっている。第8図1～6は壺と甕の底部で，2は外面に縄文が施され，3には底面に木葉痕が認められる。7～16は鉢と深鉢の口縁部破片である。外面には太い沈線と磨消縄文手法による文様が描出されている。器形には，口縁部が内湾する

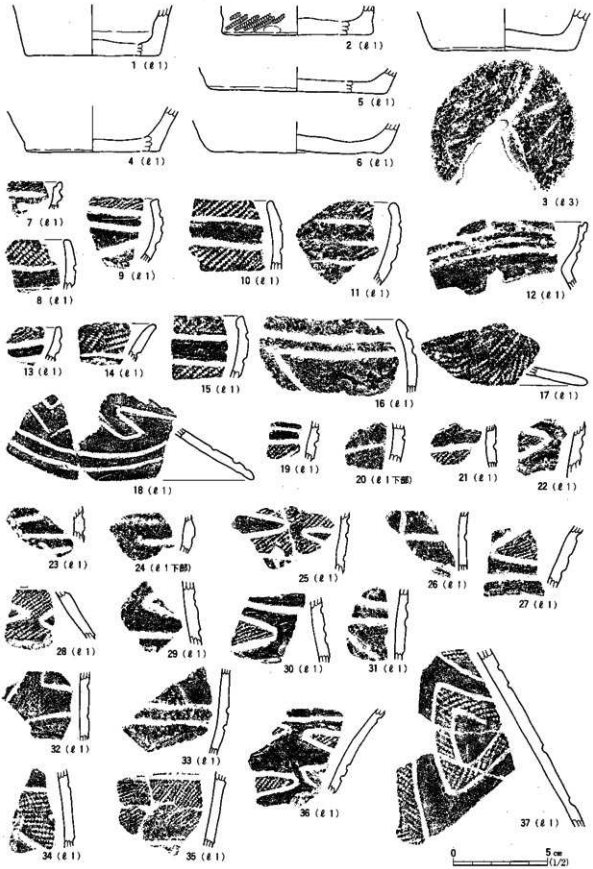



第６図　３号住居跡

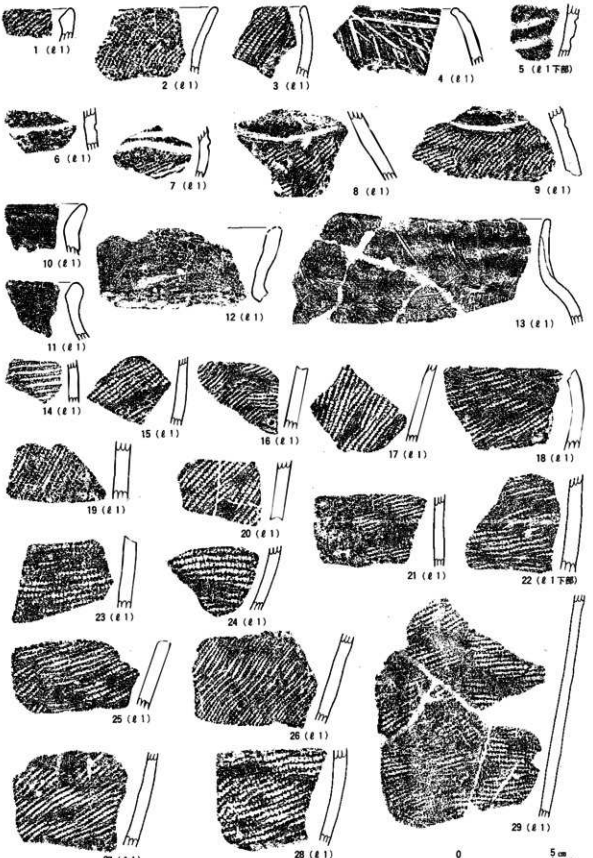
ものと体部との境界が括れて内湾気味に開くものがある。17・18は蓋で，18には沈線区画文が施文されている。19～37は外面に文様を有する鉢及び壺の体部破片である。文様は太い沈線による楕円や三角形区画文と磨消縄文を用いて描かれている。この内，楕円区画文には楕円部に縄文が入るもの（22・27・30・31・36）とその外側に縄文が入るもの（25・36）がある。第９図１・３は外面に縄文の施された深鉢の口縁部，２は外面に縄文が施された壺の口縁部，４は外面に条痕が施された深鉢の口縁部である。５～７は鉢の体部，８・９は同一個体の壺の体部である。10～13は甕の口縁部で，短い口縁部が外反するもの（10）や口縁部が外傾しながら立ち上がるもの（13）等がある。14～29は地文のみの体部破片で，地文には単節縄文の他に附加条縄文のもの（14・16）がある。第10図１～５は同一個体と考えられる壺の口縁部から体部にかけての破片で，外面には附加条縄文が施されている。口縁部は外傾しており，口唇には縄文が施文されている。６～13は条痕及び撚糸文が施された体部破片である。



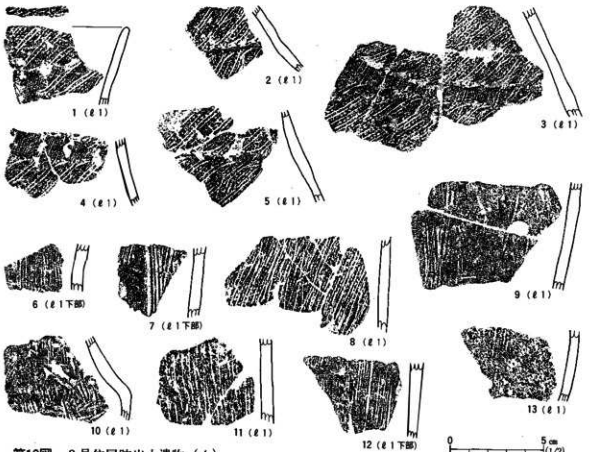

**第7図　3号住居跡出土遺物（1）**




第8図　3号住居跡出土遺物（2）




第9図　3号住居跡出土遺物（3）




**第10図　3号住居跡出土遺物（4）**

ま と め

3号住居跡は，炉跡が付設された小判形を呈する住居跡で，堆積土及び遺物の出土状況から，住居廃絶後の比較的短い期間，捨て場として利用された可能性が高い。住居の機能した年代は，出土遺物より弥生時代中期前半と考えられる。　（藤　谷）

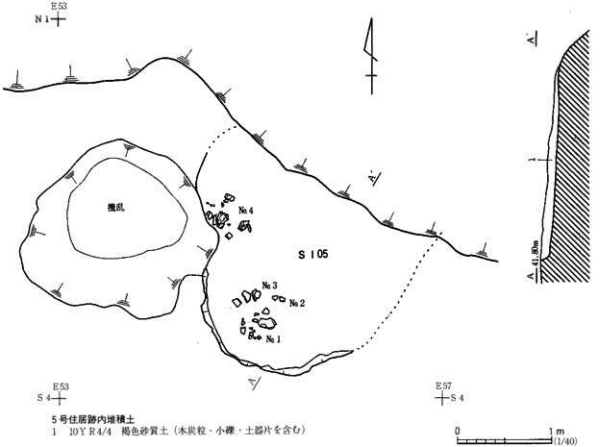
5号住居跡　SI05

**遺　構**（第11図　写真13・14）

調査区中央部から東寄りのH4－60・I4－61グリッドから検出された竪穴住居跡である。北西側に6号住居跡，南西側に1号遺物包含層が隣接する。遺存状況は不良で，西側を木根による攪乱，北側を後世の削平，住居全体を細い木根によって覆われていた。検出面はLⅣ上面である。

平面形は南壁の一部が遺存しており，ほぼ楕円形を呈していたと考えられる。また，床面については，ℓ1の堆積土の範囲から推定した。規模は，遺存する部分で長径250cm・短径220cmを測る。堆積土は1層で，自然堆積である。ℓ1は木炭粒・小礫・土器片を含む褐色砂質土である。

壁面はLⅣを掘り込み，南壁の壁高約10cmで，床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面はLⅣ中位面を使用し，ほぼ水平である。貼床や硬化した面は確認されず，通年の居住施設とは考えられなかった。他に，柱穴や炉跡などの住居内施設は確認されなかった。




**第11図**　５号住居跡

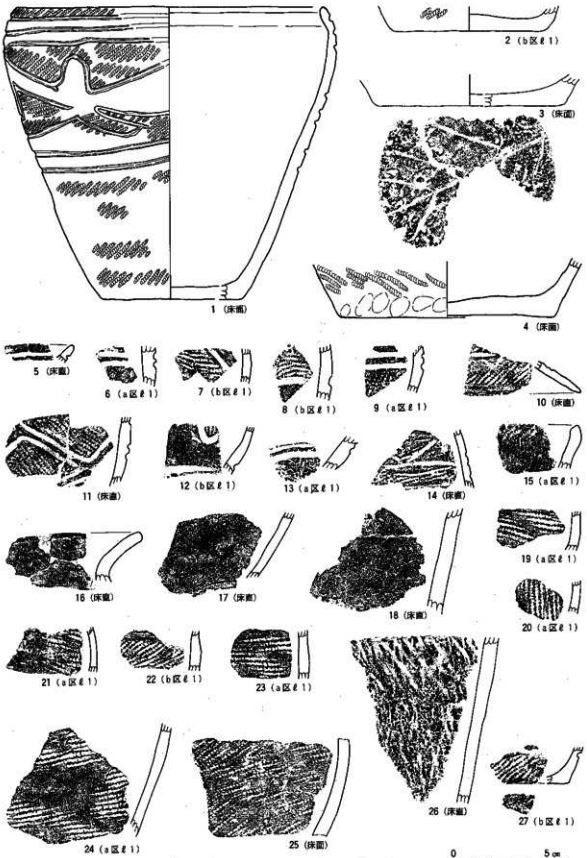
**遺　　物**　（第12・13図　写真45・46）

遺物は，堆積土から弥生土器片57点，床直からＮｏを付した弥生土器片90点の計147点が出土した。床直から出土した弥生土器片は比較的まとまっており，Ｎｏ１～４までの採取番号を付した。室内の整理作業では接合する土器片は少ないが，数個体の弥生土器が含まれていることが明らかになった。第12図１～27・第13図１～３の30点を図示した。

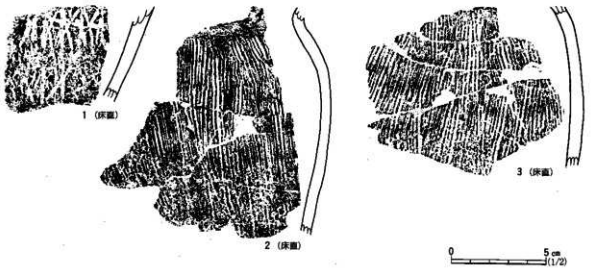
第12図１～４は図上復元した鉢・甕である。１は鉢で約20％の破片から復元し，推定口径16.2㎝・器高15.5㎝・推定底径7.4㎝を測る。器形は底部から直線的に開き，口縁部で大きく内湾する。器面は，体部上半に磨消縄文と太い沈線でヒトデ状の文様と，口縁部下と体部下半に２条の平行沈線で区画されている。２～４は鉢又は甕の底部片である。器面には縄文と指頭痕が施され，３の底面には木葉痕が観察される。５～９・11～13・15・19・20～25・27は鉢，10は蓋，14は壺，16～18は甕，26と第12図１～３は深鉢である。５・15・16は口縁部，14は頸部，他は体部片である。５～９・11～14は，磨消縄文と太い沈線で文様を表出している。19・20・20～25は縄文，16～18は無文でミガキが，26・第13図１は粗い網目状撚糸文，第13図２・３は条痕がそれぞれ施されている。

**ま　と　め**

本住居跡の遺存状況は不良で，西側を木根による攪乱，北側を後世の削平，住居全体を細い木根によって覆われていた。柱穴や炉跡などの住居内施設は確認されず，床面も軟弱で通年使用した住




第12図　5号住居跡出土遺物（1）




**第13図**　５号住居跡出土遺物（２）

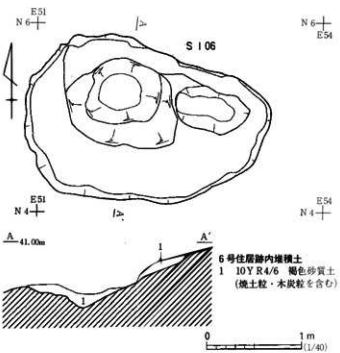
居とは考えられなかった。遺物は，床直で比較的まとまって出土しており，Ｎｏ１～４の採取番号を付して取り上げた。接合の結果，数個体の弥生土器が含まれていた。本住居跡の機能した時期は，磨消縄文と沈線を用いて文様を表出していることから，弥生時代中期前半と考えられる。（高　橋）

## ６号住居跡　ＳＩ06

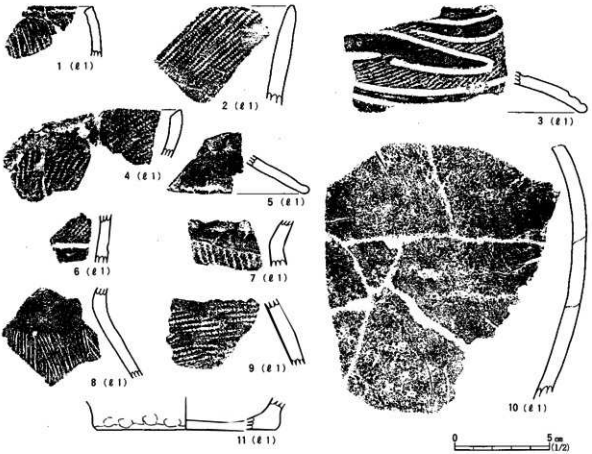
**遺　構**　（第14図　写真15・16）

調査区中央部東寄りのＨ４－40・50グリッドから検出された竪穴住居跡である。南東側６mの地点には５号住居跡が隣接する。本住居跡は，遺構検出作業時に弥生土器の細片がまとまって出土し，堆積土の状況は他の住居跡に類似しており，６号住居跡の名称を付した。検出面はＬⅣ上面である。

平面形は横長の不整な楕円形を呈し，長径256cm・短径172cmを測る。堆積土は１層で，南側からの自然堆積である。ℓ１は木炭粒・小礫を含む褐色砂質土である。壁面はＬⅣを掘り込み，北・南壁の壁高約10cmで，床面から緩やかに立ち上がる。床面はＬⅣ面を使用していたが，本住居跡が斜面に立地しており，かつ北壁際では浅い窪みが２ヵ所確認された。土層図でも水平な床面は確認されず，断




**第14図**　６号住居跡




**第15図**　6号住居跡出土遺物

面も開口部の広い「V」字状を呈する。他に，柱穴や炉跡などの住居内施設は確認されなかった。

**遺　物**　(第15図)

遺物は堆積土及び遺構検出作業時に61点の弥生土器片が出土し，第15図1～11の11点を図示した。破片が大半を占め，図化した土器は皆無であった。1・2・4は深鉢，6は鉢，3・5は蓋，7～9は壺，10は鉢または甕の底部片である。1・8は条痕文，2・4・7は縄文，3・6は磨消縄文と太い沈線，5・10は無文で器面が剝落しているがケズリやミガキがそれぞれ施されている。3は蓋の口縁部片で，磨消縄文と太い沈線を使用し，変形工字文の変質した入組文を表出している。

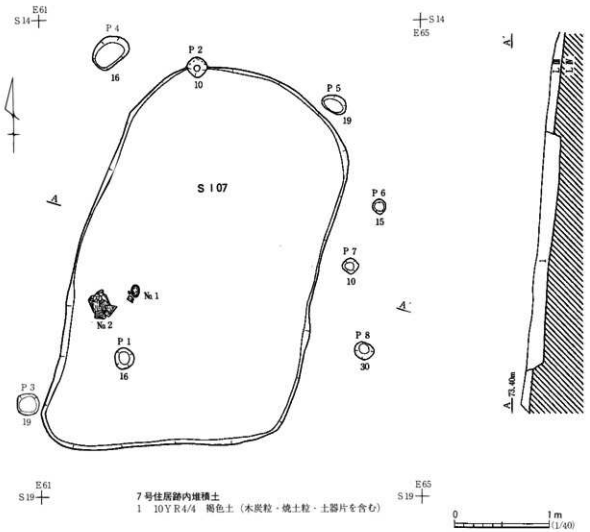
**ま　と　め**

本遺構は，遺物の出土状況や堆積土から調査の段階では竪穴住居跡と考えたが。精査の段階で，水平な床面は確認されず，断面も開口部の広い「V」字状を呈する。また，柱穴や炉跡などの住居内施設も確認されなかった。このため，竪穴住居跡と考えられず，土坑や竪穴状遺構の可能性が高い。時期は出土した弥生土器から，弥生時代中期前半が推定される。　(高　橋)

### 7号住居跡　SI07

**遺　構**　(第16図　写真17・18)

調査区東部I4－73・83グリッドから検出された竪穴住居跡である。東側に8・9号住居跡，北




**第16図**　7号住居跡

西側に1～3号土器棺墓・19号土坑がそれぞれ隣接する。本住居跡は遺構検出作業時に，多くの弥生土器片や石器（剝片）が出土した地点で，堆積土とⅢが酷似しており確認に手間取った遺構である。検出面はⅣ上面である。

平面形は南北に長い不整楕円形を呈し，北壁は丸味を持ち，南壁は直線的に角張る。長軸432cm・短軸248cmを測る。堆積土は1層で，自然堆積である。ℓ1は木炭粒・焼土粒・土器片を含む褐色土である。壁面はⅣを掘り込み，壁高は平均して18cm前後で，床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面はⅣ下位面を使用し，やや北壁に向かって緩やかに傾斜している。貼床や硬化した面は確認されず，通年使用した住居とは考えられなかった。住居内にP1，北東壁際にP2，屋外にP3～8の8個のピットが検出された。埋土は住居内堆積土と類似した木炭粒・焼土粒を含む褐色土である。遺物や柱痕は確認されなかった。このピット群は，径が14～38cm・床面および検出面からの深さ10～30cmを測る。この他に，炉跡などの住居内施設は確認されなかった。

**遺　物**　（第17～21図　写真47～52）

遺物は遺構検出作業を含めて，多量に出土している。弥生土器片約900点，石器（剝片を含む）

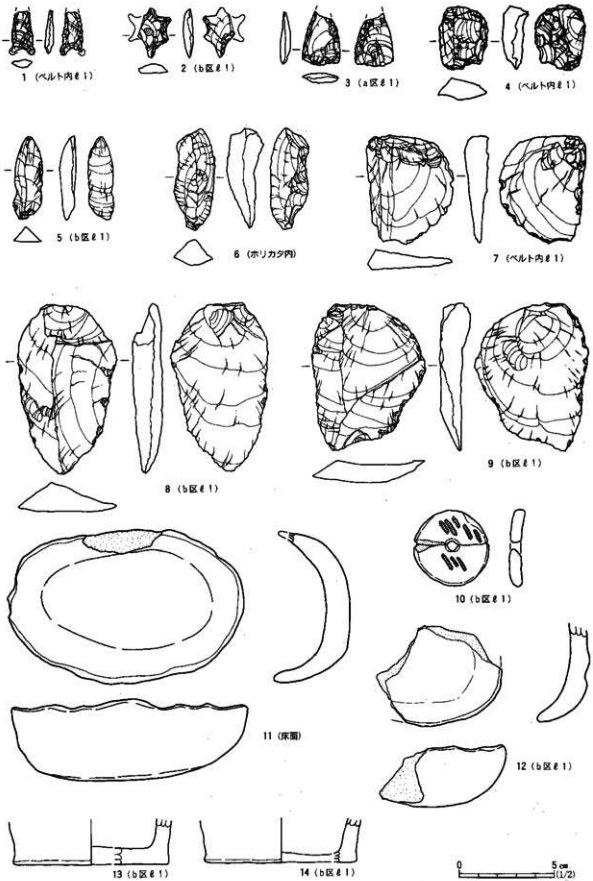
26点が出土している。他の住居跡と比較して，本遺跡中最大の出土量である。細片が多く，室内での整理作業で接合し，ある程度の形を復元することができた。

第17図１～９は石器，第17図10は土製品，第17図11～第21図16は弥生土器の93点を図示した。第17図１～９は石器を９点図示した。計測値については，表２に付した。１・３は石鏃，２は異形石器，４～６は不定形石器，７～９はスクレイパーである。石質は，１・３が珪質岩，２・４～９が流紋岩である。１は細長い無茎鏃で，先端部が欠損する。３は比較的大型な石鏃で，先端部が欠損する。２は異形石器で，周縁に６ヵ所の抉りを有し，突出状の先端部を有する。４は不定形石器であるが，丁寧な剝離があり未成品の可能性がある。５・６は縦長の使用痕のある不定形石器である。７～９はスクレイパーで，使用痕が観察される。

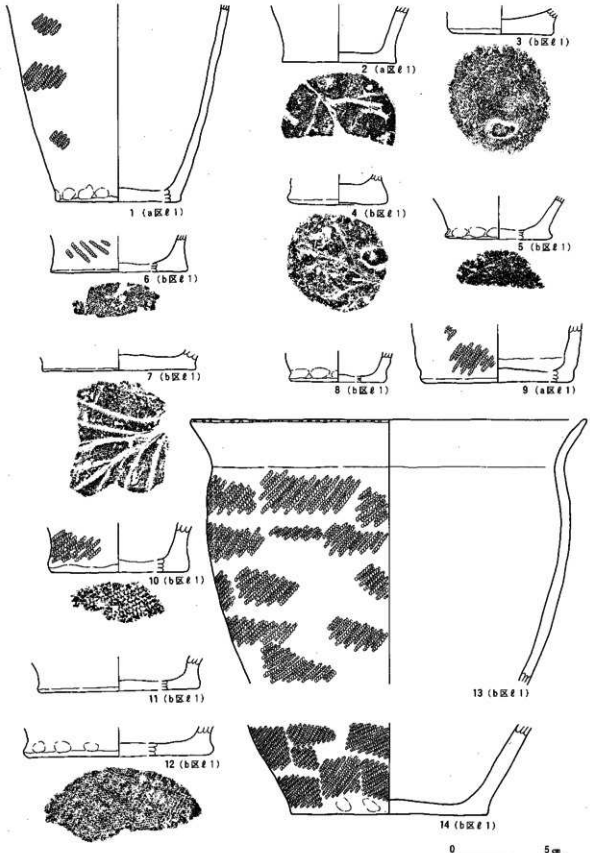
第17図10は，弥生土器片を再利用した土製円盤である。直径４cm，円盤の中央には径が５～７mmの有孔がある。表面に縄文が観察される。

第17図11～14・第18図１～14・第19図１・２は，弥生土器を20点復元図示した。第17図11・12は舟形土器である。11は口縁部の一部が欠損するが，ほぼ完形に近い。底部は丸底風，口縁部は波状口縁を呈する。口径の長径12.3cm・短径8.0cm，器高4.4cmを測る。器面には，内外面共にナデ・指頭痕などの調整が施されている。12は11と同じような舟形土器の欠損品である。第17図13・14，第18図１～12・14，第19図１・２は体部下半から底部までの破片を図示した。第17図13・14，第18図３・５・６・10・11と第19図２は壺，第18図１・２・４・８・９と第19図１は鉢，第18図７・12・14は甕と推定されるが，一部の底部については壺又は甕との区別がつかない土器もある。器面の調整はナデが主であるが，第18図１・６・９・14と第19図１・２は縄文，第18図10は附加条縄文が施されている。この他に，指頭痕が底部下端に加えられた第18図１・５・８・12・14と第19図１がある。また，底面に第18図２・４・７は木葉痕，第18図６・12と第19図１は布目痕，第18図10は網代痕，第18図３・５はケズリ痕が観察される。第18図13は甕の口縁部から体部上半にかけて，約50%の破片から復元図示した。推定口径30.6cm・遺存高14.0cmを測る。器面には，口端部に縄文，体部に附加条縄文やナデ調整が加えられている。

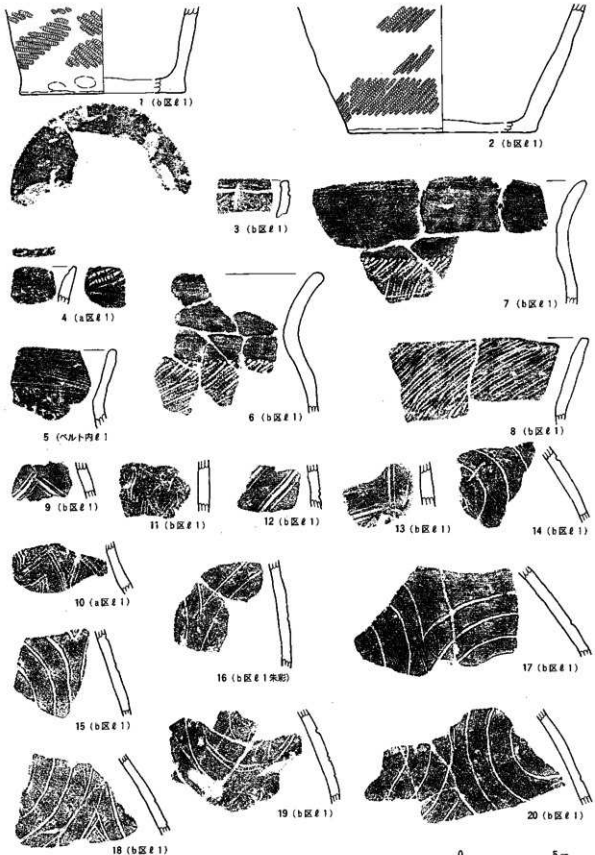
第19図３～第21図16に図示した63点は，甕・鉢・壺類である。第19図３・４は鉢，第19図５～８と第20図１は甕，第19図９～20は壺，第20図２～29と第21図１～16は甕又は壺の体部片である。第19図３・４は鉢で，３は平行沈線と縄文？，４は口縁部と内面に縄文が施されている。第19図５～８と第20図１は甕で，口縁部片である。口縁部下は無文でナデやミガキが施され，８は附加条縄文や６・７は直前段多条縄文が観察される。第19図９～20は壺の頸部破片である。９～13は３本同時施文の線間の狭い工具を使用し，山形文や連孤文が構成される。14～20は同一個体と考えられ，先端の鋭い工具を使用し渦文を描き，沈線間は無文を呈し，この無文部分に朱彩が施されている。第20図２～29と第21図１～16は体部片で，甕または壺と考えられる。第20図２・３は縄文，第20図４・８～10・13・15・16～19・21・22・23・25・27・28と第21図１～３・６～８・11は附加条縄文，第20図５・７・12・26・29と第21図16は直前段多条縄文，第20図14と第21図４・９・10・12～15は



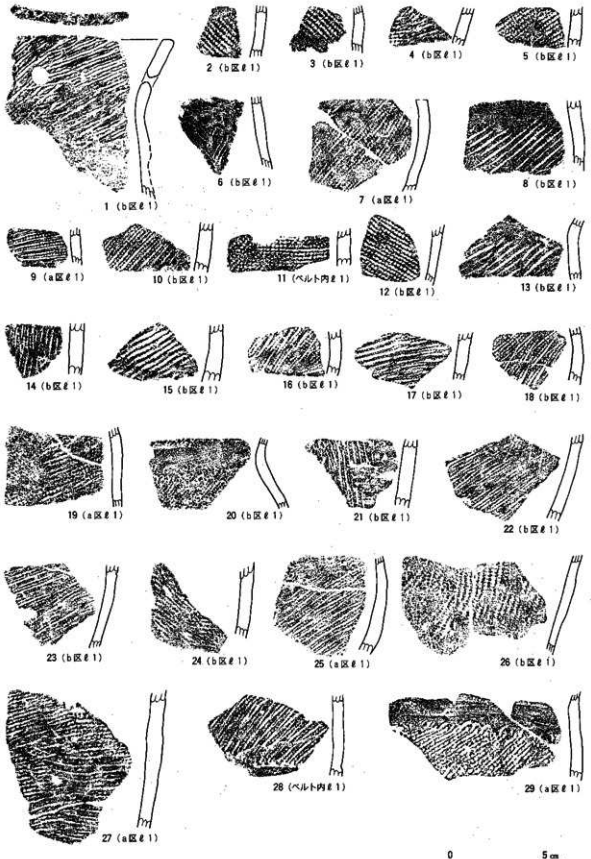

第17図　7号住居跡出土遺物（1）



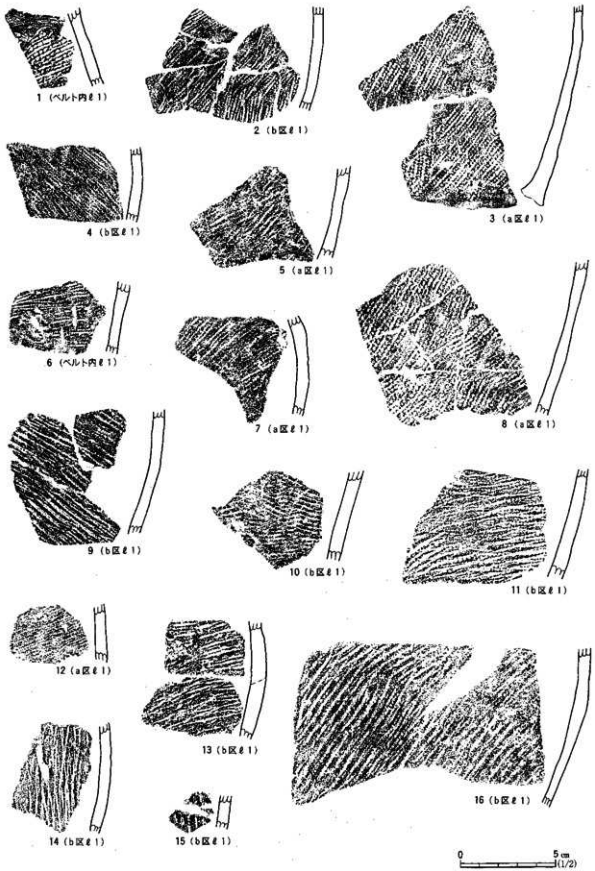

第18図　7号住居跡出土遺物（2）




**第19図　7号住居跡出土遺物（3）**




第20図　7号住居跡出土遺物（4）




第21図　7号住居跡出土遺物（5）

撚糸文が観察される。

**ま　と　め**

本住居跡は遺構検出作業時に，多くの弥生土器片や石器（剝片）が出土した地点で，堆積土とⅠⅣが酷似しており確認に手間取った遺構である。平面形は南北に長い不整楕円形を呈し，北壁は丸味を持ち，南壁は直線的に角張る竪穴住居跡である。住居内及び屋外から検出したＰ１～Ｐ８の８本のピットは本住居の柱穴と考えられる。炉跡は確認されず，貼床や硬化した面は確認されず，通年使用した本住居とは考えられなかった。時期は，出土遺物から弥生時代中期末と考えられる。

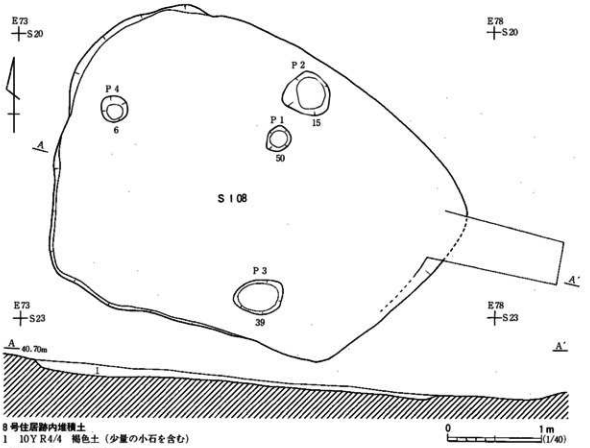
（高　橋）

## ８号住居跡　ＳＩ08

**遺　構**　（第22図　写真19）

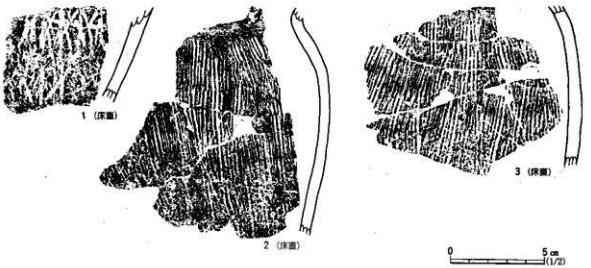
本遺構は，調査区の南東端Ｉ４－84・85グリッドとＩ４－94・95グリッドにまたがり，検出された竪穴住居跡である。標高42m程の丘陵頂部より南東方向に緩く傾斜するほぼ平坦部に立地している。北側に24号土坑，北西側に弥生時代の７号住居跡がそれぞれ隣接している。

遺構検出面は，ＬⅣ上面である。遺構内の堆積土は，しまり・粘性のある褐色土１層で，その掘り込みの深さは５cm前後，比較的遺存状況の良好な西側部分でも最大12cmと非常に浅いのが特徴で




８号住居跡内堆積土
1　10YR4/4　褐色土（少量の小石を含む）

第22図　８号住居跡




**第13図**　５号住居跡出土遺物（２）

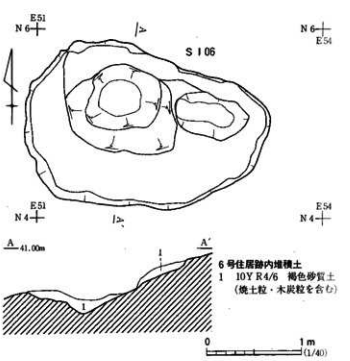
居とは考えられなかった。遺物は，床直で比較的まとまって出土しており，Ｎｏ１～４の採取番号を付して取り上げた。接合の結果，数個体の弥生土器が含まれていた。本住居跡の機能した時期は，磨消縄文と沈線を用いて文様を表出していることから，弥生時代中期前半と考えられる。（高　橋）

## ６号住居跡　ＳＩ06

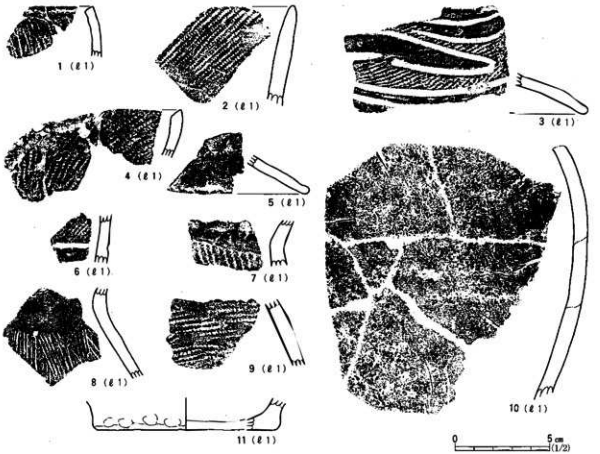
**遺　構**　（第14図　写真15・16）

調査区中央部東寄りのＨ４－40・50グリッドから検出された竪穴住居跡である。南東側６ｍの地点には５号住居跡が隣接する。本住居跡は，遺構検出作業時に弥生土器の細片がまとまって出土し，堆積土の状況は他の住居跡に類似しており，６号住居跡の名称を付した。検出面はＬⅣ上面である。

平面形は横長の不整な楕円形を呈し，長径256㎝・短径172㎝を測る。堆積土は１層で，南側からの自然堆積である。ℓ１は木炭粒・小礫を含む褐色砂質土である。壁面はＬⅣを掘り込み，北・南壁の壁高約10㎝で，床面から緩やかに立ち上がる。床面はＬⅣ面を使用していたが，本住居跡が斜面に立地しており，かつ北壁際では浅い窪みが２ヵ所確認された。土層図でも水平な床面は確認されず，断




**第14図**　６号住居跡




第15図　6号住居跡出土遺物

面も開口部の広い「V」字状を呈する。他に，柱穴や炉跡などの住居内施設は確認されなかった。

遺　物　（第15図）

遺物は堆積土及び遺構検出作業時に61点の弥生土器片が出土し，第15図1～11の11点を図示した。破片が大半を占め，図化した土器は皆無であった。1・2・4は深鉢，6は鉢，3・5は蓋，7～9は壺，10は鉢または甕の底部片である。1・8は条痕文，2・4・7は縄文，3・6は磨消縄文と太い沈線，5・10は無文で器面が剝落しているがケズリやミガキがそれぞれ施されている。3は蓋の口縁部片で，磨消縄文と太い沈線を使用し，変形工字文の変質した入組文を表出している。

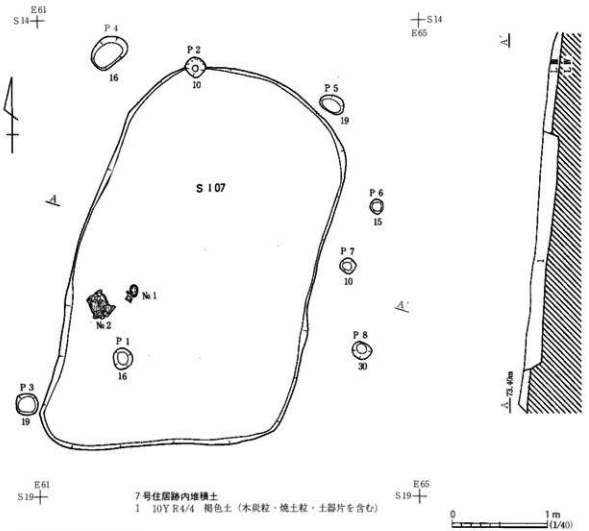
ま と め

本遺構は，遺物の出土状況や堆積土から調査の段階では竪穴住居跡と考えたが。精査の段階で，水平な床面は確認されず，断面も開口部の広い「V」字状を呈する。また，柱穴や炉跡などの住居内施設も確認されなかった。このため，竪穴住居跡と考えられず，土坑や竪穴状遺構の可能性が高い。時期は出土した弥生土器から，弥生時代中期前半が推定される。　（高　橋）

7号住居跡　SI07

遺　構　（第16図　写真17・18）

調査区東部I 4－73・83グリッドから検出された竪穴住居跡である。東側に8・9号住居跡，北




**第16図**　７号住居跡

西側に１～３号土器棺墓・19号土坑がそれぞれ隣接する。本住居跡は遺構検出作業時に，多くの弥生土器片や石器（剝片）が出土した地点で，堆積土とⅠⅢが酷似しており確認に手間取った遺構である。検出面はⅠⅣ上面である。

平面形は南北に長い不整楕円形を呈し，北壁は丸味を持ち，南壁は直線的に角張る。長軸432cm・短軸248cmを測る。堆積土は１層で，自然堆積である。ℓ１は木炭粒・焼土粒・土器片を含む褐色土である。壁面はⅠⅣを掘り込み，壁高は平均して18cm前後で，床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面はⅠⅣ下位面を使用し，やや北壁に向かって緩やかに傾斜している。貼床や硬化した面は確認されず，通年使用した住居とは考えられなかった。住居内にＰ１，北東壁際にＰ２，屋外にＰ３～８の８個のピットが検出された。埋土は住居内堆積土と類似した木炭粒・焼土粒を含む褐色土である。遺物や柱痕は確認されなかった。このピット群は，径が14～38cm・床面および検出面からの深さ10～30cmを測る。この他に，炉跡などの住居内施設は確認されなかった。

**遺　物**　（第17～21図　写真47～52）

遺物は遺構検出作業を含めて，多量に出土している。弥生土器片約900点，石器（剝片を含む）

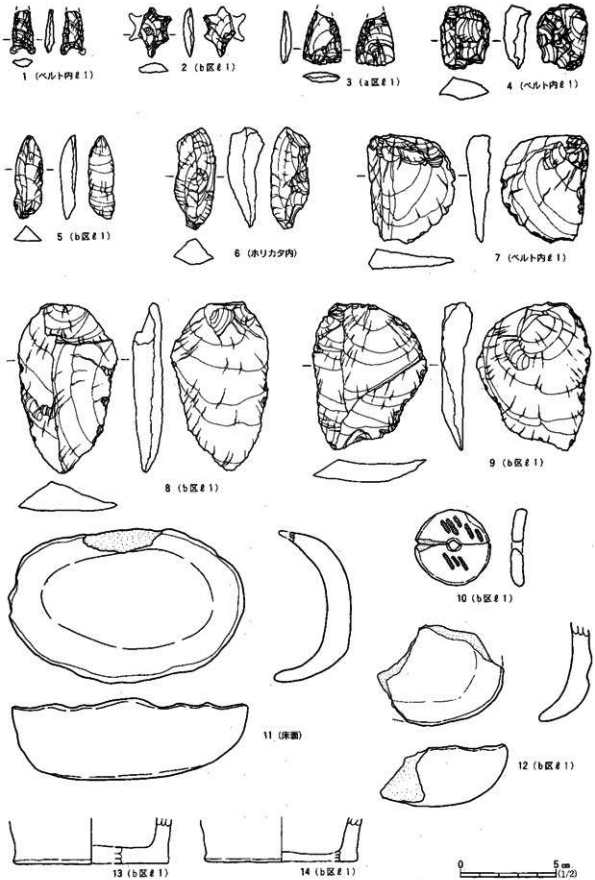
26点が出土している。他の住居跡と比較して，本遺跡中最大の出土量である。細片が多く，室内での整理作業で接合し，ある程度の形を復元することができた。

第1 7図 ～９は石器，第17図10は土製品，第17図11～第21図16は弥生土器の93点を図示した。第17図１～９は石器を９点図示した。計測値については，表２に付した。１・３は石鏃，２は異形石器，４～６は不定形石器，７～９はスクレイパーである。石質は，１・３が珪質岩，２・４～９が流紋岩である。１は細長い無茎鏃で，先端部が欠損する。３は比較的大型な石鏃で，先端部が欠損する。２は異形石器で，周縁に６ヵ所の抉りを有し，突出状の先端部を有する。４は不定形石器であるが，丁寧な剝離があり未成品の可能性がある。５・６は縦長の使用痕のある不定形石器である。７～９はスクレイパーで，使用痕が観察される。

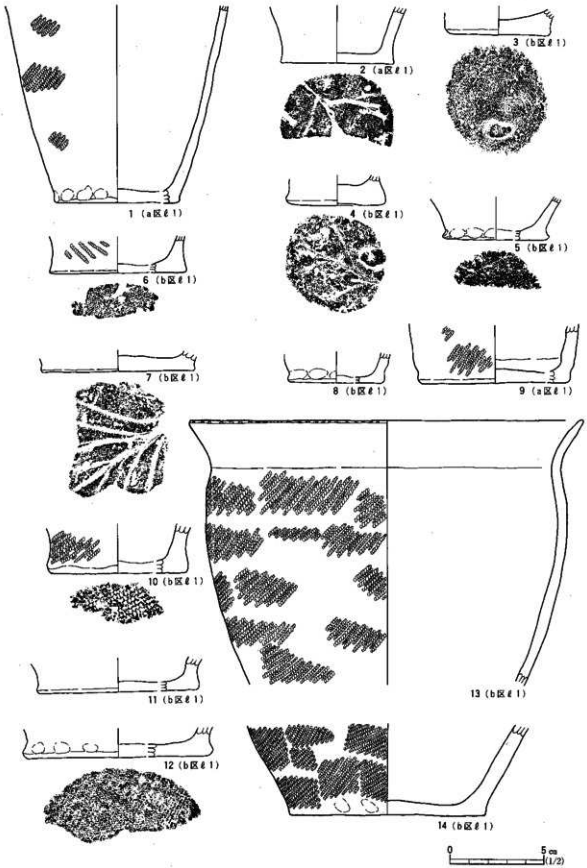
第17図10は，弥生土器片を再利用した土製円盤である。直径４㎝，円盤の中央には径５～７㎜の有孔がある。表面に縄文が観察される。

第17図11～14・第18図１～14・第19図１・２は，弥生土器を20点復元図示した。第17図11・12は舟形土器である。11は口縁部の一部が欠損するが，ほぼ完形に近い。底部は丸底風，口縁部は波状口縁を呈する。口径の長径12.3㎝・短径8.0㎝，器高4.4㎝を測る。器面には，内外面共にナデ・指頭痕などの調整が施されている。12は11と同じような舟形土器の欠損品である。第17図13・14，第18図１～12・14，第19図１・２は体部下半から底部までの破片を図示した。第17図13・14，第18図３・５・６・10・11と第19図２は壺，第18図１・２・４・８・９と第19図１は鉢，第18図７・12・14は甕と推定されるが，一部の底部については壺又は甕との区別がつかない土器もある。器面の調整はナデが主であるが，第18図１・６・９・14と第19図１・２は縄文，第18図10は附加条縄文が施されている。この他に，指頭痕が底部下端に加えられた第18図１・５・８・12・14と第19図１がある。また，底面に第18図２・４・７は木葉痕，第18図６・12と第19図１は布目痕，第18図10は網代痕，第18図３・５はケズリ痕が観察される。第18図13は甕の口縁部から体部上半にかけて，約50％の破片から復元図示した。推定口径30.6㎝・遺存高14.0㎝を測る。器面には，口端部に縄文，体部に附加条縄文やナデ調整が加えられている。

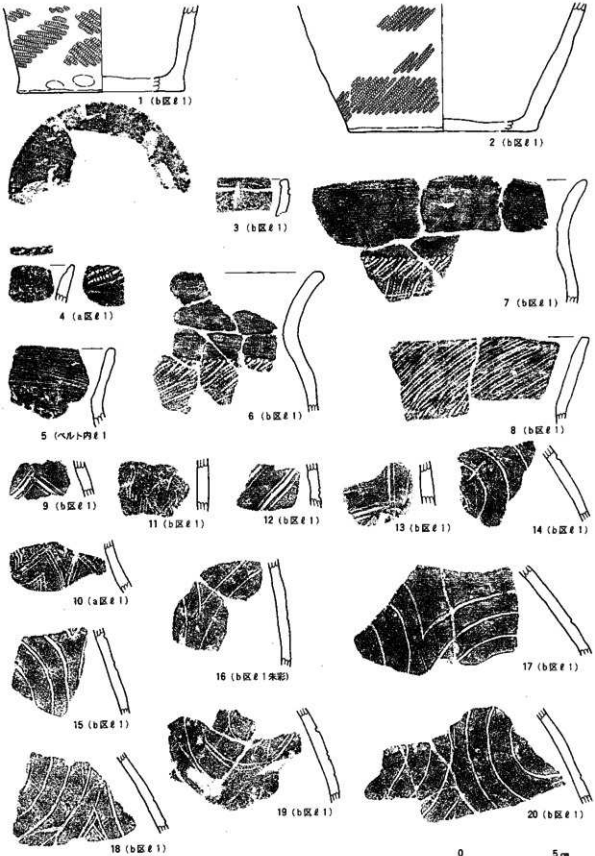
第19図３～第21図16に図示した63点は，甕・鉢・壺類である。第19図３・４は鉢，第19図５～８と第20図１は甕，第19図９～20は壺，第20図２～29と第21図１～16は甕又は壺の体部片である。第19図３・４は鉢で，３は平行沈線と縄文？，４は口端部と内面に縄文が施されている。第19図５～８と第20図１は甕で，口縁部片である。口縁部下は無文でナデやミガキが施され，８は附加条縄文や６・７は直前段多条縄文が観察される。第19図９～20は壺の頸部破片である。９～13は３本同時施文の線間の狭い工具を使用し，山形文や連孤文が構成される。14～20は同一個体と考えられ，先端の鋭い工具を使用し渦文を描き，沈線間は無文を呈し，この無文部分に朱彩が施されている。第20図２～29と第21図１～16は体部片で，甕または壺と考えられる。第20図２・３は縄文，第20図４・８～10・13・15・16～19・21・22・23・25・27・28と第21図１～３・６～８・11は附加条縄文，第20図５・７・12・26・29と第21図16は直前段多条縄文，第20図14と第21図４・９・10・12～15は



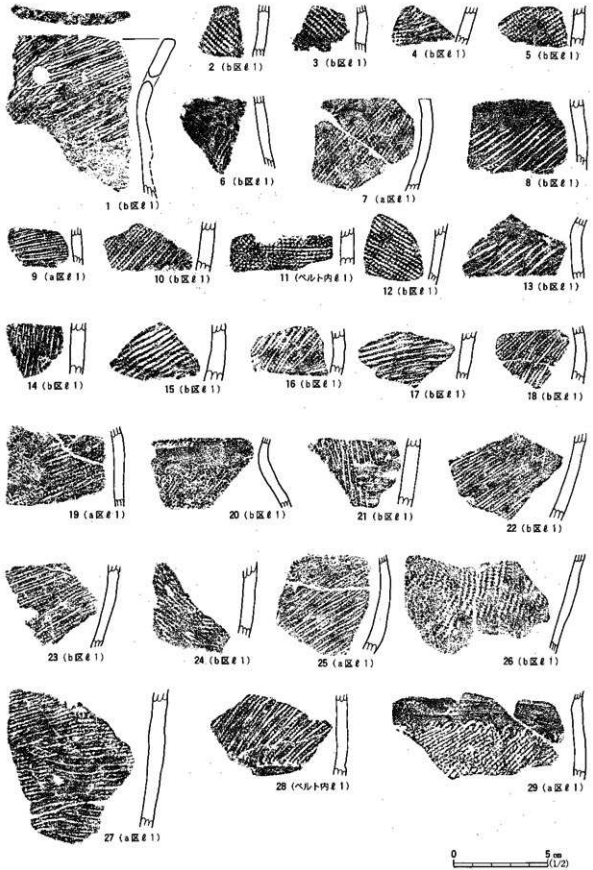

第17図　7号住居跡出土遺物（1）



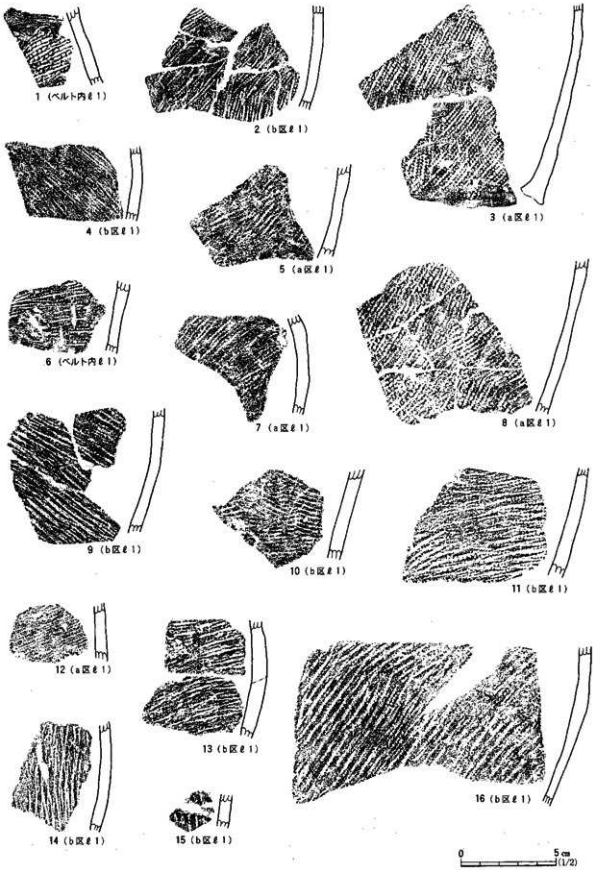

第18図　7号住居跡出土遺物（2）




第19図　7号住居跡出土遺物（3）




第20図　7号住居跡出土遺物（4）




第21図　7号住居跡出土遺物（5）

撚糸文が観察される。

**ま と め**

本住居跡は遺構検出作業時に，多くの弥生土器片や石器（剥片）が出土した地点で，堆積土とⅣが酷似しており確認に手間取った遺構である。平面形は南北に長い不整楕円形を呈し，北壁は丸味を持ち，南壁は直線的に角張る竪穴住居跡である。住居内及び屋外から検出したＰ１～Ｐ８の８本のピットは本住居の柱穴と考えられる。炉跡は確認されず，貼床や硬化した面は確認されず，通年使用した本住居とは考えられなかった。時期は，出土遺物から弥生時代中期末と考えられる。

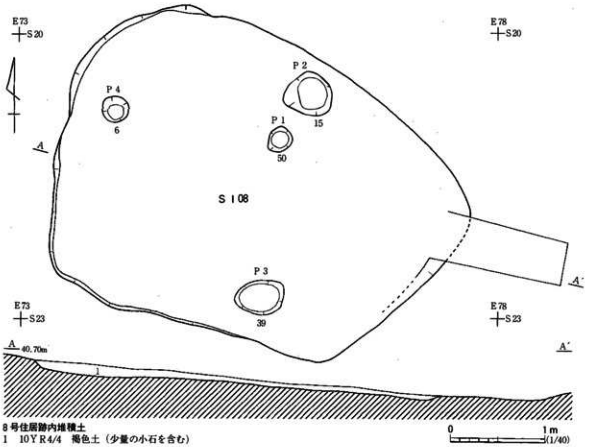
（高　橋）

## ８号住居跡　ＳＩ08

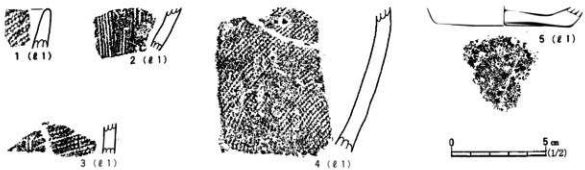
**遺　構**　（第22図　写真19）

本遺構は，調査区の南東端Ｉ４－84・85グリッドとＩ４－94・95グリッドにまたがり，検出された竪穴住居跡である。標高42m程の丘陵頂部より南東方向に緩く傾斜するほぼ平坦部に立地している。北側に24号土坑，北西側に弥生時代の７号住居跡がそれぞれ隣接している。

遺構検出面は，ＬⅣ上面である。遺構内の堆積土は，しまり・粘性のある褐色土１層で，その掘り込みの深さは５㎝前後，比較的遺存状況の良好な西側部分でも最大12㎝と非常に浅いのが特徴で




第22図　８号住居跡




第35図　15号住居跡出土遺物

の断面を観察したところ，床面から6㎝の深さまで赤褐色に変色していた。この焼土面は，地床炉であった可能性がある。

**遺　物**　（第35図　写真56）

遺物は堆積土中より，弥生土器片が少量出土している。図示資料では，第35図1が附加条縄文が施された甕の口縁部である。2は外面に条痕が施されており，深鉢あるいは甕の体部と思われる。3は3本の沈線と附加条縄文が施された壺の体部である。4は壺の体部，5は甕の底部で木葉痕が施される。

**ま　と　め**

本遺構は，遺存状態が悪く不明な点が多い。だが，床面が水平に形成されていたことと，また床面から地床炉と考えられる焼土面が検出された，このため，本遺構は弥生時代の住居跡と考える。後世の削平・攪乱が著しいため，本遺構の平面形は不明であるが，壁遺存部の形状から円形，あるいは楕円形を呈していたと推測する。本遺構の所属時期であるが，床面から出土した遺物がないため正確な年代は不明であるが，弥生時代中期末頃の可能性がある。　（本　田）

## 第3節　土器棺墓

### 1号土器棺墓　SM01

**遺　構**　（第36図　写真27）

1号土器棺墓は，調査区東側平坦部上のⅠ4－62・72グリッドにて検出された遺構である。遺構検出面はⅣ上面で，周辺には東側2mに2号土器棺墓が，南東側2mに3号土器棺墓が位置している。遺構は上部と下部の2個体の土器からなる。下部の土器は壺の口縁の一部を欠くほぼ完形のもので，底部を東側に向けて口縁を上部にした横位に近い斜位の形で埋設されている。上部の土器は体部の一部を欠く甕で，底部を北側に向けて下部の土器に北側より覆い被さるように埋設されている。堆積土は木炭粒を微量混入する褐色土1層である。掘形は土器よりやや大きめに掘られており，平面形は径65㎝程の円形を呈し，検出面からの深さは30㎝程である。1号土器棺墓は，遺構の形態より，壺と甕を用いた合口土器棺墓で，その年代は弥生時代中期末と考えられる。

**遺　物**　(第37図　写真57)

上部の土器は，口径22㎝，底径8.5㎝，器高23.3㎝の甕で，底部から口縁部までの30%程が遺存している。器形は，底部から直立気味に立ち上がり，体部上位で内湾し，その上に若干開き気味に立ち上がる口縁部がつく形態である。口唇には縄文が転がされ，底部には布目痕が残っている。地文は横方向の細かな附加条縄文で，軸縄が所々でのみ観察される。胎土には砂粒が少量混入している。色調は内外面とも橙褐色を呈し，焼成は良好である。

下部の土器は，底径10.5㎝，遺存高33.5㎝の口縁部と底部を欠損する壺である。器形は体部下半から体部中位に向かって開き気味に立ち上がり，体部中位よりやや上に最大径を持ち，そこから頸部にいたる器形である。地文は体部と口縁部に施されており，上部の甕と同様，横方向の細かな附加条縄文である。体部最上位と口縁最下部に施された縄文は意図的に原体の端部が転がされている。胎土には，長石と考えられるやや大粒の砂粒が混入している。色調は内外面ともに橙褐色を呈し，焼成は良好である。　(藤　谷)

2号土器棺墓　SM02

**遺　構**　(第36図　写真28)

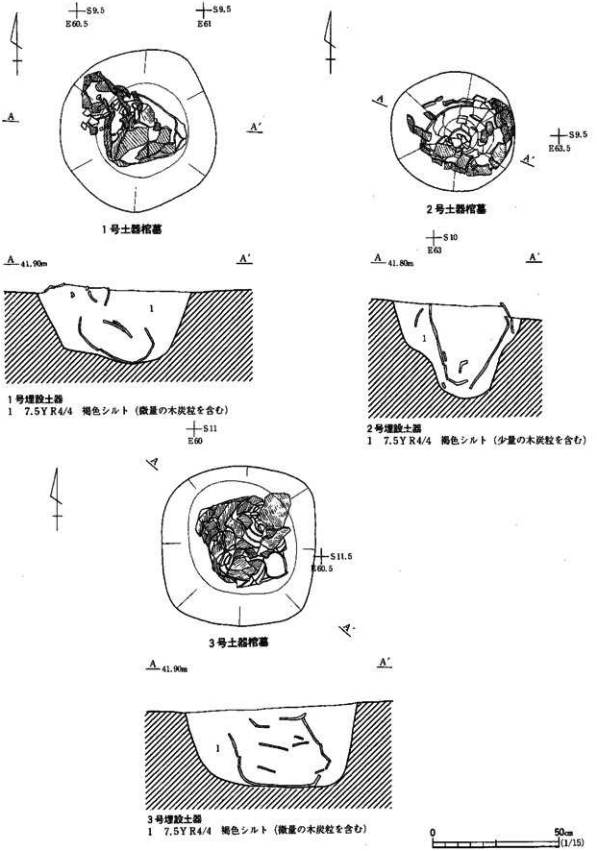
2号土器棺墓は，調査区東側平坦部上のⅠ4－62グリッドにて検出された遺構である。遺構検出面はⅬⅣ上面で，周辺には北西側2mに1号土器棺墓が位置している。土器棺墓群の中では，一番東側に位置している。

遺構は上部と下部の2個体の土器からなる。下部の土器は壺の体部で，ほぼ立位で埋設されている。上部の土器は甕の口縁部で，口縁を下に向けて下部の土器に合わさるように埋設されている。堆積土は木炭粒を微量混入する褐色シルト1層である。掘形は土器より若干大きめに掘られており，平面形は径50㎝程の円形を呈し，検出面からの深さは37㎝程である。2号土器棺墓は，その形態より，弥生時代中期末の土器棺墓であると考えられる。

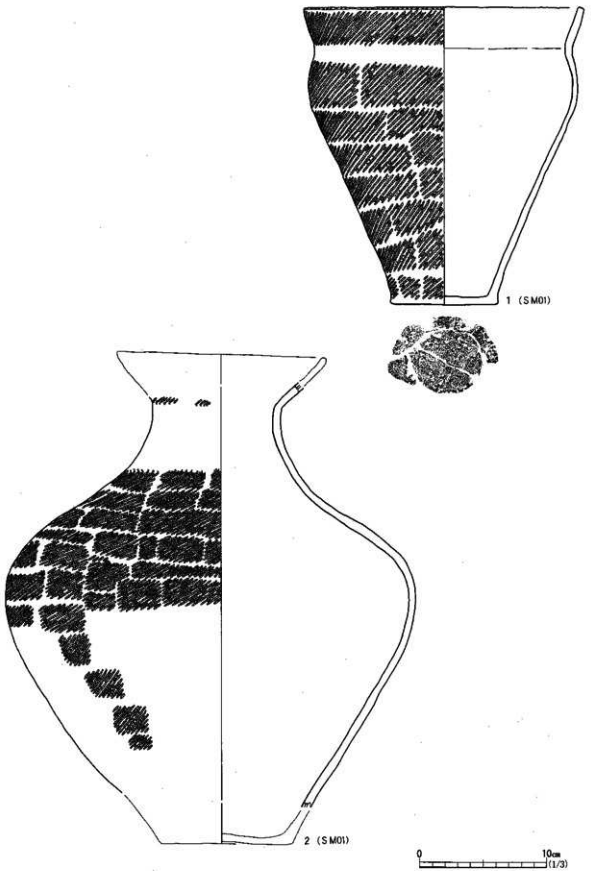
**遺　物**　(第38図　写真58)

1の上部の土器は，口径39.2㎝，推定器高19.5㎝の甕で，体部下位が欠損しており，上部も60%程が遺存している。器形は底部から体部にかけて開き気味に立ち上がり，口縁部との境界が緩く括れ，その上部に外反気味の短い口縁部が付く形態である。口縁にはキザミが入っており，小波状を呈している。体部外面には，横位の輪縄と反対方向に巻かれた附加条縄文が施されている。色調は内外面とも橙褐色を呈し，焼成は良好である。胎土には中程度の砂粒が少量混入している。

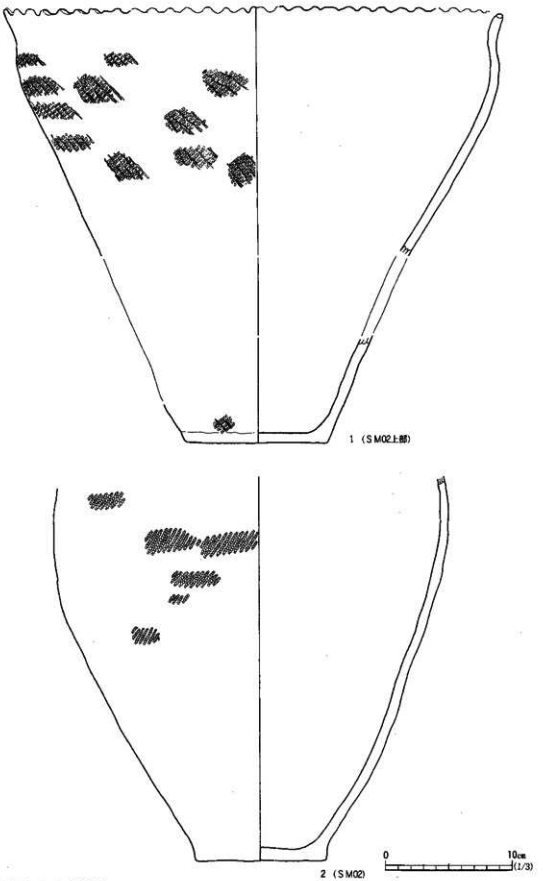
2の下部の土器は，体部上位と口縁部が欠損している遺存率70%程度の甕である。底径は10.4㎝，遺存高は30.4㎝である。器形は底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり，最大径が体部上位にあると推定される器形である。外面は磨滅が著しいが，横方向の単節縄文が所々で観察される。底部には木葉痕が残されている。胎土には白色の粗砂粒がやや多めに混入している。色調は内外面ともに赤褐色を呈し，焼成は良好である。　(藤　谷)



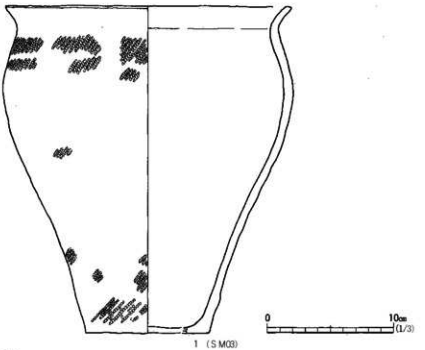

第36図　1～3号土器棺墓




第37図　1号土器棺




第38図　2号土器棺




**第39図**　３号土器棺（１）

３号土器棺墓　ＳＭ03

**遺　構**　（第36図　写真28）

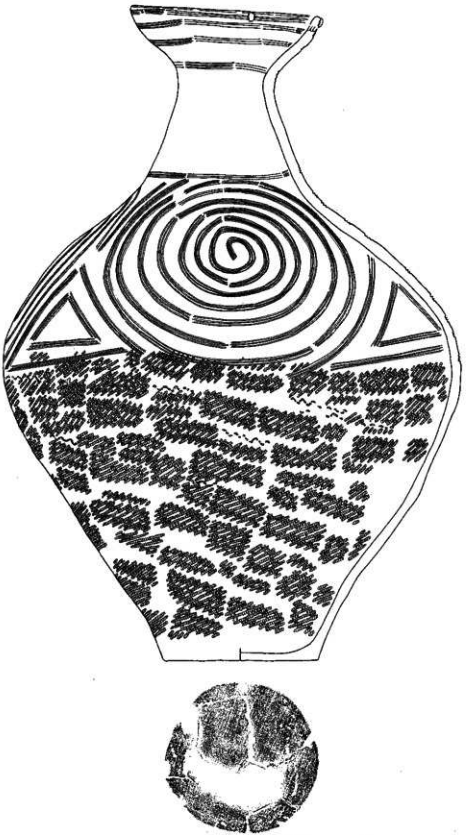
３号土器棺墓は，調査区東側平坦部上のＩ４－71・72グリッドにて検出された遺構である。遺構検出面はⅣ上面で，周辺には北東側２mに１号土器棺墓が位置している。

遺構は上部と下部の２個体の土器からなる。下部の土器は壺の口縁の一部を欠くほぼ完形のもので，底部を北西側に向けて口縁を上部にした横位に近い斜位の形で埋設されている。上部の土器は甕の口縁部から体部にかけての大きな破片で，下部の土器に覆い被さるかぶさるように埋設されている。堆積土は木炭粒を微量混入する褐色シルト１層である。掘形は土器よりやや大きめに掘られており，平面形は一辺が50cm程の不整隅丸方形を呈し，検出面からの深さは32cm程である。３号土器棺墓は，土器の特徴より弥生中期末の土器棺墓と考えられる。

**遺　物**　（第39・40図　写真59）

第39図１の上部の土器は，口径22.8cm，9.8cm，器高25.8cmの甕で，全体の40%が遺存している。器形は底部から体部下半にかけて外反気味に立ち上がり，最大径が体部上位にあり，短い口縁部が外反する器形である。口縁部は横方向にナデられている。体部には横方向の縄文が観察されるが，器面の磨滅が著しく，底部付近を除いて原体の詳細は不明である。胎土には粗砂粒がやや多めに混入している。色調は内面が橙褐色，外面が褐色で，焼成は良好である。

第40図１の下部の土器は，口径14.6cm，底径12.2cm，器高57.0cmの壺で，口縁部と頸部の一部を欠損しているもののほぼ完形である。器形は，底部から体部下半にかけては外反気味に開き，体部中位が丸みを帯びて膨らみ，最大径が体部中位よりやや上にあり，体部の上には口縁部に向かって




**第40図**　3号土器棺（2）

内傾する長めの頸部が付き，内湾気味に開く口縁部に到る器形の長頸壺である。器面は口縁部から体部上半まで平滑に磨かれ，そこに文様が描かれている。口縁部は頸部との境界に３本１組の沈線が巡り，その上部に３本１組の沈線による緩い波状の文様が３段にわたって巡っている。更に，口縁直下には２カ所に粘土粒の貼り瘤の痕跡が認められ，その位置より少なくとも合計３個の貼り瘤があったと推定される。頸部は無文帯となっている。体部上半には上が横方向の３本１組の沈線，下が地文の縄文帯に挟まれた主要な文様帯がある。文様帯内には３本１組の沈線によって描かれた渦文が４単位施文されており，渦文の上下間には重三角文が施文されている。文様の施された口縁部から体部上半にかけてには，所々に赤色塗料の跡が認められ，赤彩されていたと考えられる。体部下半は地文の附加条縄文が横位から斜位に施され，底面には布目痕が残っている。　（藤　谷）

## 第４節　土　　坑

### １号土坑　ＳＫ01　（遺構　第41図　写真29）

１号土坑は，調査区東側のＩ４－53グリッドに位置している。土坑の位置している付近は，南側の段丘上部平坦面より北側へ続く緩斜面となっており，西側には２・３号土坑が位置している。遺構検出面はⅣ上面で，平面形は楕円形を呈している。その規模は東西の長軸が135㎝，南北の短軸が75㎝となっている。検出面からの深さは最深部で25㎝程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルト１層で，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは緩やかで，底面は北側に向かってやや傾斜している。

遺物は出土しておらず，その時期・性格は不明である。　（藤　谷）

### ２号土坑　ＳＫ02　（遺構　第41図　写真29　遺物　第45図　写真60）

２号土坑は，調査区東側の北へ向かう緩斜面上のＩ４－52グリッドに位置している。周辺には東側に１号土坑が，南側に３号土坑が位置している。遺構検出面はⅣ上面で，平面形は楕円形を呈している。その規模は長軸が70㎝，短軸が48㎝となっている。検出面からの深さは最深部で25㎝程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルト１層で，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは緩やかで，底面はほぼ平坦である。

遺物は堆積土中より，土師器片・須恵器片が少量出土している。図示資料では第45図１が輪積み痕の残る土師器筒形土器の口縁部，２・３がヘラケズリの痕跡の残る土師器甕の体部，４が須恵器甕の体部である。

本遺構の年代は，出土遺物より９世紀頃と考えられるが，その性格は不明である。　（藤　谷）

### ３号土坑　ＳＫ03　（遺構　第41図　写真29）

３号土坑は，調査区東側のＩ４－53グリッドに位置している。土坑の位置している付近は，南側

の段丘上部平坦面より北側へ続く緩斜面となっており，周辺には東側に1号土坑が，北側に3号土坑が位置している。遺構検出面はⅠⅣ上面で，平面形は径115cm程の不整な円形を呈している。検出面からの深さは最深部で9cm程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルト1層で，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは緩やかで，底面は北側に向かってやや傾斜している。

本土坑より遺物は出土しておらず，その年代・性格は不明である。　（藤　谷）

4号土坑　SK04　（遺構　第41図　写真29　遺物　第45図　写真60）

4号土坑は，調査区中央よりやや西側の段丘平坦面に作られた土坑で，H4－24・25グリッドに位置している。遺構は3号住居跡と重複関係にあり，その堆積土を切っている。周辺には，東側に2号住居跡が，西側には9号土坑が位置している。遺構検出面はⅠⅣ上面で，遺構の平面形は径93cm程の不整な円形を呈している。検出面からの深さは最深部で23cm程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルト2層からなり，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりはやや急で，底面はほぼ平坦である。

遺物は，堆積土中より弥生土器片が少量出土している。図示資料では，第45図5・6が地文のみの体部片，7は沈線による区画文が施された鉢の体部片である。

本土坑の年代は，出土遺物より弥生時代中期前半と考えられる。その詳細な性格は不明であるが，その位置関係より，2号住居跡に付随する施設である可能性が高い。　（藤　谷）

5号土坑　SK05　（遺構　第41図　写真29）

5号土坑は，調査区中央よりやや西側の段丘平坦面に作られた土坑で，H3－86・96グリッドに位置している。周辺には，北側に13号住居跡が，東側には8号土坑が位置している。遺構検出面はⅠⅣ上面で，遺構の平面形は長軸100cm，短軸80cmの楕円形を呈している。検出面からの深さは最深部で23cm程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルト2層からなり，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりはやや急で，底面はほぼ平坦である。

遺物は堆積土中より弥生土器の細片が少量出土している。

本土坑は，出土遺物・周辺の遺構の状況・堆積土などから弥生時代の遺構と思われるが，その細部の時期・性格については特定できない。　（藤　谷）

7号土坑　SK07　（遺構　第41図　写真29・30　遺物　第45図　写真60）

7号土坑は，調査区北東側に北面する緩斜面上のⅠ4－14グリッドに位置している。周辺には，南側に2号溝跡と6号土坑が位置している。遺構検出面はⅠⅣ上面で，平面形は不整楕円形を呈している。その規模は東西の長軸が180cm，南北の短軸が80cmとなっている。検出面からの深さは最深部で25cm程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルトと黄褐色シルトの2層で，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは緩やかで，底面はほぼ平坦である。

遺物は，堆積土中より弥生土器片が若干量出土している。図示資料では第45図8が外面に沈線と磨消縄文手法による文様が施された壺で，口唇に沈線が巡っている。14は口縁部が外傾し，体部上位に最大径があると考えられる器形の深鉢で，体部上位には太い沈線による変形工字文が施されている。9・10は深鉢の口縁部，16・17は底部破片である。他は地文のみの体部破片で，地文は単節縄文が横位あるいは斜位に施されているものが多い。

本土坑は，出土遺物より弥生時代中期前半の遺構と考えられるが，その性格は不明である。

（藤　谷）

8号土坑　SK08　（遺構　第42図）

8号土坑は，調査区中央より北側に延びる平坦面上のH3－85グリッドに位置している。付近には13号住居跡や5号土坑が位置している。遺構検出面はLⅣ上面で，平面形は上端が楕円形，それ以下が長方形を呈している。その規模は上端の東西の長軸が165cm，南北の短軸が145cm，中段の上場が長軸145cm，短軸70cmとなっている。検出面からの深さは最深部で165cm程である。堆積土は黄褐色シルト粒を混入する褐色シルト等からなっており，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは急で，底面は東側に向かってやや傾斜しており，底面上には3ヵ所に径20cm前後の小ピットが3個位置している。

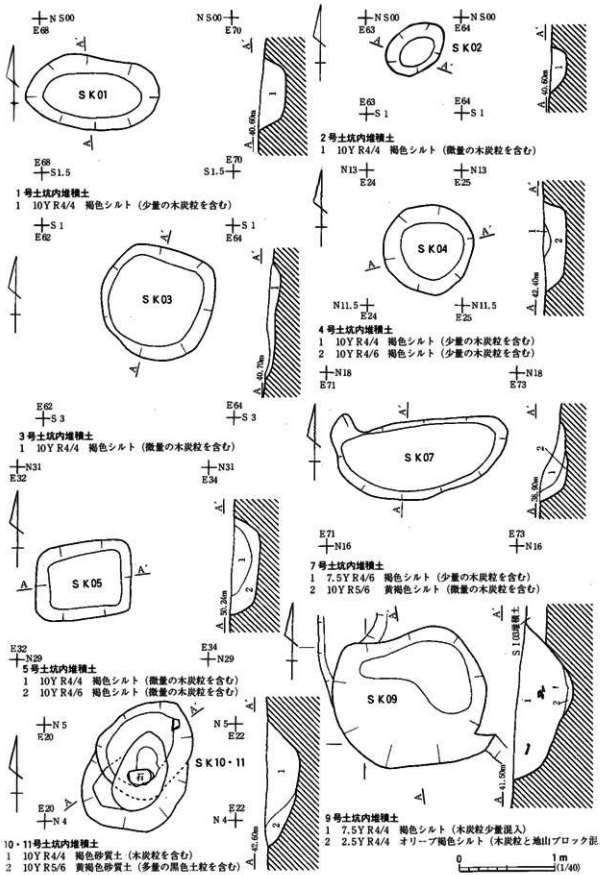
遺物は出土しておらず，正確な年代は不明である。しかし，本遺跡から縄文早期末の遺物が出土しており，その形態も典型的な落し穴状土坑と考えられるところから，その時期の落し穴である可能性が高い。

（藤　谷）

9号土坑　SK09　（遺構　第41図　遺物　第45・46図　写真61）

9号土坑は，調査区東側よりやや西側のH4－24グリッドに位置している。土坑は3号住居跡と重複関係にあり，それを切っている。また，この他周辺には，東側に2号住居跡と4号土坑が，北側に29号土坑が位置している。遺構検出面はLⅣ上面で，平面形は不整な楕円形を呈している。その規模は東西の長軸が162cm，南北の短軸が133cmとなっている。検出面からの深さは最深部で55cm程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルトと木炭粒と地山ブロックを混入するオリーブ褐色シルト2層で，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは緩やかで，床面は平坦でなく窪んでいる。

本土坑の堆積土中からは，ややまとまった量の弥生土器が出土している。図示資料では，第45図23～26は深鉢の口縁部で，何れもゆるく内湾する器形で，太い沈線と磨消縄文手法による文様が施されている。28～31は深鉢の体部で太い沈線による文様が施されている。第46図3は口径22cm，遺存高12.9cmの鉢で，外面には明瞭な輪積み痕が残されている。第46図4は壺の体部破片，6は甕の口縁部破片である。第46図のそれ以外は壺あるいは甕の地文のみの体部破片で，地文には単節縄文・条痕がある。




第41図　1～5・7・9～11号土坑

9号土坑は，3号住居跡と重複しており，それを切って作られている不整な楕円形を呈する。その時期は，出土遺物より，3号住居跡と同じく弥生中期前半と思われる。また，性格は不明である。（藤　谷）

10号土坑　SK10　（遺構　第41図　写真30　遺物　第47図）

調査区西部のH4－34・44グリッドから検出された土坑である。丘陵頂部の標高42.0mに立地し，南西側8mの地点には12号土坑が，南側3mの地点には13号土坑がそれぞれ隣接する。検出面はLⅣ上面である。本土坑の精査に，南側に重複する土坑が確認され，11号土坑と命名した。

平面形は楕円形を呈し，長径108cm・短径86cm・検出面からの深さ約20cmを測る。堆積土は1層で，自然堆積である。ℓ1は木炭粒を含む褐色砂質土である。周壁や底面は砂質性に富み，崩壊した部分もある。断面は，鍋底状を呈する。南西コーナーの壁際から，径が16×30cmの自然石が出土している。

遺物は，堆積土及び検出面から97点の弥生土器片が出土している。第47図4～14の11点を図示した。14は遺構検出作業時に出土した，弥生土器の粗製甕である。推定口径28.0cm・遺存高24.2cm・最大胴径30.0cmを測る。胴部上半部に最大径を有し，口縁部が外反する。器面の調整は，外面に条痕文，内面にナデやケズリが施されている。5・7～12は器面に条痕文が施されており，胎土も酷似しており同一個体の可能性が高い。4・6は細かい縄文が施されている。13は一部に条痕文が確認されるが，5・7～13と胎土や条痕文が異なり別個体と考えられる。

本土坑は遺構の検出時や堆積土から比較的多くの条痕文が施された弥生土器片が出土している。11号土坑と重複しており，性格は不明で，機能していた時期は出土遺物から弥生時代中期前半と考えられる。（高　橋）

11号土坑　SK11（遺構　第41図　写真30）

調査区西部H4－44グリッドから検出された土坑である。10号土坑精査時に確認され，本土坑が古い。検出面はLⅣ上面である。平面形は北側の大半が10号土坑によって破壊されており，遺存する部分から楕円形を呈していたと考えられる。規模は遺存する長径110cm・短径102cm・検出面からの深さ15～20cmを測る。堆積土は1層で，人為堆積である。ℓ2は多量の黒色土粒を含む黄褐色砂質土である。

本土坑は10号土坑によって北壁から西壁まで破壊されており，遺存状況は不良であった。堆積土は人為堆積を示しており，短期間で埋没したと考えられる。出土遺物もなく所属時期は不明な点もあるが，10号土坑に近接して弥生時代中期前半前後と考えられる。（高　橋）

12号土坑　SK12　（遺構　第42図　写真30）

調査区西端H4－42グリッドから検出された土坑である。丘陵頂部の標高42.0mに立地し，北東

側８mの地点には10・11号土坑が，南東側９mの地点には13号土坑がそれぞれ隣接する。検出作業は，ＬⅣに黒味を帯びた地点を精査したが，木根による攪乱は著しい。検出面はＬⅣ上面である。

平面形は不整楕円形を呈し，規模は長径300㎝・短径212㎝・検出面からの深さ10～20㎝を測る。堆積土は１層に分かれ，自然堆積である。ℓ１は木炭粒・焼土を含む褐色砂質土である。底面は木根による攪乱を受け，凹凸が著しい。また，底面は不明瞭で，ＬⅣ面にも攪乱が及び遺構と地山の境界が不明確であった。

遺物は出土せず，時期・性格は不明である。　（高　橋）

13号土坑　ＳＫ13（遺構　第42図　遺物　第48図）

調査区南西部Ｈ４－44グリッドから検出された土坑である。北側９mの地点には10・11号土坑が，東側１mの地点には１・２号特殊遺構がそれぞれ隣接する。検出面はＬⅣ上面である。１号遺物包含層の精査時に，ＬⅢａを除去した際に発見した。当初は遺構とは考えられず，堆積土もＬⅣに酷似しており平面形や壁面の境界は不明瞭であった。しかし，隣接して岩盤の壁面を確認し，土坑と推定した。調査の段階では，開口部が狭いため土層ベルトを設定することが困難であった。

平面形は不整長方形を呈し，規模は長径184㎝・短径132㎝・検出面からの深さ164㎝を測る。堆積土は土層ベルトを設定しないため不明確であるが，上面にはＬⅢａが，中位にはＬⅣが，底面近くには岩盤とＬⅣの混合土が堆積していた。底面はほぼ平担で，壁面は底面から垂直に立ち上がり，開口部で外反する。

遺物は，堆積土の上面から弥生土器片２点が出土している。第48図１・２の２点を図示した。１は底部片で底面に布目痕が，２は器形は不明であるが器面に附加条縄文が施されている。

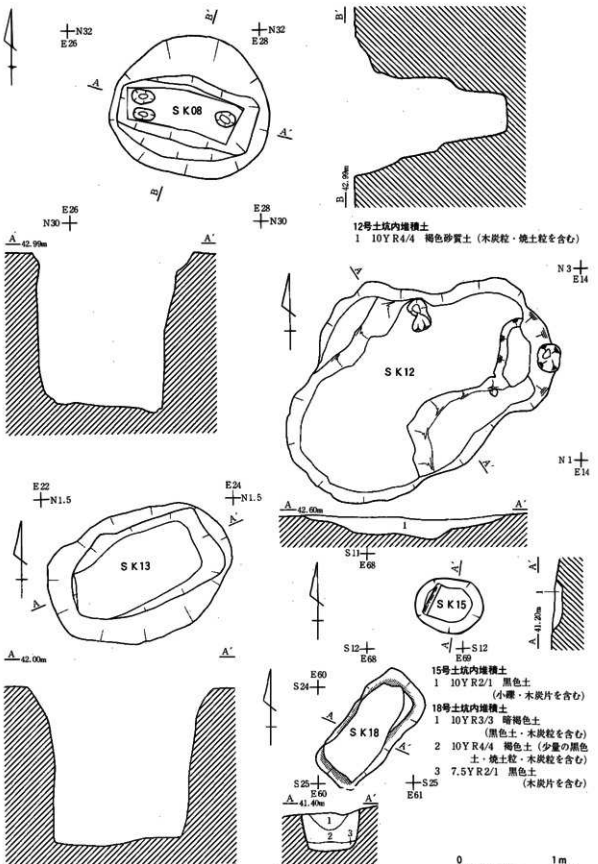
本土坑の性格・時期は出土遺物も少なく不明確である。しかし，規模・構造は縄文時代の落し穴状土坑に類似しており，本土坑の性格は落し穴状土坑の可能性が高い。　（高　橋）

15号土坑　ＳＫ15　（遺構　第42図　写真30　遺物　第48図　写真62）

調査区東部Ｉ４－73グリッドから検出された土坑である。検出面はＬⅣ上面である。平面形は楕円形を呈し，規模は長径72㎝・短径58㎝・検出面からの深さ10㎝を測る。堆積土は１層に分かれ，自然堆積である。ℓ１は小礫・木炭片を含む黒色土である。断面は鍋底状を呈し，西壁には木根による攪乱が確認された。

遺物は，弥生土器・土師器が７点出土している。第48図３～６の４点を図示した。３・４・６は弥生土器片である。器面に３は縄文？，４・６は撚糸文が施されている。５は土師器の甕で，底径9.4㎝，遺存高11.4㎝を測る。長胴甕で，体部下半にヘラケズリ，内面にヘラナデ，底面に木葉痕が観察される。

本土坑は弥生土器・土師器が混入しており所属時期や性格は不明である。　（高　橋）




第42図　8・12・13・15・18号土坑

18号土坑　ＳＫ18　（遺構　第42図　写真30）

調査区南端Ⅰ４－92グリッドから検出された土坑である。検出面はⅬⅣ上面である。平面形は隅丸長方形を呈し，規模は長径131㎝・短径58㎝・検出面からの深さ40㎝を測る。堆積土は３層に分かれ，自然堆積である。ℓ１は黒色土・木炭粒を含む暗褐色土，ℓ２は少量の黒色土・焼土粒・木炭粒を含む褐色土，ℓ３は木炭片を含む黒色土である。特に，ℓ３は水平に堆積し，多量の木炭片が含まれていた。断面は箱型を呈し，底面は平坦で，壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がる。周壁の開口部分で，厚さ２㎝前後の酸化面が確認された。

遺物は出土していない。本土坑の性格は，規模（平面形は隅丸長方形）・堆積土の状況（木炭片を含む）・壁面が酸化していることを考慮すると，平安時代以降に出現する木炭焼成土坑の可能性が高い。　（高　橋）

19号土坑　ＳＫ19　（遺構　第43図　写真31）

本遺構は，調査区の南東部に位置し，Ⅰ４－72グリッドで検出された木炭焼成土坑である。標高42mの丘陵頂部東側の緩く東に傾斜するほぼ平坦部に立地している。その北側及び北東側にかけて１～３号土器棺墓がそれぞれ隣接するほか，南東側に７号竪穴住居跡が位置する。検出面は，ⅬⅣ上面である。遺構内の堆積土は４層に分層され，ℓ２のレンズ状堆積部で最大30㎝を測り，各層とも自然堆積を呈する。特にℓ３の黒褐色土からは，多量の木炭片が出土したほか，ℓ４とℓ１から木炭粒や木炭片に混じり，少量の焼土粒が検出された。

平面形は，東西に長い楕円形で，その規模は長軸で1.30m，短軸で0.90mを計測する。検出面からの深さは50㎝前後，底部は平坦であり，壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出面から中端にかけ，45°から60°で立ち上がる土坑の掘形のラインが認められた。検出面から20㎝前後に当たる遺構の中端付近で見られる焼土塊は，東西部の遺存率が高く，その厚みは，西側で最大１㎝，東側で最大２㎝を計測した。

遺構に伴う遺物等がないので，明確な時代限定は困難であるが，その規模及び構造や周辺の遺物の状況から推察し，平安時代の木炭焼成土坑であると考えられる。　（高　村）

20号土坑　ＳＫ20　（遺構　第43図）

調査区東部Ⅰ４－83グリッドから検出された土坑である。東側には，７号住居跡が近接する。検出面はⅬⅣ上面である。木根による攪乱を受け，東壁は不明瞭である。

平面形は不整円形を呈し，規模は長径60㎝・短径46㎝・検出面からの深さ12～16㎝を測る。堆積土は３層に分かれ，人為堆積である。ℓ１は小礫・焼土ブロックを含むにぶい赤褐色土，ℓ２は木炭片・焼土粒を含む黒色土，ℓ３は焼土粒・木炭粒・黒色土粒を含む褐色土である。断面は，鍋底状を呈する。遺物は出土せず，時期・性格は不明である。　（高　橋）

21号土坑　SK21　（遺構　第43図　写真24　遺物　第48図）

調査区北西端H3－76・86グリッドから検出された土坑である。この地区は13号住居跡と33号土坑と風倒木痕が複雑に重複しており，21号土坑が最も新しい遺構である。検出面は13号住居跡のℓ1上面である。平面形は楕円形を呈し，規模は長径144cm・短径80cm・検出面からの深さ54cmを測る。堆積土は1層で，自然堆積である。ℓ1は少量の木炭粒を含む褐色砂質シルトである。周壁はLⅣ中位から下部を使用し，底面から外方に向かって大きく開く。

遺物は，堆積土から弥生土器片3点・石器1点が出土し，第48図7～10の4点を図示した。弥生土器は器面が剝落しているが，7・8には附加条縄文が，10には撚糸文が観察される。9は無茎石鏃である。

本土坑は堆積土から弥生土器片や石鏃が出土しているが，13号住居跡と重複しており時期は速断はできない。また，性格についても不明である。　（高　橋）

23号土坑　SK23　（遺構　第43図　写真31　遺物　第48図）

調査区北西端H3－75・76グリッドから検出された土坑である。南側には，13号住居跡や21・33号土坑が近接する。検出面はLⅣ上面である。平面形は不整楕円形を呈し，規模は長径112cm・短径94cm・検出面からの深さ34cmを測る。堆積土は1層に分かれ，自然堆積である。ℓ1は焼土粒・木炭粒を含む褐色土である。底面は凹凸が著しく，底面中央部が円形状に窪む。周壁は底面から緩やかに立ち上がり，開口部で大きく外方に広がる。

遺物は，堆積土から弥生土器片11点出土している。第48図11～13の3点を図示した。器面には，11に単節縄文，12に附加条縄文が施されている。13は底部付近の破片で，無文である。

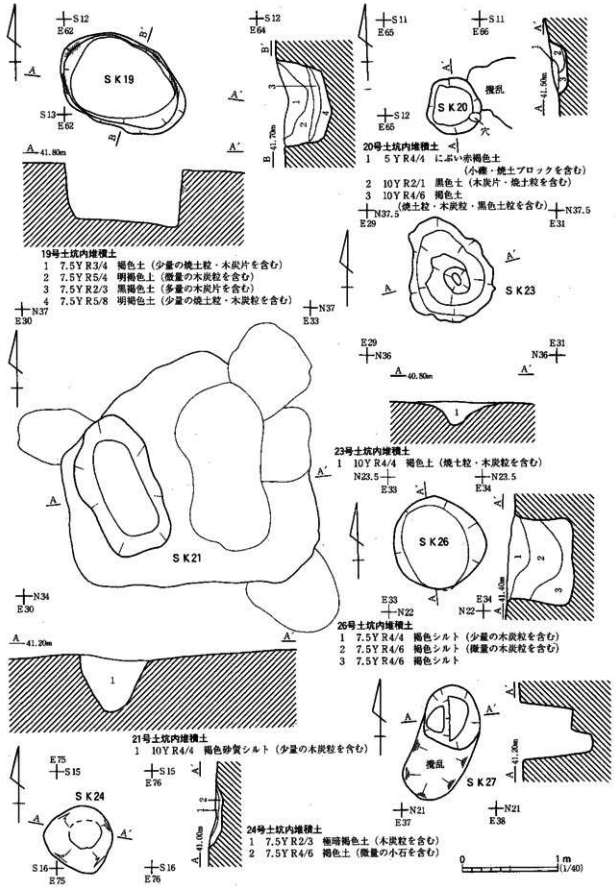
本土坑は弥生土器の出土や堆積土の状況から，弥生時代中期には開口していた可能性があり，性格を考える上での証左は確認されなかった。　（高　橋）

24号土坑　SK24　（遺構　第43図　写真31）

本遺構は，調査区南東部のI4－84・85グリッドにまたがり検出された土坑である。東側に緩く傾斜するほぼ平坦部に立地している。南側に弥生時代中期末の8号住居跡，西側に弥生時代中期末の7号住居跡がそれぞれ隣接する。検出面は，LⅣ上面である。遺構内の堆積土は，2層からなる自然堆積である。ℓ1には，まばらであるが木炭粒が含まれる。

平面形は楕円形で，その規模は，上端・下端の最大直径がそれぞれ70cm，35cmを計測する。また，深さも最深部で10cm程度と非常に浅く，底部は平坦である。壁の立ち上がりは緩やかであり，全体として平底の浅鉢のような外形を呈する。土坑からは遺構に伴う遺物等は出土しなかった。

本土坑は検出面から10cm程度掘り込み，ほとんど深度を持たない性格不明の土坑である。本調査区内からは，19号土坑のような木炭焼成土坑が検出されているが，木炭片や焼土などその根拠とな




**第43図**　19～21・23・24・26・27号土坑

る要素が見られず，遺構に伴う遺物等も出土していないので，その機能や時代考証は困難である。

（高　村）

26号土坑　ＳＫ26　（遺構　第43図　写真31　遺物　第48図）

26号土坑は，調査区北側平坦面上のＨ４－６グリッドに位置している。付近の東側には27号土坑が位置している。遺構検出面はＬⅣ上面で，平面形は楕円形を呈している。その規模は南北の長軸が152cm，南北の短軸が142cmとなっている。検出面からの深さは最深部で70cm程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルト３層からなり，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは急で，南側では一部がオーバーハングしている。床面はほぼ平坦である。

遺物は堆積土中より弥生土器片が少量出土している。図示資料の第48図13は甕の口縁部で，外面と口唇に縄文が施されている。

本土坑の年代は，出土遺物より弥生中期末と考えられるが，その性格は不明である。（藤　谷）

27号土坑　ＳＫ27　（遺構　第43図　遺物　第48図）

27号土坑は，調査区北側平坦面上のＨ４－７グリッドに位置している。付近には西側に26号土坑が位置している。遺構検出面はＬⅣ上面で南側で攪乱を受けている。土坑の平面形は上端で不整な楕円形を呈している。その規模は東西の長軸が65cm，南北の短軸が60cmとなっている。検出面からの深さは最深部で70cm程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルトで，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは急で，底面は２段となっており，西側が20cm程低くなっている。

遺物は堆積土中より弥生土器片が出土している。図示資料では，第48図15が太い沈線による文様が施された壺あるいは深鉢の体部，16が地文のみの体部破片，17が蓋の天井部である。

本土坑の年代は，出土遺物より弥生中期前半と思われるが，その性格は不明である。（藤　谷）

28号土坑　ＳＫ28　（遺構　第44図　写真31）

28号土坑は，調査区北側のＨ３－87グリッドに位置している。土坑は，調査区中央よりやや西より北側に張り出す丘陵平坦面の北縁部に位置している。周辺には，東側に12号住居跡，西側に13号住居跡が位置している。遺構検出面はＬⅣ上面で，平面形は楕円形を呈している。その規模は南北の長軸が75cm，東西の短軸が70cmとなっている。検出面からの深さは最深部で20cm程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルト１層で，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは緩やかで，底面はほぼ平坦である。

本土坑から遺物は出土しておらず，年代・性格は不明である。（藤　谷）

29号土坑　ＳＫ29　（遺構　第44図）

29号土坑は，Ｈ４－87グリッド，調査区中央よりやや西側の丘陵平坦面上に位置している。３号

住居跡と重複関係にあり，南半部がそれに切られている。遺構検出面はⅠⅣ上面で，平面形は遺存状況より楕円形を呈していたと考えられる。遺存部の規模は東西長が77cm，南北長が89cmとなっている。検出面からの深さは最深部で13cm程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルト1層で，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは緩やかで，底面はほぼ平坦である。

遺物は弥生土器の細片が堆積土中より出土しているが，細片のため時期は不明である。遺構の時期は重複関係より弥生中期以前と考えられる。その性格については不明である。　（藤　谷）

30号土坑　ＳＫ30　（遺構　第44図）

30号土坑は，Ｈ４－15グリッド，調査区中央よりやや西側の丘陵平坦面上に位置している。周辺には，２・３号住居跡，４号特殊遺構が位置している。このうち，４号特殊遺構と重複しており，それを切っている。遺構検出面はⅠⅣ上面で，平面形は楕円形を呈している。その規模は南北の長軸が180cm，東西の短軸が140cmとなっている。検出面からの深さは最深部で20cm程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルト1層で，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは緩やかで，底面はほぼ平坦である。

30号土坑から遺物は出土していないが，堆積土が周辺の遺構と近似するところから，同じ弥生中期の遺構である可能性が高い。また，その性格は不明である。　（藤　谷）

31号土坑　ＳＫ31　（遺構　第44図　遺物　第48図）

31号土坑は，調査区東側のＩ４－14グリッドに位置している。土坑の位置している付近は，南側の段丘上部平坦面より北側へ続く緩斜面となっており，西側には７号土坑・３号特殊遺構が位置している。遺構検出面はⅠⅣ上面で，平面形は径60cm程の円形を呈している。検出面からの深さは最深部で17cm程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルト1層で，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは緩やかで，底面はほぼ平坦である。

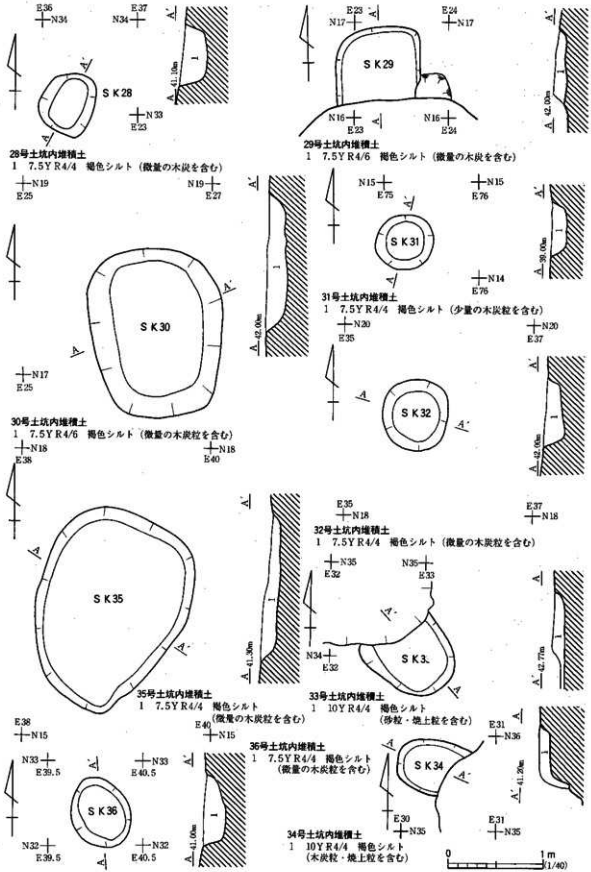
遺物は堆積土中より，弥生土器の破片が出土している。図示資料では，第48図18・19は縄文の施された甕の体部破片である。20は甕の底部で，底面には布目痕が残っている。

31号土坑の年代は，出土遺物や堆積土の状況から，同じ弥生中期の遺構である可能性が高い。また，その性格は不明である。　（藤　谷）

32号土坑　ＳＫ32　（遺構　第44図　写真32）

32号土坑は，Ｈ４－16グリッド，調査区中央よりやや西側の丘陵平坦面上に位置している。周辺には，北側に26号土坑がある。遺構検出面はⅠⅣ上面で，平面形は径70cm程の円形を呈している。検出面からの深さは最深部で20cm程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルト1層で，堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは緩やかで，底面はほぼ平坦である。

32号土坑からは遺物が出土しておらず，その時期・性格は不明である。　（藤　谷）




第44図　28～36号土坑

33号土坑　SK33　（遺構　第44図　写真32）

調査区北西端H3－76グリッドから検出された土坑である。この地区は13号住居跡と21号土坑と風倒木痕が複雑に重複しており，33号土坑を破壊している。検出面はLⅣ上面である。

平面形は推定で楕円形を呈していたと考えられ，遺存する径は66×80cm，検出面からの深さ12cmを測る。堆積土は砂粒・焼土粒を含む褐色シルト1層で，自然堆積である。底面は平坦で，断面は鍋底状を呈していたと推定される。

遺物は出土せず，時期・性格は不明である。　（高　橋）

34号土坑　SK34（遺構　第44図　写真32）

調査区北西端H3－86グリッドから検出された土坑である。この地区は13号住居跡と21号土坑と風倒木痕が複雑に重複しており，34号土坑を破壊している。検出面はLⅣ上面である。

平面形は推定で楕円形を呈していたと考えられ，遺存する径は58×60cm，検出面からの深さ12cmを測る。堆積土は砂粒・焼土粒を含む褐色シルト1層で，自然堆積である。底面も平坦で，断面は鍋底状を呈していたと推定される。

遺物は出土せず，時期・性格は不明である。　（高　橋）

35号土坑　SK35　（遺構　第44図　写真32　遺物　第48図）

35号土坑は，H4－17グリッド，調査区中央よりやや西側の丘陵平坦面から東に向かう緩斜面上に位置する。周辺には，北側に11号住居跡がある。遺構検出面はLⅣ上面で，平面形は長軸200cm，短軸160cm程の楕円形を呈している。検出面からの深さは最深部で15cm程である。堆積土は自然堆積の褐色シルト1層である。壁面の立ち上がりは緩やかで，底面はほぼ平坦である。

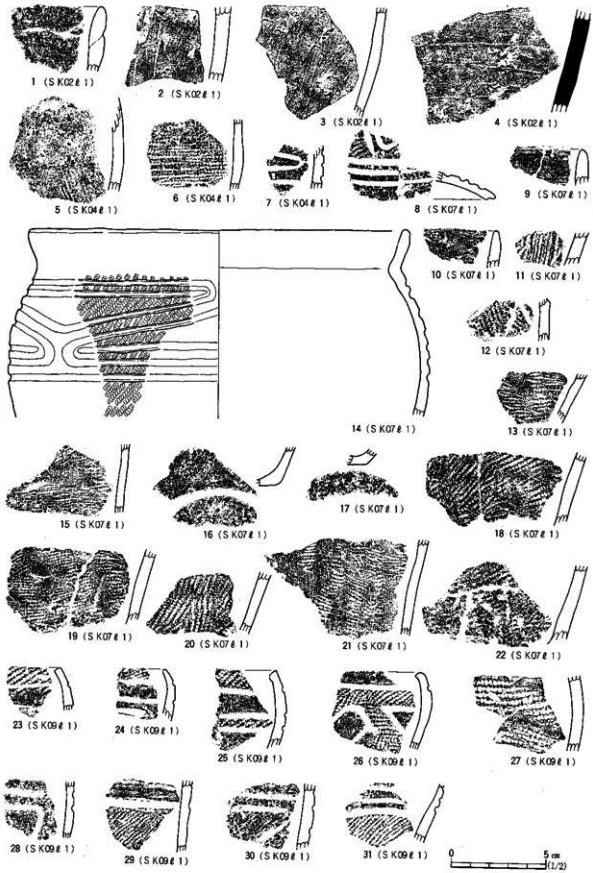
遺物は，緑色片岩製の凹石（第48図21）が出土している。

35号土坑は，出土遺物より弥生時代の遺構と考えられるが，その性格は不明である。（藤　谷）

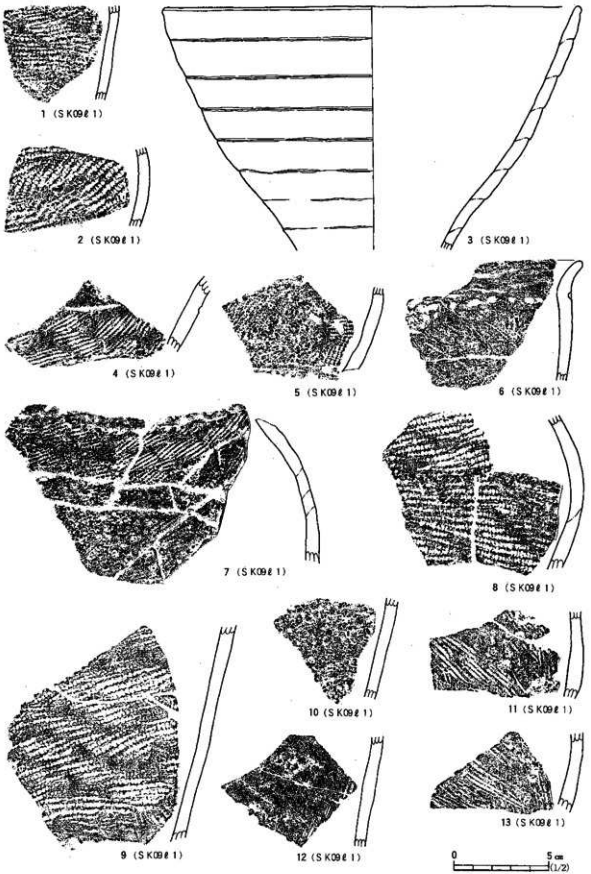
36号土坑　SK36　（遺構　第44図　写真32）

本遺構は，調査区北部のH3－88に位置する。本遺構の立地は，丘陵頂部の平坦面である。本遺構の北側1mの地点には14号住居跡が近接している。遺構検出面はLⅣ上面である。他の遺構との重複関係はない。本遺構の堆積土は，木炭粒をまばらに含む褐色砂質土1層で，細分することができなかった。人為堆積のような様子は認められなかったことから，本遺構は自然に埋没したものと考える。本遺構の平面形は，北西から南東方向を長軸とする楕円形を呈する。その規模は上端の長軸78cm，短軸60cm，深さは最深部で20cmを測る。底面は平坦であり，凹凸はほとんど見られない。壁は，底面から約45°の角度で直線的に立ち上がる。

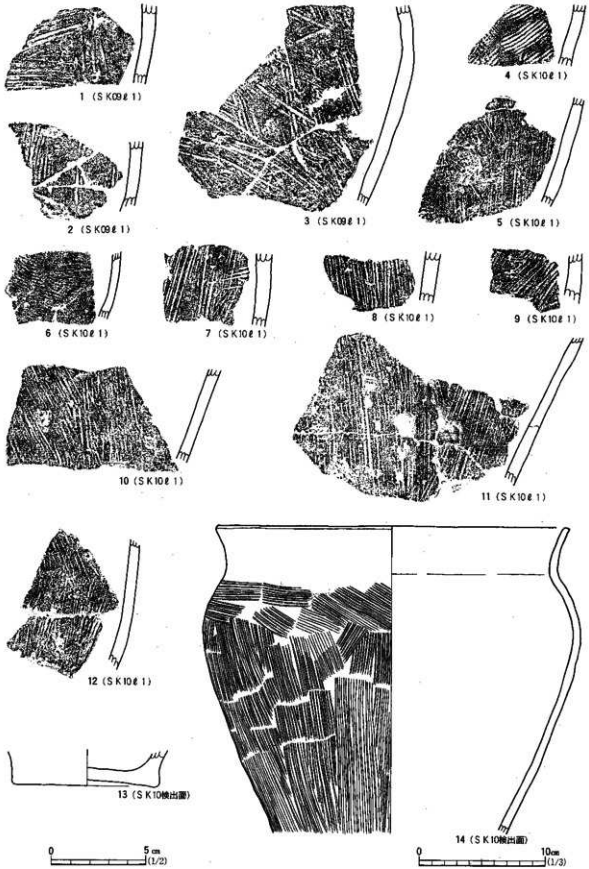
本土坑から遺物は出土しておらず，時代や性格については不明である。　（本　田）



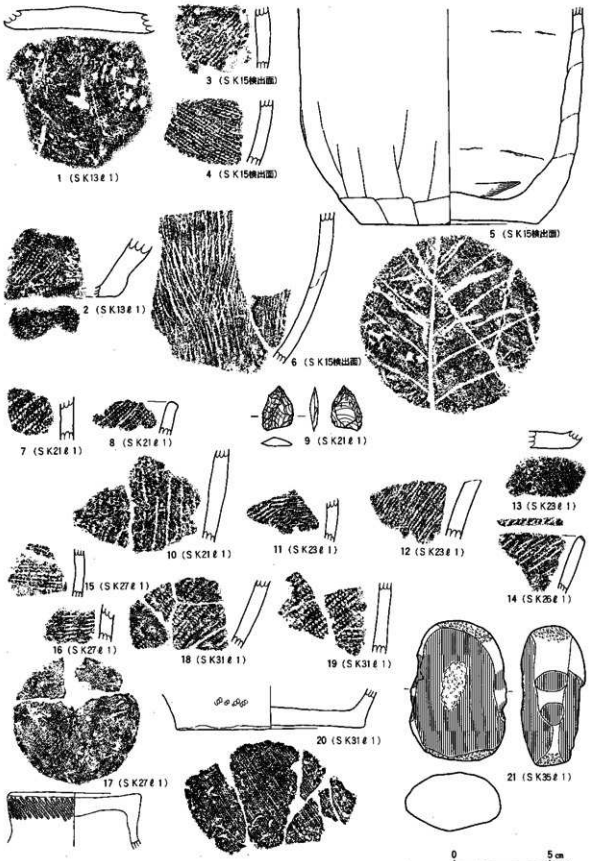

**第45図**　2・4・7・9号土坑出土遺物




第46図 9号土坑出土遺物




第47図　9・10号土坑出土遺物




**第48図**　13・15・21・23・26・27・31・35号土坑出土遺物

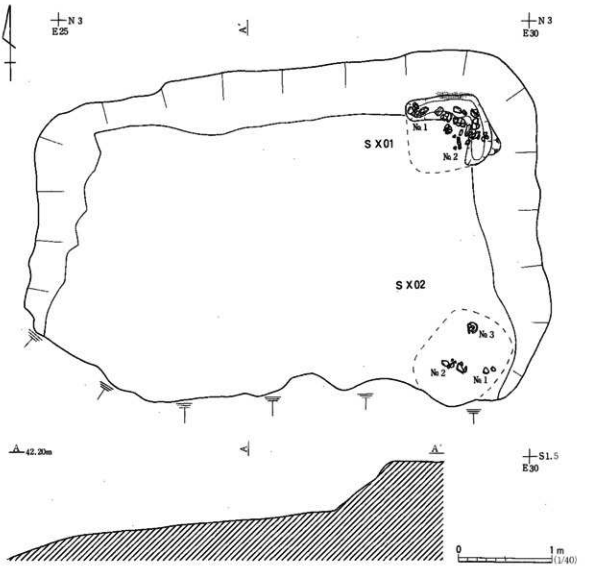
## 第５節　特殊遺構

### １・２号特殊遺構　ＳＸ01・02

**遺　構**　（第49図　写真33）

調査区中央部から南寄りのＨ４－45・55グリッドから検出された特殊遺構である。南側には１号遺物包含層が，西側には13号土坑がそれぞれ隣接する。本遺構は遺構検出作業のためＬⅢａを除去後，ＬⅣ面で竪穴状に掘削した整地面を確認した。

掘削面の平面形は南側が流失しており不明確であるが，ほぼ隅丸方形を呈していたと考えられる。北壁の東西長534㎝・西壁の遺存長270㎝・東壁の遺存長366㎝を測る。堆積土は２層に分かれ，北側頂部からの自然堆積である。この堆積土は１号遺物包含層を形成するＬⅢａ・Ⅲｂで，ＬⅢａは土器片・木炭粒を含む褐色砂質土，ＬⅢｂは明黄褐色砂質土である。周壁はＬⅣ中位から下部を使



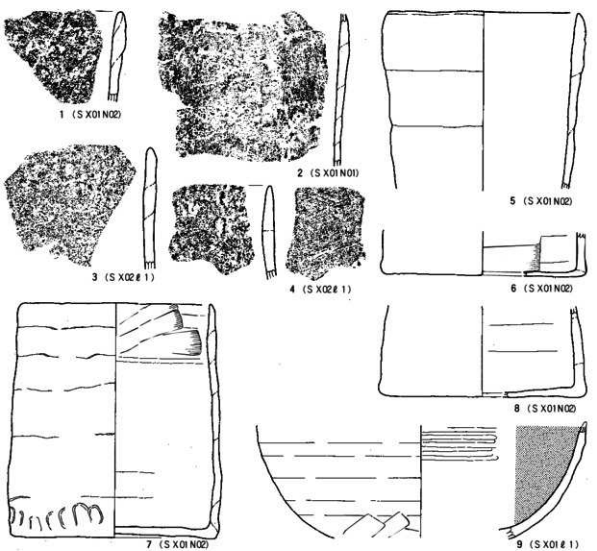

第49図　１・２号特殊遺構

用し，床面から40°の角度で緩やかに立ち上がる。床面はやや南側に傾斜しており，LⅣ下部を使用し貼床は確認されなかった。

床面の精査時に，2ヵ所の焼土面と土師器筒形土器の散乱しているのを確認した。この範囲を識別するため，北側を1号特殊遺構，南側を2号特殊遺構と命名し調査した。1号特殊遺構は整地した北東壁際から検出された。筒形土器片の散乱した範囲は東西90cm・南北80cmを測り，さらに土器片を取り上げると焼土面と逆「L」字状の壁溝を確認した。幅25cm前後・深さ約6cmを測り，断面「U」字状を呈する。2号特殊遺構は南側で，一部流失した可能性がある。筒形土器片の散乱した範囲は東西84cm・南北106cmを測り，さらに土器片を取り上げると焼土面を検出した。

**遺　物**　(第50図　写真63)

第50図1～9の9点を図示した。1～8は土師器筒形土器である。小片が多く，器面が荒れて剝落しており，復元作業は困難を極めた。1～4は口縁部から体部にかけての破片を採択した。土器断面は口縁部に向かって直立し，明瞭に粘土紐の積み上げ痕が観察される。5は口縁部から体部に




**第50図**　1・2号特殊遺構出土遺物

かけての破片から復元図示した。推定口径10.2cm，遺存高9.5cmを測る。器面は再酸化のため，剝落し砂粒が浮上している。内外面には粘土紐の積み上げ痕やヘラナデ・ナデが観察される。6・8は底部付近の破片から復元図示した。底部は平底を呈し，体部に向かって直立気味またはやや内湾気味に立ち上がる。底部は体部と異なり，器肉は薄い。7は唯一復元図示することができた。推定口径9.9cm，器高12.4cm，底径10.8cmを測る。上げ底気味の底部から口縁部に向かって直立する。器面の内外面には，粘土紐の積み上げ痕が観察される。調整は，外面に指頭痕や不定方向のナデと2ヵ所の刷痕，内面にヘラナデが施されている。胎土中には微量の白糸針状物質を含む。9は土師器杯の体部片から復元図示した。ロクロ成形で，口唇部と底部を欠損する。推定口径17.4cm，遺存高6.0cmを測る。器面の調整は，体部下半に手持ちヘラケズリ，内面には黒色処理とヘラミガキが加えられている。

**ま　と　め**

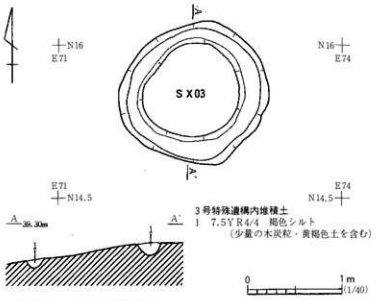
本遺構は，出土したロクロ土師器から平安時代前半の年代が推定される。この遺構の性格については，土師器筒形土器の小片が多量に出土しており，従来の研究成果から製塩との関係が考えられる。土師器筒形土器の小片および復元した土器を観察すると，①口唇部に不明瞭な片口，②器面には再酸化を受けたものと受けないものが共存する，③出土はすべて破片の状態で完形に復元することはできない，④意図的に破壊したものである。また，底面に焼土面を確認し，煮沸に関連する行為が行われたことが推定される。

海縁から500m離れており，当時の海岸線がさらに東側と考え，さらに海水を運搬してきた労力を考えると，製塩との関係も若干の疑問も残る。　（高　橋）

## 3号特殊遺構　S X03

**遺　構**　（第51図　写真34）

3号特殊遺構は，調査区北東側に北面する緩斜面上のⅠ4－14グリッドに位置している。周辺には，南側に2号溝跡が，北側に弥生中期前半の7号土坑が位置している。遺構検出面はⅡ上面で，平面形はドーナツ形を呈している。その規模は東西の長軸が160cm，南北の短軸が140cm，溝の幅が20～40cmとなっている。検出面からの深さは5～15cm程である。堆積土は木炭粒を混入する褐色シルト1層で，

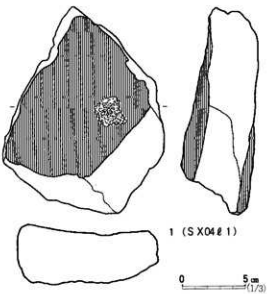



第51図　3号特殊遺構

堆積状況は自然堆積と推定される。壁面の立ち上がりは緩やかで，床面は北側に向かってやや傾斜している。

**ま　と　め**

３号特殊遺構は，ドーナツ形を呈する遺構で，遺物として弥生土器の細片が少量出土している。遺物から詳細な時期を特定することは困難であるが，堆積土が弥生時代の遺構と近似することや周辺に弥生時代の遺構が分布することから，弥生時代中期頃の遺構である可能性がある。　（藤　谷）

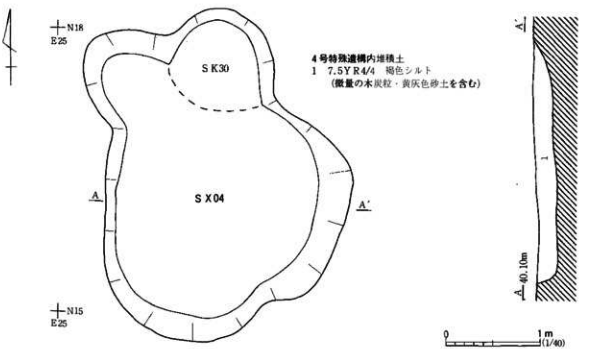



第52図　４号特殊遺構出土石器

## ４号特殊遺構　ＳＸ04

**遺　構**　（第53図　写真35）

４号特殊遺構は，調査区中央よりやや西側の丘陵平坦部のＨ４－15グリッドに位置する。２号住居跡と30号土坑と重複関係にあり，それらに切られている。遺構検出面はⅠⅣ上部で，２号住居跡の断ち割り作業を実施した際に検出された。平面形は不整楕円形を呈し，その規模は，南北の長軸3.2m，東西の短軸2.6mを測る。検出面からの深さは，最深部で20cm程である。堆積土は褐色シルト１層で，木炭粒・黄灰色砂土が混入しており，堆積状況は自然堆積と考えられる。壁面の立ち上がりは西側がやや急で，底面は若干の凹凸がある。




第53図　４号特殊遺構

**遺　物**　（第52図　写真64）

遺物は弥生土器の細片と石器が堆積土中より，出土している。図示したのは，第53図1の砂質変成岩製の石皿の破片である。

**ま と め**

本遺構の年代は，遺構の重複関係と出土遺物より，弥生時代前期から中期前半頃と考えられる。また，その性格は，その規模より住居跡の基礎掘形の可能性が考えられる。　（藤　谷）

## 第6節　溝　跡

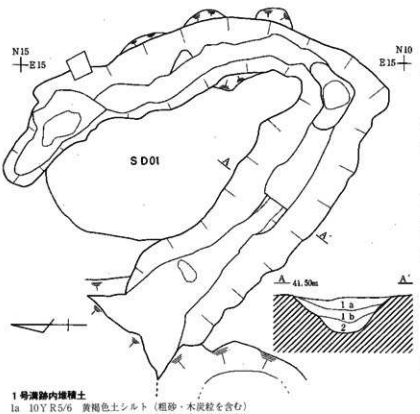
### 1号溝跡　SD01

（遺構・遺物　第54・55図　写真36）

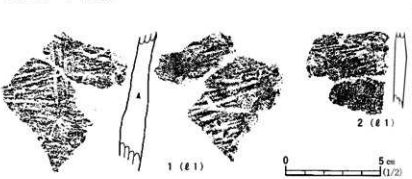
調査区西端H4－12・22・23グリッドから検出された溝跡である。本溝跡は検出の段階で逆「U」字状を呈し，堆積土の状況も他の弥生時代の遺構群の堆積土に類似していた。検出面は，LⅣ上面である。幅は110～152cm，検出面からの深さ40～80cmを測る。

堆積土は2層に分かれ，含有物の量によって細分された。ℓ1aは木炭粒・粗砂を含む黄褐色土，ℓ1bは少量の木炭粒・粗砂を含む黄褐色土，ℓ2は明黄褐色粘質土である。さらに，東西に断ち割り調査した結果，風倒木痕で窪地にℓ1～2が堆積したことが明らかになった。この風倒木痕の規模は，東西5m・南北7.1mを測る。

遺物は，縄文土器と弥生土器の破片が6点出土している。第




第54図　1号溝跡




第55図　1号溝跡出土遺物

55図１・２の２点を図示した。１は胎土に繊維を含み，器面の内外面に条痕文が施されており，縄文時代早期後半の条痕文系土器に相当する。２は弥生土器で，器面は剝落しているが単節縄文が観察される。

倒木の時期は不明確であるが，縄文土器や弥生土器の混入と堆積土の状況を考慮すると，弥生時代中期以降の可能性が高い。（高　橋）

２号溝跡　ＳＤ02　（遺構　第56図　写真37）

２号溝跡は調査区東端から北西側谷部に向かって東西に延びる溝跡である。溝跡の周辺には，北側に６・７号土坑が位置している。検出面はⅠⅣ上面である。溝跡の全長は7.80m程で，東端部と西端部の比高差は40cm程となっている。堆積土は木炭粒を含む褐色シルト１層からなっている。溝の幅は50～80cm，深さ10～30cmで，その断面はＵ字状を呈している。

遺物は堆積土中より，弥生土器片が少量出土している。

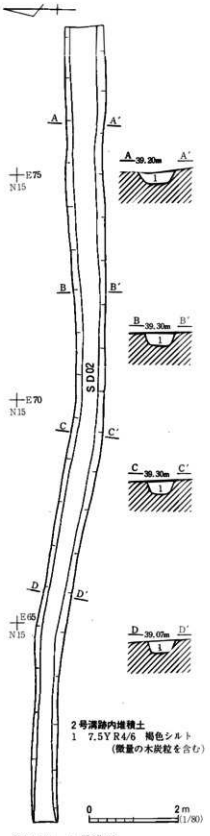
２号溝跡の年代は，遺構検出面と出土遺物より弥生時代中期である可能性が高い。（藤　谷）

## 第７節　木炭窯

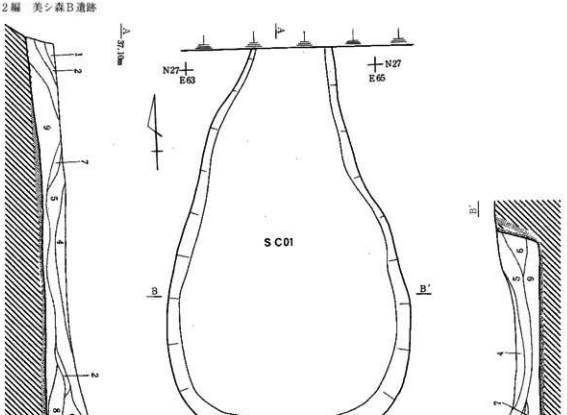
１号木炭窯　ＳＣ01　（遺構　第57図　写真38・39）

１号木炭窯は，調査区北東側の谷部に作られた木炭窯で，Ⅰ３－93・Ⅰ４－３グリッドに位置している。遺構検出面は谷部に堆積する暗褐色土上面であり，焚口付近は削平を受けている。

木炭窯の平面形は焚口から奥壁に向かって広がり，奥壁と側壁の境界に角をもたない形態を呈する。木炭窯の主軸はＳ－２°－Ｗで，その規模は，主軸の遺存部長4.20m，焼成室の幅は，北端の遺存部で85cm，中央部で2.30m，奥壁付近で2.00mである。堆積土は，９層からなり，この内底面直上に堆積するℓ９が天井崩落土である。また，堆積状況は自然堆積と考えられる。底面は南側から北側に向かって緩やかに傾斜しており，その比高差は20cm程である。また，底面下部は還元部と酸化部が認められ，その下半部には還元部が２面認められ，その使用は



第56図　２号溝跡




1号木炭窯跡内堆積土
1　7.5YR3/3　暗褐色シルト（少量の木炭粒・焼土粒を含む）
2　7.5YR3/2　黒褐色シルト（少量の木炭粒を含む）
3　7.5YR4/4　褐色シルト（少量の木炭粒を含む）
4　7.5YR2/2　黒褐色シルト（少量の木炭粒・焼土粒を含む）
5　7.5YR3/4　暗褐色シルト（少量の木炭粒を含む）
6　7.5YR3/2　黒褐色砂質シルト(少量の木炭粒・焼土ブロックを含む)
7　10YR5/6　黄褐色粘質シルト
8　7.5YR2/1　黒色砂質シルト
9　2.5YR4/6　赤褐色シルト
（天井部崩壊土）

0　1m
(1/40)

**第57図**　1号木炭窯跡

2回であったと推定される。煙道は奥壁中央にあり，外側には8cm程の還元部と4cm程の酸化部がある。壁面の立ち上がりは急で，遺存部の高さは奥壁で75cm，中央部で55cm，北端で20cm程となっている。

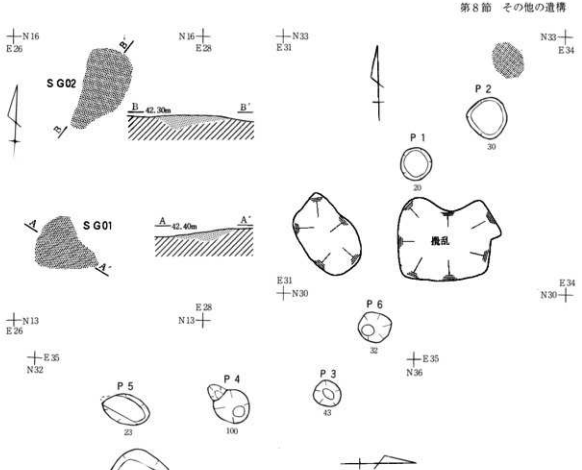
本木炭窯は，形状より中世以降に作られたものと考えられる。　（藤　谷）

## 第8節　その他の遺構

その他の遺構として，焼土遺構・ピット群等が検出されている。ともに，調査区中央よりやや西側から北に広がる平坦面より検出されている。

### 1号焼土遺構　SG01　（遺構　第58図）

1号焼土遺構は，調査区中央部よりやや西側の段丘平坦面に位置する遺構である。遺構は，2号住居跡の堆積土上面より検出された。周辺には北側に2号焼土遺構があり，同じく2号住居跡の堆




**第58図**　１・２号焼土遺構・ピット群

積土上面より検出されている。遺構の平面形は東西に長い不整な楕円形を呈し，その規模は，長軸70㎝，短軸45㎝である。焼土の厚さは，最も厚いところで９㎝である。本遺構は，周辺の遺構の検出状況・遺物の出土状況より，弥生時代中期に形成された可能性が高い。　（藤　谷）

２号焼土遺構　ＳＧ02　（遺構　第58図）

２号焼土遺構は，１号土坑とともに段丘平坦部の２号住居跡の堆積土上面より検出された遺構である。遺構の平面形は東西に長い不整な楕円形を呈し，その規模は，長軸70㎝，短軸45㎝である。焼土の厚さは，最も厚いところで９㎝である。本遺構は，周辺の遺構の検出状況・遺物の出土状況より，弥生時代中期に形成された可能性が高い。　（藤　谷）

ピット群　（遺構　第58図）

調査区中央のやや西側より北側に広がる平坦部からは，竪穴住居跡・土坑などのほかに３ヵ所よりピットが検出されている。このうち２ヵ所について図示した。ピットは13号住居跡の南側に２基，

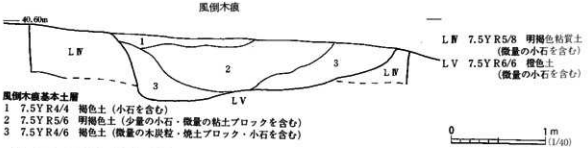
東側に3基がある。南側のものは，径30～40cm，深さ20～30cm，東側のものは，径30～50cm，深さ10～40cmである。堆積土は，木炭粒をやや多めに含む褐色シルトである。

ピット群の時期は，その堆積土が周辺の弥生時代の遺構のものと近似するところから，弥生時代中期のものと考えられる。また，その性格は，位置関係・検出された住居跡の柱穴との共通性より住居跡の柱穴である可能性が考えられる。　（藤　谷）

風倒木痕　（第9図）

調査区東部Ｈ５－４グリッドから風倒木痕を検出した。風倒木痕は，遺構検出作業時にしばしば下位の土層が浮上し，あるいは腐食土を含む黒色土がドーナツ状に落ち込んでいる部分が確認される。このような落ち込みは，自然の営力によって作られてきたと考えられ，人為的な意図は確認されない。１号溝跡も精査の段階で，風倒木痕と推定された。

この範囲は，径約３m・検出面から深さ64cmを測る。堆積土は，３層に分れる。ℓ１は小石を含む褐色土，ℓ２は少量の小石・粘土ブロックを含む明褐色土，ℓ３は少量の木炭粒・焼土粒・小石を含む褐色土である。ＬⅣは検出面で微量の小石を含む明褐色土，ＬⅤは微量の小石を含む橙色土となる。遺物は出土せず，時期は不明である。　（高　橋）




第59図　風倒木痕基本土層

## 第９節　遺物包含層

調査区南側中央部の緩斜面から多くの弥生土器片が出土した。そこで，精査のため南北に土層観察用のベルトを設定し，１号遺物包含層と命名した。遺物はグリット名と層位を記入して取り上げた。調査区のグリッド名は，Ｈ４－44・45・53～57・63～68・73～79・87～89・97～99，Ｇ５－８である。土器片は総数で３，473点で，ＬⅡ・Ⅲからの出土が多い。時期別では，縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器と続く。地山（ＬⅣ面）の地形は，標高39.0m～42.0mで，南西方向に向って扇状に開いている。

１．基本層序（第60図　写真40）

基本層序の確認は，付図１のＡ－Ａ′の地点で行った。ＬⅡは一部で遺存し，ＬⅢａは土器片・木炭粒を含む褐色砂質土，ＬⅢｂは明黄褐色砂質土，ＬⅣは黄褐色砂土，ＬⅤは褐色粘土となる。

遺物を多く含む層はⅬⅢａで，斜面上方のＨ４－53～57では層厚が30㎝前後，Ｈ４－73～77付近では50㎝前後を測る。堆積土中には砂粒や小礫を含み，ⅬⅢａ～ⅬⅢｂは丘陵頂部からの再堆積土と考えられる。また，平安時代と考えられる１・２号特殊遺構にⅬⅢｂが堆積しており，この遺物包含層は平安時代以降に形成されたものと推定される。

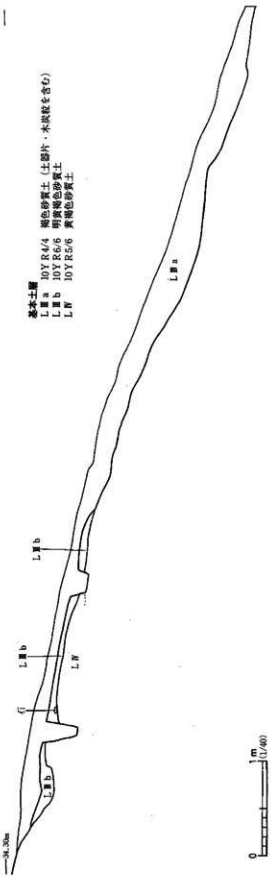
２．土　　器（第61～71図　写真65～82）

本遺跡で遺物の大半を占める弥生土器は，前節まで報告してきた各遺構から出土した土器と大差なく，これ以外に縄文土器が少量出土している。分類は，出土量の多い弥生土器を文様から時期別に１～３群に大別した。

**縄文土器**　第65図１～12の12点を図示した。５・11を除き，ⅬⅢから出土している。１～３は口縁部片で，内外面に条痕が施されている。外面に半截竹管状工具で斜位の沈線を集合させ，この文様帯は「集合斜線充填文」とも呼ばれている。また，口唇部にはキザミが，胎土中には繊維が含まれている。１は口縁部下に隆帯状の突帯が巡る。４・５も口縁部片で，外面に縄文，内面に条痕が施されている。６～11は体部片で，胎土中には繊維が含まれている。６～９は内外面に条痕が，10～12は外面に縄文と内面に条痕が施されている。１～３・６～９は縄文時代早期後半の茅山下層式期に，４・５・10～12は早期末葉の縄文ー条痕文系土器に相当する。

**弥生土器**　第61図１～第64図17，第66図１～第71図19の209点を図示し，文様から３群，３類に細分した。

１群土器　（第61図１～６，第66図１～44，第67図１～９）




第60図　１号遺物包含層基本土層

変形工字文を主体とした文様が施された弥生時代前期の土器で，文様の明確な精製土器を本群とした。第61図1は脚部を欠損した小型な台付鉢，2～5は坏部と脚部の一部を欠損した高坏あるいは台付鉢，6は口縁部と底部を欠損したコップ状の鉢である。1は変形工字文，6は2本の沈線で平行や波状の文様を構成する。第66図1～11は口縁部片で，高坏または鉢と考えられる。12～18は口唇部を欠損するが，高坏または鉢と考えられる。19～21は蓋である。22～24は鉢の口縁部片で，口縁部には波状または2対の突起を有する。口唇部及び口縁部下に平行沈線が巡る。25～43は鉢または深鉢の体部上半部で，沈線による変形工字文が施されている。44，第67図1～5は壺の頸部片で，沈線による変形工字文が施されている。6～9は深鉢で，口縁部に沈線による変形工字文と体部上半部に縄文が施されている。

2群土器　（第67図10～35，第68図1～3）

太い沈線と磨消縄文を主体とした文様が施された弥生時代中期前半の土器で，文様の明確な精製土器を本群とした。第67図10～14は蓋である。10・13は縄文または附加条縄文，11・14は平行沈線と縄文，12は沈線で文様を表出している。第67図15～23は鉢または深鉢である。平行沈線や沈線で区画された文様帯に縄文が施されている。第67図24～35，第68図1～3は壺である。いずれも太い沈線で区画された文様帯に縄文が施されている。

3群土器　（第62図2・3，第68図4～16）

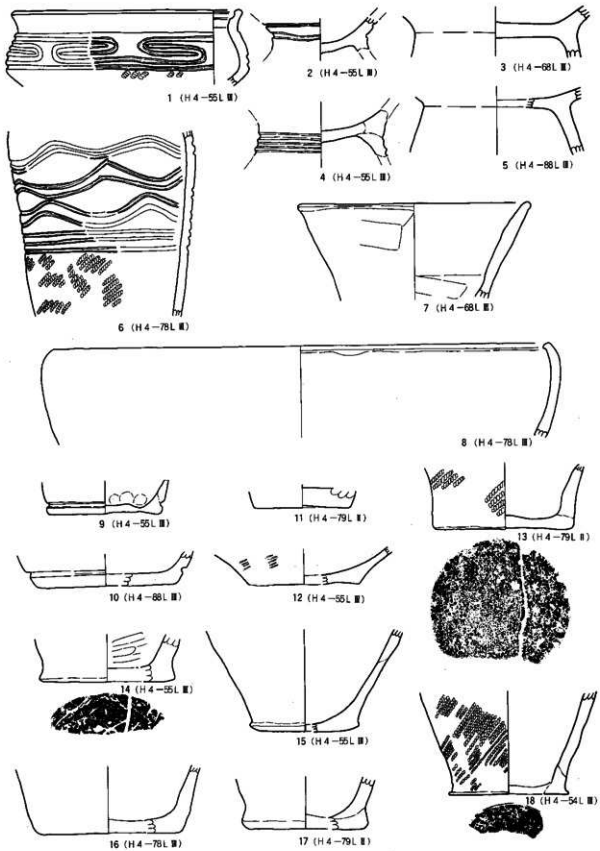
主に2本以上の平行沈線文を主体とした文様が施された弥生時代中期末の土器で，文様の明確な精製土器を本群とした。第62図2は体部下半を欠損する壺で，口縁部の内外面に附加条縄文，頸部に2本で平行と垂下する沈線がある。また，口唇部には細かなキザミが観察される。3は同一地点で出土した。当初土器棺墓とも考え精査したが，掘形は確認されなかったが。室内作業で，接合した結果2・3のように図示され，土器棺墓であった可能性が高い。第68図4～6は鉢で，平行または斜位の多条沈線が施されている。7～16は壺である。7・9～15は地文の附加条縄文に1本または2本の沈線で，渦文が施されている。16は連続する刺突と2本の沈線文が観察される。

**その他の弥生土器**

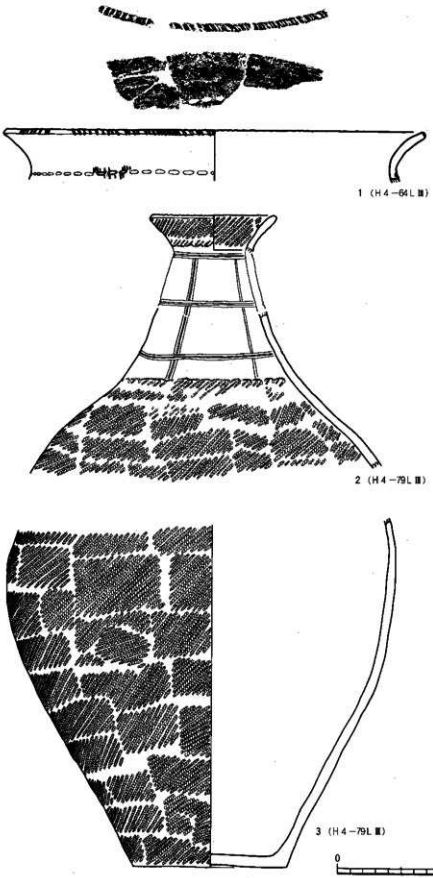
1～3群土器に含まれる土器の中で，底部片・地文のみの体部片・無文・粗製の甕を集めた。本来なら，いずれかの土器群に含まれると考えられるが，特定が困難な土器を一括した。

1類（第61図9～18，第62図3，第63図1～10，第64図1～7）

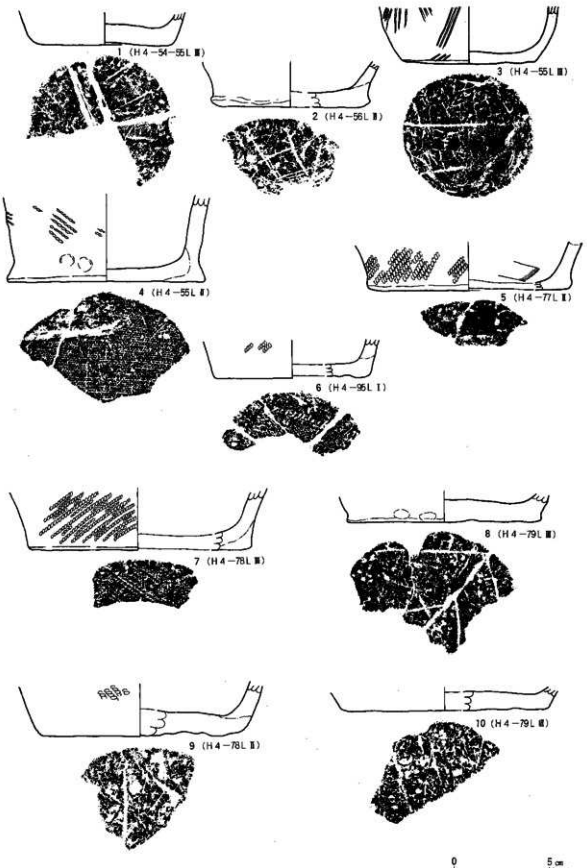
底部のみの土器を本類とした。器形は大きく分けて，鉢または壺と考えられる（第61図9・10・12～18，第62図3，第63図1～10，第64図1～17）と，それ以外の甕がある。器面には，縄文の施された（第61図13，第62図3，第63図5・6・9，第64図2・3・5・7），条痕の施された（第63図3），撚糸文の施された（第63図4），附加条縄文の施された（第61図18・第63図7・第64図4）がある。底部の底面には，布目痕（第61図18，第63図4～7）と木葉痕（第61図14，第63図1～3・8～10，第64図1）が観察されるものがある。他は小片や底面に剝落やケズリがあり，不明なものもある。この中で，条痕の施された土器は1・2群土器に，附加条縄文の施された土器は主に3



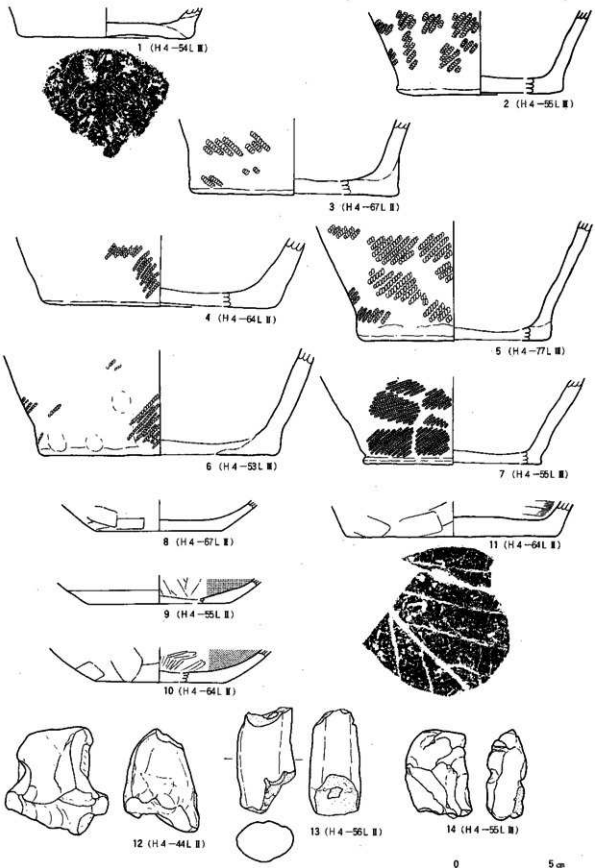

第61図　1号遺物包含層出土遺物（1）



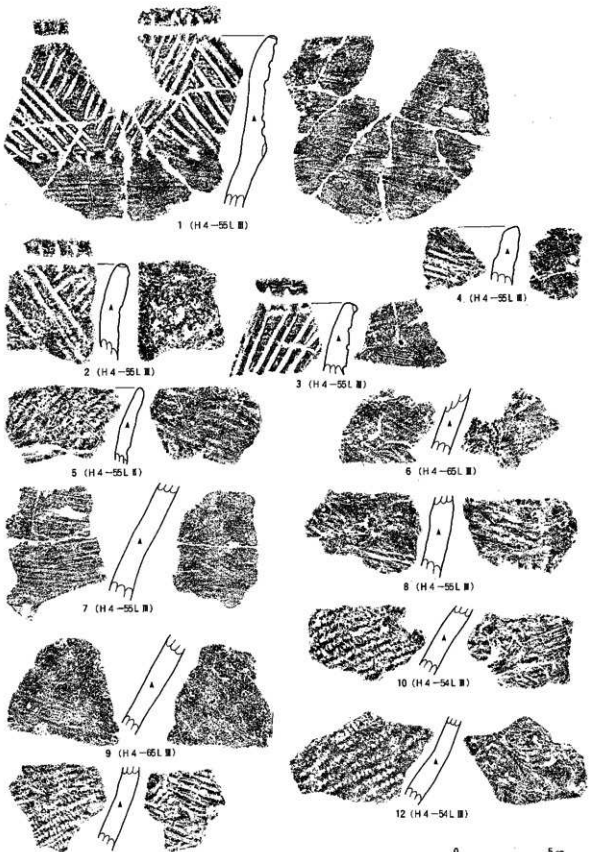

**第62図**　1号遺物包含層出土遺物（2）



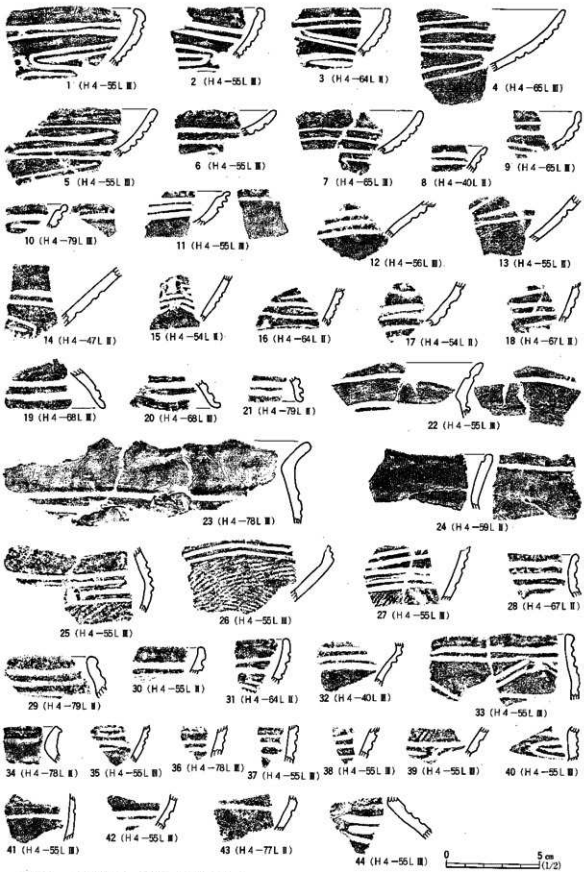

第63図　1号遺物包含層出土遺物（3）



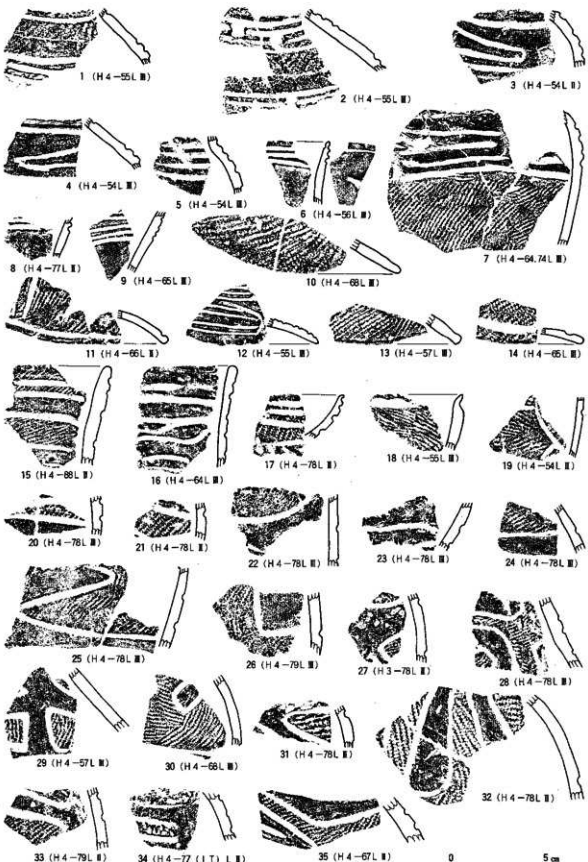

**第64図**　1号遺物包含層出土遺物（4）



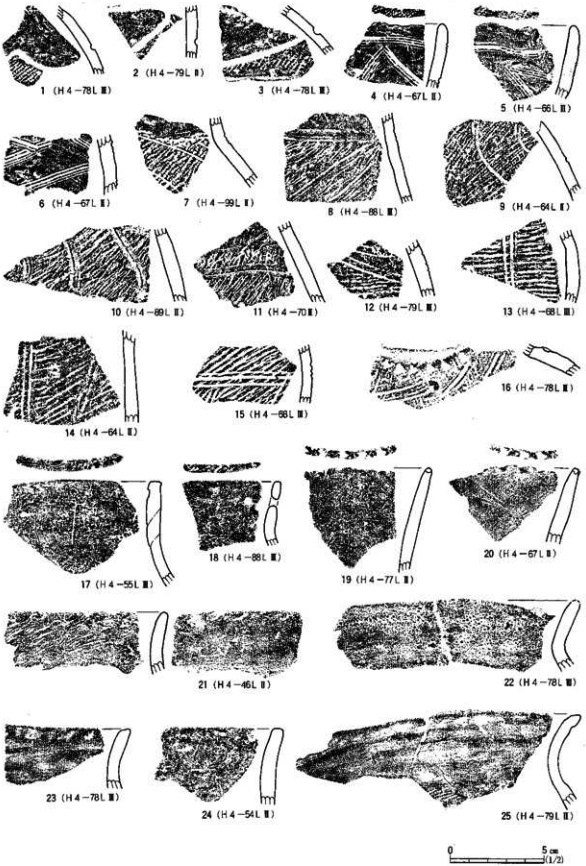

第65図　1号遺物包含層出土遺物（5）



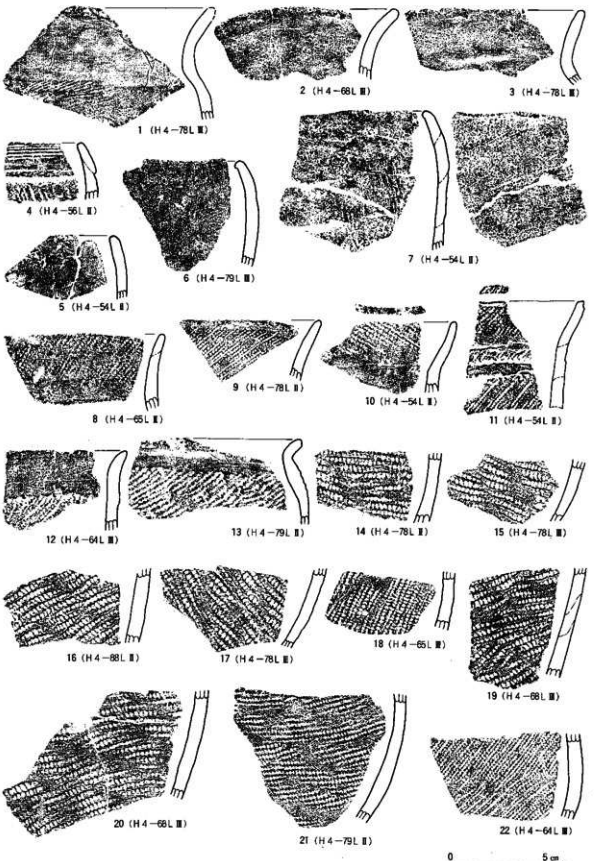

**第66図　1号遺物包含層出土遺物（6）**



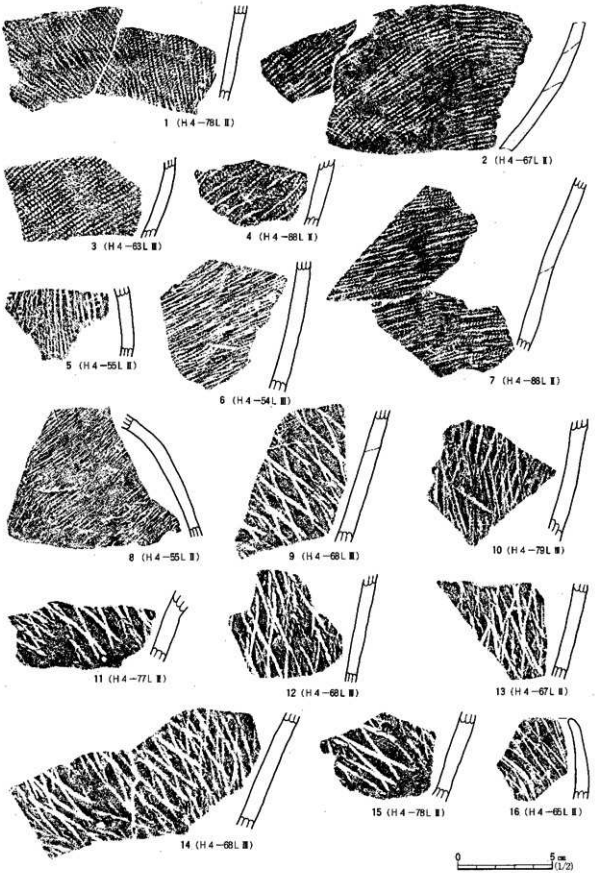

第67図　1号遺物包含層出土遺物（7）



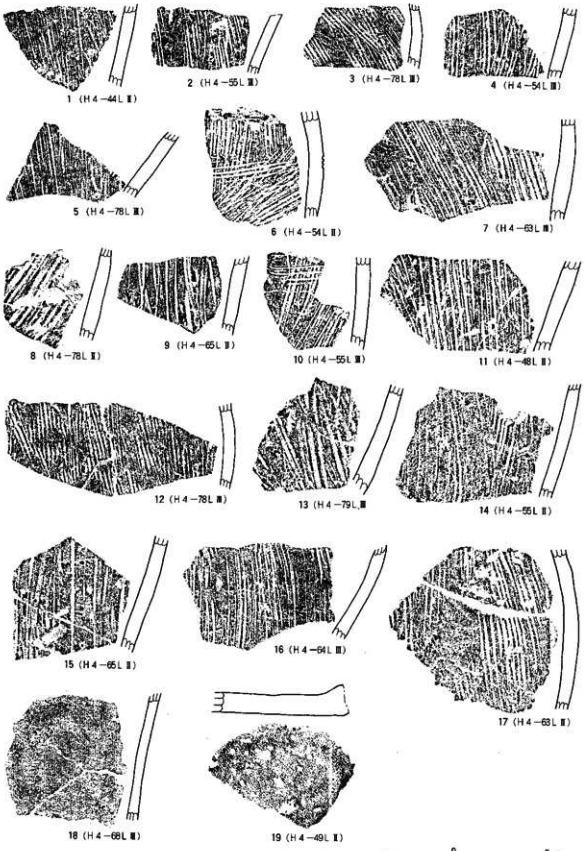

第68図　1号遺物包含層出土遺物（8）




**第69図**　1号遺物包含層出土遺物（9）




**第70図**　1号遺物包含層出土遺物（10）




第71図　1号遺物包含層出土遺物（11）

群土器に伴うと考えられる。

2類（第69図14～22，第70図1～16，第71図1～17）

地文のみの体部破片を本類とした。地文に単節縄文の施された土器（第69図14・15），附加条縄文の施された土器（第69図22・17・20，第70図1・4），直前段多条の土器（第69図18・21，第70図2・3），撚糸文の施された土器（第70図1～16），条痕の施された土器（第71図1～17）がある。撚糸文は網目状（第70図9～16），条痕は横方向や縦位に施されている。この中で，条痕の施された土器は1・2群土器に，附加条縄文の施された土器は主に3群土器に伴うと考えられる。

3類（第61図8，第68図17～25，第69図1～13）

粗製甕または深鉢の口縁部を本類とした。甕は第62図1・第68図17～25・第69図1～3・8～13，深鉢は第61図8・第69図4～13である。第62図1は甕の口縁部で，口縁が強く外反する器形で，口唇にはキザミが入れられている。内外面はナデられ，体部との境界には列点文が巡り，体部には条痕が施されている。器形・調整より邊賀川系の甕と推定され，出土位置からⅠ群土器に伴出するものと考えられる。17～24は口縁部が無文で，17は内湾気味，18～20は直線的，21～24・第69図2・3は外反する。17・18は口唇部に縄文が，19・20は口唇部にキザミが施されている。25・第69図1は口縁部が大きく外反し，口唇部が肥厚しており，口縁部下に縄文が施されている。第69図8～10は口縁部外面に附加条縄文，11は口唇部から口縁部にかけて附加条縄文が施されている。第61図8・第69図5～7は無文で口縁部が内湾する深鉢，第69図4は折り返し口縁部に多条沈線が施されている。この中で，附加条縄文の施された土器は主に3群土器に伴うと考えられる。

**土師器**（第64図8～11）

土師器は，8～10の杯と11の甕の4点図示した。杯はロクロ成形で，内面に黒色処理とヘラミガキが施されている。底部の切り離し方は不明で，体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリ再調整が加えられている。甕は底部付近の破片で，底面に木葉痕が観察される。

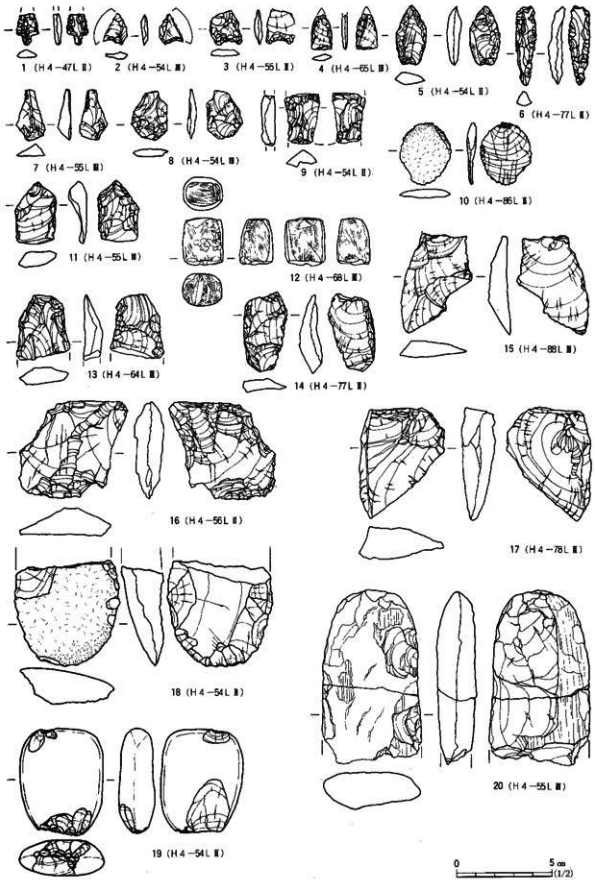
2．土製品（第64図12～14）

土製品は用途不明品が多い。12・14は手捏土器で表面に指頭痕が，13は表面に丁寧なナデが施されている。時期・性格は不明である。

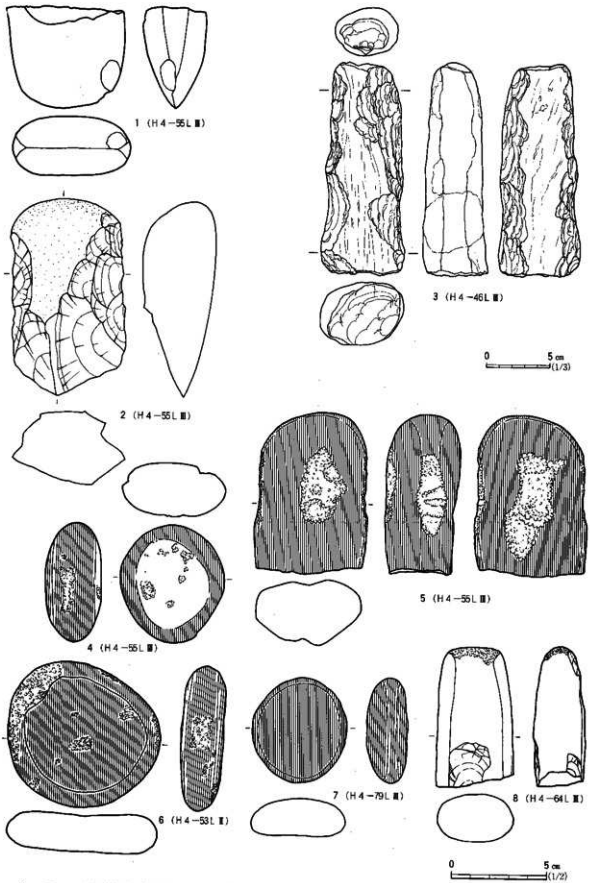
3．石　　器（第72・73図　写真85）

石器は，石鏃・縦長石匙，偏平片刃石斧，打製石斧，敲石などの定型石器以外に，中～大型剥片の側縁を刃部として利用したと考えられる剥片が出土している。計測値や石質は表4にまとめた。

第72図1は先端部を欠損する有茎石鏃，2～5は無茎石鏃である。2・3は基部が丸みを呈し，4の基部が直線的で二等辺三角形を呈し，5の側縁は丸味を有し，6は縦長の石錐である。7～11・13～17は，石核や剥片と側縁を刃部として使用したと考えられるものである。18は短冊形の打製石斧で，片面に自然面を有する。19は両端に剥離痕がみられる礫器である。20は剥落が著しいが，




第72図　1号遺物包含層出土石器（1）




**第73図**　1号遺物包含層出土石器（2）

短冊形の打製石斧と考えられる。石質は柔らかい緑色片岩である。12は６面に研磨痕が観察される用途不明品で，石質は滑石である。

第73図１は大型蛤刃石斧で，基部を欠損する。石質は花崗閃緑斑岩である。２は短冊形の打製石斧で，片面に自然面を有する。３は敲石，４～７は敲石・磨石類で，８は石斧で，磨痕・擦痕・打撃痕・敲打による窪みなどが観察される。石質は，細粒花崗岩・花崗閃緑岩・花崗閃緑斑岩・角内岩片岩である。７は磨石で磨痕・擦痕が観察され，石質は花崗閃緑岩である。　（高　橋）

## 第10節　遺構外出土遺物

１．土器　（第74図～79図　写真86～88）

**縄文土器**　縄文土器は表採のものを図示した。第76図12は口縁部破片で，内外面に条痕が施され，外面にはその上に竹管を用いてつけられた２条の平行沈線による波状文が施されている。また，口唇にはキザミが入っており，胎土には植物繊維が混入している。縄文早期後葉の茅山下層式に比定されるものと考えられる。

**弥生土器**　弥生土器は，文様の特徴などから以下の３群土器に大別した。

１群土器（第76図12～28，第77図１・２）

変形工字文を主体とした文様が施された弥生前期の土器で，文様の明確な精製土器を本群とした。第76図13～16は口縁部破片で，14が体部と口縁部が括れる形態の鉢の口縁部，他が高坏と考えられる。17は高坏の脚部である。第76図18～22・24～26，第77図１は鉢の体部で，沈線による変形工字文が施されていると考えられる。27～29は体部上半が内湾する形態の深鉢の体部上半の破片で，沈線による変形工字文が施されている。第77図２は鉢の口縁部で沈線による変形工字文が施されている。

２群土器（第77図３～18）

太い沈線と磨消縄文手法を主体とした文様が施された弥生中期前半の土器で，文様の判別可能な精製土器を本群とした。第77図３～６は平行沈線が施された深鉢，７は平行沈線の施された鉢，８は沈線による菱形文内に縄文が施された鉢である。９は蓋で，沈線内に縄文が施されている。10～18は壺の体部で，沈線で区画された文様内に縄文が施されている。

３群土器（第74図４，第77図19～29）

主に２本以上の平行沈線文を主体とした文様が施された中期末の土器で，文様あるいは器形の明確な精製土器を本群とした。第74図４は小型の広口壺で口縁部と体部に附加条縄文が施され，内面はヘラナデされている。第74図19・20は平行沈線による山形文の施された鉢で，20には口唇にキザミが入れられている。21は２本の沈線によって，重菱文の施された壺の体部，22は３本の沈線によって重菱文の施された壺の体部である。23～27は地文の縄文の上に１もしくは２本の沈線で渦文が施された壺の体部である。この他，第77図31・32，第78図２の内外面に附加条縄文が入る壺の口縁

部も本群に含まれる。

**その他の弥生土器**

1～3群土器に含まれる土器の内，底部のみの破片・地文のみの破片・粗製の甕を本群とした。本来何れかの土器群に含まれると考えられるが，特定が困難なものも含まれるため，一括し，3類に細分した。

1類　（第74図2・3・5～16，第75図1～12，第79図16～19）

底部のみのものを本類とした。器形には，大きく分けて鉢・壺と考えられるもの（第74図2・3・5～16，第75図2・3・5～7）とそれ以外の甕と考えられるものがある。第74図2・3については沈線が認められるもので，あるいは蓋となるかもしれない。鉢・壺の底部には，木葉痕の残されているものと布目痕の残されているものがある。甕の底部にも布目痕が残されているものがある。また，甕の地文には縄文の他に条痕の施されているもの（第75図12）もある。この他，底面の一部のみのものには，木葉痕が残されているもの（第79図16～18）と，布目痕が残されているもの（第79図19）がある。

2類（第78図15～19，第79図1～15）

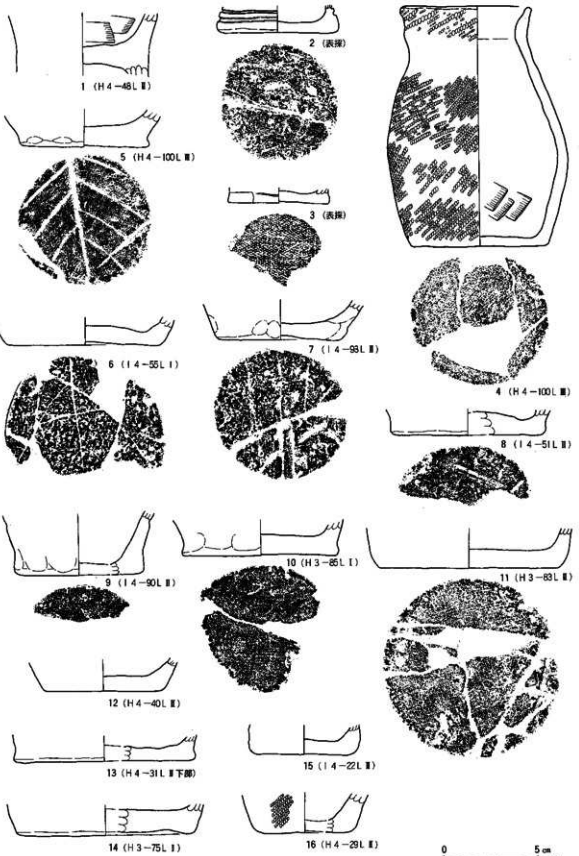
地文のみの体部破片を本類とした。地文に単節縄文の施されたもの（第78図15～19・第79図1・2），附加条縄文の施されたもの（第79図3～8），撚糸文が施されたもの（第79図9），条痕が施されたもの等（第79図13～15）がある。このうち，条痕の施されたものは，1・2群土器に伴い，附加条縄文の施されたものは主に3群土器に伴うものと考えられる。これらの内，附加条縄文の施されたものは，3群土器を中心とする時期に，条痕の施されたものは1・2群土器に伴うものと考えられる。

3類（第78図1，3～14）

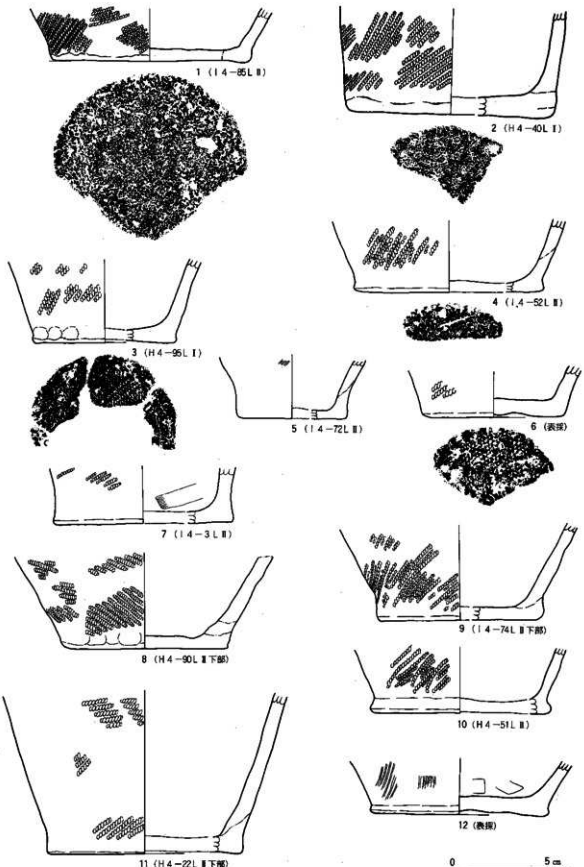
粗製の甕の口縁部破片を本類とした。縄文の入った外傾する長めの口縁のもの（第78図1・3～6），同様の器形で縄文の施されないもの（第78図7），体部との括れが緩く縄文の入る外傾する口縁部がつくもの（第78図8），強く外反する無文の口縁部のもの（第78図11），直立気味の体部に強く外反する口縁部がつくもの（第78図12），外傾する短い口縁のつくもの（第78図13），体部との境界に段をもつ深鉢に近い器形のもの（第78図14）がある。これらの粗製の甕のうち，地文に附加条縄文の施された口縁部が外反するタイプのものは，3群土器に伴うと考えられる。

土師器（第76図1～10，第79図10・11）

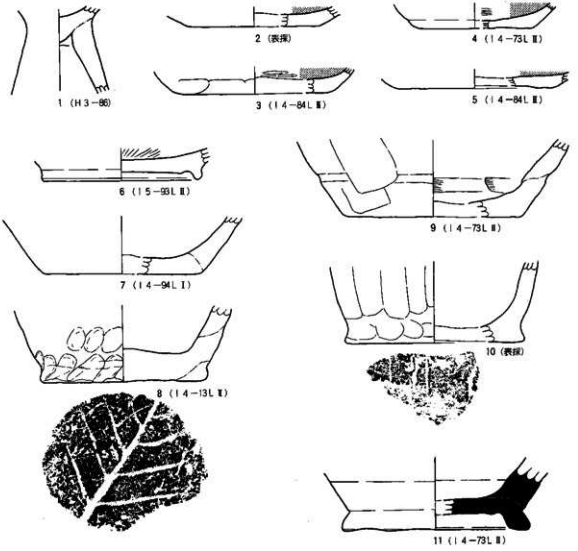
土師器では，高坏・杯・高台杯・甕などが出土している。第76図1は高坏でその器形より古墳時代前期のものと考えられる。第76図2～5は内面黒色処理された杯の底部で，このうち3には体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。6は高台杯で内面はヘラミガキがされている。7～10は甕の底部破片である。8・9は外面にヘラケズリの痕跡が残っている。8・10には底面に木葉痕が残されている。この他筒形土器の口縁部破片（第79図10・11）も出土している。




第74図　遺構外出土遺物（1）

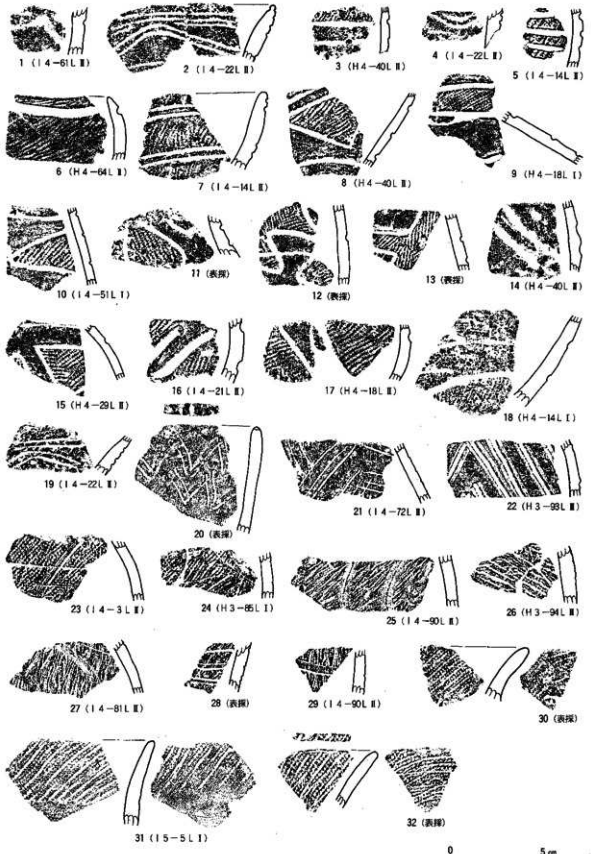



第75図　遺構外出土遺物（2）

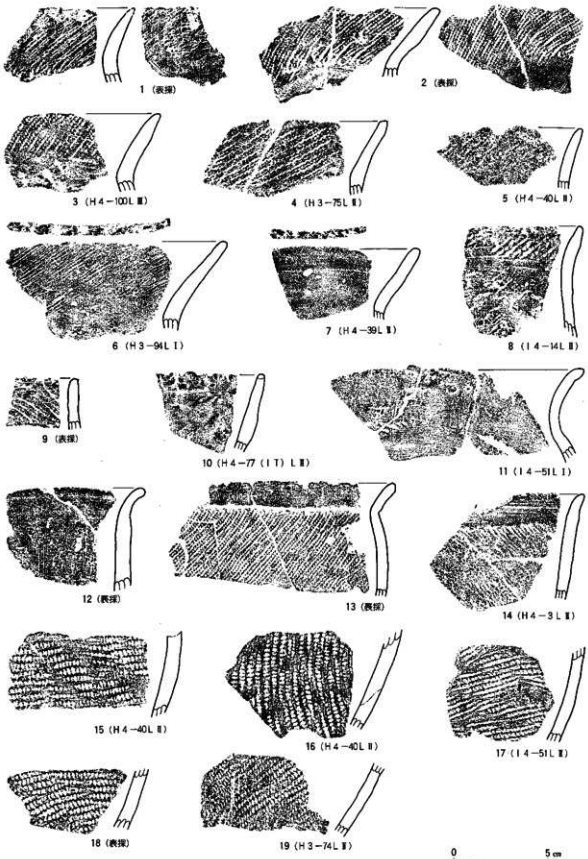



第76図　遺構外出土遺物（3）

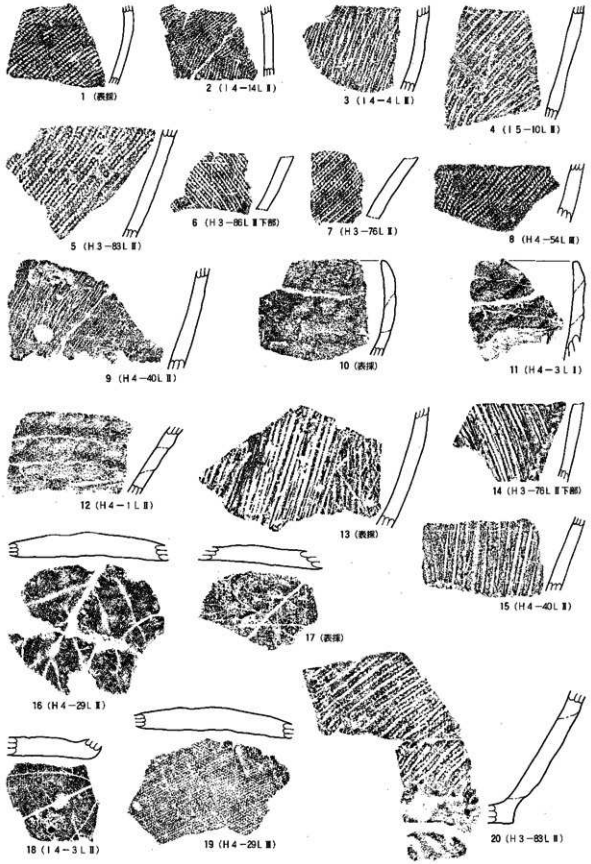
0　5cm（1/2）



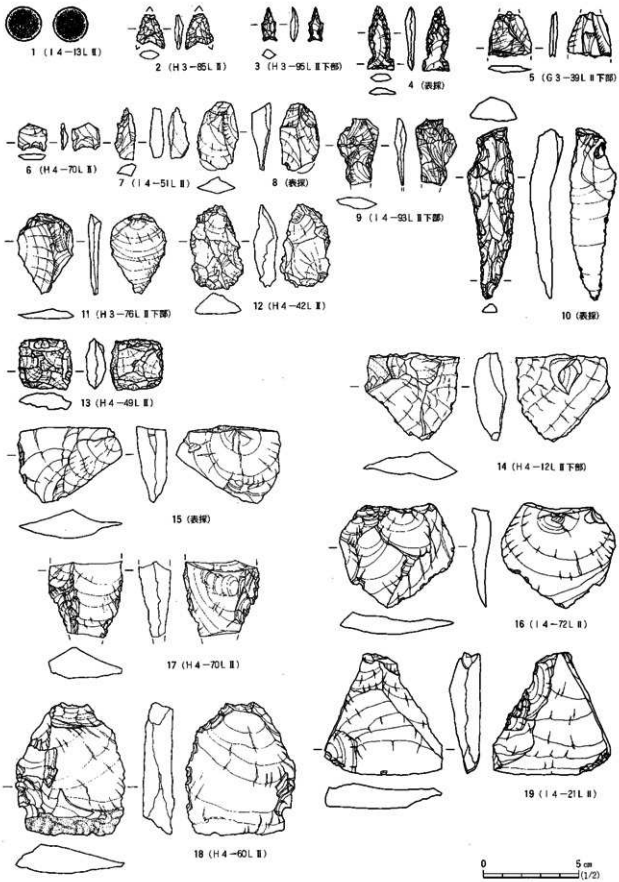

第77図　遺構外出土遺物（4）



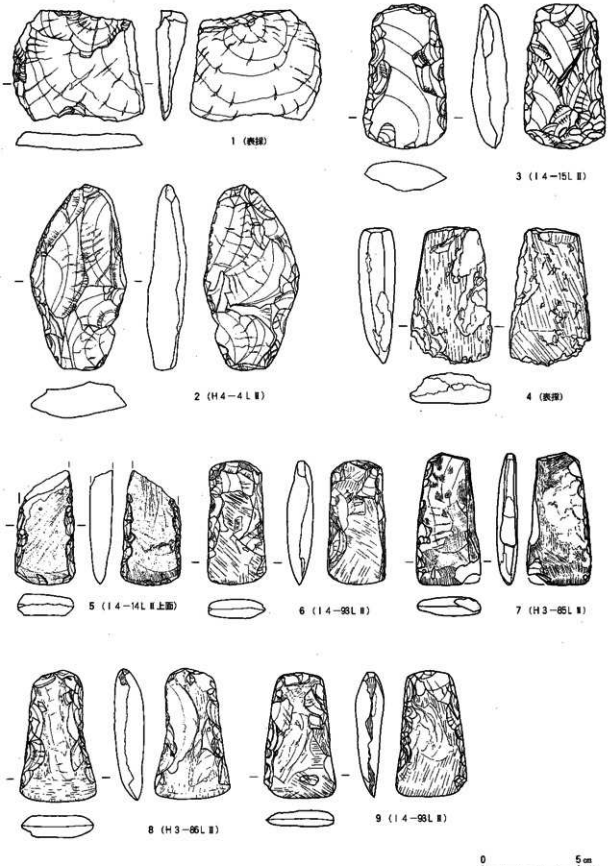

第78図　遺構外出土遺物（5）



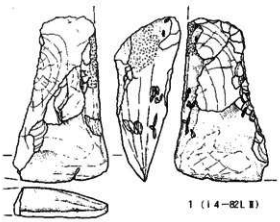

第79図　遺構外出土遺物（6）

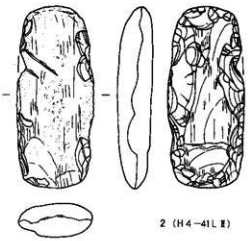


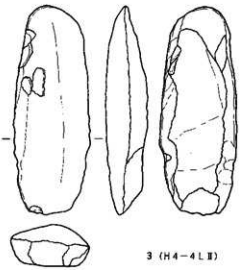

第80図　遺構外出土石器（1）

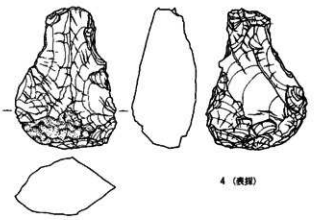


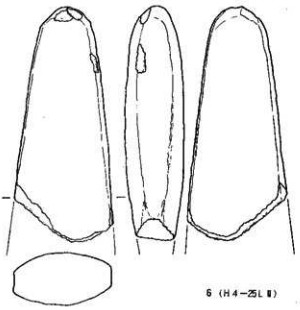

第81図　遺構外出土石器（2）

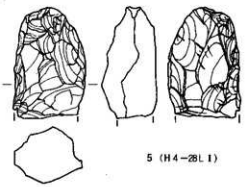


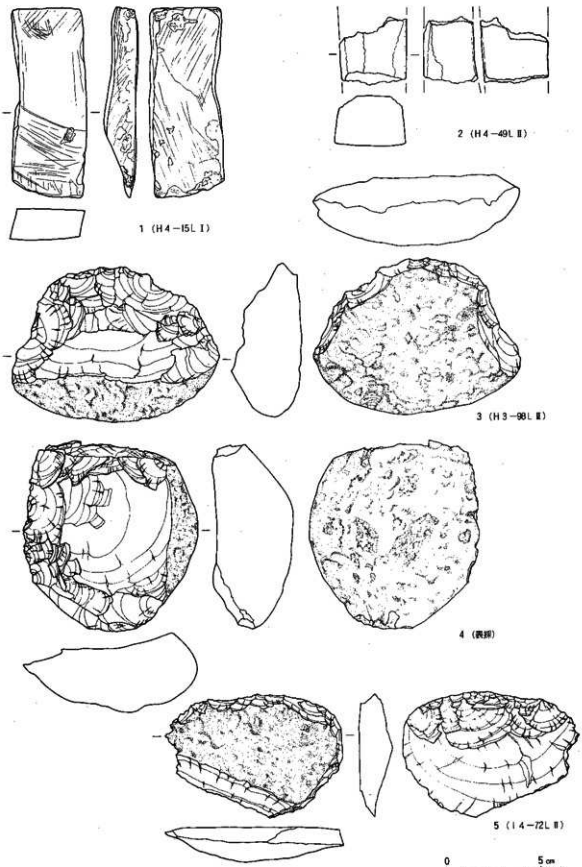



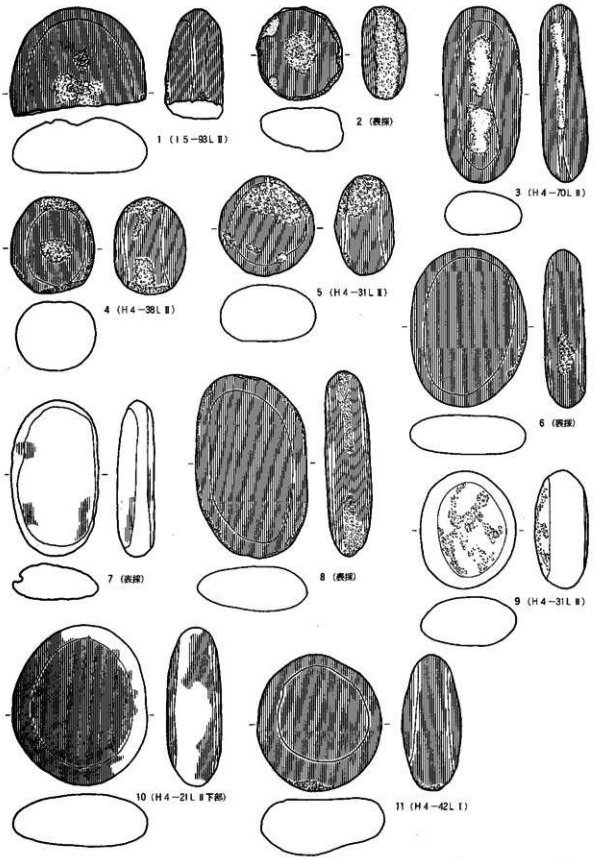



**第82図　遺構外出土石器（3）**




**第83図**　遺構外出土石器（4）




**第84図　遺構外出土石器（5）**

## ２．石　器　（第86～94図　写真　89～94）

石器には，石鏃，縦長石匙，扁平片刃石斧，打製石斧，砥石，磨・敲石などの定型石器の他，中～大型の剝片の側縁を刃部として利用した削器として利用されたと考えられる剝片が出土している。石鏃では，第80図２が凹基式の三角鏃，３・４がアメリカ式石鏃である。

第80図10は，凝灰質頁岩製の片面加工の縦長石匙で，基部が抉られている。縄文時代早期の土器に伴うと考えられる。

扁平片刃石斧は，ややまとまった量が出土している（第81図４～９・第82図１）。石質は，泥岩製のものが多い。形態は基部幅と刃部幅がほぼ同じな短冊型のもの（第81図５・６）とそれ以外の刃部幅が基部幅より広いものがある。

打製石斧は，第81図２・３，第82図２～４で，扁平な短冊型のものが多い。

第82図６は磨製石斧で，刃部が欠損している。

第83図１・２は砥石で，平安時代のものである可能性が高い。

第84図は，磨・敲石類で，磨痕と敲打痕の双方の痕跡を残すものもある。

その他に図示した資料は，石核と側縁を刃部とし削器として使用されたと考えられる剝片である。

## ３．その他　（第80図１）

昭和22年発行の50銭銅貨がＩ４－13グリッドより出土している。

# 第3章　ま　と　め

## 第1節　遺物について

### 1．弥生土器

美シ森B遺跡から出土した弥生土器は，大きくは3時期に区分することが可能である。本節では，それらの時期に大別される土器群について概観し，周辺地域の土器群と比較しその編年的な位置付けについても触れてみたい。

**弥生1期の土器**

遺物包含層のH4大グリッドの中の55小グリッドを中心とした区域で検出された土器群を基準とする。遺物包含層と遺構外出土遺物の1群土器も本時期のものと思われる。完形となる土器は出土しておらず，破片からの復元となるが，壺，高坏，鉢，蓋，甕等の器種がある。高坏・鉢・鉢ともに文様は沈線による険刻的な変形工字文である。粗製の深鉢と甕には，次の弥生2期とともに地文に条痕の施されたものがある。

この他，第62図1の口唇にキザミの入った遠賀川系の甕もこの時期に含まれると考えられる。東北地方で遠賀川系の甕を出土した遺跡には，生石2遺跡等がある。これらの遺跡出土の遠賀川系の甕と比較すると，口縁部のキザミが明瞭である，口縁部で条痕がナデ消されているなどの特徴を持っている。この甕は，大きさ・胎土等から，搬入品とは考えにくいが，このような畿内の土器により近い要素を持っている点が注目される。

1期の土器については，変形工字文系の土器の中では砂沢式に並行する土器に後続する段階のものと考えられる。東北中部では，青木畑遺跡，福島県内では，会津地方の上野尻遺跡，中通り地方の牡丹平遺跡，浜通り地方の成田藤堂塚遺跡から出土した土器群が，同時期に該当すると考えられる。

**弥生2期の土器**

3・5号住居跡出土遺物を基準とする。遺物包含層と遺構外出土遺物の2群及びそれに並行する2類土器の甕も本時期のものと考えられる。一部図化可能なものもあったが，ほとんどが破片であり器形の全容が不明なものが多い。壺は，体部に磨消縄文による区画文が施されたものである。鉢は口縁部が内湾する器形で，体部上半の文様帯に磨消縄文による沈線区画文が施されたものである。蓋も磨消縄文による沈線区画文が施されたものが出土している。地文のみの粗製の土器には，口縁部が内湾する器形の深鉢，口縁が外反する器形の甕等がある。地文は条痕と縄文がある。

2期の土器については，磨消縄文系の土器の中では，変形工字文が明確に残る段階の次の段階に位置付けられる。宮城県では，鳴沼遺跡の新しい段階のもの，福島県内では，会津地方の今和泉遺跡，中通り地方の孫六橋遺跡，浜通り地方の岩下A遺跡から出土した土器群が同じ段階のものと考

えられる。また，いわき市龍門寺遺跡出土の龍門寺式土器とは，2期の土器の鉢や蓋には磨消縄文を用いた入組み的な文様が用いられる点，粗製土器の地文に条痕が多用される点が異なっており，2期の土器は明確に龍門寺式に先行すると考えられる。

弥生3期の土器

7号住居跡，1～3号土器棺墓出土遺物を基準とする。遺物包含層と遺構外出土遺物の3群及びそれに併行する2類土器の甕も本時期のものと考えられる。壺は，体部上半に渦文が施されたもの，頸部に沈線が施されたもの，地文のみのもの等がある。器形は，体部上半に最大径をもつ長頸壺である。甕には，短い口縁部が強く外反するもの，口縁部が「く」の字状に屈曲し，口縁部にも地文が施されるもの，体部上半が大きく開き，口縁部が小波状を呈するものなどがある。

これらのうち，3号土器棺墓の下部の土器である長頸壺には，器形・文様ともに，天神原式土器・桜井式土器とは異なった要素も認められる。口縁部には，粘土粒の貼り瘤が認められ，器形も口縁部が若干内湾する器形である。また，体部上半に施文された渦文は，3本一組の沈線を用いて描かれたものである。このうち，口縁部の特徴は二ツ釜式や川原町口式土器など会津や中通り地方に分布する土器に認められる要素である。文様は，川原町口式や桜井式に共通するものがあるが，施文具が異なっている。このような要素より，施文具の違いや頸部以下の器形が天神原式と共通することを除けば，この土器は会津・中通り地方に分布する土器に強い影響を受けた土器と考えられる。

また，7号住居跡からは，川原町口式の壺と考えられる土器片が1個体分出土しているが，この住居跡からは，天神原式土器や桜井式に認められるような外傾する広めの口縁をもつ甕も出土している。

明確に天神原式土器と考えられる壺（第68図7～16・第77図23～29）については，遺物包含層と遺構外から出土している。

ところで，近年，これら中期末の沈線文系土器の併行関係に関する論考が発表されている。（吉田　1995）それによれば，各土器型式の分布域の偏りを同一時期の主体・客体土器の立場から捉え，それらの併行関係と位置づけている。浜通り地方では，鹿島町南入A遺跡，いわき市白岩堀ノ内遺跡の遺物包含層などから，それらの土器群が混在して出土している。

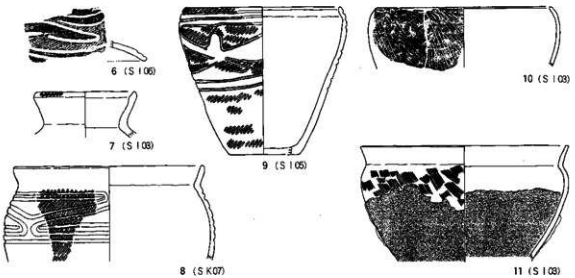
本遺跡の7号住居跡の遺物出土状況や3号土器棺墓下部の壺の折衷的な要素は，これを裏付け，これらの土器型式は一部で併行関係にある可能性がある。

本遺跡の弥生3期の土器は，これらの土器型式が混在して分布する中期末に位置づけられると考えられる。

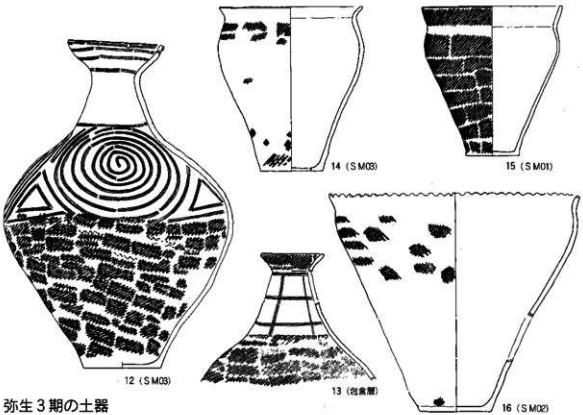
## 2．石　器

石器は，弥生時代のものと考えられるものが，住居跡・土坑などの遺構の他，遺物包含層や遺構外からも出土している。土器と同様に大きくは，3時期にわたるものが出土していると考えられる。本節では，各時期に伴う石器及び全体的なその器種と石質についてまとめる。

弥生1期の土器




弥生2期の土器




弥生3期の土器

第85図　美シ森B遺跡出土弥生土器集成図

弥生前期の土器が集中して出土したＨ４－55グリッド付近出土の石器を弥生１期のものと判断した。器種には，石鏃・使用痕のある剥片・打製石斧・太型蛤刃石斧・磨石がある。石鏃は，基部が平坦又は抉れた三角鏃で石質は流紋岩製である。他の剥片石器もほとんど流紋岩製である。

弥生２期の遺構に明確に伴う石器は少なく，不定形石器のみである。

弥生３期の石器には，７号住居跡から出土したものとして，石鏃・スクレイパー・不定形石器・使用痕のある剥片・磨石などがある。石質は，珪質岩と流紋岩である。

この他に，遺構外からは，石鏃・スクレイパー・使用痕のある剥片・扁平片刃石斧・打製石斧・磨石等が出土している。

これら主要な石器について，図示したものの割合は，石鏃14％，スクレイパー８％，使用痕のある剥片25％，扁平片刃石斧９％，打製石斧８％，磨石14％，敲石５％となっている。

図示した石器の石材の割合は，流紋岩44％，泥岩12％，細粒花崗岩10％，珪質岩10％，花崗閃緑岩６％，花崗閃緑斑岩４％，緑色片岩３％，凝灰質頁岩２％，角内岩片岩・滑石？・砂質泥岩？・砂質変成岩・細粒凝灰岩・中粒砂岩・粘板岩１％となっている。　（藤　谷）

## 第２節　遺構について

今回の調査で検出された遺構は，竪穴住居跡14軒，土坑30基，溝跡２条，埋設土器３基，特殊遺構４基，木炭窯１基，焼土遺構１基，遺物包含層１カ所である。これらのうち，土坑の一部，溝跡，２号性格不明遺構，木炭窯を除いた遺構は，弥生時代前期から中期にかけての作られたものと考えられる。本節では，第１節で行った時期区分をもとに，遺構の変遷とその特徴について概観したい。

**弥生１期**

１期の遺構は，遺物包含層から検出されている。遺物包含層の中でも１期の遺物は，Ｈ４－55の小グリッド周辺からまとまって検出されている。この包含層に伴う他の遺構は今回の調査で明らかにすることができなかった。

**弥生２期**

２期の遺構は，遺物包含層の他，竪穴住居跡４軒，土坑５基が検出されている。

竪穴住居跡では，２・３・５・６号住居跡が該当する。調査区内では，尾根筋の平坦面に位置している。形態は不整隅丸方形・小判形・楕円形と明確な企画性は認められない。規模は，２・３号住居跡でそれぞれ長軸4.1mと4.5mである。床面の施設は，地床炉と柱穴が検出されている。

土坑は，２・３号住居跡近辺から４基，調査区北東側の緩斜面部から１基検出されている。形態は楕円形のものが多く，性格は，住居跡周辺のものはそれらに付属して機能したものと推定される。

**弥生３期**

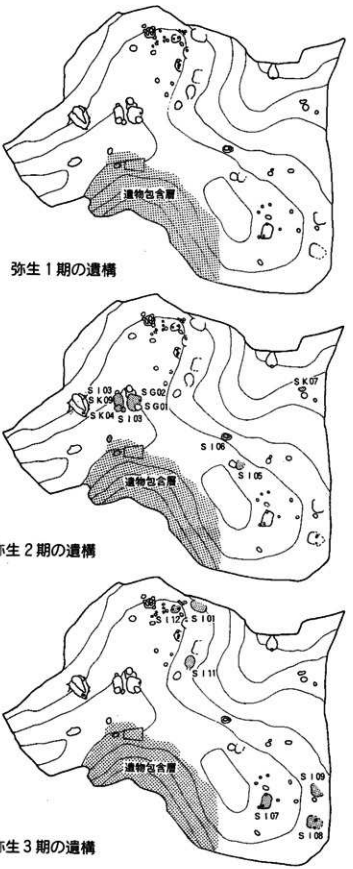
３期の遺構は，遺物包含層の他，竪穴住居跡６軒，土器棺墓３基，土坑１基が検出されており，本遺跡の中では，最も数が多い。調査区内では，大きく２カ所にまとまりをもって検出されている。

第１のグループは，調査区の中央よりやや西側より北側に広がる平坦面の北～東側の周縁部，第２のグループは，東側の平坦部より続く緩斜面に位置している。

住居跡の形態は，不整楕円形から隅丸長方形を呈しており，２期の住居跡同様に明確な企画性は認められなかった。住居内施設としては，地床炉と思われる焼土をもつものが11号住居跡１軒から，柱穴と考えられるピットをもつものが，７・８・12号住居跡の３軒から検出されており，それらは不明確なものが多かった。その規模は，長軸2.2m～3.65mと小ぶりなもの（11・12号）とやや大きめな長軸4.3m前後のものもある。

土器棺墓は，西側より３基がまとまって検出されており，木戸川対岸の天神原遺跡で検出されたような，この時期に特徴的な遺構と考えられる。

以上の遺跡内での弥生時代の遺構の変遷より，本遺跡では，弥生時代前期に生活の痕跡が認められる所から，その時期に活動が始まり，その後弥生中期前半期には，尾根付近で小規模な集落が営まれたと考えられる。更に，中期中頃を挟んで中期末に再び平坦部周縁で集落が営まれ，墓跡も同時に作られ，比較的短い期間で廃絶されたと思われる。　　（藤　谷）




第86図　弥生時代遺構変遷図

## 第3節　集落と墓域

今回の調査では，弥生時代中期末の集落と墓域が発見された。この中で，墓域（1～3号土器棺墓）と関連する竪穴住居跡は6軒（1・7～9・11・12号住居跡）・土坑1基（26号土坑）がある。竪穴住居跡は配置から，調査区北東部の北群（1・11・12号住居跡と26号土坑）と調査区南東部の東群（7～9号住居跡）に分類され，丘陵裾部に立地する。土器棺墓は調査区南東部に配置しており，東群の竪穴住居跡との関連が推測される。また，調査区北東部の北群は，東側を段丘礫の露呈する開析谷に面し，西側から南側にかけて風倒木痕や攪乱・時期不明の遺構群が配置され，土器棺墓は消滅した可能性がある。

これまでの調査例では集落と墓域が同時に発見されることは少ない。弥生時代中期の墓域には，会津若松市一ノ堰遺跡（芳賀他　1988）や須賀川市土取場B遺跡（長島他　1982）・橋葉町天神原遺跡（馬目他　1982）がある。最近では，いわき市白岩堀ノ内遺跡（井他　1997）で小規模な集落と墓域が発見されている。『第9回三県シンポジウム東日本の弥生墓制』の中で「福島県内の弥生時代墓制の展開」では，会津・浜通り地方は土器片で上面を覆った特異な土坑墓が発達するのに対して，浜通り地方には土器棺墓が卓越することを指摘している（芳賀　1988）。表2は福島県内の墓跡を検出した主要遺跡を掲載し，同様な傾向が指摘される。また，墓域が単独で発見された橋葉町天神原遺跡の土器棺墓と土坑墓の分析では，土器棺墓に乳幼児，土坑墓に成人と分けて埋葬したと考えられている。しかし，小規模な集落では，墓域と共存している場合が多い。浜通り地方では，表1・2の中で相馬・原町地区で丘陵裾部に炉跡を伴わない竪穴住居群が2～4軒が分布し，さらに土器棺墓が2～4基を単位として存続している。本遺跡でも，弥生時代中期末の住居跡群が大きく2グループ（北群と東群）と1墓域とに区画されている。土器棺墓を1グループの墓域と考えると，土器棺墓を中心とする墓域が存在した可能性が高い。

美シ森B遺跡では，遺構検出作業時に石器の細かなフレーク・チップが出土し，石材として使用された段丘礫の露頭を確認した。また，竪穴住居跡の精査では，堆積土の状況から短時間に埋没し，床面に硬化した面や炉跡が発見されないことから，季節的や短期間の使用が考えられる。このため，竪穴住居は定住性に乏しく，石器組成では石包丁や石鍬などの農具類が極僅かであるのに対して，太蛤刃石斧や偏平片刃石斧などの工具類の出土が多いことを考慮すれば，谷部において小規模な稲作農耕を営み，山に関わる生業や工房的な集落とも考えられる。本遺跡は，太平洋に面した阿武隈高地から延びる丘陵に立地している。これらの丘陵は，木戸川や井出川を初めとする小河川によって複雑に開析されており，小規模な開析谷をしばしば観察することができる。現在は，太平洋に面した丘陵先端は海岸崖線を構成し，これは海流による浸食作用で海進が進んだためである。弥生時代中期末は約1,900年前で，当時と現在とで地形に大きな変化が考えられており，水田遺構の検出と沖積地の調査が進めばさらに福島県浜通り地方の弥生文化の様相が推察されよう。　（高　橋）

表1　福島県内検出弥生時代中期住居跡

| No | 所在地 | 遺跡名 | 遺構名 | 形態 | 長軸 | 単軸 | 炉 | 柱穴 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 会津若松市 | 一ノ堰B | 1号住居跡 | 方形 | 4.65 | 4.35 | 無 | 4 | 二ツ釜 |
| 2 | 須賀川市 | 土取場B | 1号住居跡 | 隅丸方形 | 5.15 | | 有 | 無 | 南御山2 |
| 3 | 新地町 | 向田E | 1号住居跡 | 方形 | | | 無 | 無 | 桜井 |
| 4 | 新地町 | 武井D | 2号住居跡 | 隅丸長方形？ | 4.05 | | 有 | 無 | 桜井 |
| 5 | 原町市 | 鳥井沢B | 1号住居跡 | 小判形 | 5.72 | 4 | 無 | 2 | 桜井 |
| 6 | 原町市 | 鳥井沢B | 2号住居跡 | 長方形 | 5.7 | | 無 | 1 | 桜井 |
| 7 | 原町市 | 鳥井沢B | 3号住居跡 | 隅丸平行四辺形 | 4.76 | 4.55 | 無 | 3 | 桜井 |
| 8 | 原町市 | 鳥井沢B | 8号住居跡 | 隅丸長方形 | 3.3 | 1.6 | 有 | 無 | 中期末？ |
| 9 | 原町市 | 鳥井沢B | 11号住居跡 | 長方形 | | 2.66 | 無 | 1 | 中期末？ |
| 10 | 原町市 | 鳥井沢B | 12号住居跡 | 楕円形 | | 3.34 | 無 | 2 | 中期末？ |
| 11 | 原町市 | 鳥井沢B | 13号住居跡 | 隅丸長方形 | 3.4 | | 無 | 無 | 中期末？ |
| 12 | 原町市 | 長瀞 | 2号住居跡 | 台形 | 3 | 2.5 | 有 | 6 | 桜井 |
| 13 | 原町市 | 長瀞 | 3号住居跡 | 方形 | 4 | 3 | 無 | 1 | 桜井 |
| 14 | 原町市 | 長瀞 | 4号住居跡 | 不整方形 | | | 無 | 無 | 桜井 |
| 15 | 原町市 | 長瀞 | 9号住居跡 | 不整形 | 4.2 | 2.5 | 無 | 3 | 桜井 |
| 16 | 原町市 | 長瀞 | 19号住居跡 | 隅丸長方形 | 5.5 | 3.5 | 有 | 13 | 桜井 |
| 17 | 原町市 | 長瀞 | 22号住居跡 | 不明 | | | 無 | 4 | 桜井 |
| 18 | 双葉町 | 塚ノ腰 | 1号住居跡 | 方形 | 4.3 | 3.8 | 無 | 無 | 桜井 |
| 19 | いわき市 | 上ノ内 | 43号住居跡 | 不整形 | | 3.5 | 有 | 5 | 二ツ釜 |
| 20 | いわき市 | 伊勢林前 | 2号住居跡 | 不整円形 | 1.2 | 1.15 | 有 | 16 | 磨消縄文 |
| 21 | いわき市 | 朝日長者 | 52号住居跡 | 隅丸方形 | 2.6 | 2.58 | 無 | 2 | 大神原 |
| 22 | いわき市 | 龍門寺 | 1号住居跡 | 円形 | 3.86 | | 有 | 3 | 龍門寺 |
| 23 | いわき市 | 龍門寺 | 2号住居跡 | 楕円形 | | 8.8 | 有 | 4 | 龍門寺 |
| 24 | いわき市 | 白岩堀ノ内 | 3号住居跡 | | | | 有 | 2 | 中期末 |
| 25 | いわき市 | 白岩堀ノ内 | 5号住居跡 | 不整楕円 | 3.8 | | 無 | 無 | 中期末 |
| 26 | いわき市 | 白岩堀ノ内 | 6号住居跡 | 不整楕円 | 3.8 | 2.9 | 無 | 3 | 中期末 |
| 27 | いわき市 | 白岩堀ノ内 | 7号住居跡 | 隅丸長方形 | 3.3 | | 無 | 無 | 中期末 |
| 28 | いわき市 | 白岩堀ノ内 | 11号住居跡 | 楕円形 | 4.9 | 4 | 無 | 3 | 中期末 |
| 29 | いわき市 | 白岩堀ノ内 | 16号住居跡 | 楕円形 | 3 | | 無 | 無 | 中期末 |

表2　福島県内弥生時代墓跡検出主要遺跡

| No | 所在地 | 遺跡名 | 円形墓 | 土坑墓 | 土器棺墓 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 会津若松市 | 一ノ堰B | | 112 | | 二ツ釜 | |
| 2 | 会津若松市 | 川原町口 | | 29 | | 南御山2～川原町口 | |
| 3 | 会津若松市 | 墓料 | 18？ | | | 前期～中期 | |
| 4 | 熱塩加納村 | 岩尾 | 1 | | | 前期 | |
| 5 | 西会津町 | 上野尻 | 3 | | | 前期 | |
| 6 | 高郷村 | 上野 | 1 | | | 前期 | |
| 7 | 金山町 | 宮崎 | 10？ | 1 | | 前期～中期前半 | |
| 8 | 只見町 | 窪田 | 13 | | | 前期～中期前半 | |
| 9 | 福島市 | 青柳 | 1 | | | 中期前半 | |
| 10 | 霊山町 | 武ノ内 | 7 | | | 前期～中期前半 | |
| 11 | 霊山町 | 根古屋 | 25 | 2 | | 前期～中期前半 | |
| 12 | 大玉村 | 下高野 | | 2 | | 川原町口 | |
| 13 | 本宮町 | 舞治 | | 15 | 1 | 二ツ釜 | |
| 14 | 郡山市 | 福良沢 | | 4 | 1 | 川原町口 | |
| 15 | 郡山市 | 柏山 | | 10 | | 南御山2～二ツ釜 | |
| 16 | 郡山市 | 桜木 | | | 1 | 二ツ釜 | 畑畝土器 |
| 17 | 郡山市 | 上納豆内 | | | 1 | 川原町口 | |
| 18 | 須賀川市 | 七取場B | | | | 南御山2 | |
| 19 | 須賀川市 | 大久保A | | 3 | | 二ツ釜 | |
| 20 | 鏡石町 | 笹池上 | | 4 | | 南御山2 | |
| 21 | 石川町 | 鳥内 | 25 | | | 前期～中期前半 | |
| 22 | 新地町 | 向田G | | | 1 | 桜井 | 畑畝土器 |
| 23 | 新地町 | 武井E | | | 2 | 桜井 | 畑畝土器 |
| 24 | 相馬市 | 藤金塚 | 1？ | | | 前期 | |
| 25 | 鹿島町 | 南入A | | | 1 | 桜井 | 畑畝土器 |
| 26 | 原町市 | 長瀞 | | | 1 | 桜井 | 畑畝土器 |
| 27 | 楢葉町 | 天神原 | | 48 | 32 | 天神原 | |
| 28 | いわき市 | 大畑遺跡G地点 | | | 1 | 中期後半 | |
| 29 | いわき市 | 上ノ内 | | 1 | 8 | 中期後半 | |
| 30 | いわき市 | 龍門寺 | | 1 | | 龍門寺 | |
| 31 | いわき市 | 白岩堀ノ内 | | | 4 | 中期末 | 畑畝土器 |

表3　土器観察一覧

単位：口径・底径・器高（cm），遺存率（%）

| 挿図番号 | 写真№ | 出土位置 | 名　称 | 口径 | 底径 | 器高 | 遺存率 | 器面の特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第3図21 | | 1号住居跡 | 弥生土器鉢 | | 4 | 3.1 | 5 | |
| 第7図3 | | 3号住居跡 | 弥生土器高坏 | | | 2.7 | 10 | |
| 第7図4 | 42 | 3号住居跡 | 弥生土器深鉢 | 18.7 | | 8.4 | 5 | |
| 第7図5 | 42 | 3号住居跡 | 弥生土器壺 | 10.4 | | 4.8 | 5 | |
| 第7図6 | | 3号住居跡 | 弥生土器鉢 | | 6.6 | 2 | 5 | |
| 第7図7 | 42 | 3号住居跡 | 弥生土器鉢 | | 6.4 | 2.4 | 5 | |
| 第7図8 | 42 | 3号住居跡 | 弥生土器深鉢 | 27.2 | | 9.4 | 5 | 条痕 |
| 第7図9 | | 3号住居跡 | 弥生土器甕 | 32.6 | | 18.1 | 15 | 条痕 |
| 第8図1 | | 3号住居跡 | 弥生土器皿 | | 7 | 3.7 | 2 | |
| 第8図2 | | 3号住居跡 | 弥生土器壺 | | 7.8 | 1.5 | 2 | |
| 第8図3 | | 3号住居跡 | 弥生土器甕 | | 7.5 | 2.2 | 5 | 木葉痕 |
| 第8図4 | | 3号住居跡 | 弥生土器甕 | | 7 | 2.3 | 2 | |
| 第8図5 | | 3号住居跡 | 弥生土器甕 | | 9.4 | 1.3 | 5 | |
| 第8図6 | | 3号住居跡 | 弥生土器鉢 | | 9 | 1.6 | 2 | 木葉痕 |
| 第12図1 | 45 | 5号住居跡 | 弥生土器鉢 | 16.2 | 7.4 | 15.5 | 20 | 磨消縄文 |
| 第12図2 | 45 | 5号住居跡 | 弥生土器鉢or甕 | | 8 | 1.3 | 5 | 木葉痕 |
| 第12図3 | 45 | 5号住居跡 | 弥生土器鉢or甕 | | 10 | 1.7 | 10 | 木葉痕 |
| 第12図4 | | 5号住居跡 | 弥生土器鉢or甕 | | 11.5 | 3.2 | 5 | 木葉痕 |
| 第15図11 | | 6号住居跡 | 弥生土器鉢or甕 | | 9.4 | 1.7 | 3 | |
| 第17図10 | 48 | 7号住居跡 | 弥生土器片円盤 | 4 | | | 100 | |
| 第17図11 | 48 | 7号住居跡 | 弥生土器舟形土器 | 12.3 | | 4.4 | 95 | |
| 第17図12 | 48 | 7号住居跡 | 弥生土器舟形土器 | | | 3 | 25 | |
| 第17図13 | 48 | 7号住居跡 | 弥生土器壺 | | 8 | 2.3 | 2 | |
| 第17図14 | 48 | 7号住居跡 | 弥生土器壺 | | 7.8 | 2.3 | 3 | 木葉痕 |
| 第18図1 | | 7号住居跡 | 弥生土器鉢 | | 6.4 | 10.5 | 10 | |
| 第18図2 | | 7号住居跡 | 弥生土器鉢 | | 6 | 3.1 | 5 | 木葉痕 |
| 第18図3 | | 7号住居跡 | 弥生土器壺 | | 5.4 | 1.4 | 10 | |
| 第18図4 | | 7号住居跡 | 弥生土器鉢 | | 5 | 1.6 | 5 | 木葉痕 |
| 第18図5 | | 7号住居跡 | 弥生土器壺 | | 5.6 | 2.3 | 5 | 木葉痕 |
| 第18図6 | | 7号住居跡 | 弥生土器壺 | | 7.1 | 1.9 | 2 | 布目痕 |
| 第18図7 | 49 | 7号住居跡 | 弥生土器甕 | | 8 | 1.1 | 5 | 木葉痕 |
| 第18図8 | | 7号住居跡 | 弥生土器鉢 | | 5 | 2.1 | 5 | |
| 第18図9 | | 7号住居跡 | 弥生土器鉢 | | 8 | 3.1 | 5 | |
| 第18図10 | 49 | 7号住居跡 | 弥生土器壺 | | 7.2 | 2.6 | 2 | |
| 第18図11 | | 7号住居跡 | 弥生土器壺 | | 8.4 | 1.8 | 3 | |
| 第18図12 | 49 | 7号住居跡 | 弥生土器甕 | | 10 | 1.5 | 5 | 布目痕 |
| 第18図13 | 49 | 7号住居跡 | 弥生土器甕 | | 30.6 | 14 | 50 | |
| 第18図14 | | 7号住居跡 | 弥生土器甕 | | 10.4 | 4.9 | 5 | |
| 第19図1 | | 7号住居跡 | 弥生土器壺or鉢 | | 8.7 | 9.5 | 5 | 布目痕 |
| 第19図2 | | 7号住居跡 | 弥生土器壺 | | 10.7 | 6.7 | 3 | 布目痕 |
| 第23図1 | 53 | 8号住居跡 | 弥生土器甕 | | 9 | 2.4 | 3 | |
| 第23図2 | 53 | 8号住居跡 | 弥生土器壺 | | 7.8 | 1.9 | 2 | 附加条縄文 |
| 第23図3 | 53 | 8号住居跡 | 弥生土器甕 | | 6.6 | 1 | 3 | 木葉痕 |
| 第25図3 | | 9号住居跡 | 須恵器長頸瓶 | | | 3.8 | 5 | |
| 第25図4 | | 9号住居跡 | 弥生土器壺or鉢 | | 6.4 | 2.3 | 5 | 木葉痕 |

| 挿図番号 | 写真No. | 出土位置 | 名　称 | 口　径 | 底　径 | 器　高 | 遺存率 | 器　面　の　特　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第25図 5 | | 9号住居跡 | 弥生土器壺or鉢 | | 6 | 2.4 | 2 | 布目痕 |
| 第25図 6 | | 9号住居跡 | 弥生土器甕 | | 13.4 | 2.7 | 5 | 布目痕 |
| 第25図 7 | | 9号住居跡 | 弥生土器甕 | | 8 | 2.8 | 5 | |
| 第27図 2 | | 10号住居跡 | 弥生土器壺or鉢 | | 7.4 | 2.2 | 3 | |
| 第27図 3 | | 10号住居跡 | 弥生土器鉢 | | 5.8 | 4 | 5 | 布目痕，附加条縄文 |
| 第29図 4 | 55 | 11号住居跡 | 弥生土器壺or鉢 | | 6 | 2.8 | 2 | 木葉痕 |
| 第31図 2 | | 12号住居跡 | 弥生土器高坏 | | | 1.7 | 5 | |
| 第35図 5 | | 15号住居跡 | 弥生土器壺 | | 7 | 1 | 2 | 木葉痕 |
| 第37図 1 | 57 | 1号土器棺墓 | 弥生土器甕 | 22 | 8.5 | 23.3 | 30 | 布目痕，附加条縄文 |
| 第37図 2 | 57 | 1号土器棺墓 | 弥生土器壺 | | | 33.5 | 70 | 附加条縄文 |
| 第38図 1 | 58 | 2号土器棺墓 | 弥生土器甕 | 39.2 | | 19.5 | 60 | 附加条縄文 |
| 第38図 2 | 58 | 2号土器棺墓 | 弥生土器甕 | | 10.4 | 30.4 | 70 | |
| 第39図 1 | 59 | 3号土器棺墓 | 弥生土器甕 | 22.8 | 9.8 | 25.8 | 40 | 附加条縄文 |
| 第40図 1 | 59 | 3号土器棺墓 | 弥生土器壺 | 14.6 | 12.2 | 57 | 95 | 満文，貼り瘤，朱彩 |
| 第45図14 | 60 | 7号土坑 | 弥生土器深鉢 | 20 | | 10 | 10 | 変形工字文 |
| 第46図 3 | 61 | 9号土坑 | 弥生土器鉢 | 22 | | 12.9 | 15 | 輪積み痕 |
| 第47図14 | 62 | 10号土坑 | 弥生土器甕 | 28 | | 24.2 | 15 | 条痕 |
| 第48図 5 | 62 | 15号土坑 | 土師器甕 | | 9.4 | 11.5 | 30 | 木葉痕，ヘラケズリ，ヘラナデ |
| 第48図17 | | 27号土坑 | 弥生土器蓋 | | 6.9 | 2.9 | 5 | |
| 第48図20 | | 31号土坑 | 弥生土器甕 | | 10 | 2.1 | 3 | 布目痕 |
| 第50図 5 | | 1号特殊遺構 | 土師器筒形土器 | | 10.2 | 9.3 | 50 | |
| 第50図 6 | | 1号特殊遺構 | 土師器筒形土器 | | 10.6 | 2.3 | 5 | |
| 第50図 7 | 63 | 1号特殊遺構 | 土師器筒形土器 | 10 | 10.8 | 12.4 | 60 | |
| 第50図 8 | | 1号特殊遺構 | 土師器筒形土器 | | 10.7 | 4.8 | 20 | |
| 第50図 9 | | 1号特殊遺構 | 土師器杯 | | | 6 | 20 | ヘラミガキ |
| 第61図 1 | 65 | H 4 －55 | 弥生土器鉢 | | 12 | 4 | 10 | 変形工字文 |
| 第61図 2 | 65 | H 4 －55 | 弥生土器高坏 | | 5.1 | 1.8 | 10 | 平行沈線 |
| 第61図 3 | 65 | H 4 －68 | 弥生土器高坏 | | | 2.8 | 10 | |
| 第61図 4 | 65 | H 4 －88 | 弥生土器高坏 | | | 3.3 | 3 | ミガキ |
| 第61図 5 | 66 | H 4 －54 | 弥生土器壺or鉢 | | 6.2 | 5.4 | 3 | 布目痕 |
| 第61図 6 | 67 | H 4 －78 | 弥生土器壺or鉢 | | | 9.8 | 30 | 波状文 |
| 第61図 7 | 65 | H 4 －68 | 弥生土器壺 | | 12.2 | 4.8 | 3 | ヘラケズリ |
| 第61図 8 | 65 | H 4 －78 | 弥生土器深鉢 | 26 | | 5 | 3 | |
| 第61図 9 | 65 | H 4 －55 | 弥生土器鉢 | | 6 | 1.8 | 7 | 沈線文 |
| 第61図10 | 66 | H 4 －88 | 弥生土器鉢 | | 7.2 | 1.7 | 5 | 平行沈線 |
| 第61図11 | 65 | H 4 －79 | 弥生土器壺or鉢 | | 5 | 1.1 | 5 | |
| 第61図12 | 66 | H 4 －55 | 弥生土器壺 | | 5.8 | 1.9 | 3 | 条痕 |
| 第61図13 | 66 | H 4 －79 | 弥生土器甕 | | 7.3 | 3.2 | 5 | 布目痕 |
| 第61図14 | 66 | H 4 －55 | 弥生土器壺 | | 7 | 2.5 | 3 | 木葉痕 |
| 第61図15 | 66 | H 4 －55 | 弥生土器壺 | | 5.8 | 5.2 | 3 | |
| 第61図16 | 66 | H 4 －78 | 弥生土器甕 | | 7.4 | 3.4 | 3 | |
| 第61図17 | 66 | H 4 －79 | 弥生土器壺or鉢 | | 6.4 | 2.6 | 2 | |
| 第61図18 | 66 | H 4 －54 | 弥生土器壺or鉢 | | 6.2 | 5.4 | 3 | 布目痕 |
| 第62図 1 | 67 | H 4 －64 | 弥生土器甕 | 33 | | 3.9 | 2 | キザミ，列点文，ハケメ |
| 第62図 2 | | H 4 －79 | 弥生土器壺 | 9.8 | | 20.5 | 30 | 沈線 |
| 第62図 3 | 67 | H 4 －79 | 弥生土器壺 | | 12.2 | 27.3 | 60 | |
| 第63図 1 | 68 | H 4 －54 | 弥生土器甕 | | 7.4 | 1.7 | 4 | 木葉痕 |
| 第63図 2 | 68 | H 4 －56 | 弥生土器壺 | | 8.2 | 2.2 | 2 | 木葉痕 |

| 挿図番号 | 写真No. | 出土位置 | 名　称 | 口　径 | 底　径 | 器　高 | 遺存率 | 器　面　の　特　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第63図 3 | 68 | H 4－55 | 弥生土器鉢 | | 7 | 3 | 5 | 木葉痕条痕 |
| 第63図 4 | 68 | H 4－55 | 弥生土器甕 | | 10.3 | 4.4 | 5 | 布目痕 |
| 第63図 5 | 68 | H 4－77 | 弥生土器壺 | | 10.6 | 2.4 | 2 | 布目痕 |
| 第63図 6 | 68 | H 4－95 | 弥生土器甕 | | 8 | 2 | 2 | 布目痕 |
| 第63図 7 | 68 | H 4－78 | 弥生土器甕 | | 11.4 | 3.2 | 2 | 布目痕 |
| 第63図 8 | 68 | H 4－79 | 弥生土器甕 | | 10.2 | 1.4 | 3 | 木葉痕 |
| 第63図 9 | 68 | H 4－78 | 弥生土器甕 | | 10.2 | 2.6 | 2 | 木葉痕 |
| 第63図10 | 68 | H 4－79 | 弥生土器甕 | | 10.8 | 1.1 | 3 | 木葉痕 |
| 第64図 1 | 69 | H 4－54 | 弥生土器甕 | | 9.2 | 1.6 | 3 | 木葉痕 |
| 第64図 2 | 69 | H 4－55 | 弥生土器壺 | | 8.6 | 4.3 | 3 | 木葉痕 |
| 第64図 3 | 69 | H 4－67 | 弥生土器甕 | | 10.9 | 3.9 | 2 | |
| 第64図 4 | 69 | H 4－64 | 弥生土器甕 | | 12 | 3.5 | 2 | 附加条縄文 |
| 第64図 5 | 69 | H 4－77 | 弥生土器壺 | | 10 | 6.1 | 3 | 附加条縄文 |
| 第64図 6 | 69 | H 4－53 | 弥生土器甕 | | 12.3 | 5.1 | 3 | 附加条縄文 |
| 第64図 7 | 69 | H 4－55 | 弥生土器甕 | | 11.2 | 4.6 | 3 | 布目痕 |
| 第64図 8 | | H 4－67 | 土師器杯 | | 6.8 | 1.4 | 10 | ヘラミガキ，内面黒色処理 |
| 第64図 9 | | H 4－55 | 土師器杯 | | 7.1 | 1.3 | 5 | ヘラミガキ，内面黒色処理 |
| 第64図10 | | H 4－64 | 土師器杯 | | 6.8 | 1.7 | 4 | ヘラミガキ，内面黒色処理 |
| 第64図11 | 69 | H 4－65 | 土師器甕 | | 11.2 | 1.7 | 3 | 木葉痕，ヘラケズリ，ナデ |
| 第64図12 | 69 | H 4－44 | 性格不明土製品 | | 11.2 | 1.7 | 3 | 木葉痕，ヘラケズリ，ナデ |
| 第64図13 | 69 | H 4－56 | 性格不明土製品 | | | 5.5 | | |
| 第64図14 | 69 | H 4－55 | 性格不明土製品 | | | 2.1 | 90 | |
| 第74図 1 | | H 4－48 | 弥生土器台付鉢 | | | 3.1 | 10 | |
| 第74図 2 | 87 | 表採 | 弥生土器鉢 | | 6.2 | 1.5 | 10 | 平行沈線 |
| 第74図 3 | 87 | 表採 | 弥生土器壺or鉢 | | 5.4 | 0.8 | 5 | 沈線 |
| 第74図 4 | 86 | H 4－100 | 弥生土器小型壺 | 6.8 | 7 | 12.8 | 80 | 附加条縄文，布目痕 |
| 第74図 6 | 86 | H 4－100 | 弥生土器壺 | | 6.7 | 2 | 5 | 木葉痕 |
| 第74図 7 | 86 | I 4－93 | 弥生土器壺 | | 6.9 | 2 | 5 | 木葉痕 |
| 第74図 8 | 86 | I 4－51 | 弥生土器壺 | | 8 | 1.3 | 2 | 木葉痕 |
| 第74図 9 | | I 4－51 | 弥生土器甕 | | 8 | 1.5 | 5 | 木葉痕 |
| 第74図10 | 86 | H 3－85 | 弥生土器壺 | | 8 | 1.9 | 4 | 布目痕 |
| 第74図11 | | H 3－83 | 弥生土器甕 | | 9.4 | 2.1 | 5 | 布目痕 |
| 第74図12 | | H 4－40 | 弥生土器甕 | | 6.2 | 1.5 | 2 | ケズリ |
| 第74図13 | | H 4－31 | 弥生土器甕 | | 9.6 | 1.4 | 2 | ケズリ |
| 第74図14 | | H 3－75 | 弥生土器甕 | | 9.4 | 1.6 | 3 | |
| 第74図15 | | I 4－22 | 弥生土器小型土器 | | 5.3 | 1.6 | 50 | |
| 第74図16 | | H 4－29 | 弥生土器壺or鉢 | | 5.9 | 2 | 2 | |
| 第75図 1 | | I 4－85 | 弥生土器壺 | | 10.2 | 2.8 | 5 | 布目痕，附加条縄文 |
| 第75図 2 | | H 4－40 | 弥生土器甕 | | 10.5 | 5.5 | 2 | 布目痕 |
| 第75図 3 | | H 4－95 | 弥生土器壺 | | 7.4 | 4.2 | 5 | 布目痕 |
| 第75図 4 | | I 4－52 | 弥生土器甕 | | 10 | 3.8 | 2 | 木葉痕，附加条縄文 |
| 第75図 5 | | I 4－72 | 弥生土器壺 | | 5.8 | 3 | 2 | 木葉痕，附加条縄文 |
| 第75図 6 | | 表採 | 弥生土器甕 | | 7.4 | 2.7 | 2 | 布目痕 |
| 第75図 7 | | I 4－3 | 弥生土器甕 | | 9.4 | 2.9 | 2 | 布目痕 |
| 第75図 8 | | H 4－90 | 弥生土器壺 | | 4.9 | 8.5 | 10 | |
| 第75図 9 | | I 4－74 | 弥生土器甕 | | 8.4 | 5 | 3 | 附加条縄文 |
| 第75図10 | | H 4－51 | 弥生土器壺 | | 9.4 | 3.4 | 2 | 附加条縄文 |
| 第75図11 | | H 4－22 | 弥生土器甕 | | 10.1 | 8.2 | 2 | 附加条縄文 |

| 挿図番号 | 写真No. | 出土位置 | 名　称 | 口　径 | 底　径 | 器　高 | 遺存率 | 器　面　の　特　徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第75図12 | | 表採 | 弥生土器壺 | | 9.4 | 3 | 3 | 条痕 |
| 第76図 1 | | H 3－86 | 土師器高坏 | | | 4.3 | 20 | 朱彩 |
| 第76図 2 | | 表採 | 土師器杯 | | 6.8 | 1 | 10 | ヘラミガキ，内面黒色処理 |
| 第76図 3 | | I 4－84 | 土師器杯 | | 8 | 1.2 | 5 | ヘラミガキ，内面黒色処理 |
| 第76図 4 | | I 4－73 | 土師器杯 | | 6 | 1.3 | 5 | ヘラミガキ，内面黒色処理 |
| 第76図 5 | | I 4－84 | 土師器杯 | | 8.2 | 0.8 | 5 | ヘラミガキ，内面黒色処理 |
| 第76図 6 | | I 5－93 | 土師器高台杯 | | 8 | 1.7 | 10 | ヘラミガキ，内面黒色処理 |
| 第76図 7 | | I 4－94 | 土師器甕 | | 8.3 | 2.9 | 2 | ヘラケズリ |
| 第76図 8 | | 表採 | 土師器甕 | | 8 | 4.2 | 2 | ヘラケズリ・木葉痕 |
| 第76図 9 | | I 4－73 | 土師器甕 | | 9.2 | 4 | 3 | ヘラケズリ，ナデ |
| 第76図10 | | I 4－13 | 土師器甕 | | 8.8 | 3.9 | 5 | 木葉痕 |

表4　石器観察一覧

単位：最大長・最大幅・最大厚（cm），重量（g）

| 挿図No. | 写真No. | 出土位置 | 器　種 | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重　量 | 石　質 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第5図1 | | 2号住居跡 | 不定形石器 | 2.5 | 1 | 0.5 | 1.4 | 流紋岩 |
| 第7図1 | | 3号住居跡 | 石核 | 2 | 2 | 0.8 | 2.9 | 流紋岩？ |
| 第7図2 | | 4号住居跡 | 石核 | 8.3 | 8 | 5.1 | 441.0 | 珪質岩 |
| 第17図1 | 47 | 7号住居跡 | 石鏃 | 2.3 | 1.2 | 0.4 | 1.7 | 珪質岩 |
| 第17図2 | 47 | 7号住居跡 | 異形石器 | 2.55 | 1.5 | 0.5 | 2.7 | 流紋岩 |
| 第17図3 | 47 | 7号住居跡 | 石鏃 | 2.7 | 2 | 0.5 | 2.7 | 珪質岩 |
| 第17図4 | 47 | 7号住居跡 | 不定形石器 | 3.3 | 2.5 | 1.3 | 9.3 | 流紋岩 |
| 第17図5 | 47 | 7号住居跡 | 不定形石器 | 4.35 | 1.4 | 0.8 | 3.6 | 流紋岩 |
| 第17図6 | 47 | 7号住居跡 | 不定形石器 | 5.3 | 2 | 1.8 | 12.2 | 流紋岩 |
| 第17図7 | 47 | 7号住居跡 | スクレイパー | 5.5 | 4.4 | 1.2 | 23.6 | 流紋岩 |
| 第17図8 | 47 | 7号住居跡 | スクレイパー | 8.9 | 5.1 | 1.5 | 55.0 | 流紋岩 |
| 第17図9 | 47 | 7号住居跡 | スクレイパー | 7.7 | 5.9 | 1.5 | 51.9 | 流紋岩 |
| 第25図1 | | 9号住居跡 | 使用痕のある剥片 | 3 | 3.25 | 1.1 | 7.4 | 流紋岩 |
| 第25図2 | | 9号住居跡 | 使用痕のある剥片 | 2.75 | 2.2 | 0.8 | 3.2 | 珪質岩 |
| 第27図1 | | 10号住居跡 | 磨石 | 5.7 | 6.3 | 4.5 | 260 | 細粒花崗岩 |
| 第29図1 | | 11号住居跡 | 使用痕のある剥片 | 5.55 | 4.3 | 2.3 | 45.3 | 珪質岩 |
| 第29図2 | | 11号住居跡 | 石鏃 | 1.5 | 1.1 | 0.3 | 0.3 | 流紋岩 |
| 第31図1 | | 12号住居跡 | 石鏃 | 1.9 | 1.1 | 0.55 | 1.0 | 流紋岩 |
| 第48図21 | | 35号土坑 | 磨石 | 11.1 | 7.7 | 4.7 | 600.0 | 緑色片岩？ |
| 第48図9 | | 21号土坑 | 石鏃 | 2.4 | 1.7 | 0.5 | 1.5 | 凝灰質頁岩 |
| 第53図1 | 83 | 4号特殊遺構 | 石皿 | 16.3 | 12.9 | 4.2 | 900.0 | 砂質変成岩 |
| 第72図1 | 83 | H 4－47 L Ⅱ | 石鏃 | 1.6 | 1.1 | 0.4 | 0.6 | 流紋岩 |
| 第72図2 | 83 | H 4－54 L Ⅲ | 石鏃 | 1.6 | 1.1 | 0.4 | 0.6 | 流紋岩 |
| 第72図3 | 83 | H 4－55 L Ⅱ | 石鏃 | 1.8 | 1.5 | 0.4 | 1.0 | 流紋岩 |
| 第72図4 | 83 | H 4－65 L Ⅱ | 石鏃 | 1.8 | 1.1 | 0.3 | 0.6 | 流紋岩 |
| 第72図5 | 83 | H 4－54 L Ⅱ | 石鏃 | 3 | 1.6 | 0.8 | 2.5 | 流紋岩？ |
| 第72図6 | 83 | H 4－77 L Ⅱ | 石鏃 | 4.1 | 1 | 0.7 | 2.8 | 流紋岩 |
| 第72図7 | 83 | H 4－55 L Ⅲ | 使用痕のある剥片 | 2.6 | 1.5 | 0.7 | 1.3 | 流紋岩 |
| 第72図8 | 83 | H 4－54 L Ⅲ | 使用痕のある剥片 | 2.6 | 1.9 | 0.4 | 2.2 | 珪質岩 |
| 第72図9 | 83 | H 4－54 L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 2.6 | 1.7 | 0.7 | 3.7 | 泥岩 |
| 第72図10 | 83 | H 4－86 L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 3.2 | 2.7 | 0.5 | 3.7 | 珪質岩 |
| 第72図11 | 83 | H 4－55 L Ⅲ | 使用痕のある剥片 | 3.2 | 2.1 | 11 | 4.4 | 流紋岩 |
| 第72図12 | 84 | H 4－68 L Ⅲ | 用途不明石器 | 2.5 | 2.1 | 1.7 | 17.7 | 滑石？ |

| 挿図No | 写真No | 出土位置 | 器種 | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重量 | 石質 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第72図13 | 83 | H4－64L Ⅲ | 使用痕のある剥片 | 3.4 | 2.8 | 1.1 | 9.1 | 流紋岩 |
| 第72図14 | 83 | H4－77L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 3.9 | 2.3 | 1.1 | 7.3 | 流紋岩 |
| 第72図15 | 84 | H4－88L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 5.8 | 3.4 | 1.2 | 12.5 | 流紋岩 |
| 第72図16 | 84 | H4－56L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 5.1 | 4.7 | 1.5 | 34.5 | 流紋岩 |
| 第72図17 | 84 | H4－78L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 5.9 | 4.4 | 1.7 | 37.1 | 流紋岩 |
| 第72図18 | 84 | H4－54L Ⅱ | 打製石斧 | 5.4 | 5.5 | 5.1 | 80.2 | 中粒砂岩 |
| 第72図19 | 84 | H4－54L Ⅱ | 礫器 | 5.4 | 4.3 | 1.9 | 71.2 | 泥岩？ |
| 第72図20 | 84 | H4－55L Ⅲ | 打製石斧 | 9.1 | 5.2 | 2 | 142.9 | 緑色片岩 |
| 第73図 1 | 85 | H4－55L Ⅲ | 太型蛤刃石斧 | 5.4 | 6 | 3.3 | 150.0 | 花崗閃緑斑岩 |
| 第73図 2 | 85 | H4－55L Ⅲ | 打製石斧 | 10.2 | 5.9 | 3.9 | 300.0 | ？ |
| 第73図 3 | | H4－64L Ⅲ | 敲石 | 11.2 | 4.3 | 3.4 | 270.6 | 角内岩片岩 |
| 第73図 4 | 85 | H4－55L Ⅲ | 敲石 | 9.3 | 8.15 | 4.5 | 410.0 | 細粒花崗岩 |
| 第73図 5 | 85 | H4－55L Ⅲ | 敲石 | 12.5 | 8.8 | 5.9 | 1,000.0 | 細粒花崗岩 |
| 第73図 6 | 85 | H4－53L Ⅱ | 敲石 | 11.3 | 11.9 | 3.4 | 700.0 | 花崗閃緑岩 |
| 第73図 7 | 85 | H4－79L Ⅲ | 磨石 | 8.3 | 7.3 | 3.2 | 250.0 | 花崗閃緑岩 |
| 第73図 8 | 85 | H4－64L Ⅲ | 石斧 | 10.95 | 6.1 | 4 | 450.0 | 花崗閃緑斑岩 |
| 第80図10 | 90 | 表採 | 石匙 | 8.9 | 2.4 | 1.2 | 25.5 | 凝灰質頁岩 |
| 第80図11 | 89 | H3－76L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 4.2 | 2.9 | 0.65 | 5.8 | 流紋岩 |
| 第80図12 | 90 | H4－42L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 4.3 | 2.4 | 1.2 | 13.2 | 珪質岩 |
| 第80図13 | | H4－49L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 2.6 | 2.7 | 11 | 8.8 | 珪質岩 |
| 第80図14 | 90 | H4－12L Ⅱ | スクレイパー | 4.6 | 4.8 | 1.7 | 24.0 | 流紋岩 |
| 第80図15 | 90 | 表採 | スクレイパー | 3.8 | 5.3 | 1.5 | 25.2 | 流紋岩 |
| 第80図16 | 90 | I4－72L Ⅱ | スクレイパー | 5.3 | 5.9 | 0.9 | 26.3 | 流紋岩 |
| 第80図17 | 90 | H4－70L Ⅱ | 不定形石器 | 3.9 | 3.8 | 1.6 | 17.5 | 流紋岩 |
| 第80図18 | 90 | H4－60L Ⅱ | スクレイパー | 6.9 | 5.6 | 1.5 | 61.6 | 流紋岩 |
| 第80図19 | 90 | I4－21L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 6.3 | 6.1 | 1.6 | 53.8 | 流紋岩 |
| 第80図 2 | 89 | H3－85L Ⅱ | 石鏃 | 1.8 | 1.5 | 0.4 | 0.7 | 流紋岩？ |
| 第80図 3 | 89 | H3－95L Ⅱ | 石鏃 | 1.8 | 0.85 | 0.4 | 0.4 | 流紋岩 |
| 第80図 4 | 89 | 表採 | 石鏃 | 3.3 | 1.3 | 0.5 | 1.8 | 砂質泥岩 |
| 第80図 5 | 89 | G3－39L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 2.4 | 2.3 | 0.4 | 1.8 | 粘板岩 |
| 第80図 6 | 89 | H4－70L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 1.4 | 1.5 | 0.3 | 0.7 | 流紋岩 |
| 第80図 7 | 89 | I4－51L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 2.7 | 1.1 | 0.7 | 1.4 | 流紋岩 |
| 第80図 8 | 89 | 表採 | 使用痕のある剥片 | 3.5 | 2 | 1 | 4.9 | 流紋岩 |
| 第80図 9 | | I4－93L Ⅱ | 使用痕のある剥片 | 3.5 | 2.2 | 0.6 | 3.2 | 珪質岩 |
| 第81図 1 | 91 | 表採 | 使用痕のある剥片 | 5.8 | 6.7 | 1.5 | 43.7 | 流紋岩 |
| 第81図 2 | 91 | I4－15L Ⅱ | 打製石斧 | 7.6 | 4.2 | 2 | 65.3 | 泥岩 |
| 第81図 3 | 91 | H4－4L Ⅱ | 不定形石器 | 9.7 | 5 | 2.1 | 97.6 | 泥岩 |
| 第81図 4 | 91 | 表採 | 扁平片刃石斧 | 7.2 | 4.2 | 1.9 | 80.4 | 緑色片岩 |
| 第81図 5 | 91 | I4－14L Ⅱ | 扁平片刃石斧 | 6 | 3 | 1.2 | 25.0 | 泥岩 |
| 第81図 6 | 91 | I4－93L Ⅱ | 扁平片刃石斧 | 6.4 | 3.1 | 1.4 | 37.8 | 泥岩 |
| 第81図 7 | 91 | H3－85L Ⅱ | 扁平片刃石斧 | 6.9 | 3.4 | 1.11 | 33.2 | 泥岩 |
| 第81図 8 | 91 | H3－86L Ⅱ | 扁平片刃石斧 | 6.8 | 4 | 1.6 | 46.0 | 泥岩 |
| 第81図 9 | 91 | I4－93L Ⅱ | 扁平片刃石斧 | 6.5 | 3.7 | 1.5 | 45.8 | 泥岩 |
| 第82図 1 | 92 | I4－82L Ⅱ | 扁平片刃石斧 | 8.7 | 4.9 | 3.4 | 125.0 | 泥岩？ |
| 第82図 2 | 92 | H4－41L Ⅱ | 扁平片刃石斧 | 9.4 | 4.1 | 1.9 | 107.7 | 泥岩 |
| 第82図 3 | 92 | H4－4L Ⅱ | 打製石斧 | 11 | 4.1 | 1.9 | 141.7 | 花崗閃緑斑岩？ |
| 第82図 4 | 92 | 表採 | 打製石斧 | 7.4 | 5.3 | 3.3 | 107.1 | 流紋岩 |
| 第82図 8 | 92 | H4－28L Ⅱ | 石核 | 5.8 | 3.8 | 2.9 | 73.5 | 泥岩 |

| 挿図No. | 写真No. | 出土位置 | 器種 | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重量 | 石質 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第82図6 | | H4－25L Ⅱ | 磨製石斧 | 12.3 | 5.2 | 3 | 322.3 | 花崗閃緑斑岩？ |
| 第83図1 | 92 | H4－15L Ⅰ | 礫石 | 10 | 3.8 | 1.6 | 83.4 | 細粒花崗岩？ |
| 第83図2 | 93 | H4－49L Ⅱ | 礫石 | 3.6 | 3.6 | 2.6 | 45.2 | ？ |
| 第83図3 | 93 | H3－98L Ⅱ | 石核 | 10.9 | 8.1 | 3.6 | 328.8 | 流紋岩 |
| 第83図4 | 93 | 表採 | 石核 | 10 | 9.1 | 3.5 | 400.9 | 流紋岩 |
| 第83図5 | 93 | I4－72L Ⅱ | 石核 | 6.4 | 9.2 | 1.8 | 109.1 | 流紋岩 |
| 第84図1 | 94 | I5－93L Ⅱ | 磨・凹石 | 8.3 | 10.5 | 4.6 | 525.0 | 細粒花崗岩 |
| 第84図2 | 94 | 表採 | 磨・凹石 | 7.2 | 6.8 | 3.5 | 250.0 | 細粒花崗岩 |
| 第84図3 | | H4－70L Ⅱ | 敲石 | 13.7 | 6.2 | 3.6 | 415.0 | 細粒花崗岩 |
| 第84図4 | 94 | H4－38L Ⅱ | 磨・凹石 | 7.6 | 6.3 | 5.5 | 400.0 | 細粒凝灰岩 |
| 第84図5 | 94 | H4－31L Ⅱ | 磨石 | 7.75 | 7.5 | 4.5 | 325.0 | 花崗閃緑岩 |
| 第84図6 | | 表採 | 磨石 | 12.2 | 9 | 3 | 525.0 | 細粒花崗岩 |
| 第84図7 | | 表採 | 磨石 | 12.2 | 6.8 | 2.8 | 320.0 | 花崗閃緑岩？ |
| 第84図8 | | 表採 | 磨石 | 14.5 | 8.8 | 3.5 | 710.0 | 花崗閃緑岩 |
| 第84図9 | 94 | H4－31L Ⅱ | 磨石 | 9.2 | 7.6 | 4.1 | 360.0 | 細粒花崗岩 |
| 第84図10 | 94 | H4－21L Ⅱ下 | 磨石 | 12.5 | 10.6 | 4.3 | 800.0 | 細粒花崗岩 |
| 第84図11 | | H4－42L Ⅰ | 磨石 | 10.7 | 9.8 | 4.6 | 610.0 | 花崗閃緑岩 |

## 参考文献


中村五郎・穴沢和光1958「福島県川原町口遺跡について」『古代学研究』19

小滝利意　1960『今和泉－福島県北会津郡北会津村和泉遺跡出土の弥生式土器』　会津史談会

杉原荘介　1968「福島県成田における小竪穴と出土土器」　『考古学集刊』第4巻第2号

志間泰治　1971『鰕沼遺跡』　東北電力株式会社宮城支店

馬目順一他　1972『伊勢林前遺跡』　福島県いわき市教育委員会

中村五郎　1976「東北地方南部の弥生土器編年」『東北考古学の諸問題』

馬目順一他　1980『八鰐台遺跡』福島県いわき市教育委員会

木本元治他　1980「孫六橋遺跡」『東北新幹線関連遺跡調査報告Ⅱ』　福島県教育委員会

鈴木重美他　1981『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡』　福島県いわき市教育委員会

馬目順一他　1982『楢葉天神原弥生遺跡の研究』　楢葉町教育委員会

加藤道男　1982『青木畑遺跡』　宮城県教育委員会

芳賀英一他　1982「牡丹平遺跡」『阿武隈中部地区遺跡分布調査（Ⅲ）』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター

長島雄一他　1982「土取場塚群・土取場B遺跡」『阿武隈中部地区遺跡分布調査（Ⅱ）』福島県教育委会・財団法人福島県文化センター

馬目順一　1983「東北南部」『弥生土器Ⅱ』

猪狩忠雄他　1985『龍門寺遺跡』　福島県いわき市建設事務所・福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団

松本　茂他　1985「岩下A遺跡（第1次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅶ』　福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター

馬目順一他　1986「原始・第三章弥生時代」『いわき市史　第一巻』

安部　実　1986『生石2遺跡発掘調査報告書（2）』　山形県教育委員会

芳賀英一　1988「福島県に於ける弥生時代墓制の展開」『東日本の弥生墓制』　群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会

松本　茂　1988「岩下A遺跡（第2次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』　福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター

芳賀英一他　1988「一ノ堰B遺跡」『国営会津農水水利事業関連遺跡調査報告Ⅵ』　福島県教育委員会

寺島文隆他　1989『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ』　福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター

須藤　隆　1990「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論攷』　伊東信雄先生追悼論文集刊行会

飯村　均他　1991「長瀞遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅱ』　福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・東北電力株式会社

能登谷宣康他　1992「長瀞遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅲ』　福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・東北電力株式会社

能登谷宣康他　1992「鳥井沢B遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅲ』　福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・東北電力株式会社

樫村友延他　1994『上ノ内遺跡』　福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団

井　憲治他　1994「南入A・長瀞遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅵ』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・東北電力株式会社

堀金　靖　1995『川原町口遺跡』　会津若松市教育委員会

馬目順一　『伊勢林前遺跡』　福島県いわき市教育委員会

吉田秀享　1996「弥生時代の主体的土器と客体的土器について」『論集しのぶ考古』論集しのぶ考古刊行会

井　憲治他　1997『常磐自動車道調査報告10』　福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団

# 第3編　美シ森（うつくもり）C遺跡

遺跡記号　NH－USM・C
所在地　双葉郡楢葉町大字山田岡字美シ森
時代・種別　弥生時代・平安時代・現代
　　集落跡・墓域・遺物包含層
調査期間　1996年6月4日～6月25日
調査員　本田公成・香川慎一
協力機関　楢葉町教育委員会

# 目　次

第１章　調査経過……141
　第１節　位置と地形……141
　第２節　調査経過……142
第２章　遺構・遺物……143
　第１節　調査の方法と基本層序……143
　第２節　竪穴状遺構……145
第３章　ま　と　め……146

# 写真目次

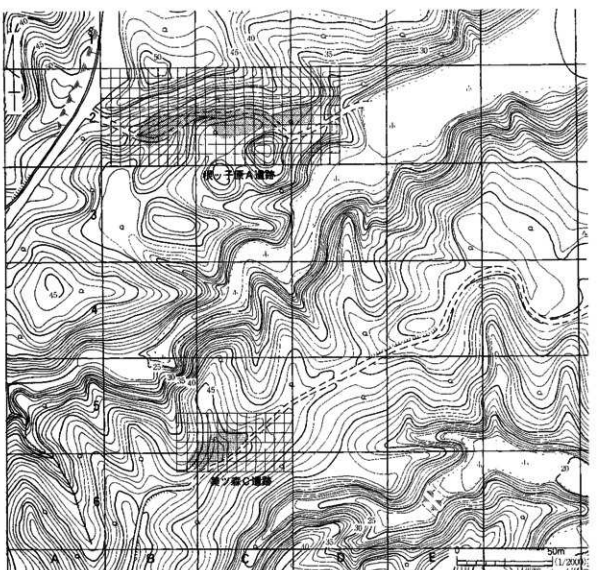
1　美シ森Ｃ遺跡遠景（南から）……246
2　美シ森Ｃ遺跡全景（西から）……246
3　１号竪穴状遺構土層（西から）……247
4　１号竪穴状遺構全景（南から）……247

# 第1章　調　査　経　過

## 第1節　位置と地形

美シ森C遺跡はNTC建設地の東部に位置する。国土座標でおおよその位置を示すと，遺跡の中心部は，Ⅸ系：X＝＋138,555.000，Y＝＋104,110.000である。遺跡の面積は，320㎡である。美シ森C遺跡から北側へ約150mの所に根ッ子原A遺跡がある。

遺跡周辺の地形は，南西から北東側に向かって痩せた丘陵尾根が延びており，その北側を谷が蛇行しながら併走している。美シ森C遺跡の立地は，痩せた尾根から北に向かって張り出す丘陵斜面の一帯で，その標高は43～47mである。今回，発掘調査を実施した5遺跡の中では，下岩沢A遺跡




**第1図　美ツ森C遺跡周辺地形図**

に次いで標高が高い。

丘陵の頂部には尾根伝いに道が造られており，国道6号線から太平洋岸に向かう地元の人々の生活道となっていたようである。ＮＴＣ建設工事によってこの道は削平されてしまったが，現在は旧道の北側に新道が付け替えられている。発掘調査のため現地入りした4月の時点では，美シ森C遺跡の周辺は削平されて平坦になっており，遺跡部分だけが丁度，浮島のように残っていた。発掘調査前の地目は山林で，広葉樹を中心とする雑木で覆われていた。　（香　川）

## 第2節　調　査　経　過

美シ森C遺跡は，平成7年度のＮＴＣ遺跡分布調査において，性格・時期不明の竪穴状遺構が発見されたことで登録された遺跡である。

当初の計画では，美シ森A遺跡の発掘調査終了後，その調査員2名と作業員を根ッ子原A遺跡に移動して調査を行うというものであった。だが，美シ森B遺跡で予想を上回る数の遺構と遺物が確認されたことから，当初の計画通りに進行することができなくなった。そこで，ＮＴＣ工事関係者と協議したところ，美シ森A遺跡の調査終了後，先に美シ森Cと下岩沢Aの2遺跡の調査を同時に行うことで話がまとまった。

美シ森A遺跡の発掘調査は5月31日で終了し，6月から調査員と作業員を2分して先の両遺跡の調査を行うことになった。美シ森C遺跡の調査員は，香川が担当した。

美シ森C遺跡の表土は，4月23・24日の2日間に重機を使い，全体の約60％を除去した。残りの表土は人力で除去することにした。調査区の周囲は，工事用道路となっており大型車両が頻繁に通過するため，非常に危険な環境であった。また，遺跡のすぐ側で工事が行われており，発掘調査を実施する上で様々な制約が求められた。そこでＮＴＣ工事関係者と綿密に連絡を取り合い，6月4日から作業員を調査区に入れて本格的に調査を開始する。

6月10日には，グリッド杭とベンチマークの設置作業が終わる。6月11日，重機で取り切れなかった表土の除去が終わり，遺構・遺物の検出作業に入る。結局，検出遺構は，分布調査時に確認された竪穴状遺構1基（1号竪穴状遺構）のみである。また，出土遺物は，時期不明の鉄滓が1点だけである。

1号竪穴状遺構の調査は6月19日に開始し，6月20日に終了した。6月21日に調査区の遠景写真の撮影を行う。6月24日に調査区基底面の地形測量を終え，美シ森C遺跡の発掘調査を終了した。6月4日～24日の期間は梅雨入りもあったが，美シ森C遺跡の発掘調査は，雨による影響も少なく比較的順調に進んだ。

6月28日，福島県教育委員会・東京電力株式会社・(財) 福島県文化センターの各担当者が集まり，調査経緯・成果の説明後，美シ森C・下岩沢A遺跡の引き渡しを行った。　（香　川）

# 第２章　遺構・遺物

## 第１節　調査の方法と基本層序

### １．調査の方法

今回の発掘調査では，ＮＴＣ建設地全体を大きく網羅する50m方眼の大グリッドと，さらに各大グリッドを５m方眼に100分割した小グリッドを併用して各遺跡の区画割りを行った。ＮＴＣ建設地における美シ森Ｃ遺跡のおおよその位置は，大グリッドで示すとＣ５・６の境界を中心とする一帯である。

調査区内の小グリッドを表す場合には，大グリッドの後に小グリッドの番号を付け，Ｃ６－１のように記した。小グリッドの表記は，遺構の位置や遺物の出土地点を示す場合などに利用した。

また，便宜上，美シ森Ｃ遺跡のＣ６－３杭を原点として，南北方向へ１m進むごとにＳ01・02…，Ｎ01・02…のように，また東西方向の場合も同様にして組み合わせ，遺跡内の位置を１m単位で示せるようにした。この方法は，遺構図の作成や掲載をする時に用いた。なお，Ｃ６－３杭の国土座標は，Ⅸ系：Ｘ＝＋138,550.000・Ｙ＝＋104,110.000である。

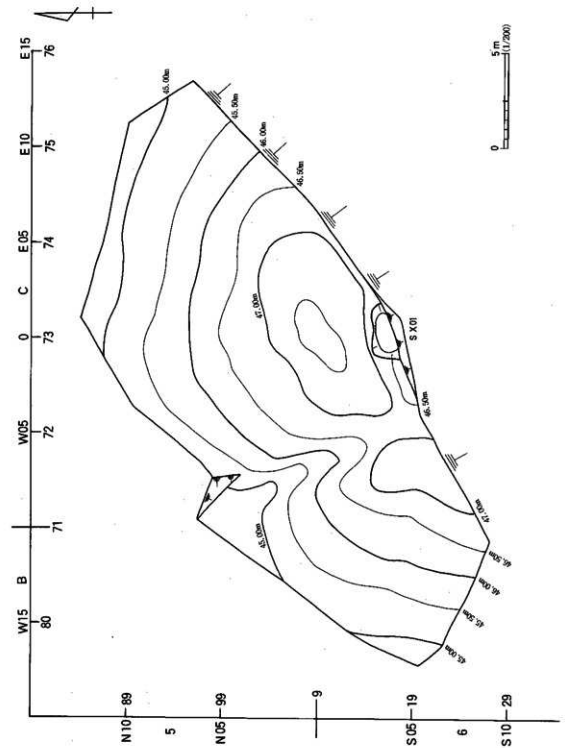
遺跡を覆う表土の除去は，バックフォー（0.45㎥）による作業が中心であったが，地形的制約からバックフォーの入れない所は人力で除去した。排土の処理は，遺跡の周囲が削平されて工事用道路になっていたため，遺跡内に排土を一時溜め置き，ある程度まとまった時点で小型のクローラキャリアで移動した。

美シ森Ｃ遺跡の検出遺構は，竪穴状遺構（１号竪穴状遺構）の１基のみであるが，実測は1/20の縮尺で行った。調査区基底面の地形測量は，1/100の縮尺で行った。写真撮影は，６×4.5判中型カメラを主カメラとして使用した。また，補助・リバーサル用に35㎜カメラを使用した。（香　川）

### ２．基本層序

美シ森Ｃ遺跡の地形は，小丘陵の頂部から北側へ下る急斜面である。堆積土壌は，ＬⅠ・Ⅱの２層で，調査区全域に15㎝前後堆積する。ＬⅠはやや粘性のある黒褐色土で，表土層である。ＬⅡは灰黄褐色の砂質土で，炭粒をまばらに含んでいる。頂部のＣ６－３杭付近では，ＬⅠが４㎝程度，ＬⅡが12㎝程度の厚さで堆積している。斜面下方のＣ５－83杭付近では，ＬⅠが10㎝程度，ＬⅡが５㎝程度の厚さで堆積しており，表土化が進んでいる。ＬⅡの次層を地山とし，ＬⅢとした。

美シ森Ｃ遺跡から出土した鉄滓１点は，ＬⅠからの出土である。ＬⅡから遺物は確認していない。各基本層の色調・土質は以下の通りである。




第2図　美ツ森C遺跡遺構配置図

ＬⅠ：10ＹＲ3/1　黒褐色土。やや粘性のある表土層。
ＬⅡ：10ＹＲ5/2　灰黄褐色砂質土。木炭粒をまばらに含む。
ＬⅢ：10ＹＲ8/6　黄褐色砂質土。地山。

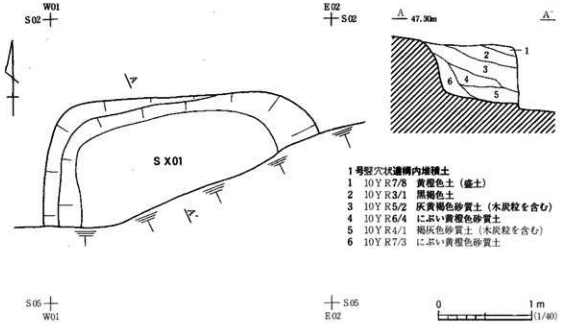
## 第２節　竪穴状遺構

美シ森Ｃ遺跡では，平成７年度の分布調査で竪穴状遺構（１号竪穴状遺構）が１基発見された。本年度の発掘調査でさらに他の遺構が分布している可能性があったが，調査の結果，１号竪穴状遺構以外の遺構は検出できなかった。

### １号竪穴状遺構　ＳＸ01

**遺　構**　（第３図　写真３・４）

位置は，Ｃ６－２・３グリッドである。立地は，小丘陵頂部の平坦地である。丘陵頂部の南側は，南西から北東方向へ抜ける道によって大きく切土されている。分布調査時の１号竪穴状遺構の発見状況は，道の切土面から破壊された本遺構の断面が認められた。分布調査の成果を受けて，遺構遺存部の平面形を検出し調査を行う。遺構検出面はＬⅢ上面である。１号竪穴状遺構と重複する遺構はない。　遺構内の堆積土は，６層に分けられた。ℓ１は，基本層序のＬⅠに比定され，表土が流入したものである。ℓ３～５は，黄色・褐灰色系の砂質シルトで，ＬⅡと同様に木炭粒をまばらに含んでいた。ℓ６は，ℓ４の色調・土質と類似しており，床面から壁にかけて三角状に堆積していた。堆積土の状況から人為的に埋め戻されたような痕跡は認められず，１号竪穴状遺構は自然に埋没したものと考える。




**第３図**　１号竪穴状遺構

1号竪穴状遺構の平面形は，遺存部の形状から隅丸の方形を呈していたと思われる。壁の全体が遺存しているのは北壁のみである。他の壁は道に破壊されており，東・西壁は一部しか残っておらず，南壁は全体を失っている。北壁は，底面から約65°の急角度で立上がる。北壁の上端から底面までの深さは60cmを測る。北壁の長さは2.45mで，その方向はN－86°－Eである。底面は，北部しか残っていないが平坦に整地されており，丁寧に造られた様子がうかがえた。だが，踏み締まっているような痕跡は，特に認められなかった。遺構の内外からピットを確認することはできなかった。なお，1号竪穴状遺構から遺物は出土していない。

ま と め

1号竪穴状遺構は，丘陵頂部の平坦面を利用して造られている。道によって南部を大きく破壊されていたが，隅丸方形を呈していたと思われる。唯一全体が遺存している北壁の長さは，約2.5mである。底面は，比較的丁寧に造られていた。遺構内堆積土の状況は，底面から上端まで自然堆積の様相を示しており，廃絶直前まで竪穴状に開口していたようである。遺構の内外からピットは確認できなかったが，上屋の有無は不明である。

本遺構の機能としては住居跡に類する可能性もあるが，性格が推測できるような遺物もなく不明である。（香　川）

# 第3章　ま と め

今回の発掘調査における調査成果は，竪穴状遺構1基（1号竪穴状遺構）と鉄滓1点である。美シ森C遺跡の調査面積は320㎡で，下岩沢A遺跡に次ぐ小面積である。美シ森C遺跡の地形は，小丘陵の頂部から北方向に下る斜面で，その標高は43～47mである。

小丘陵の頂部には，切土面によって作られた道路が東西に通過していたが，平成7年度の分布調査では，その切通し面から1号竪穴状遺構の断面が発見された。分布調査では，遺構・遺物の密度が比較的薄いことが報告されていたが，今回の発掘調査でも確認され，1号竪穴状遺構以外の遺構は検出されなかった。

1号竪穴状遺構は，道路によって大きく破壊されていた。遺存する壁の形状から隅丸の方形が推測され，竪穴住居跡の可能性も考えられた。だが，破壊が著しいため1号竪穴状遺構の性格を推察することはできなかった。

美シ森C遺跡から出土した鉄滓は，表土除去前のLⅠ表面から採取したものである。しかし，出土した鉄滓は1点のみであり，鉄滓の出自については不明である。

以上，美シ森C遺跡は不明な点が多く，遺跡としての性格を推察するには，あまりにも判断材料が少ない。（香　川）

# 第4編　根ッ子原（ねこはら）A遺跡

遺跡記号　NH－NTH・A
所在地　双葉郡楢葉町大字山田岡字根ッ子原
時代・種別　平安時代・集落跡
調査期間　1996年6月26日～8月6日
調査員　本田公成・香川愼一
協力機関　楢葉町教育委員会

# 目　次

第1章　調　査　経　過 ……149
　第1節　位置と地形 ……149
　第2節　調査経過 ……150
第2章　遺構・遺物 ……151
　第1節　調査の方法と基本層序 ……151
　第2節　竪穴住居跡 ……153
　第3節　土　　坑 ……165
　第4節　その他の遺構 ……167
　第5節　遺構外出土遺物 ……169
第3章　まとめ ……171

# 写真目次

1　根ッ子原A遺跡遠景（南から） ……248
2　東部近景1（南西から） ……248
3　東部近景2（西から） ……249
4　西部近景（南西から） ……249
5　1A・B号住居跡全景1（南から） …250
6　1A・B号住居跡全景2（西から） …250
7　2号住居跡土層（西から） ……251
8　2号住居跡全景（南から） ……251
9　3号住居跡全景（南から） ……252
10　3号住居跡細部 ……252
11　4号住居跡全景（南から） ……253
12　4号住居跡細部 ……253
13　1号性格不明遺構全景（西から） ……254
14　1号性格不明遺構細部・1号溝跡 ……254
15　土坑 ……255
16　1A・B号住居跡出土遺物 ……256
17　1B号住居跡出土遺物 ……257
18　4号住居跡出土遺物（1） ……257
19　4号住居跡出土遺物（2） ……258
20　遺構外出土遺物 ……259

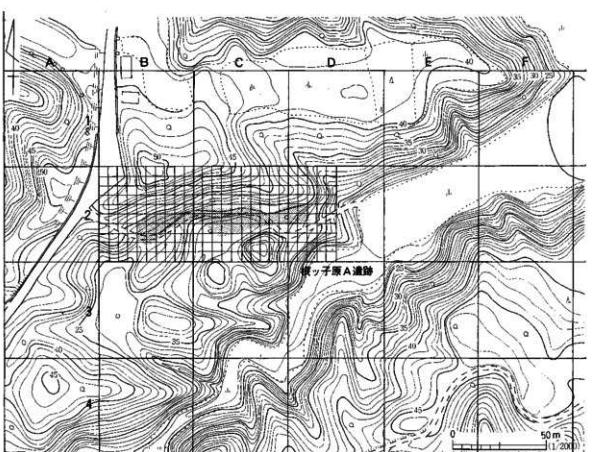
# 第1章　調　査　経　過

## 第1節　位置と地形

根ッ子原A遺跡は，ＮＴＣ建設地内の北西端に位置する。国土座標でおおよその遺跡の位置を示すと，その中心部は，Ⅸ系：Ｘ＝＋138,725.000・Ｙ＝＋104,120.000である。遺跡の面積は930㎡である。根ッ子原Ａ遺跡の中心部から，東軸線に沿って約250m進んだ地点に美シ森Ａ遺跡がある。

根ッ子原Ａ遺跡の立地は丘陵の裾部で，東西に細長く延びる遺跡である。立地する丘陵の頂部は平坦地で広範囲に開けた地形となっているが，人工的に切り開かれたもののようである。一方，丘陵の裾部では，生活道・畑・盛土・切土の痕跡が各所で認められ，遺跡周辺の旧地形が大きく改変されている。特に遺跡中央部が著しく起伏の著しい地形になっているが，本来はなだらかな丘陵斜面がさらに南側へ続いていたと思われる。発掘調査前の地目は山林で，雑木林の中を道が通過していた。この道は盛土をして造られていたが，その盛土の下はかつて畑として利用されていたようである。

（香　川）




**第1図**　根ッ子原Ａ遺跡周辺地形図

## 第２節　調　査　経　過

**試掘調査の成果**

根ッ子原Ａ遺跡は，平成７年度のＮＴＣ遺跡分布調査で，平安時代の集落跡として発見・登録された。踏査では，切り通しの道の断面から竪穴住居跡が確認されている。試掘調査では，計５本のトレンチが設定され，新たに竪穴住居跡・土坑などの遺構や，土師器・須恵器などの遺物が確認されている。試掘調査の結果から，根ッ子原Ａ遺跡は，ＮＴＣ建設地内に分布する遺跡の中でも比較的，遺構数の密度が高いと予想された。

**発掘調査の経過**

根ッ子原Ａ遺跡の発掘調査は，平成８年度の６月26日から開始した。調査体制は，美シ森Ｃ・下岩沢Ａ遺跡の調査員と作業員が引き続き行なうことになった。調査担当者は，本田・香川である。当初の計画では，根ッ子原Ａ遺跡の調査は７月中に終了させる予定であった。だが，調査計画の変更があり，７月下旬までに調査区全域を引き渡すことが不可能になった。そこでＮＴＣ工事関係者と協議した結果，７月26日までに調査区の東半部を先に引き渡し，残りの調査区を８月７日に引き渡すということで話がまとまった。

表土の除去は，重機を使用して４月23・24日に一度行っていた。だが，６月26日にトレンチを設定して，調査区の堆積土の状況を観察したところ，南半部に大規模な現代の盛土が確認された。盛土の厚さは，最深部で2.5mを越えており，再度重機の導入が必要となった。しかし，ＮＴＣ関連の造成工事の進行が早く，約束していた重機の進入路・排土置き場も埋められていた。重機を即稼働できる状態ではなかったので，造成工事が一段落するまで，盛土の薄い箇所を人力で除去し，調査を行うことにした。

また，６月26日のトレンチ観察では，少なくとも２軒の住居跡の存在を確認しており，１Ａ・Ｂ号住居跡とした。６月27日，１Ａ・Ｂ号住居跡の調査を開始する。７月２日，２号住居跡の調査を開始する。７月５日，１Ａ・Ｂ号住居跡の調査を終了する。

７月８日～12日の１週間は，梅雨の本格化，台風の影響を受け，調査が停滞する。

７月16日，ようやく重機を導入することができ，調査区に厚く堆積する盛土の除去を開始する。７月18日，３号住居跡を確認する。７月19日，重機による盛土の除去が終了する。７月23日，４号住居跡を確認する。７月26日，正午に調査区東・中央部の地形測量・遠景撮影が終了し，午後，調査区の約75％の引き渡しを行った。

７月30日，残る調査区の発掘を開始し，１号性格不明遺構・１～３号土坑を確認する。７月31日，先に引き渡した調査区の工事が始まる。８月５日，１号溝跡を確認する。８月６日，すべての遺構の調査と，調査残区の地形測量・遠景撮影が終了する。８月７日，調査残区の引き渡しを行った。

（香　川）

# 第２章　遺構・遺物

## 第１節　調査の方法と基本層序

### １．調査の方法

今回の発掘調査では，ＮＴＣ建設地全体を大きく網羅する50m方眼の大グリッドと，さらに各大グリッドを５m方眼に100分割した小グリッドを併用して各遺跡の区画割りを行った。ＮＴＣ建設地における根ッ子原Ａ遺跡のおおよその位置は，大グリッドで示すとＢ・Ｃ・Ｄ２の一帯である。

調査区内の小グリッドを表す場合には，大グリッドの後に小グリッドの番号を付け，Ｂ２－１のように記した。小グリッドの表記は，遺構の位置や遺物の出土地点を示す場合などに利用した。

また，便宜上，美シ森Ｃ遺跡のＣ２－65杭を原点として，南北方向へ１m進むごとにＳ01・02…，Ｎ01・02…のように，また東西方向の場合も同様にして組み合わせ，遺跡内の位置を１m単位で示せるようにした。この方法は，遺構図の作成や掲載をする時に用いた。なお，Ｃ２－65杭の国土座標は，Ⅸ系Ｘ＝＋138,720.000・Ｙ＝＋104,120.000である。

各遺構の記録は，平面形，軸線方向の断面形・堆積土状況を基本とした。竪穴住居跡など大型遺構の実測図は１/20で作成したが，カマド・出土遺物など必要に応じて微細図を作成した。土坑など小型遺構の実測図は，１/10で作成した。

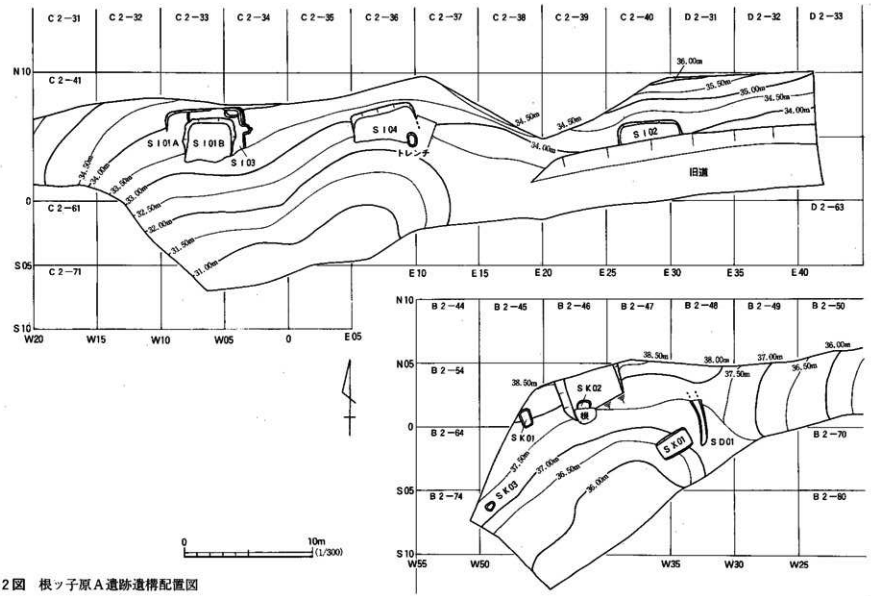
住居跡床面から柱穴らしい痕跡が認められた箇所には，観察優先で断ち割りを施して堆積土の有無を確認した。カマドなど熱を受けた痕跡が認められた箇所には，断ち割りを施して受熱の程度を確認した。調査区基底面の地形測量は，1/100の縮尺で行った。写真撮影は，６×4.5判中型カメラを主カメラとして使用した。また，補助・リバーサル用として35㎜カメラを使用した。（香　川）

### ２．基本層序

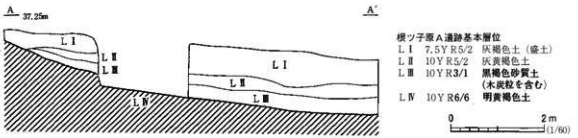
根ッ子原Ａ遺跡の地形は，東西に伸びる小丘陵の裾部であるため，堆積土壌は厚いことが予想された。だが，調査区中央部～東部では，大規模な土地改変が行われていた。調査区の南側には，最近まで使われていた道が東西に通過していた。

調査区東部では，丘陵斜面を大きく削平した切り通しの道が作られていた。調査区中央部では，丘陵斜面に盛土をして水平に造成し道を通していた。この盛土は最深部で2.5mを越えたが，盛土の直下は地山の斜面が段々状に下っていた。地元の人の話によると，道の以前は桑畑であったらしい。このように調査区中央部では，元の地形が大きく損なわれており，堆積土壌を認めることができなかった。

一方，調査区西部では，平成７年度の分布調査時のトレンチを観察したところ，地山上の堆積土




第2図　根ッ子原A遺跡遺構配置図




**第３図**　根ッ子原Ａ遺跡基本層序

はＬⅠ～Ⅲの３層に分けられた。ＬⅠは灰褐色土で，ＬⅢとの間に薄く旧表土が認められたため，人工の盛土であることが判った。ＬⅡは灰黄褐色砂質シルトで，土壌の腐食は著しいものでない。ＬⅡから土師器が出土したが，その量は少ない。ＬⅢは黒褐色土で，土師器・須恵器などの遺物は，主にこの層から出土した。地山はＬⅣとし，全般的に黄褐色系の砂質土であるが，部分的に赤褐色砂質シルトも認められた。　（香　川）

## 第２節　竪穴住居跡

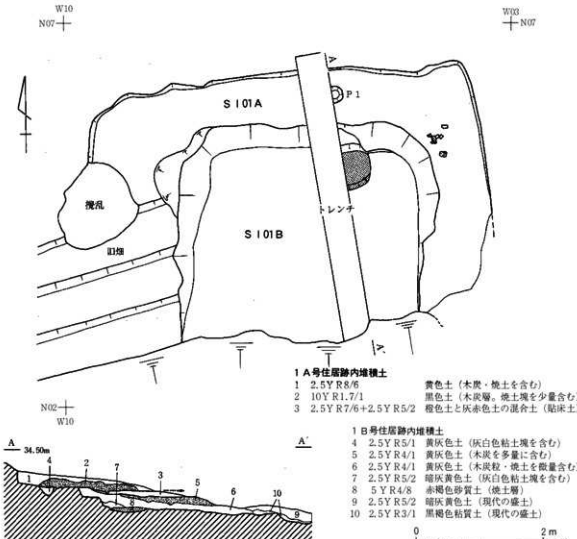
根ッ子原Ａ遺跡から，平安時代の竪穴住居跡を５軒確認した。いずれの住居跡も現代の土地改変によって大きく破壊されており，遺存状態が悪い。１Ａ・１Ｂ・３号住居跡は，建替え，あるいは旧住居跡の跡地を利用するように同一地点で重複していた。その３軒の住居跡から，東側約10mの地点には４号住居跡がある。また，４号住居跡の東側約17mの地点には，５号住居跡がある。これら５軒の住居跡は，南面する小丘陵の裾部に立地し，東西に延びる標高約34mの等高線に沿って分布している。

### １Ａ号住居跡　ＳＩ01Ａ

**遺　構**　（第４図　写真５・６）

位置は，Ｃ２－54杭を中心とする所である。立地は，急峻な丘陵斜面が北側にせまるが，斜面の傾斜が緩やかとなる変換部に構築されている。１Ａ号住居跡の発見は，調査区の基本層序を確認するため，南北にトレンチを設定した。そのトレンチの観察から，住居跡２軒の断面が上下に重複する形で確認された。建替えの可能性が考えられたため，新しい住居跡を１Ａ号住居跡，古い方を１Ｂ号住居跡とした。さらに，１Ａ・１Ｂ号住居跡は３号住居跡とも重複していたが，３号住居跡が最も古い。

トレンチの観察から少なくとも２軒の住居跡が存在していることが判ったが，両住居跡の堆積土に木炭層の形成が認められた。根ッ子原Ａ遺跡では調査前に木の伐採を行っており，その時に生じた雑木類を各所で燃やして処分したようである。１Ａ号住居跡の周辺でも最近の木炭・焼土・ゴミが散乱しており，トレンチの設定前に遺跡の清掃を行った。だが，同時に住居跡内堆積土の木炭粒も除去してしまい，１Ａ号住居跡を床面から大きく破壊してしまったようである。なお，遺構検出




**第４図**　１Ａ・Ｂ号住居跡

面はⅣ上面である。

住居跡内堆積土の状況であるが，ℓ１～３が１Ａ号住居跡内の堆積土である。ℓ１は黄色土・木炭化粒・焼土が混じり，人為的に投入されたようである。ℓ２は木炭層で，多量の消し炭状の木炭や黒灰が混ざっていた。ℓ３は，やや粘質の灰赤色と橙色の混合土で，その上面は水平になっており，貼床的な整地層と考えられる。ℓ３の色調から床面は熱を受けた可能性があり，また木炭層ℓ２の存在から，１Ａ号住居跡は焼失した可能性が高い。

住居跡の平面形は，唯一全体が遺存している北壁の形状から方形を呈していたと思われる。北壁の長さは，5.8mである。北壁の深さは，15～20cmである。北壁の方向は，Ｎ－83°－Ｅである。南壁は，完全に失われていた。東壁は，北東角から約2.4m遺存していたが，３号住居跡の上端の一部を壊していた。西壁も畑などの撹乱を大きく受けており，北西角から約0.7mしか遺存していなかった。

床面の状況であるが，他遺構との重複状況で異なる。まず３号住居跡が造られ，次に３号住居跡

の跡地を利用して1B号住居跡が造られている。そして，最後に1A号住居跡が造られ，その床面は1B・3号住居跡の床面よりも約35cm高い。1A号住居跡の北西部では，重複遺構がなくLⅣの地山が床面である。1B号住居跡との重複部では，ℓ3を貼床的に整地して床面としている。1A号住居跡の北・東部では，3号住居跡の堆積土を掘り下げて床面としている。

1A号住居跡から，カマド跡を確認することはできなかった。少なくとも北壁には付設していない。また，柱穴などのピットや，壁溝も確認できなかった。

**遺　物**　（第5図　写真16）

本住居跡に伴うと考えられる遺物は，床面から出土した第5図1・2・4が上げられる。第5図1は，底部に回転糸切り痕が認められ，体部下端に手持ちヘラケズリが施された土師器杯である。第5図4は，その器面が褐灰色を呈し，また非常に堅緻であることから，須恵窯で焼成された可能性がある。第5図2は筒形の土師器であり，表面に粘土の積み上げ痕が，裏面にはヘラナデ痕が認められる。

**ま と め**

遺存状態は非常に悪いが唯一遺存していた北壁から，東西方向が6m近い方形の住居跡であったと思われる。1B・3号住居跡と重複するが，1A号住居跡が最も新しく，規模も一番大きい。床面上に多量の木炭が認められ，また貼床と思われるℓ3にも熱を受けた痕跡が認められたことから，1A号住居跡は焼失したものと考えられる。カマドは付設されていたと思われるが，北壁以外の地点である。柱穴などのピットは検出できず，上屋の構造は不明である。1A号住居跡の時期は，床面から出土した遺物から9世紀後半が予想される。　（香　川）

### 1B号住居跡　SI01B

**遺　構**　（第4図　写真5・6）

位置は，C2－54杭を中心とする所である。1A・3号住居跡と重複するが，各住居跡の軸線方向は等しい。1B号住居跡は，3号住居跡の東・北壁部を埋めて構築している。住居跡の南部は大きく削平されており，南壁を失っている。1A号住居跡との新旧関係は，1B号住居跡のほうが古い。遺構検出面はLⅣ上面である。

1B号住居跡内の堆積土は，ℓ4～10である。ℓ5は黄灰色土であるが，多量の木炭を含んでいた。ℓ6も黄灰色土であるが，木炭をほとんど含んでいない。ℓ5・6は，人為的に形成された可能性がある。ℓ7は灰白色粘土塊を含んでおり，ℓ8は窪地に焼土が堆積している。窪地の底は，強い熱を受けて赤く硬化していた。ℓ7・8の状態から，1B号住居跡のカマド部分であった可能性がある。ℓ4は小ピットの堆積土であるが，位置的に煙出しピットの可能性もある。1B号住居跡の南側は造成工事によって大きく削平されており，地山上に堆積するℓ9・10は現代の盛土である。

住居跡の平面形は，遺存部の状態から方形を呈していたと思われる。床面はLⅣ面で，3号住居跡の床面を利用していた。住居跡の平面形の規模は，北辺下端の長さが3.0mである。北辺下端の

方向は，ほぼ北西を向いている。

住居跡の北東部に，カマドの火床面と考えられる皿底状の窪みが認められ，その上部に焼土の$\ell$8が堆積していたが，火床面の窪みは床面よりも約5㎝低い。火床面の平面形は楕円形を呈し，その規模65×45㎝である。袖部など燃焼室の痕跡は，認められなかった。火床面の北側は階段状の段差になっており，削平されたのか煙道らしい痕跡は確認できなかった。火床面付近以外の壁は，床面から45°以下の角度で立ち上がっており，他の住居跡と比較すると壁の傾斜はかなり緩い。住居跡内の堆積土が人為的に形成された可能性を考えると，壁の上部を崩して土を投入した可能性もある。床面から，柱穴などのピットや溝などの確認はできなかった。

**遺　物**　（第5図　写真16・17）

本住居跡の床面出土遺物は確認できなかった。本住居跡内の堆積土からは，多量の土師器・須恵器が出土したが，いずれも遺存状態が悪く全体の器形が復元できたものは1点もなかった。本住居跡内の堆積土から出土した遺物の内，図化できたのは第5図3・5～11の8点である。

第5図3は土師器甕の底部で，胴部下端にヘラケズリが施されている。第5図5は，口縁部が外傾し，胴部にロクロナデが施されている。第5図6も胴部外面にロクロナデが認められるが，その内面は黒色処理・ヘラミガキが施されている。口縁部は急角度で外傾しているが，その口唇部はわずかにつまみ上げられている。第5図7は，底部から胴部下半が遺存する土師器甕である。胴部の表面には化粧土が施されていたが，その化粧土が剝落した箇所から，ヘラケズリ痕が明瞭に認められた。

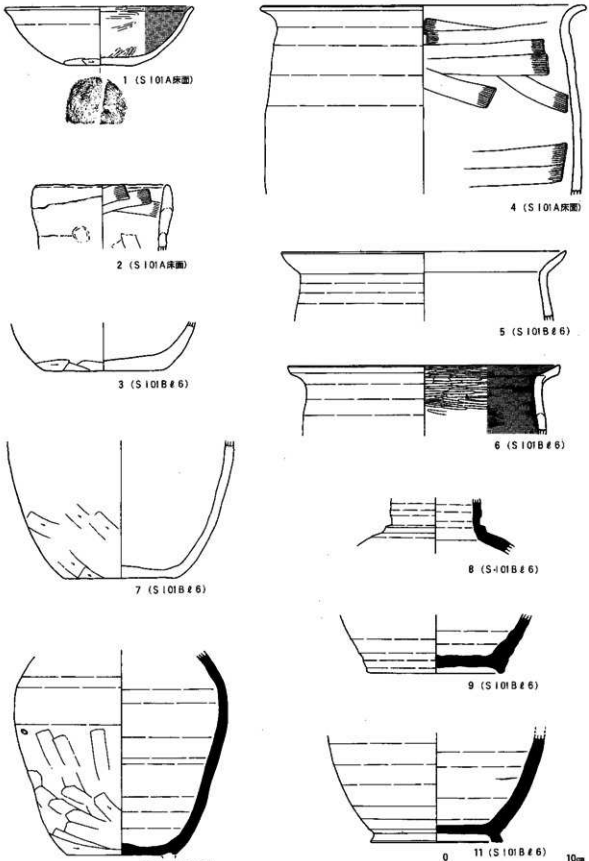
第5図8は，長頸瓶の頸部付近の破片である。胴部と頸部の境には，リング状の段差が巡る。第5図9は，須恵器の甕底部の破片である。胴部と底部の内面に自然釉の付着が認められた。底部には高台が付くが，その高台の断面は三角状につまみ出されたようになっている。第5図10は頸部から口縁部を完全に欠損する長頸瓶で，胴部下半にヘラケズリが施されている。また，胴部の中ほどに籾殻痕が認められた。底部から高台が剝落した痕跡が認められたが，その付着部は棒状工具による連続状の刻みが施されていた。第5図11も胴部下半が遺存する長頸瓶である。底部に高台が付くが，その断面は四辺形を呈する。

**ま と め**

1B号住居跡の平面形は，北辺下端の長さが3.0mであったことから，1辺約3mの方形を呈していたと思われる。1A号住居跡の規模と比較すると，かなり小型である。

床面には貼床を施しておらず，3号住居跡の床面を直接利用していた。床面から柱穴を確認することはできなかった。カマドは，火床面と思われる痕跡から，住居跡の北東部に付設されていたと考える。住居跡内堆積土の状況は人為堆積の可能性があるが，1A号住居跡を構築する時，廃絶した1B号住居跡内に土を入れて整地したのかもしれない。なお住居跡の時期は，出土した遺物から9世紀前半頃と考える。

（香　川）




第5図　1A・B号住居跡出土遺物

## ２号住居跡　ＳＩ02

**遺　構**　（第６図　写真７・８）

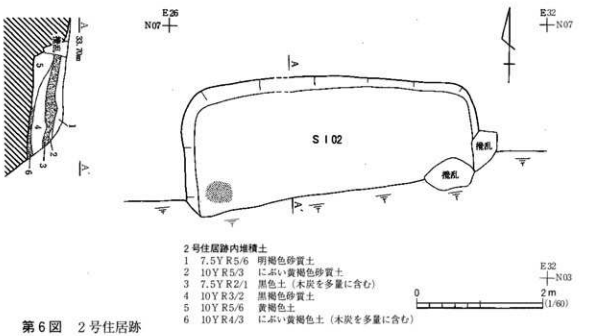
調査区東部の丘陵南向き斜面中位，Ｃ２－60杭の東1.2mに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。本住居跡の立地は，勾配の急な丘陵斜面である。本住居跡の西側約17mの地点に４号住居跡がある。本遺構の南半部は，丘陵斜面を切り通して造られた道路によって大きく破壊されていた。他の遺構との重複関係はない。

本住居跡の発見は，平成７年度の遺跡分布調査時であり，道路の切り通し面から竪穴状に落ち込む断面が認められた。そこで，遺構の性格を把握するためにトレンチが設定され，竪穴住居跡であったことが確認されている。

住居跡内の堆積土は，６層に分けられた。ℓ１は，北部の丘陵斜面から一気に流れ込んできた土である。ℓ３は，本住居跡の上部を覆う堆積土であるが，木炭を多量に含んでいた。木炭の状況は，木の枝が燃えて消し炭状になったものや，焼土が少量混じっていた。ℓ６も多量の木炭・焼土を含む層であるが，床面上に堆積する。堆積土の状況からℓ１・２・４・５は，自然堆積層と判断したが，ℓ３は不明である。なお，ℓ４の上面は，特に踏み締まりもなく，住居跡の床面として使われた痕跡は認められなかった。

住居跡の平面形は，遺存する北半部の形状から，方形を呈していたと考えられる。北壁は，唯一全体が遺存しており，その長さは4.45mである。東壁は北東角から0.90m，西壁は北西角から1.65m遺存していた。北壁の方向は，ほぼ東－西を向く。壁は，全体的に急角度で直線的に立ち上がる。壁の深さは，それぞれ遺存部の中央で北壁48cm，東壁28cm，西壁31cmを測る。

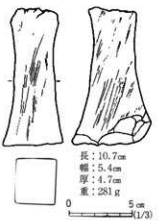
床面は，ＬⅣ面を平坦にしており，貼床は認められなかった。床面上には厚さ８cm前後の木炭粒




**第６図**　２号住居跡

が堆積していたが，その範囲は床面遺存部の中央から南半部全体であり，北壁周辺では全く認められなかった。西壁側の床面に，熱を受けて赤褐色に変色している部分があった。

カマドの痕跡は，確認することができなかった。おそらく，切り通しの道路を造った際に破壊されてしまったものと思われる。また，床面遺存部から柱穴などのピットも確認できなかった。



第7図　2号住居跡出土遺物

**遺　物**　（第7図）

遺物は，ℓ2～4で土師器が20点，ℓ5で須恵器が1点出土しているが，いずれも細片のため図化できなかった。北西角付近の床面から砥石（第7図1）が出土している。第7図1は白灰色の細粒凝灰岩製で，その形状はバチ状を呈する。両端部を除く各面は，よく使用されて非常に滑らかになっている。後端部は，打ち欠いたような剝離面が認められる。第7図1の計測値は，長さ10.7cm，幅5.4cm，厚さ4.7cmである。

**ま　と　め**

本住居跡の平面形は，遺存する壁の形状から方形を呈していたと考えられるが，後世の破壊が著しいため不明である。住居跡内堆積土のℓ6は床面上に堆積し，また熱を受けて変色した床面部分も認められたことから，本住居跡は焼失家屋の可能性がある。

だが，住居跡の上部に堆積していたℓ3の形成理由は不明であった。カマドは検出されなかったが，東壁に付設されていた可能性がある。本住居跡の時期は，推測できる遺物に乏しいが平安時代前半頃と考えられる。　（本　田）

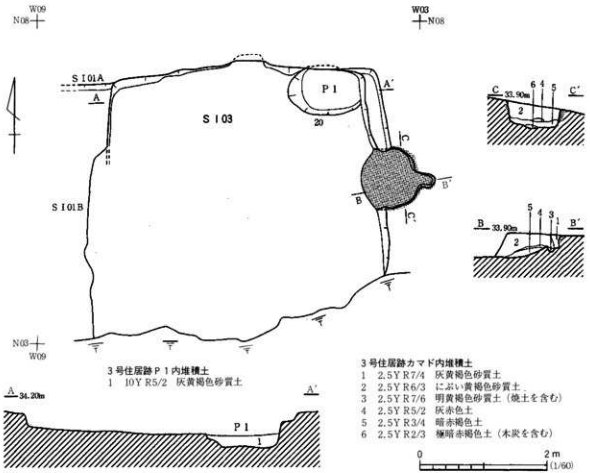
### 3号住居跡　SI03

**遺　構**　（第8図　写真9・10）

位置は，C2－54杭を中心とする所である。1A・B号住居跡と重複するが，3号住居跡が最も古い。遺存状態は非常に悪く，全体が遺存しているのは北壁だけである。南壁は，削平されて完全に失われている。遺構検出面はLⅣ上面である。

住居跡内の堆積土は図示できなかったが，堆積土の色調・土質は地山のLⅣに類似していた。だがLⅣと異なる点があり，白色粘土塊・明黄褐色土が少量混じっていた。この住居跡内堆積土が人為的に埋められたものなのか，自然埋没なのかその判断はできなかった。可能性としては，1B号住居跡を構築する時にLⅣを崩して投入したか，あるいは北側丘陵部の崩落土が一気に流入したと考えられる。

住居跡の平面形は，遺存する北壁の形状から方形を呈していたと考えられる。北壁の長さは3.95m，検出面から床面までの深さは最大で49cmを測る。北壁の立ち上がりは，垂直に近い。北壁の方向はN－80°－Eで，重複する1A・B号住居跡とほぼ等しい。東壁の遺存長は3.15mで，南部を




**第８図　３号住居跡**

現代の土地改変の時に削平されたようである。西壁の遺存長は1.20mで，１Ｂ号住居跡によって破壊されている。なお，１Ｂ号住居跡の西壁は，元来，３号住居跡の西壁を利用していた可能性がある。だが，１Ａ号住居跡の構築時，１Ｂ号住居跡の壁を崩したことによって，３号住居跡の西壁が失われてしまったのかもしれない。床面はⅣ層で，貼床は施されていなかった。３号住居跡の床面は，その一部を１Ｂ号住居跡の床面として利用されており固く締まっていたが，それ以外の地点でもよく踏み締まっていた。

カマドは東壁にあり，燃焼室が壁から外部へ張り出している。カマドの中心の位置は，北東角から約1.7mの距離である。住居跡の南部が大きく破壊されているため，南北方向の規模は不明である。だが，もし住居跡の平面形が正方形であったとすると，カマドは東壁の中心から北寄りの地点に付設されていたことになる。

カマドの燃焼部は，壁側の上部を１Ａ号住居跡によって少し破壊されていた。燃焼室の堆積土は６層に分けられた。ℓ１はしまりが弱く棒状に堆積しており，煙出し内に堆積したものと考えられる。ℓ２は黄色系の砂質土で，灰白色粘土塊・浅黄褐色土が少量含まれており，住居内堆積土と類似していた。ℓ４は灰赤色土で非常に硬くなっており，燃焼室の天井崩落土の可能性がある。ℓ５・６は焼土層である。ℓ１～６の状況から，カマドの廃絶後あまり時間が経たないうちにℓ２が堆

積し，続いてℓ1が堆積したようである。

カマドの火床面は，約10°の傾斜で内湾気味に立ち上がった後，煙出しの手前で下る。火床面の受熱による変色は著しいものでなかったが，燃焼室の壁は5㎝以上の厚さで赤褐色に浸透していた。火床面の平面形は，隅丸の方形を呈する。火床面の規模は東西100㎝・南北95㎝で，燃焼室の規模に近いと思われる。煙出しの規模は，上端の直径24㎝，深さ21㎝を測る。

北東角から楕円形を呈するP1を検出した。カマドの付設されている東壁に対して，P1の長軸方向は北壁に平行していた。また，床面から底面までのP1の深さは20㎝で，比較的浅い。そのためP1は，1A号住居跡に伴っていた可能性もあった。だが，P1内の堆積土は1層であるが，住居内堆積土・カマド内堆積土のℓ2に類似する。このことからP1は，3号住居跡に伴うものと考えられ，また住居跡の廃絶直前まで開口していたと考えられる。P1の規模は，平面形が123×75㎝，床面から底面までの深さは22㎝である。なお，床面からP1以外のピットは確認されなかった。また壁溝も認められなかった。

**遺　物**　（第9図）

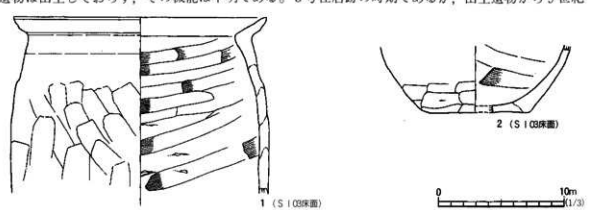
本住居跡に伴う遺物としては，床面から出土した第9図1・2の土師器甕が上げられる。いずれもP1の南側で出土したもので，同一個体の可能性がある。第9図1は口縁部が急角度で外傾し，内面に明瞭な稜線が形成されている。胴部外面には縦位方向のヘラケズリが，胴部内面にはヘラナデが施されている。第9図2は，底部付近の破片である。胴部外面の下端は，横位方向にヘラケズリが施されている。

**ま と め**

3号住居跡の北壁の全長から，東西方向の規模は約4mである。重複する1A・B号住居跡と比較すると，その中間の規模である。南北方向の規模は，住居跡南部の破壊が著しいため不明である。

東壁にカマドが設けられており，燃焼室が壁から外部へ張り出す形態のものである。燃焼室の堆積土の状況から，3号住居跡は廃絶後まもなく短時間で埋没したものと思われる。だが，その埋没が人為なのか，それとも自然に埋まったのかは不明である。

床面から柱穴を確認することはできなかった。カマドの北側からP1を検出している。P1から遺物は出土しておらず，その機能は不明である。3号住居跡の時期であるが，出土遺物から9世紀




第9図　3号住居跡出土遺物

前半頃と考える。　（香　川）

### ４号住居跡　ＳＩ04

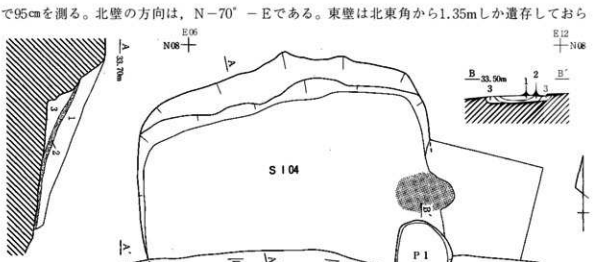
**遺　構**　（第10図　写真11・12）

位置は，Ｃ２－46グリッドである。立地は南面する丘陵斜面の裾部で，標高33.5m付近の等高線に北壁が平行している。この等高線に沿って西側へ約10m進んだ地点に，１Ａ・１Ｂ・３号住居跡がある。住居跡の南部は，現代の土地改変によって大きく削平されており，床面から破壊されていた。なお，重複する遺構はない。

住居跡を確認したのは，重機による盛土の除去作業中である。盛土が予想以上に厚く，その厚みを測るために深掘りしたところ，焼土面を確認した。一見して住居跡のカマドを破壊したことが判った。住居跡上に堆積する盛土を慎重に除去したところ，北壁分が良好に遺存している方形のプランを確認した。遺構検出面はＬⅣ上面である。なお，住居跡の南部は，過去の土地改変ですでに破壊されていた。

住居跡内の堆積土は，３層に分けられた。ℓ２は間層状に入る黒色土で，多量の木炭粒と少量の焼土を含んでいた。ℓ３は，北壁の下半から床面にかけて堆積しており，ＬⅣに類似していた。住居内堆積土の状況から，人為的に埋め戻されたような痕跡は認められず，自然に埋没したものと考える。

住居跡の平面形は，全長が唯一遺存する北壁の形状から，方形を呈していたと思われる。北壁の全長は4.35mである。北壁は，床面から約65°の角度で中位まで立ち上がった後，一度緩やかな段差が付き，さらに約55°の角度で上端まで立ち上がる。北壁の上端から床面までの深さは，最深部で95cmを測る。北壁の方向は，Ｎ－70°－Ｅである。東壁は北東角から1.35mしか遺存しておら




４号住居跡内堆積土
1　10ＹＲ4/2　灰黄褐色砂質土
2　10ＹＲ2/1　黒色土（木炭を多量に含む）
3　10ＹＲ6/4　にぶい黄橙色砂質土

４号住居跡Ｐ１内堆積土
1　10ＹＲ4/6　褐色土（木炭・焼土を含む）
2　10ＹＲ4/2　灰褐色粘質土（木炭を含む）
3　10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色土

**第10図**　４号住居跡

ず，その南部は重機で破壊してしまった。西壁は，北西角から2.10m遺存していた。

東壁にカマドが付設されていたが，重機で破壊してしまい，どの程度遺存していたのか不明である。火床面は，その表面が熱を受けて楕円形に硬化していたため，その範囲を把握することができた。火床面は，床面よりも最大で3㎝ほど窪むが，全体的に見ると床面に対してほぼ水平である。火床面の東部は，東壁を南部に延長した推定線よりも外側へ張り出す。このことからカマドの燃焼室の形態は，壁の外部へ張り出すものであったと推測される。火床面はさらに東部へ延びていた可能性があるが，その遺存長は東西方向が92㎝，南北方向が65㎝である。床面はⅣ面を水平に整地しており，貼床は施されていなかった。床面の状態は，著しいものではないが，全体的に踏み締まっていた。

火床面の南側から楕円形のＰ１を検出した。Ｐ１は，床面から底面まで14.5㎝と浅いピットであるが，その底面から土師器が出土している。Ｐ１内の堆積土は，３層に分けられた。ℓ１は褐色土であるが，木炭粒・焼土・白色粘土を含んでいた。ℓ２・３も少量であるが，木炭粒・白色粘土を含んでいた。ℓ１～３の状況から，Ｐ１は人為的に埋められた可能性がある。なお。床面からＰ１以外のピットや，壁溝は確認できなかった。

**遺　物**　（第11図，写真　18・19）

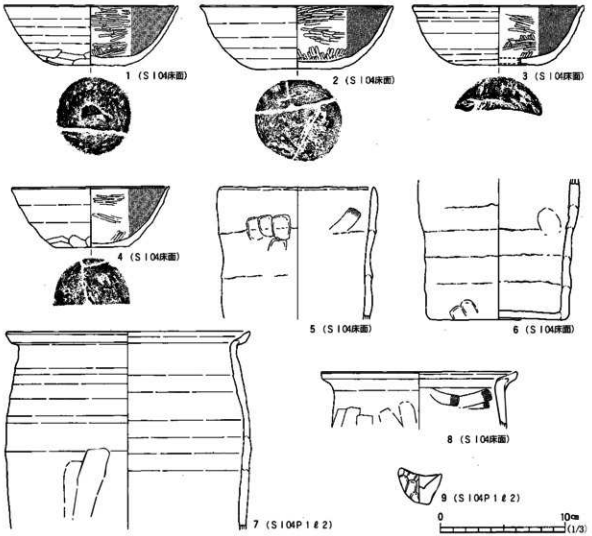
本住居跡から計169点の遺物が出土している。出土遺物の大半が細片であるが，住居跡の床面，Ｐ１から比較的遺存状態の良い土師器が出土しており，第11図１～９の９点を図示した。

第11図１～４は，ロクロ成形の土師器杯である。第11図１はＰ１のℓ２から出土したもので，全体の約60％が遺存しており，体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。底部外面には，同心円状に段差が付いており，回転ヘラ切りによる切り離し痕が認められる。第11図２もＰ１のℓ２から出土したものであるが，ロクロからの切り離しは回転糸切りであり，また再調整は施されていない。２は全体の約95％が遺存しており，ほぼ完形に近い状態でＰ１内に破棄された可能性がある。第11図３は全体の約30％の破片であるが，床面から出土したもので，第11図３と同様に回転糸切りによる切り離しで，再調整は施されていない。第11図４は，第11図１～３と比較すると，口径に対して器高が高い器形である。第11図４も床面から出土したもので，底部には回転糸切り痕が認められ，体部下端には手持ちヘラ削りが施されている。

本住居跡の床面から計46点の筒形土器が出土したが，そのほとんどが細片で，器形を復元できたのは第11図５・６の２点だけである。第11図５・６の調整は，粘土の積み上げ痕を指の押圧やナデによって整えているもので，粗雑である。器面は２次的に熱を受けたらしく，脆くなっている。第11図５は，胴部に対して口縁部がやや広口になっている。第11図６は底部が遺存しているもので，やや上げ底風である。底部の器厚は，胴部に比べてやや薄い。

第11図７・８は土師器甕であるが，ともに口縁部が短く外傾し，口唇部が上方につまみ上げられている。７は胴部外面の中位から，第11図８は胴部外面の上位からヘラケズリが施されている。

第11図９はＰ１のℓ２から出土した手捏ねの土器である。底部内面の中央に浅い突起が認められ




第11図　4号住居跡出土遺物

た。用途については不明である。

ま と め

4号住居跡は，東壁にカマドを持つ方形の住居跡である。住居跡の南部が大きく破壊されていたが，全体が唯一遺存している北壁の長さは約4.4mを測る。4号住居跡の構築面は急な斜面上で，北壁側は90cm以上掘り込んで床面を形成している。

カマドは，火床面と考えられる範囲が，東壁の遺存部を南側へ延長したラインよりも外側にあるため，燃焼部が壁から外部へ張り出す形態であったと推測される。住居跡平面形の規模・カマドの燃焼室の形態を他の住居跡と比較すると，3号住居跡に類似している。

火床面と考えられる範囲の南側から，楕円形の浅いP1が検出された。P1内の堆積土は人為的に埋められたものと判断され，また土師器の杯・甕が出土している。P1の機能としては，ゴミ穴であった可能性もある。出土遺物としては，筒形土器の出土量が特徴的である。

柱穴や壁溝などの施設は確認できず，上屋の構造については不明である。4号住居跡の時期であるが，床面から出土した遺物から9世紀前半頃と考える。　（香　川）

# 第3節　土　坑

調査区内で発見された土坑の数は3基（1～3号土坑）である。いずれの土坑も調査区西端部に位置する。調査区中央部～東部が大きく土地改変されていたのに対し，3基の土坑が発見された一帯は認められなかった。そのため，調査区西端部にだけ土坑が遺存していたのかもしれない。

## 1号土坑　SK01　（第12図　写真15）

位置は，B2－55グリッドである。地形は丘陵の裾部で，緩やかな斜面上に作られている。土坑の平面形は南北に長い長方形であるが，土坑の長軸線は，標高38.0mの等高線に直交する。遺構検出面はⅣ上面である。1号土坑の東側約4mの地点には，2号土坑がある。重複する遺構はない。

土坑内の堆積土は，ℓ1の1層である。ℓ1は，暗褐色土に，直径5cm前後の黄褐色土塊が斑状に混じっていた。ℓ1の状況から，人為堆積の可能性が高い。土坑内の堆積土は，墓などの可能性も考え，遺物の有無を確認するために一度フルイをかけてから処分した。だが，堆積土から出土遺物を確認することはできなかった。

土坑の平面形は，おおよそ角の張る長方形である。だが，計測値で短軸方向の長さを見ると北辺81cm，南辺69cmで，やや南辺が短い。長軸方向の長さは，東辺125cm，西辺123cmで差異はない。壁の立ち上がりは，曲線的である。検出面から底面までの深さは，最深部で36cmである。底面は，水平で平坦に整地されており，丁寧に作られたことがうかがえる。長軸線の方向は，N－18°－Wである。1号土坑の性格であるが，堆積土の状況から墓の可能性も考えられる。だが，出土遺物がなく，その性格・時期は不明である。　（香　川）

## 2号土坑　SK02　（第12図　写真15）

位置は，B2－55グリッドである。B2－55グリッドから平坦面が検出されたが，当初は住居跡の可能性が考えられた。だが調査の結果，その平坦面は住居跡でなく，さらに丘陵上方に延びており，道状に切り開かれていることが判った。土坑の南部に松の根株が重複していたが，その根株は巨大で除去することができなかった。遺構検出面はⅣ上面である。

土坑内の堆積土は，検出面のⅣよりも黄色い黄褐色土の1層であった。ℓ1の観察から，人為的に埋め戻されたのか，あるいは自然に埋没したのか，その判断はできなかった。土坑の平面形は，検出できた北部の形状から長方形を呈していると思われる。長軸線の方向はN－75°－Eで，立地する等高線の方向に等しい。

壁は，内湾気味に急角度で立ち上がる。検出面から底面までの深さは，最深部で18cmである。底面は，根の影響を受けた可能性があるが，やや起伏していた。土坑内から遺物は出土しなかった。2号土坑の性格・時期とも不明である。　（香　川）

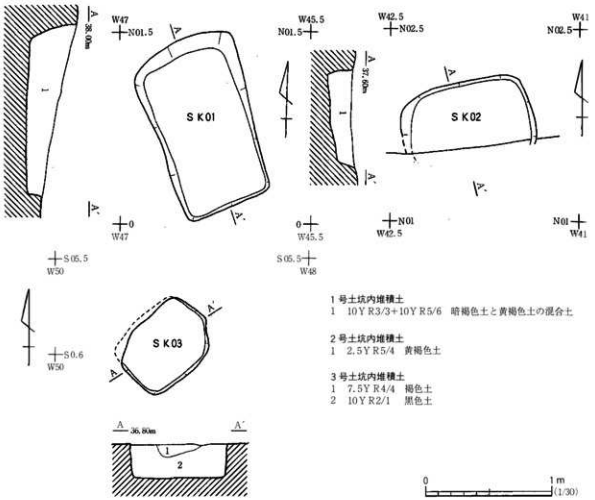
### ３号土坑　ＳＫ03　（第12図　写真15）

位置は，Ｂ２－75グリッドである。遺構検出面はＬⅣ上面である。北東側７mの地点には１号土坑がある。重複遺構はない。土坑内の堆積土は，２層に分けられた。ℓ１は褐色土で，直径３cm未満の黄褐色土塊を含んでいた。ℓ２は黒色土で，やや粘りがあった。ℓ２から木炭粒は認められなかった。ℓ１の状況から，人為的に埋め戻された可能性がある。

土坑の平面形は，南部の辺が不整だが，全体的に見ると長方形を呈している。平面形の上端規模は，長軸方向が72cm，短軸方向が52cmである。長軸の方向はＮ－46°－Ｅで，立地する等高線に平行している。

壁の状況は，北東壁が底面方向に抉れているが，他の壁は底面からほぼ直立気味に立ち上がる。検出面から底面までの深さは，26cmを測る。底面の形状はほぼ水平であり，比較的丁寧に作られたようである。

土坑内から遺物は出土していない。小型の土坑で，埋め戻したような痕跡が認められたが，その性格・時期は不明である。　（本　田）




**第12図**　１～３号土坑

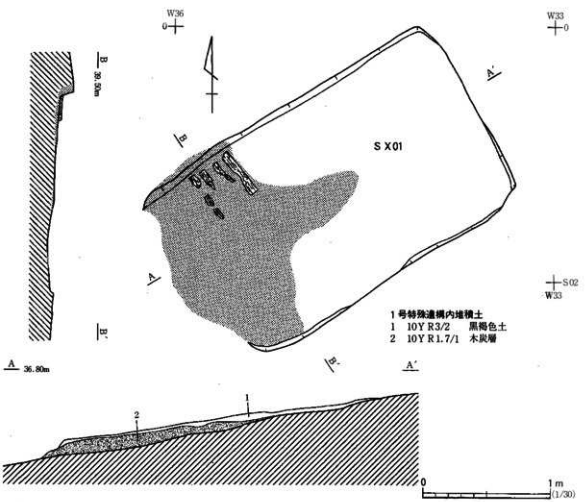
## 第４節　その他の遺構

調査区西部から，掘形内に多量の木炭粒・焼土を含む１号性格不明遺構と，その遺構の西側から道状の１号溝跡を検出した。１号性格不明遺構は，木炭窯の可能性がある。両遺構は接近しており，作業場と通路という可能性が考えられる。

### １号性格不明遺構　ＳＸ01

**遺　構**　（第13図，写真13・14）

位置は，Ｂ２－67・68グリッドの境界である。本遺構は，南西方向に下る斜面上に作られている。遺構検出面は，ＬⅢ中面である。本遺構の検出状況は，重機でＬⅡを除去したところ，ＬⅢ上面で木炭粒の一部が露出した。そこで，周辺のＬⅢ面をさらに10cmほど掘り下げたところ，長方形のプランを検出した。本遺構の東側約1.5mの地点に１号溝跡が近接しており，本遺構と関係があった可能性がある。なお，重複する遺構はない。

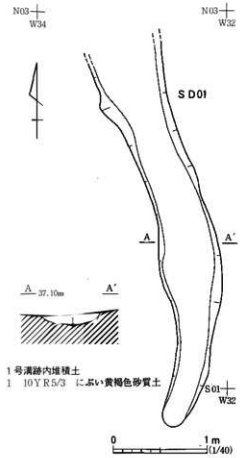



第13図　１号性格不明遺構

遺構内の堆積土の状況は，掘形の底面上に堆積する木炭粒・焼土塊を黒褐色土の ℓ１が覆っていた。ℓ１は，ＬⅢと同質の層であった。木炭粒・焼土塊の堆積状況は，傾斜する掘形底面が下るにつれて厚みを増している。底面上に堆積する木炭粒は，直径２㎝前後の消し炭状になったものと黒灰が混じり合った状態であり，土の混入は認められなかった。

掘形の平面形は，長方形を呈する。斜面上方の北東壁は，最大で４m遺存していたが，その中央部は崩れていた。また，斜面下方の南西部は，壁が検出できなかった。南東・北西壁は，比較的良好に遺存しており，検出面から底面まで最大10㎝の深さがあった。掘形底面は，熱を受けて変色していた。南西部の底面の色は赤褐色であったが，斜面上方に向かうにつれて色が黒味を増しており，受けた熱量の違いを示していた。

北西壁の斜面下方部で，木炭が検出された。木炭は，掘形の短軸方向に平行していた。木炭の遺存状況はその上部が燃えて失われており，厚みが２㎝位しかなかったが，薪状の木を整然と並べていた様子がうかがえた。木炭が出土した辺の壁は熱変が著しく，壁面から橙～暗赤褐色に６㎝浸透していた。掘形平面形の規模は，北西壁の長さが2.65m，北東壁の長さが1.50mを測る。北西壁の方向は，Ｎ－60°－Ｅである。掘形底面の傾斜は，約10°である。なお，本遺構の周囲からピットは検出できなかった。遺物はℓ１から土師器が出土しているが，細片のため図化できなかった。




第14図　１号溝跡

## ま　と　め

本遺構の状況から，木を多量に燃やしたことがうかがえる。底面上に堆積する木炭粒層が斜面の下方ほど厚みを増していたが，底面の熱変色の状況から燃焼終了後に木炭を斜面下方側へ掻き出した可能性が高い。本遺構の機能としては，簡易な木炭窯の可能性も考えられる。本遺構の時期は，遺構検出面から平安時代前期と考える。

（香　川）

### １号溝跡　ＳＤ01

**遺　構**　（第14図　写真　14）

位置は，Ｂ２－58・68グリッドである。遺構検出面は，ＬⅣ上面である。１号性格不明遺構の斜面上方側で近接している。本遺構の北部は，さらに丘陵斜面の上方に向かって延びていたが，大きな切り株に遮られて，それ以上北側を調査することができなかった。本遺構の南部は，１号性格不明遺構の南側に向かって延びていくが，途中で消失した。本遺構の検出面がＬⅣ上面であったことから，本遺構の南部を破壊してしまった可能性が高い。

遺構内の堆積土は，ℓ１の１層で，検出面のⅣよりも暗い黄褐色砂質土である。本遺構の断面形は皿底状で，壁は曲線的に底面から緩やかに立ち上がる。底面の硬さは，検出面のⅣ上面と比較したが，著しいものではなかった。本遺構の幅は，最大で72cmである。検出面から床面までの深さは，最深部で19cmである。なお，ℓ１から平安時代のものと思われる土師器が１点出土したが，いずれも細片であったため図化できなかった。

**ま　と　め**

１号溝跡は，その位置から１号性格不明遺構に関連していた可能性がある。１号性格不明遺構が何らかの作業場であったとすると，本遺構はその作業場に至る通路であったと考えられる。本遺構が北傾の丘陵斜面に向かって延びていることから，裏山で木を伐採し，本遺構を通って１号性格不明遺構で燃やしたと推測できる。本遺構の時期であるが，１号性格不明遺構との関連性から同時期の平安時代前半頃と考える。　　（香　川）

## 第５節　遺構外出土遺物

根ヶ子原Ａ遺跡における遺構外出土遺物の総点数は439点である。出土遺物の内容としては，土師器が中心で，他に須恵器が少量出土している。土師器・須恵器は，主にⅢから出土した。出土土器の大半は細片で，図化できたのは第15図１～８の８点と少数である。

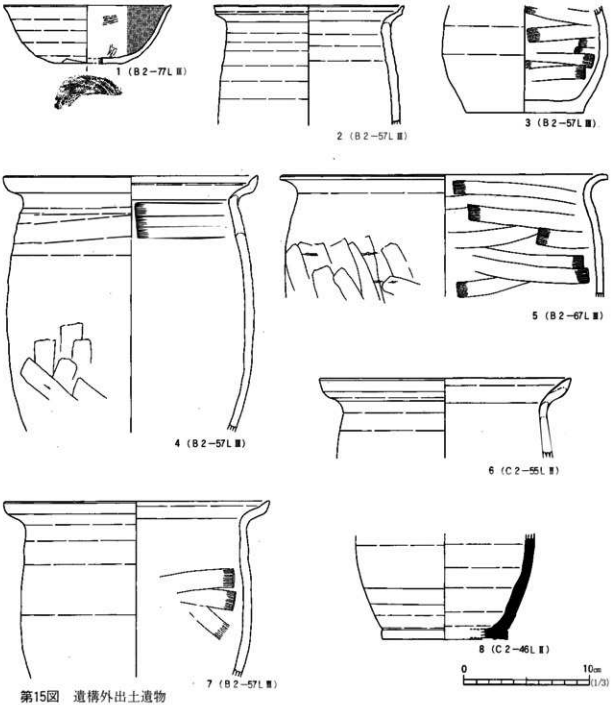
遺物の出土地点を見ると，竪穴住居跡など大型遺構の周辺に集中している。だが，調査区西部では竪穴住居跡は確認されなかったが，Ｂ２－57グリッドから39点の土師器・須恵器が出土している。Ｂ２－57グリッド付近の地形は，南傾へ下る斜面で，その勾配はやや急である。Ｂ２－57グリッドの北側に竪穴住居跡があり，そこから遺物が流れてきた可能性があるが，調査対象外の区域にあたるためその有無は確認していない。

土師器・須恵器　（第15図　写真20）

第15図１～７の土器が土師器である。第15図１は，全体の約30％が遺存するロクロ成形の杯である。２次的に熱を受けたらしく，器面は非常に脆くなっていた。体部は内湾気味に立ち上がるが，口縁部でわずかに外反する器形である。調整は，ロクロから回転糸切りによる切り離し後，体部下端に手持ちヘラケズリを施している。内面の調整は，ヘラミガキ・黒色処理が施されているが，受熱のため黒色処理が一部消失している。

第15図２・３は小型の甕である。第15図２の器形は胴長と思われるが，第15図３は球形に近い器形のようである。第15図２の口縁部は面取りされており，直線的に上外方へ開く。第15図３の内面は，横位方向のヘラナデが施されている。

第15図４・６・７の口縁部は曲線的に開いており，２の口縁部の形状と異なっている。第15図４の器形は紡錘形を呈し，胴部外面の下半にはヘラケズリが，内面にはヘラナデが施されている。第15図６・７は，第15図４に比べて頸部の括れが弱い器形である。第15図５は，土師器甕の口縁部破




**第15図　遺構外出土遺物**

片であるが，その口径は推定値で26cmと広い。器形は頸部で括れた後，口縁部で大きく外反し，その端部は丸く収められている。器厚は薄く，非常に堅緻に焼かれており，器面の色調は褐灰色を呈する。第15図５は調査区西部で出土したものであるが，調査区中央の１Ｂ号住居跡から出土した第５図４に類似しており，この土器も須恵窯で焼かれた可能性がある。遺構外出土遺物で図化できた土器の内，須恵器は第15図８の１点だけである。第15図８は長頸瓶の底部と思われる。その底部には高台が付くが，高台の断面は厚みがなく，装飾的な高台である。　（香　川）

# 第3章　ま　と　め

根ッ子原A遺跡は，調査面積が930㎡で，南面する丘陵の裾部に展開する平安時代の集落跡である。今回の発掘調査で発見された遺構は，竪穴住居跡5軒，土坑3基，性格不明遺構1基，溝跡1基である。出土遺物は，土師器971点，須恵器17点，石器2点である。

根ッ子原A遺跡の地形は丘陵の裾部であるが，美シ森A・B・C遺跡，下岩沢A遺跡が，丘陵頂部の高台に立地している点と異なる。竪穴住居跡の分布状況を見ると，調査区中央部で1A・B号住居跡と3号住居跡が重複するが，その地点から17m東へ進んだ地点に4号住居跡がある。また4号住居跡から東へ10m進んだ地点には2号住居跡がある。

2・4号住居跡は，堆積土の中位に炭化物層が形成されている。この炭化物層の形成原因は判然としないが，2・4号住居跡の埋没過程で山火事か何かで混入した可能性がある。カマドは，3号住居跡で比較的良好な状態で遺存していた。3号住居跡のカマドは，東壁から外部へ張り出す形態のものである。4号住居跡はカマドを破壊してしまったが，遺存していた火床面から4号住居跡のカマドも東壁から張り出す形態のものであったと推測された。また，3・4号住居跡はカマドの脇に浅いピットを作っていることも共通する。以上の点を考え合わすと2～4号の3軒の住居跡は，ほぼ同時期に営まれていた可能性がある。

2・3号住居跡から出土した遺物は，非常に少ない。だが，4号住居跡からは，土師器杯・甕，筒形土器が出土している。4号住居跡から出土した土師器（第11図1～4）を見ると，ロクロからの切り離しは回転糸切りが主流であるが，第11図1のように回転ヘラ切りのものも含まれている。土師器杯の調整は，体部下端に手持ちヘラケズリを施すか，あるいは無調整である。第11図1～4の底径／口径比は0.42～0.46である。1A号住居跡からも土師器杯（第5図1）が出土しているが，その底径／口径比は0.34である。

4号住居跡からは筒形土器が46点出土している。その大半は細片で破壊されたような状態で出土している。筒形土器は底部が検出される例は少ないとされるが，第11図6のように上げ底風の底部が良好に遺存しているものもある。筒形土器は，美シ森B遺跡から多量に出土しており，根ッ子原A遺跡と関連していた可能性も考えられる。

4号住居跡よりも新しいと考えられる1B号住居跡から多量の土器が出土している。2～4号住居跡から須恵器は確認されなかったが，1B号住居跡の堆積土からは長頸瓶が少なくとも3個体分出土している。1B号住居跡から出土した土師器甕の口縁部は，3・4号住居跡から出土した土師器甕とは異なるものがあり，第5図4のように口唇部を丸く収めているものがある。

各住居跡の時期であるが，出土土器の特徴から，1A・B号住居跡が9世紀後半頃，2～4号住居跡が9世紀前半頃と考えたい。　　（香　川）

表1　土器観察一覧

○：推定法量　△：残存高　単位：cm

| 遺　物 | 器　種 | 出　土　地　点 | 口　径 | 底　径 | 器　高 | 外面の特徴 | 内面の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第5図1 | 土師器杯 | S11A　床面 | ○14.8 | ○5.0 | 4.7 | 回転糸切り痕 | 黒色処理・ヘラミガキ | 底／口比0.34 |
| 第5図2 | 筒形土器 | S11A　床面 | 10.5 | － | △5.1 | 粘土積み上げ痕 | ナデ | |
| 第5図3 | 土師器甕 | S11B　堆積土 | － | ○9.2 | △3.8 | ヘラケズリ | | |
| 第5図4 | 土師器甕 | S11A　床面 | ○25.8 | － | △14.8 | ロクロナデ | ヘラナデ | 須恵窯焼成？ |
| 第5図5 | 土師器甕 | S11B　堆積土 | ○22.4 | － | △5.4 | ロクロナデ | | |
| 第5図6 | 土師器甕 | S11B　堆積土 | ○21.6 | － | △5.5 | ロクロナデ | 黒色処理・ヘラミガキ | |
| 第5図7 | 土師器甕 | S11B　堆積土 | － | 8.8 | △11 | ヘラケズリ→化粧土 | | |
| 第5図8 | 須長類瓶 | S11B　堆積土 | － | － | △4.4 | ロクロ | ロクロ | 頸部有段 |
| 第5図9 | 須長類瓶 | S11B　堆積土 | － | 10.8 | △4.6 | ロクロ・自然釉 | ロクロ | |
| 第5図10 | 須長類瓶 | S11B　堆積土 | － | ○8.6 | △16 | ロクロ・ヘラケズリ | ロクロ | 高台が剝落 |
| 第5図11 | 須長類瓶 | S11B　堆積土 | － | ○10.4 | △8.6 | ロクロ | ロクロ | |
| 第9図1 | 土師器甕 | S103　床面 | ○20.0 | － | △13.9 | ロクロ・ヘラケズリ | ヘラナデ | 2と同一個体 |
| 第9図2 | 土師器甕 | S103　床面 | － | ○7.8 | △5.3 | ヘラケズリ | ヘラナデ | 1と同一個体 |
| 第11図1 | 土師器杯 | S104　P1・ℓ2 | 13.7 | 5.7 | 4.7 | 回転ヘラ切り痕 | 黒色処理・ヘラミガキ | 底／口比0.42 |
| 第11図2 | 土師器杯 | S104　P1・ℓ2 | 15.2 | 6.6 | 5 | 回転糸切り痕 | 黒色処理・ヘラミガキ | 底／口比0.43 |
| 第11図3 | 土師器杯 | S104　床面 | ○13.5 | ○6.3 | 4.7 | 回転糸切り痕 | 黒色処理・ヘラミガキ | 底／口比0.47 |
| 第11図4 | 土師器杯 | S104　床面 | ○12.4 | 5.7 | 4.8 | 手持ちヘラケズリ | 黒色処理・ヘラミガキ | 底／口比0.46 |
| 第11図5 | 筒形土器 | S104　床面 | 12.2 | － | △10.5 | 粘土積み上げ痕 | ナデ | |
| 第11図6 | 筒形土器 | S104　床面 | － | 10.8 | △11.2 | 粘土積み上げ痕 | | 底部全面遺存 |
| 第11図7 | 土師器甕 | S104　P1・ℓ2 | ○19.4 | － | △15.7 | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 第11図8 | 土師器甕 | S104　床面 | ○15.5 | － | △4.6 | ロクロナデ | ヘラナデ | |
| 第11図9 | 手捏土器 | S104　P1・ℓ2 | 3.4 | － | 2.9 | | | |
| 第15図1 | 土師器杯 | B2－77　L■ | ○13.2 | ○5.0 | 4.7 | 回転糸切り痕 | 黒色処理・ヘラミガキ | 底／口比0.38 |
| **第15図2** | **土師器甕** | **B2－57　L■** | **○15.0** | **－** | **△9.5** | **ロクロナデ** | **ロクロナデ** | |
| **第15図3** | **土師器甕** | **B2－57　L■** | **－** | **9.3** | **△8.5** | **ロクロナデ** | **ヘラナデ** | |
| **第15図4** | **土師器甕** | **B2－57　L■** | **20** | **－** | **△20.4** | **ヘラケズリ** | **ヘラナデ** | |
| **第15図5** | **土師器甕** | **B2－57　L■** | **○25.7** | **－** | **△9.6** | **ヘラケズリ** | **ヘラナデ** | **須恵窯焼成？** |
| **第15図6** | **土師器甕** | **C2－55　L■** | **○20.0** | **－** | **△6.3** | **ロクロナデ** | | |
| **第15図7** | **土師器甕** | **B2－57　L■** | **○21.0** | **－** | **△13.9** | **ロクロナデ** | **ヘラナデ** | |
| **第15図8** | **須長類瓶** | **C2－46　L■** | **－** | **○10.0** | **△8.4** | **ロクロ** | **ロクロ** | |

# 第５編　下岩沢（しもいわさわ）Ａ遺跡

遺跡記号　ＮＨ－ＳＩＳ・Ａ
所在地　双葉郡楢葉町大字山田岡字下岩沢
時代・種別　不明・土坑
調査期間　1996年６月５日～６月20日
調査員　本田公成
協力機関　楢葉町教育委員会

# 目　次

第１章　調　査　経　過 ……175
　第１節　位置と地形 ……175
　第２節　調査経過 ……176
第２章　遺構・遺物 ……177
　第１節　調査の方法と基本層序 ……177
　第２節　土　　坑 ……178
第３章　まとめ ……180

# 写真目次

1　下岩沢Ａ遺跡遠景（北から） ……260
2　下岩沢Ａ遺跡全景（西から） ……260
3　１号土坑土層（北東から） ……261
4　１号土坑全景（南西から） ……261

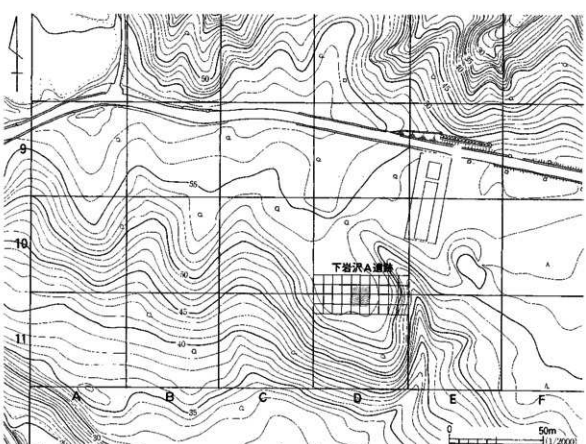
# 第1章　調　査　経　過

## 第1節　位置と地形

下岩沢A遺跡は，ＮＴＣ建設地の南端部に位置する。遺跡の北側約80mの地点に，国道6号線と岩沢海水浴場を東西に結ぶ旧町道が通過していたが，ＮＴＣの造成工事によって失われた。遺跡の調査面積は100㎡で，その標高は53～54mである。下岩沢A遺跡は，今回発掘調査を実施した5遺跡の中で，最も南部に位置し，最も面積が小さく，また最も標高が高い遺跡である。

遺跡周辺の地形は，丘陵の南辺部にあたり，丘陵から斜面が南方向へ急勾配で傾斜している。失われた旧町道は，丁度，丘陵部の最も標高が高い所を通過していた。下岩沢A遺跡の立地は丘陵の突端部で，遺跡の東西を「W」状に谷筋が入り組んでいる。

下岩沢A遺跡からの見晴らしは非常によく，広野町の火力発電所の本体部まで遠く見渡せる。下岩沢A遺跡の眼下に民家があったが，遺跡から民家までの標高差は約20mである。下岩沢A遺跡の発掘調査前は，広葉樹林を中心とする山林である。　　（本　田）




**第1図**　下岩沢A遺跡周辺地形図

## 第2節　調　査　経　過

美シ森A遺跡の調査が終了した後，6月5日から下岩沢A遺跡の調査を開始した。遺跡を覆う表土の除去は，年度当初に他の4遺跡（美シ森A・美シ森B・美シ森C・根ッ子原A遺跡）に連続して，重機を使用し，4月24日に終了させた。

本遺跡は最も南部に位置しており，器材の収納場所や作業員の休憩所となっていた美シ森A遺跡前のプレハブからは相当の距離があった。それゆえ人の移動および器材の運搬は容易でなく，またプレハブから本遺跡へ至る道も工事によって，度々，通行止めになったため，調査面積に対して日数がかかると予想された。しかし，調査を実施した遺構は平成7年度の試掘調査で発見されていた土坑1基のみで，遺物の出土量も極めて少なかったため，日数的に大きな遅れはでなかった。以下，下岩沢A遺跡調査経過の概要を記す。

6月5日　　発掘調査を開始する。すでに重機を用いて表土の除去は終了していたので，早速，遺構確認作業に入る。また，基本層序の観察を行い，記録した。

6月6日～7日　遺構検出作業を行う。それと同時に，遺跡の外周に石がゴロゴロしていたり，多くの木の根や枝が散乱している状態であったので，その清掃を実施する。また，調査区内には木の切り株が多数あり，遺構の確認作業が容易でなかった。だが，切り株を除去すると，遺構を破壊してしまう恐れがあったため，切り株の除去は最小限にし，大きな切り株は張り出す根っこを切り取る程度に止めた。

6月10日～12日　小グリッド杭・ベンチマークの設定を行う。遺跡外周の石・雑木の除去は終わったが，起伏が激しく排土の置き場に不適切であった。また，調査区の全体写真のことも考えて，遺跡の外周を平坦にならす作業を行った。

6月13日～14日　平成7年度の試掘調査で発見されていた1号土坑の調査を開始する。検出写真撮影後半截し，土坑断面の記録を行う。調査区北東部のD11－6グリッドから時期不明の陶器が1点出土した。

6月17日～18日　1号土坑の記録がすべて終了した。遺構確認作業を継続してきたが，1号土坑以外の遺構は，確認できなかった。

6月19日～20日　1号土坑の調査が終了した時点で，調査区の地形測量を開始する。地形測量は19日の午前中で終了した。午後からは，明日の調査区全体・遠景写真撮影のための清掃を行う。20日の午前中に写真撮影が終了し，午後，器材類の撤収を行った。

6月28日　　各関係者に下岩沢A遺跡の調査経過の説明後，遺跡の引き渡しを行った。

（本　田）

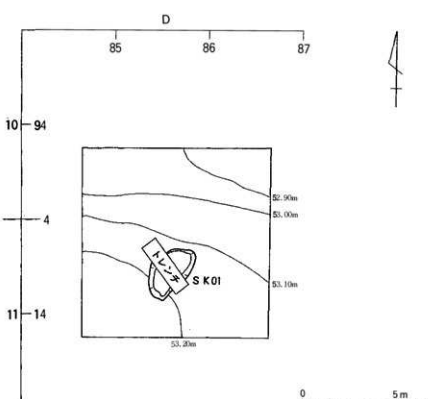
# 第２章　遺構・遺物

## 第１節　調査の方法と基本層序

### １．調査の方法

今回，発掘調査を実施した５遺跡は，広大なＮＴＣ建設地内に大きく離れて分布していた。そこで，遺跡間の位置関係を明確にするため，国土座標を基にＮＴＣ建設地内を一辺50mの大方眼で網羅し，南北方向に算用数字，東西方向にアルファベットの大文字を付して呼称し，大グリッドとした。50m四方の大グリッドの中は，さらに５m四方の小さな方眼で100区画に分割し，小グリッドと呼称した。１つの大グリッドの北西端部から南東端部に向かって１～100の番号を付した。そして，大グリッドと小グリッドの番号を組み合わせて，D11－１グリッドのように呼称した。

また遺構図作成などの利便のために，D11－６杭の地点を原点として，北方向へ１m移動するごとにN01，02，03…，南方向へ１m移動するごとにS01，02，03…と表した。東・西方向も同様でE・Wの横に数字を付けて，原点からの移動距離を表した。なお，D11－６杭の位置は，国土座標




**第２図**　下岩沢Ａ遺跡遺構配置図

Ⅸ系：Ｘ＝＋138,300.000，Ｙ＝＋104,175.000である。

発掘作業に際しては，まず調査区を覆う現表土を重機で除去した。遺構は検出された順に縮尺１/100の遺構配置図にその位置を記載する方針であったが，検出遺構は１号土坑のみであった。

遺構の掘り込みは，２分法（半截）を基本として土層観察を行った。遺構外出土遺物は原則として小グリッド名とその層位を記して採取し調査を進めた。土層の記録は，基本土層にＬとローマ数字を，遺構内堆積土は$\ell$と算用数字を用いて表現した。

遺構の記録は，土坑を１/10の縮尺で，調査区南東壁を利用した基本層序図を１/20の縮尺でそれぞれ記録した。遺構配置図は１/100の縮尺で図化した。

写真は35㎜と６×4.5判のカメラを使用し，モノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムで撮影した。同アングル・同コマ数である。　（本　田）

２．基本層序

下岩沢Ａ遺跡の地形上の位置は，阿武隈高地から連続して延びる丘陵地帯の東端部にあたり，その基盤は変成岩と花崗閃緑岩によって構成されている。発掘調査においては，堆積土壌とその基底層を基本層序の対象とし，ＬⅠ～ＬⅢに区分した。下岩沢Ａ遺跡の立地は，南方向へ張り出す丘陵の突端部で，第四紀以降の堆積土壌の発達は著しいものではない。各層の色調・土質は以下の通りである。

ＬⅠ：褐色砂質土（10ＹＲ4/4）。現表土で，その厚さは平均10㎝である。時期不明の陶器が１点出土している。

ＬⅡ：暗褐色砂質土（10ＹＲ3/4）。木炭粒を少量含んでいた。層厚は10㎝前後で，調査区全域に平滑に堆積する。遺物の出土は認められなかった。

ＬⅢ：明褐色砂質土（7.5ＹＲ5/6）。本遺跡の基底層で，地山と呼称した。　（本　田）

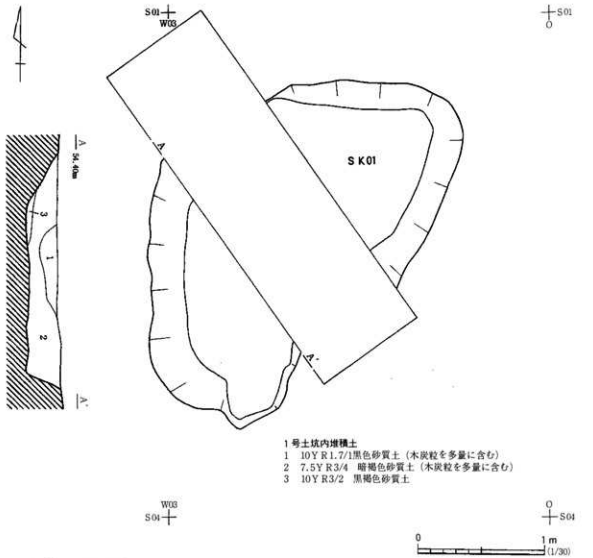
## 第２節　土　坑

下岩沢Ａ遺跡では，平成７年度の試掘調査で土坑（１号土坑）１基が確認された。今年度の発掘調査では，１号土坑以外の遺構を確認することはできなかった。

１号土坑　ＳＫ01　（第３図　写真３・４）

調査区の南西部Ｄ11－15グリッドから検出された土坑である。遺構検出面はＬⅡ中面である。本土坑の発見は平成７年度の試掘調査時で，本土坑の中央をその時のトレンチが通過していた。

本土坑内の堆積土は，３層に分けられた。$\ell$１は土坑中央の上部に浅く堆積していたもので，層中に多量の木炭が含まれていた。$\ell$１の木炭の状態は黒灰状に薄く崩れていたが，土坑内で火を焚いたような痕跡は認められなかった。$\ell$２は土坑内堆積土の大半を占める層である。$\ell$２も$\ell$１と




第3図　1号土坑

同様に木炭が含まれていたが，ℓ1と比べるとその量は少ない。ℓ2の木炭の状況は，ℓ1と同様である。ℓ3は北部の底面上に部分的に浅く堆積していたものであるが，木炭はほとんど含まれていなかった。ℓ1・2の状況から，本土坑は人為的に埋め戻された可能性が高い。

本土坑の平面形は，トレンチで中央部が失われているものの，南東から北西方向に長い不整な楕円形である。壁は，底面から直線的に立ち上がるが，その傾斜はほとんどが45°以下である。底面は，おおよそ水平に作られているが，所々に浅い起伏が認められた。本土坑の規模は，上端の長軸方向が3.06m，短軸方向が1.88mである。検出面から底面までの深さは最深部で27cmで，平面形の規模に対して浅い土坑である。

本土坑の性格は，何らかの作業後に出た木炭を土坑内に投入したようであるが，詳しくは判らなかった。また出土遺物はなく，本土坑の時期も不明である。だが，本土坑の堀り込み面がⅥ層中面であったことから，比較的時期の新しい遺構と考えられる。　（本　田）

# 第3章　ま　と　め

今回の発掘調査における成果は，土坑1基（1号土坑）と陶器1点である。1号土坑は，平成7年度の分布調査において確認されていたものである。陶磁器は，LIから出土したもので，現代のものである。

美シ森A・根ッ子原A遺跡では平安時代の集落跡が，美シ森B遺跡では弥生時代の集落・墓域が確認されている。下岩沢A遺跡でも，弥生時代や平安時代の遺構が分布している可能性があった。しかし，下岩沢A遺跡は，その調査面積が100㎡と小面積であったこともあるが，弥生時代・平安時代など他の遺跡で発見されているような遺構・遺物は確認されなかった。

1号土坑は平面形が不整形の土坑で，土坑内堆積土には木炭を多量に含んでいたが，土坑内で火を焚いたような痕跡は認められなかった。下岩沢A遺跡では1号土坑以外の遺構は確認されなかったため，他遺構との比較・検討ができず，遺物も出土しなかった。そのため，1号土坑の性格・時代は不明である。

以上の点から，本遺跡は判断材料が少なく，下岩沢A遺跡の全容を解明するには，いろいろと不明な点が多い。

（本　田）

# 総　括

サッカー・ナショナルトレーニングセンター（略称：ＮＴＣ）は，12面のサッカーグランドを備えたわが国最大のサッカー専用トレーリング施設である。所在地は福島県浜通り地方南部の楢葉町大字山田岡字下岩沢・美シ森地区と広野町大字下北迫字岩沢・二ツ沼地区で約49.5haの敷地面積を持つ。現在は造成工事が終了し，本年度５月の完成を目指して屋内施設であるセンター施設・スタジアム施設の建設が着々と進行している。この施設建設のため，造成工事で破壊される埋蔵文化財の表面調査・試掘調査・発掘調査を平成７年度から実施している。本書には，発掘調査を行った美シ森Ａ～Ｃ・根ッ子原Ａ・下岩沢Ａ遺跡の５遺跡の調査成果を収録した。

発掘調査を実施した５遺跡は，福島県双葉郡楢葉町大字山田岡に所在する遺跡群である。楢葉町は，東を太平洋に面し，西を阿武隈高地の丘陵が発達し，浜通り地方特有な西高東低の地形を形成している。山田岡地区は楢葉町でも南部に位置し，阿武隈高地から延びる山地性丘陵が発達し，この丘陵の間を岩沢川をはじめとする小河川が東流し，小規模な樹枝状に開析された谷地を形成している。この丘陵の先端は太平洋に面し，浸食作用によって比高約20mの海岸崖線を呈する。

次に，各遺跡から検出された遺構・遺物について特色と諸問題についてまとめておく。縄文時代の遺構は少なく，美シ森Ｂ遺跡の８・13号土坑や早期後半の貝殻条痕系土器・縄文条痕系土器がある。８・13号土坑は規模や形態から落し穴状土坑と考えられ，この丘陵部が猟場として使用されたことが推定される。

弥生時代に，美シ森Ｂ遺跡に集落や墓域が出現する。出土遺物の分類から前期から中期に相当し，弥生１期・２期・３期に細分される。弥生１期は前期の変形工字文系土器に相当し，調査区中央部南側の１号遺物包含層（Ｈ４－55グリッド周辺）から壺・高坏・鉢・蓋・甕等の器種が出土している。遺構は検出されなかったが，この丘陵頂部が生活の場となっていたことが考えられる。弥生２期は中期前半の磨消縄文系土器に相当し，竪穴住居跡（ＳＩ02・03・05・06）や土坑（ＳＫ04・07・09・10・11・27），１号遺物包含層が検出されている。この期は調査区中央部の２・３号住居跡と東部の５・６号住居跡が立地し，周辺に土坑群が隣接する。３号住居跡と４・９号土坑は重複しているが，時期的にはそれ程ないものと考えており，短期間の使用が考えられる。中期中頃の空白期を経て，弥生３期の天神原式期と前段階を含む時期に相当する。第３章まとめでも記載したように，本期については土器の意匠に会津地方の川原町口式土器と浜通り地方の天神原式土器の折衷的な要素を持ち，地域圏や土器系統を考慮する上で複雑な問題を孕んでいる。この時期は，竪穴住居跡（ＳＩ01・07～09・11・12），土器棺墓（ＳＭ01～03），土坑（ＳＫ26），１号遺物包含層があり，本集落の最盛期を迎える。竪穴住居跡は分布から大きく２グループ（北群・東群）に分かれ，１墓域とに区画されている。土器棺墓を東群（ＳＩ07～09）の墓域と考えると，北群（ＳＩ01・11・12）にも墓域が存在した可能性が高い。この小規模な集落は，調査所見から季節的や短期間の使用で廃

絶したと推定している。集落の性格については不明な点もあるが，石器の中で工具類が多いことを考慮すれば，山の生業や工房的な集落とも考えられ，開析谷や沖積地で集落や水田遺構が検出されれば，福島県浜通り地方の弥生文化研究も進展しよう。

楢葉町には，古墳３ヵ所・横穴群10ヵ所が発見されているが，古墳時代から奈良時代までの集落跡は不明確である。

平安時代には遺跡数が増加し，大規模な集落が出現する。『常磐自動車道予定路線周辺分布調査』（本間㈱ 1996）では，標高が40～50mの山地性丘陵に馬場前・鍛冶屋・下小塙上ノ原遺跡がある。同時に，『福島県の条里』（鈴木 1992）では古代の条里制が山田浜で確認され，地名も下八反町・日照町・柳町・大町・反町・深町・平五町・破町がある。沖積地は早くから，開発が進められていたことが推定される。美シ森Ａ遺跡と根ッ子原Ａ遺跡で小規模な集落跡を確認した。美シ森Ａ遺跡は丘陵頂部の標高38m前後に立地し，平安時代の竪穴住居跡１軒（ＳＩ01），土坑２基（ＳＫ01・02）が検出された。調査区外にも平坦な地形が確認され，北側にも竪穴住居跡が発見される可能性がある。また，根ッ子原Ａ遺跡は，山地性丘陵の南緩斜面に立地し，集落全域を調査したと考えられる。検出した遺構は，竪穴住居跡５軒（ＳＩ01Ａ～04），土坑３基（ＳＫ01～03），性格不明遺構１基（ＳＸ01），溝跡１条（ＳＤ01）である。集落は大規模と小規模の２グループの存在が指摘され，性格も含めて今後の検討課題となろう。また，美シ森Ｂ遺跡や根ッ子原Ａ遺跡で，土師器筒形土器の破片が多く出土している。平安時代の集落からは県内各地で普遍的に出土する。製塩に関する遺品と推定され，美シ森Ｂ遺跡から１・２号特殊遺構として検出された。この筒形土器は，焼土や木炭片と共に小片で出土しており，使用後破壊されたものと考えられる。現段階では，消極的であるが製塩に関する遺品の可能性が高い。出土した土師器から竪穴住居群は，平安時代（９世紀前半と後半期）に相当する。須恵器長頸瓶は胎土や長頸部の特色から会津若松市大戸窯跡産と推定される。

他に，美シ森Ｃ遺跡から竪穴状遺構１基（ＳＸ01），下岩沢Ａ遺跡から土坑１基（ＳＫ01）をそれぞれ検出したが，遺存状況が不良で出土遺物も少なく時期・性格は不明である。

最後に，野外の調査に御協力いただいた作業員の方々，出土した資料を報告書をまとめるため献身的な御協力をいただいた整理作業の方々，埋蔵文化財保護の趣旨にご理解いただいた東京電力株式会社ＮＴＣ工事事務所と楢葉町教育委員会の方々に厚く御礼申し上げます。 （高 橋）

## 参 考 文 献

馬目 順一㈱ 1982 『楢葉天神原弥生遺蹟の研究』 楢葉町教育委員会

馬目 順一㈱ 1988 『楢葉町史 第２巻 考古資料』 福島県楢葉町

鈴木 貞夫 1992 『福島の歴史地理研究』 いわき地域学會

本間 宏 ㈱ 1996 『常磐自動車道予定路線周辺遺跡分布調査報告』『福島県内遺跡分布調査報告２（福島県文化財調査報告書第318集）』 福島県教育委員会

# 付　編　美シ森B遺跡出土石器の石質と産地

福島県立博物館
香内　修

美シ森B遺跡は，楢葉町大字山田岡字美シ森に所在する。この付近の地形は，阿武隈高地東縁の南北に連なる丘陵の一つに立地している。また海岸段丘並びに河岸段丘が発達しており，東流する井出川や木戸川などの中小河川によって複雑に開析されている。遺跡は標高40m前後の丘陵上に立地し，周囲には小規模な開析谷が確認される。

今回の調査では，弥生時代中期を中心に竪穴住居跡・土坑・埋設土器などの遺構が検出された。また，出土した遺物には土器・土製品・石器類がある。本項では，石器の石質及び産地について若干の検討を加えたい。個々の石器の石質については石器観察一覧に記載した。

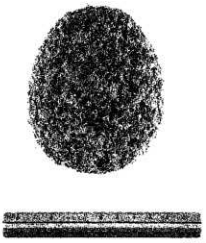
遺跡周辺の地質の概略について述べる。遺跡の西側の阿武隈高地の大部分は花崗岩～花崗閃緑岩からなっている。また阿武隈高地東縁山地と丘陵部をへだてる双葉断層付近には古生代～中生代に形成された個結度の高い泥岩，砂岩，珪質岩（チャート）石灰岩，粘板岩等が分布している。また双葉断層の西側約10キロにほぼ平行に位置する畑川破砕帯（断層の一種）付近には緑色片岩等の変成岩類が分布している。

遺跡が立地する丘陵部は鮮新世の砂～泥の半個結堆積物から形成されている。これらが原石と考えられる石器はわずかである。当地域の南部～いわきにかけては石炭層を挟む砂岩，礫岩，泥岩等からなる第三紀層が厚く堆積しており，一部には流紋岩などの火山性堆積物を含んでいる。

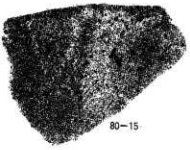
次に産出した石器の石質について礫石器と剝片石器とに大別して述べる。

礫石器はやや偏平な円礫を利用したもので，花崗閃緑岩～花崗岩からなるものが大部分で，これらはすべて阿武隈高地起源のものと考えられる。そのうち花崗閃緑岩としたものは表面の凹凸がやや荒い。細粒と記したものは鉱物粒子が細かく，表面の凹凸も細かくなっており，花崗閃緑岩に比べて硬質であるものが多い。これらの花崗岩類は他に砥石などとしても利用されているが剝片石器としてはほとんど用いられていない。

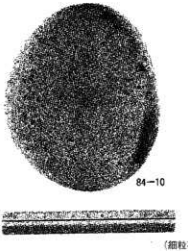
剝片石器は約半数が流紋岩であり，他に珪質岩や泥岩等が使われている。遺跡付近で産出する流紋岩は広野町以南に分布する椚平層中に含まれものである。流紋岩は剝片石器として会津などの他地域でも多用される場合があり，産出割合や周辺の地質状況から当遺跡でもかなり意図的に利用されたものと考えられる。珪質岩，泥岩は前述した中～古生層起源のものと考えられる。なお泥岩とした石斧などの剝片石器の表面は灰白色のざらついた面となっており，石質判別が困難なものであったが，破損により内部が見えるもので判断した。風化によるものと考えられるが，当初は鋭利な破断面を呈していたであろう。



（花崗閃緑岩）

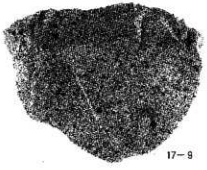


（流紋岩）




（細粒花崗岩）

（珪質岩）



（流紋岩）

（泥岩）

美シ森Ｂ遺跡出土石器の石質